

『三好inヤマト』改三リメイク

零戦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『三好inヤマト』改三のリメイクになります。

ヒロインや他キャラを一部変更します（リストラなの……）

目次

第一話	1
第二話	9
第三話	15
第四話	20
第五話	27
第六話	33
第七話	39
第八話	46
第九話	54
第十話	62
第十一話	69
第十二話	76
第十三話	83
第十四話	89
閑話その1	95
第十五話	100
第十六話	107
第十七話	115
第十八話	122
第十九話	128
第二十話	136
第二十一話	143
第二十二話	149
第二十三話	156

第二十四話	163
人物及び兵器設定その1	171
第二十五話	180
第二十六話	186
第二十七話	193
アンケート	198
第二十八話	206
地球連邦防衛軍の編成	212
第二十九話	216
第三十話	222
第三十一話	227
アンケートの結果及び再度アンケートのお知らせについて	233
第三十二話	239
第三十三話	246
第三十四話	255
第三十五話	262
第三十六話	268
第三十七話	275
第三十八話	282
第三十九話	287
第四十話	295
第四十一話	301
第四十二話	306
第四十三話	313
第四十四話	319

第四十五話	325
第四十六話	334
第四十七話	340
第四十八話	346
第四十九話	356
やるかは分からない完結編相当の展開	366
第五十話	371
報告	380
第五十一話	382
第五十二話	388
地球連邦防衛軍の編成その2	396
第五十三話	401
第五十四話	406
閑話その2 ガミラス戦役	412
第五十五話	418
第五十六話	425
第五十七話	432
第五十八話	439
第五十九話	446
第六十話	452
第六十一話	459
第六十二話	467
第六十三話	476
第六十四話	482
兵器設定その2	494

第六十五話	503
人物設定その2	511
第一次内惑星戦争〜戦間期	516
第二次内惑星戦争〜戦後処理	522
第六十六話	528
西暦2205年 地球防衛軍艦隊編成(ヤマト3)	532

第一話

無限に広がる大宇宙、静寂と光りに満ちた世界。生まれてくる星もあれば死んでゆく星もある。輝く星もあれば輝かない星もある。

今まさに、太陽系第三惑星『地球』は輝こうとしていた星であったのである。

「タキオンレーダーに反応。右舷30度、敵ガミラス艦隊接近!!」

国連宇宙軍第一艦隊旗艦『霧島』の艦橋でレーダーオペレーターが敵ガミラス艦隊接近を伝え、それを第一艦隊司令長官沖田大将は領いた。彼等の第一艦隊は1930年に惑星として発見されるも2006年には準惑星の部類に分かれてしまった『冥王星』沖に展開していた。

「……右30度返針、砲雷撃戦用意!!」

「砲雷撃戦用意!!」

「おもおーかあーじ!!」

旗艦『霧島』に続く形で二番艦『日向』三番艦『扶桑』四番艦『比叡』も同行し同宙域にて面舵をしていた。

なお、第一艦隊は以下の艦艇で構成されていた。

国連宇宙軍第一艦隊

司令長官 沖田十三大将

旗艦『霧島』

第一戦隊

『霧島』『比叡』

第二戦隊

『扶桑』『日向』

第三戦隊

『夕霧』『阿武隈』『春日』『叢雲』

第四戦隊

『八雲』『愛宕』『羽黒』『足柄』

第五戦隊

『剣』『鞍馬』『伊吹』『那智』

第六戦隊

『天龍』『龍田』『那珂』『神通』

駆逐艦

『磯風』以下28隻

別動隊 第一機動部隊

第一航空戦隊

宇宙母艦

『鳳翔』『祥鳳』『瑞鳳』『龍鳳』

『コスモファルコン』各45機搭載

第七戦隊

『夕張』『長良』『新高』『日進』

駆逐艦

『睦月』以下12隻

「照準合わせッ」

「照準用意……」

測定員と砲雷員が測定をする。その間にもガミラス艦隊は砲撃を開始し赤色で構成されたエネルギー弾が第一艦隊を襲う。

「長官ッ」

「案ずる事はあるまい……『波動防壁』展開ッ」

「ハッ『波動防壁』展開します」

『霧島』艦長の山南大佐の言葉に沖田は波動防壁展開を指示する。

無色の波動防壁は『霧島』の周囲に展開、その直後にエネルギー弾が飛来し『夕霧』の波動防壁と接触した。

しかし、エネルギー弾は波動防壁によって弾かれる事になり『夕霧』自体は健在だった。

「『夕霧』 損傷無し!!」

「照準良ろし!!」

砲雷員の測定が完了したのを確認した沖田は頷き、命令を発するのである。

「全砲門開け!! 撃エ!!」

その瞬間、第一艦隊に搭載された陽電子衝撃砲―通称ショックカノン―は砲撃を開始した。『霧島』は無砲身ではあるが35・6センチ三連装陽電子衝撃砲を4基搭載していた。

その為、『霧島』が狙った戦艦―『デストリア』級の側面装甲を貫く事は容易であり装甲を貫かれた『デストリア』級は一瞬の間を置いて爆発四散した。それは戦場となった冥王星沖の何処にでも起きている光景だった。

「敵戦艦3隻、敵巡洋艦6隻、敵駆逐艦多数撃沈!!」

「このまま砲撃を続行せよ」

「第四戦隊旗艦『八雲』より電文!! 『我、突撃ス』」

「予定通り……ですな」

「ああ……」

山南大佐の言葉に沖田は苦笑した。第四戦隊を率いるのは若いながらも歴戦の指揮官だったからだ。

「『霧島』から『突撃セヨ』の電文です!!」

「ヨッシャ!! 四戦隊は『八雲』を先頭に突撃するぞ!!」

第四戦隊旗艦『八雲』の艦橋では第四戦隊司令官の三好将和大佐がそう叫ぶ。『八雲』はそれに答えるかのように一気に加速する。その後方には第四戦隊に所属する『愛宕』『羽黒』『足柄』が続いていた。

「魚雷用意完了!!」

「魚雷連続発射!! 撃エ!!」

連続発射は三回続いた。12本の魚雷――97式空間魚雷――はガミラス艦隊の対空砲火をくぐり抜けて着弾、12発の火球が宇宙に花を咲かせたのである。

「突撃!! 突撃!! 突撃イイイイ!!」

第一艦隊の第四戦隊は『村雨』改二型で編成されている。改二型とは『波動エンジン搭載と無砲身の主砲から長砲身の主砲に換装した型』であり今回が初陣だった。

「右傾斜45度!!」

「ヨーソロー!!」

「撃エ!!」

右舷に展開した長砲身が砲撃を開始し陽電子のエネルギー弾が戦艦級――『アストリア』級――の装甲を貫通、瞬く間に爆発四散をする。後続艦も次々と砲撃し撃沈していた。

「後方より航空機多数。味方機です!!」

「おう来たか」

第一艦隊後方に待機していた別動隊の空母部隊から発艦した97式空間戦闘攻撃機『コスモファルコン』120機が到着、混乱するガミラス艦隊に航空攻撃を仕掛けたのである。

「敵艦多数撃沈、残存艦艇が冥王星方面に撤退していきます」

「味方の被害は?」

「巡洋艦『阿武隈』が航行不能に陥った駆逐艦『島風』と衝突、二隻とも撃沈しました。更にガミラス艦隊を追いすぎた駆逐艦『雪風』が撃沈。他にも『不知火』『初風』『綾瀬』が大破しました」

「何!? 古代の『雪風』が!？」

「は、はい。深追いしていくのを『磯風』が確認しています」

「……そうか……」

オペレーターからの報告に将和は溜め息を吐きながら艦長席のシートに深く座り込むのである。

(あの馬鹿野郎……変に突撃しやがって……歴史が改変しているから死に行く必要は無いだろうが……)

そう思う将和だが今は残存艦艇の收容であった。旗艦『霧島』からも戦場撤退の発光信号が送られていた。そんな時、『八雲』のタキオンリーダーが反応を示した。

「外宇宙方面から超高速船が接近しています!!」

「何? (馬鹿な……まさかイスカナル……?)」

オペレーターの報告に将和は目を見開いた。そしてメインパネルに切り替えると海王星方面から侵入してくる1隻の宇宙船があった。「あれは明らかに外宇宙速度に達している。あのままだと数分で火星に到着するぞ」

「国連宇宙軍司令部が火星にも防空警戒を出すようです」

「だろうな」

そうしているうちに宇宙船は火星方面に消え去ったのである。しかし、旗艦『霧島』から司令部に向けての暗号電文が発信されていた。『天岩戸開ク』

それはさておき、第一艦隊は乱れた艦艇を整えて冥王星宙域から離脱するのであった。そして5日後には火星沖に到達し更に2日後には月軌道に到着するのである。

「司令、地球に到着です」

「おう」

少しだけ地形が変わってしまった地球。日本では四国地方の4分の1が大きくクレーターに成り変わっていたのだ。その原因は勿論、ガミラスが初期に投下した遊星爆弾であった。

開戦時から西暦2193年頃まで地球は遊星爆弾の脅威にあった。しかし、波動エンジン搭載艦艇の配備が進み遊星爆弾への迎撃態勢が整い迎撃に成功した事で西暦2199年の今では遊星爆弾の脅威は無くなっていたのだ。

だが、失ったモノは帰っては来ない。遊星爆弾の迎撃が成功するまでに国連宇宙軍は実に無辜の市民13億8000万の尊い人命を失っていたのである。

そして遊星爆弾は原作と同じく地上に放射能を撒き散らしていた。迎撃には成功しているものの、93年頃までは地表に着弾していたの

でその衝撃波による津波は元より誘発される地震等も頻発していたのだ。そして極めつけは放射能である。その為地球市民は内惑星戦争で建設していた地下都市への移住を行っていた。

また科学者達の見解により放射能を完全に除去するには数100年の単位を必要とする事が成されていた。

「司令、横須賀に到着しました」

そうこうしているうちに第一艦隊は母港である横須賀宇宙軍港に到着する。到着し雑務整理をしていると将和は宇宙軍司令部に出頭要請が掛かったので残りの処理を副官に任せて司令部に出頭したのである。

「よく来たな、まあかけたまえ」

「どうも」

相手は国連宇宙軍の軍務局長である芹沢中将だった。普段は威厳そうな表情をしているが将和の前ではそのような表情はせず、むしろ出されたコーヒーを二人で味わっていた。

「今回のメ号作戦……御苦労だったな。完勝ではないか」

「ですが……それでも『雪風』ら若干の被害は出ました」

「それはそうだ……だが作戦に完全勝利は無い。それは君の家系がよく知っている筈だ」

(……その張本人なんですけどな)

将和は内心そう思うもそれは言わない約束である。

「だが、これでイスカンダルからの放射能除去装置の提供とガミラスへの本格的な攻撃が可能となった」

「喜ばしい事ですな。では『ヤマト』は両方の任務になると?」

「いや、『ヤマト』は放射能除去装置の受領が最優先となる。派遣は『ヤマト計画』の人員で動かされるだろう。だが地球も座して待つわけではない」

「……と言いますと?」

「『新地球艦隊構想計画』……漸く第一次建造計画のが就役する」

「ああ……あの例の『五カ年計画』のですな」

国連宇宙軍が波動エンジン搭載艦船開発の見通しが経った219

5年にスタートとした計画であった。一個艦隊に戦艦4隻を主力にしたのを九個艦隊も揃えたのが第一次計画、第二次計画は更に艦船を増やし外惑星艦隊（司令部は土星の衛星タイタン）と内惑星艦隊（司令部は月）の創設、第三次計画は長距離航海を可能とした遠征型の九個艦隊の創設を狙ったものであった。

「第一次建造計画は戦艦37隻、巡洋艦102隻、駆逐艦180隻、宇宙母艦12隻。現時点ではまさに虎の子の艦隊になるだろう」「数だけは……という形ですな（旧作の艦隊数と同じだな）」

芹沢の言葉にそう取り繕う将和である。

「そこで貴様には……一個艦隊を何れ率いてもらいたい」

「……芹沢中将、それは少し買ひ被り過ぎでは？」

「この戦役で多数の戦果を挙げているクセによく言うものだな」

芹沢は苦笑しながらもそう言ってコーヒーを啜る。

「艦隊司令になると沖田はヤマト計画のために外れている。そうすると地球艦隊総司令官には同期の土方が有力だな」

「まあ土方校長なら……」

現在は空間防衛総隊司令官に就任している土方中将だがその前は宇宙戦士訓練学校の校長をしていたのだ。将和らにとっては鬼教官としての記憶が多かった。

「まあヤマトが発進した後の話だ。今は心のうちに秘めておけ」

「はあ……」

芹沢の言葉に将和はそう言うのである。そして部屋を退出すると廊下には新見が立っていた。

「ゲツ、薫……」

「ゲツとは何よ三好君」

将和はまた悪い時に遭遇したと思ひ新見は新見で不機嫌そうにメガネをクイツとあげるが直ぐに表情を暗くする。

「三好君……『雪風』……古代君は……」

「……深追いしていたのを『磯風』が見ていた。そしてビーム砲で……」

「嘘よツ!! 古代君が……古代君が死ぬ筈は……」

将和の言葉に新見は思わず叫ぶも眼には大量の涙を浮かべていた。
そして静かに泣き出す。

「……………」

その様子に将和はいたたまれなくなりその場を後にするのであった。

第二話

それが何時から発見されたのかは定かではない。しかし、残っていた火星自治政府からの資料によれば少なくとも西暦2140年代にはその『異星文明』の戦闘艦艇が火星自治政府によって発見され解析中だったと元日本国総理は後にそう述べている。

『異星文明』

地球人類とは明らかに異なる知的生命体が持っていたとされる宇宙船が火星で見つかったのだ。だが西暦2150年代当時の地球各国政府は失笑するしかなかった。

地球各国政府の宇宙艦艇でさえ数百隻は揃えているのに火星自治宇宙海軍の艦艇がそのような事をするわけが無い。そう言われていた……否、言われていたのだ。

しかし西暦2164年、火星自治政府は地球政府に対し独立戦争を仕掛けるのである。それが後に言われる『第一次内惑星戦争』であった。

第一次内惑星戦争では数の差に有利だった地球軍だったが火星自治宇宙海軍の宇宙艦艇は解析が完了した新型宇宙エンジンを搭載しており各戦場で地球軍は敗退を重ねるのであった。

だが火星自治宇宙海軍も工業力の限界で艦艇の数がそこまで多くは無いので地球までに侵攻する余力は無く、月軌道沖海戦で日本宇宙海軍第五艦隊（司令官三好正信少将）との敗北で漸く停戦交渉が始まり西暦2168年に停戦が合意された。

平和……と思いきや、地球政府は火星に対しての反撃を思案しそれに目を付けたのが鹵獲した火星自治政府宇宙艦艇だった。地球側はリバースエンジニアリングを徹底的に分析、解析を行い新型の宇宙艦艇の建造に乗り出した。それが各国で共通の宇宙艦艇とされる『BBクラス』『CAクラス』『DDクラス』と表記される大量生産を目的と

した宇宙艦艇だった。

各国はこの宇宙艦艇の建造に取り組み日本も西暦2170年に『村雨』型宇宙巡洋艦が、西暦2171年には『金剛』型宇宙戦艦がそれぞれ進宙して日本宇宙軍の再編成に務めるのである。

そして西暦2179年、再び地球と火星の内戦――『第二次内惑星戦争』が勃発する。前回と違い数と性能に差が出て追い込まれる事になってきた火星自治政府は地球に隕石落としという禁断の技を決行、各大都市が迎撃出来ずに破壊されるも日本に関しては予め火星自治政府内にスパイを潜らせていた事もあり迎撃艦隊を展開していた事ではほぼ無傷で乗り切る事になる。

そして西暦2181年、日本が主力となった地球艦隊は火星自治宇宙海軍を火星宙域沖海戦にて破り火星自治政府は宇宙艦隊を喪失した事で徹底抗戦を断念、同年に降伏を申し入れたのである。

地球政府も各国政府が火星宇宙軍の隕石落としで半壊滅していた事もありほぼ無傷で生き残っていた日本が主導となって降伏を受け入れ火星自治政府は消滅する事になる。

それにより火星は地球の管轄下に置かれる事になるのであった。

(うーん、やはり原作と少し違うなあ……)

西暦2199年、将和は横須賀宇宙軍港の隊舎にある自室で歴史のデータを見ていた。

(というより……俺の家系が続いた『あの世界』に繋がっているな……)

将和の死後も三好という家系は日本の舵取りを時には表から時には裏から操作していたようで歴代の政権や軍首脳部からは頼られていたようである。

(それに原作には無かった描写……)

異星文明の戦闘艦艇を火星自治宇宙海軍が発見し解析していた事であろう。そして地球も火星を占領後に改めて汲まなく全面的に探索した時に『別の戦闘艦艇を発見』していた。それが光速での速度を実現した戦闘艦艇だったのだ。

(まあ親父が言うにはタキオン粒子が……と言っていたから十中八九

波動エンジンやろうけど……まさか開戦時にはある程度揃えていたとはな……)

西暦2191年4月1日、天王星の監視ステーションは外宇宙から太陽系に向けて侵攻してくるガミラス艦隊を捉えた。当初は火星自治政府の残党が戦力を揃えて再度の内惑星戦争を仕掛けようとしたと国連宇宙軍の中央司令部はそう認識した。そのため、各国の宇宙艦隊を集めて迎撃態勢を整えた。それが内惑星戦争で活躍した宇宙艦艇で編成された。

編成された艦隊は八個艦隊であり日本も沖田中将を司令官とした第二艦隊が参加した中で先遣艦『村雨』がガミラス艦隊と接触した。「早急過ぎる。もしかしたら人類初の宇宙人との接触到……」

『これは命令だ沖田中将ッ!!』

早すぎると沖田中将は具申するも軍務局長の芹沢中将は具申を退け沖田を軍務局長権限で解任、『村雨』に攻撃を命令したのである。

その結果、『村雨』は反撃され撃沈された。その後、冥王星沖宙域に侵攻してきたガミラス艦隊を国連宇宙艦隊が迎え撃つも圧倒的な科学力を前に八割を喪失してしまうのである。

国連――真っ先に動いたのは日本だった。日本は直ぐに国民に向けて発表した。

「我々は火星自治政府の残党という形で攻撃を開始した。しかし、相手は異星人だった。我々は間違っていた。だがそれ故に我々はこの地球を守らなければならない」

時の政権だった三好正信総理はそう主張し謝罪をしながらも異星人への対処を怠りはしなかった。日本政府はアメリカ等を中心に協力を要請し再度宇宙艦隊の再編をさせつつガミラスに対処するのである。

そしてガミラス艦隊は再度太陽系に侵攻してきたが、波動エンジンを搭載した新規艦隊30隻（戦艦2、巡洋艦8、駆逐艦20）は海王星沖でガミラス艦隊と激突、地球艦隊は巡洋艦2、駆逐艦7隻を喪失もガミラス艦隊を壊滅させる事に成功するのである。（西暦2192年 海王星沖海戦）

「だが直ぐにガミラスは出てくるだろう。油断はしてはならない」
宇宙軍出身の正信は必ずガミラスは再度侵攻してくると踏んで
いた。それは正しくガミラスは冥王星を占領し基地化していたのだ。

「冥王星からガミラス艦隊の出撃を確認しました!!」

「北米艦隊、ロシア、中国艦隊が出撃します!!」

「バカな、早すぎるッ!!」

「呼び戻せ!!」

「間に合いません!!」

この海戦――第二次天王星沖海戦は地球側が敗北した。というの
も三個艦隊はまだ波動エンジンを搭載していない旧式艦艇で編成さ
れた艦隊を出していた。本来なら三ヶ国とも波動エンジン搭載艦就
役まで出撃は控えるべきだったが中国は国民の感情、北米は大統領選
挙も控えていた事もあり此処で勝つ意味があったので日本の制止を
振り切つての出撃だった。(西暦2193年 第二次天王星沖海戦)
そして三個艦隊は各個撃破という形で壊滅したのである。この海
戦で国連宇宙軍の戦力は日本宇宙軍艦隊を残してほぼ壊滅する。

このため地球――日本はほぼ独力でガミラス艦隊に対処する事を
迫られるのである。(波動エンジン換装前の欧州連合軍艦隊も壊滅し
ているため)

西暦2195年、日本宇宙軍は土星を絶対防衛圏に設定し波動エン
ジン搭載の二個艦隊――宇宙母艦を主力にした機動艦隊――で侵攻
してきたガミラス艦隊を奇襲攻撃し壊滅させるのである。

(まあこの時は俺も初陣だったわな……)

将和は改装空母『隼鷹』のパイロットとしてこの海戦に参加してい
たのだ。なお、この時に将和は敵機8機を撃墜し敵空母2、戦艦1、駆
逐艦3を撃沈していた。

その後も小競り合いは続いていたが西暦2198年、ガミラスは大
艦隊(約150隻)を以て火星沖に侵攻してきた。地球艦隊――日本
艦隊は二個艦隊で迎撃し辛くも撃退する事に成功する。

(だがそうなると思スカンダルが地球にユリーシャとサーシアを送つ
た理由が分からん……)

将和は原作通りの展開に頭を傾げる。この地球は原作とは違い三割は放射能汚染に悩まされていたがまだ地球は原作のように汚染はされてはいなかったのだ。

(もしかして……ガミラスにやられると予め想定していたから二人を送った……のかもしれない……)

まあ将和にしたらどうでも良かった。

「そろそろか」

将和はマリアナ沖に眠る『大和』を見学するためリニアで移動していたがもうそろそろ着くのだ。

『お待たせしました』『大和前』『大和前』に到着です』

将和はリニアを降りて『大和』を波動エンジン搭載の宇宙戦艦に改装する地下ドックに向かう。

「将和じゃないか」

「よう真田。見学を許可してくれて助かるよ」

「なに、お前から見学したいとの連絡が来た時は驚いたがな」

将和を出迎えた真田志郎少佐は将和と握手をして艦内を案内する。

「此处が艦橋だ」

「……此处か……」

艦橋はやはり原作と同じ作りをしていた。感慨深く将和が真田にバレないように感動していると警報が鳴り出した。

「どうした!？」

『本艦上空に敵空母がワープアウトしてきました!! 上空凡そ3万!!』

その瞬間、将和は動いた。

「総員戦闘配置につけ!! 補助エンジン始動5秒前!! 砲雷撃戦用意!! 重動力線コンタクト、メインエネルギースイッチオン、傾斜復元、船体起こせエ!!」

「無茶だ将和!?! まだ作業員しかいないんだぞ!!」

「けど主砲は撃てるんだろ?」

先程、艦内案内で主砲は発射可能と真田から聞いていたのだ。ならこれを使うしかあるまい。

「だが、砲弾は採用されたばかりの三式融合弾だ。テストすらもしていないぞ!!」

「そんな暇あるか!!」

その瞬間、『大和』が揺れる。敵空母からの砲撃だった。

「真田!!」

「……分かった。主砲は二番砲が射撃可能だ」

「了解。二番、右旋回。砲弾、三式弾!! 仰角修正急げ!!」

二番砲がゆっくりと砲塔を旋回させ砲身を最大仰角にする。

「レーダー自動追尾!!」

「目標捕捉!! 将和、全て揃った!!」

「三式弾、撃エツ!!」

一斉射、二番砲が射撃し上空で再度砲撃しようとしていた空母に三式弾が命中、一瞬の間を置いて爆発四散したのである。

「敵空母撃沈!!」

「……ふう、何とかなったか……」

安堵の息を吐く将和であった。それが将和が『大和』『ヤマト』における最後の指揮であった。

その後、将和は『ヤマト』出撃のため地球軌道上で護衛のため出撃する事になっていた。

「さて、行くかな……」

将和はそう呟きながら隊舎の部屋を出るのであった。その後、将和が率いる四戦隊は『ヤマト』抜錨前日に横須賀宇宙軍港を出撃し地球軌道上で展開するのである。

そして『ヤマト』は原作通りに惑星間弾道ミサイルを48サンチ陽電子衝撃砲で破壊し出撃するのである。

第三話

『ヤマト』が行く……」

地球軌道上で待機していた四戦隊（将和）は出撃する『ヤマト』を見ていた。遠くなつていく『ヤマト』に将和はゆつくりと敬礼をするのである。

（結果は分かっているが……頼んだぞ『ヤマト』）

そして『ヤマト』が地球を出撃してから三日後、将和は横須賀宇宙軍港の日本宇宙軍司令部に出頭した。

「三好、入ります」

「ん。よく来たな」

出迎えたのは日本宇宙軍連合艦隊司令長官の土方竜大将だった。

「まあかけたまえ」

「はっ、失礼します……四戦隊に出撃があるとか……？」

「ククツ、耳が早いな。正しくその通りだ」

土方はそう言つてタブレットを将和に渡し将和は一目する。

「……タイタンとの航路開通作戦ですか？」

「ああ。『ヤマト』からの報告で土星圏内にいたガミラス艦隊はほぼ壊滅した。そこで波動エンジン製造に必要なコスモナイト90が大量に採掘可能な土星の衛星『エンケラドゥス』と地球の輸送航路を開通させる必要がある」

「土星から撤退する時にコスモナイト90は大量に持つて帰つたと聞きました。がやはり足りませんか……」

「足らんな。新規建造艦もあるのだ、現在の備蓄では到底足りん」

国連宇宙軍は戦線縮小のために土星、木星から撤退して火星での絶対防衛線を築いていた。その撤退の際に国連宇宙軍は出来るだけ多くのコスモナイト90を艦艇に積めるだけ積載して撤退していたのだが……やはり新規建造をすると減るモノは減るのだ。

しかも『ヤマト』の波動エンジンには予想より多くのコスモナイト90を使用していたのも原因の一つであった。また、ワープや波動砲を使用するのも今の地球艦艇の波動エンジンでは波動砲を撃つてもコスモナイト90が足りないので暴発して爆発四散するという実験結果があつた。(無人艦の『村雨』型で実験したところ爆発四散した)

「成る程。それで戦力は？」

「貴様の四戦隊に十七駆と十八駆、それと空母『鳳翔』『龍鳳』『神鷹』『大鷹』だ」

「空母はどれも軽空母……成る程。輸送船代わりですな」

「その通りだ。『鳳翔』以外は航空機は降ろしている。それと艦隊は貴様が指揮を取る」

「……マジですか？」

「本気だ」

土方の表情に将和は本気と捉え姿勢を正してから敬礼をした。

「分かりましたッ。微力ながら全力を尽くしますッ」

「ん。それと艦隊司令官だから貴様にも参謀は付くからな」

「分かりました」

将和は敬礼をして長官室を退出する。その足で四戦隊が停泊する三番軍港に向かう。そこで身長は小さいが技術者としての度胸は人一倍大きい同期がいた。

「ようトチロー」

「ん、おお将和か」

丸眼鏡をかけた技術尉官の大山俊郎大尉は将和を見かけてニカツと笑う。

「いつも済まんな……『八雲』の調子はどうだ？」

「好調だな。波動エンジンもコスモナイト90を増量させたモノに換装したから『ヤマト』が行ったワープも出来るぞ」

「成る程な……もしかして今回の作戦って……」

「ああ。備蓄分で波動エンジンを製造してもワープに耐えられる量のコスモナイト90が足りないから緊急輸送する事になったんだな」

「そういう事か……」

確かにそれなら納得出来ると将和はそう思う。

「まあ兎に角も輸送作戦は成功させる必要はあるな」

「なあに、何とかなるさ」

「お前なあ……」

ニカツと笑うトチローに将和は溜め息を吐くのである。その後、『八雲』に乗艦すると参謀が到着していた。

「第33護衛隊参謀に就任しましたチュン中佐です」

「第33護衛隊司令官の三好です。若輩者ですが何とか頑張ります」

「いえいえ、そのような事は。互いに頑張りましょう」

チュンはそう言いながら自身が持つてきたサンドイッチを食べる。

将和の視線に気付いたチュンは苦笑する。

「ああ、少し経ったパンでも湯気を当てれば案外美味しいですよ」

「成る程（パン屋の二代目にそっくりだなあ……）」

チュンの言葉にそう思う将和だった。なお、艦隊は二日後に出撃し一路土星の衛星エンケラドゥスに向かう。その途中、火星沖で艦隊は土星に向けてのワープを行う事にした。

「全艦ワープ準備宜し」

「ワープ1分前」

「総員、ベルト着用」

『八雲』艦橋でも乗員達が慌ただしく動き回り椅子に座りベルトを着用する。

「ワープ10秒前……5、4、3、2、1」

「ワープ!!」

ワープする瞬間、将和は目を閉じる。身体が振れそうな捻れそうなそういった感覚が数十秒、数分が過ぎると気付けばその感覚も無くなっており目を開ければ土星の環付近を航行していた。

「……どうやら『ヤマト』以外での地球艦艇によるワープに成功したようですね」

参謀席に座っていたチュンが身体を伸ばしながらそう言う。他の者達も初めてのワープに酔ったりしていた。

「ああ。被害及び全艦の掌握を急げ」

程なくして全艦異状なしの報告が舞い込み将和はそのまま艦隊をエンケラドゥスに進める。程なくしてタイタンの軌道上に到着し周辺宙域を搜索、異常が見受けられなかつたので三空母は着陸しコスモナイト90の採掘に従事する。

その間にも護衛隊は周辺宙域を警戒していた。

「司令、『龍鳳』から連絡です。『宅急便の荷物は受領した』との事です」「ん。なら三空母が軌道上に到着したらそのまま地球に帰還する」

三空母の格納庫には大量のコスモナイト90が敷き詰められ他にもカーゴが艦外に曳航用ロープで繋がれていた。他にも護衛隊の十七駆、十八駆の各駆逐艦艦外にカーゴが接続されていた。無論、中身はコスモナイト90が大量に敷き詰められていた。

そのため四戦隊が艦隊の外側に布陣をして警戒に当たる事になっていた。

「ワープ準備に取り掛かれ」

「分かりました、直ちに取り掛かります」

将和の言葉にチュンは領き艦隊は軌道上で再編をするとそのまま火星沖までのワープに移行したのである。

「よくやった」

5日後、横須賀宇宙軍港に艦隊が帰還すると土方長官が出迎えてくれた。

「今回の採掘量は凡そ半年分にはなるだろう」

「なら戦力も大分増えそうですね」

「輸送船との兼ね合いもあるからそこまでは分からんがな」

そう言う土方だがその表情は少し嬉しそうだったが直ぐに表情を変えた。

「だが直ぐにでも第二次輸送作戦を行ってもらおう」

「……二匹目の泥鰌狙いですか」

「フツ、今度は鯛を釣ってもらおう」

土方はそう言ってタブレットを将和に渡す。

「……輸送船3隻を含む艦隊ですか」

「そうだ。漸くワープ可能な波動エンジンを搭載した輸送船が再就役を果たした。その意味でこの作戦も今後に向けて重要となってくる」
「分かりました。準備出来次第、再び発進します」
「頼むぞ」

斯くして第33護衛隊は波動エンジンを搭載した輸送船『神川丸』『君川丸』『聖川丸』を伴い再び土星の衛星エンケラドゥスに向けて発進するのである。

行きは難なくエンケラドゥスに到着するとコスモナイト90を当たり前次第敷き詰めまくる第33護衛隊である。

そして積載が完了すると艦隊を再編しつつそのまま発進するのである。

「さて……行きはよいよい帰りは何とやら……だな」

「まあ……今回は……来そうですね……向こうも流星に気付くでしょうからッ」

将和の言葉にサンドイッチを食べながらチュンはそう答える。

「来るとすれば……」

「木星と火星間のアステロイドベルト辺りでしょうな。味方は少なく敵は多い、ヒットアンドウェイを仕掛けるなら好都合の場所です」
「ん」

将和の言葉を補足するようにチュンは答える。チュンの答えに将和は頷く。

「レーダー、タキオンレーダーから目を離すなよ」

「勿論です!!」

将和の言葉にレーダー手は答える。

「艦隊に通過。予定を変更し火星沖までワープを行う。各艦ワープ準備に移行しろ」

そして第33護衛隊と輸送船3隻は火星沖までワープを敢行するのであった。

第四話

「納期の延長は出来ない。それが我々の答えだ」

「……………分かりました」

重役の言葉を思い出しながらプレシア・テスタロッサは最後の調整システムの作業をしていた。この調整システムが終われば愛娘のアリシアと休暇を取る予定だった。プレシアは新型の大型魔力駆動炉の開発プロジェクトの設計主任だったが完全なお飾りであり権限は無に等しかった。主任補佐とその関係者による安全性度外視の開発と、駆動炉の稼働実験の強行があった事もありプレシアは実験を認めず、代わりに自身の参加も要請した事で成果を見守る事にしたのだ。

「それでは実験を開始します」

研究員の言葉に駆動炉の実験が開始されるが数分を待たずして駆動炉が膨張し暴走を始めるのである。

「強制冷却水の注水だ!!」

「駄目です、強制冷却水の注水でも温度が上昇しています!!」

「お母さん…………」

「大丈夫よアリシア……………冷却水の注水作業は続けて!! 駆動炉が機能停止するまで続けるのよ!!」

「開発主任、それでは!?!」

「貴方達が強引に推し進めたのでしよう!! ならば最後まで責任を取りなさい!!」

主任補佐の怒号にプレシアは怒号で返す。その間にも暴走は続き……。

「く、駆動炉、臨界点突破します!?!」

「……………!?!」

研究員の言葉にプレシアは咄嗟にアリシアと猫のリニスを抱き締めたのである。

『ヤマト!! ヤマト!! ヤマト!!』

あれから幾分かの時が過ぎ、ヤマトは無事に『コスモリバースシステム』の受け取りに成功して地球に帰還する事になる。

それにより半汚染されていた地球は元の緑に水が溢れた世界を取り戻す事に成功するのであった。

「これでめでたしめでたし……ってわけにはいかないわな……」

『ヤマト』からの報告で帰路の途中で白色彗星艦隊ーガトランティス艦隊と衝突していた事は報告書で将和も読んでいた。

(これは案外……ヤマト2への方向に行けるか?)

将和はそう思ったりするが直ぐに被りを振る。

(いや……さらばになる可能性もあるから要注意だな)

将和はそう思いながら久しぶりに出た地上のとあるところへ赴く。

そこは横須賀にある戦没者墓地だった。

「……久しぶりだな古代」

将和は花と一升瓶の酒を持ってきており花を添えると墓石に一升瓶を注ぐ。墓標には『古代守之墓』と記載されていた。

「全く……改変をしてきたつもりだったのにお前が死んでどうするんやっつての」

将和はそう言いながら酒を仰ぐ。腹にアルコールが染み渡るがそれだけでは酔えそうにもなかった。

「お前の弟がこれからどうするのかは知らん。が、俺は地球を守る。そういう事だ」

それから暫く、将和は無言で飲んでいたがそこへ歩く音が聞こえてきた。

「三好君……」

「……新見か」

現れたのは花を携えた新見だった。恐らくは古代の墓参りなのだろう。

『ヤマト』はいいのか?」

「ええ……先生が見てくれてるから」

そう言いながら新見は花を添え手を合わせる。そして将和はごそごそと紙コップを出して新しく酒を紙コップに注ぎ新見に渡す。

「奢りだ。今日くらいはいいだろ」

「……そうね」

将和の言葉に新見は笑みを浮かべて紙コップを受け取り口に含んだ。

「たつくもおろく何で死ぬのよ古代君く」

「……絡み上戸だったの忘れてた……」

酒盛りを初めて数時間、いつしか新見は酔っ払っていた。最初はあつたはずのツمامミも気付けば新見に食べられておりすつからかんであった。

「古代君も古代君よ、何で私みたいな美人と別れるのかしらく」

(……絡み上戸だからじゃね?)

思わず将和は古代の墓石を見る。その墓石付近で古代守がごめんと頭を下げるように思えて仕方なかった将和である。

「ほら飲みなさいよ三好君!!」

「いやあのな新見……」

「飲めないってなら……んぐっんぐっ……」

「ちよ、おま……」

苛立ったのか新見は一升瓶に口を付けてらっぱ飲みをしたと思っ

たら一升瓶からそのまま将和の口に吸い付いたのである。

『や、やった!?!』

一瞬、守の幻聴な言葉が聞こえたと思った将和であるがそれとは裏腹に新見は将和に酒を送り込んだ。

「プハッ……」

「お前な……」

口から離れた新見だったが頭をフラフラと揺らしながら次第に顔の表情が蒼白になってきた。

「……ウツ気持ち悪い……」

「ま、待て新ー」

「オエー」

その日、将和の軍装一着が次の日にクリーニングへ出されたのは言うまでもなかったが将和のフラグはそこで終わりを告げていなかった。

新見を当直の宙曹に任せした後、一人で酔い醒ましに散歩をしながら官舎まで歩いていった。

「まだ肌寒いが……良い夜の日だな」

将和はそう呟きながら歩いていると、ふと電柱の付近に黒い影があった。

「……ん〜?」

目を擦るとその黒い影から人間が見え、将和は数10年振りにその人間を見て目を見開いた。

「……フェイト……?」

黒い影は二人の人間であり一人は黒髪で腰まである長髪の女性と金髪の長髪での女の子と猫を抱えていた。だが、女の子は将和がかつてテレビの画面を通して見ていた『魔砲少女』もとい『魔法少女リカルなのは』シリーズに出てくるなのはLOVE……もといなのはの親友であるフェイト・テストアロッサに似ていた。だが……。

「いや待て……この女性……まさかプレシア・テストアロッサか? となる……この子はアリシア・テストアロッサとリニス?」

将和は首を傾げながらジッと二人と一匹を見つめるが確かにそれ

らの人物に似ていた。

「……取り敢えずは官舎に送るわけにはイカンし……となると実家しかないか」

将和は無人タクシーを呼びつつ実家に電話をし無理矢理起こされた将和の母である知子は嫌な顔をせず了承してくれたので急遽実家に向かう事になったのである。無論、チユンには有給で休む事をメールしておいたのであった。

「……………ッ……………」

プレシアは雀の声で目が覚めた。横に視線を向けると愛娘のアリシアがスヤスヤと寝ていた。

「……………アリシアッ!？」

意識が覚醒したプレシアは思い出してアリシアに触れる。アリシアは多少むずいたが起きる事はなく寝続ける。ホツとしたのもつかの間、プレシアは辺りを見渡すとそこは見慣れぬ部屋であった。確か第97管理外世界『地球』にあるニホンという国の部屋の造りであるワシツというのに似ていた……。

そこへ襖が開かれ中から一人の男——将和が水を入れたコップを載せた御盆と共に現れた。

「おっ、目が覚めたか」

「貴方は……」

「昨日、道端で気を失っていた貴女方を保護した者だよ」

ヨイシヨッと将和は御盆を机に置いて座る。将和の言葉にプレシアは頭を下げる。

「それは……ありがとうございます。ところで此処は……?」

「此処は地球。貴女方で言うところと第97管理外世界のところですか」

「地球ッ!? そんな、そんな爆発事故で地球まで跳ぶなんて……」

(爆発事故……となるとアリシアが死亡した時のか)

驚くプレシアを他所に将和は爆発事故の単語に直ぐ納得した。ア
ニメに比べたらプレシアは随分と若く声も低い声ではなくむしろ高
かった。(CV:17才)

「それと……猫の方ですが、猫は残念ながら……」

「リニス!? そんな……」

猫ーリニスは将和が見つけた時はまだ息をしていたが実家に連
れ込んだ時にはもう息を引き取っていた後だったのだ。今は小さな
布団に毛布を掛けられた状態で目を閉じておりプレシアが呼び掛け
ても眼を開けて返事をする事はなかった。

「……分かりました。わざわざこのような形をありがとうございます
す」

「いえいえ。一先ずはゆつくりなさって下さい。もう少しで朝食なの
ですがどうされますか?」

「……この子が眼を覚めてからでも宜しいですか?」

「勿論構いませんよ」

プレシアの願いに将和は頷き部屋を後にするのであった。なお、ア
リシアが眼を覚めたのはそれから一時間後の事であった。

「もぐもぐ……美味しいよおばちゃん!!」

「あら、それは嬉しいねえ。目玉焼きのお代わりはまだあるよ」

「うん、ありがとう!!」

知子が目玉焼きを載せた皿をアリシアに差し出してアリシアは笑
顔で礼を言っただけで食べる。

「何から何までありがとうございます」

「良いのよ。将和から急に言われてびっくりしたけど、旦那が最近仕
事ではないから楽しくて楽しくて嬉しいもんだよ」

プレシアの言葉に知子は笑みを浮かべる。そして朝食後、将和はプ
レシアに視線を向ける。

「さてテストタロツサさん。実は貴女が思っている第97管理外世界の
地球ではないのですよ。いや、原則には地球は地球なのですがね」

「……何となくは分かっていました。それとテレビを拝見しましたが
私が知っている第97管理外世界の地球ではありませんでしたので

……」

そして将和はプレシアに対してこの世界を語り出すのであった。

第五話

「フオッフオッフオッフ。そうかそうか……それは苦勞されましたなあ」

あれから、将和の連絡で話を聞いた父正信も午後休で実家に駆けつけ事情をプレシアから聞いていたのである。

「ですが私も驚きの連続です……まさか実験の爆発で世界を超えてこの世界に来るものですか……」

「成る程のう……ワシは嫁から連絡で将和が人妻を持つて帰ってきたというもんじゃからいよいよ将和にも春が来たと思うくらいですわい」

「まあ、御上手ですわ」

正信の言葉にプレシアは苦笑する。なお、隣では将和が（あんのババ……）と思っていたりする。

「テストタロツサさん、ワシはこう見えて政府の方に色々繋がりがあります。貴女達の事は任せては下さらんか？」

「……分かりました。お任せ致します」

「感謝します。おおい将和、テストタロツサさんを部屋に案内するんじゃ。今日から家族が増えるわい」

「ハイハイ……じゃ案内しますよテストタロツサさん」

「ありがとうございます。それとプレシアで構いませんよ」

「あ、それなら自分も将和で構いません」

「分かりましたわ」

（……おい……）

（ええそうね。脈有りかもしれないわね）

（フオッフオッフオッフ。今日の酒は美味いかもしれんのう）

（飲み過ぎよ貴方）

（なあに今日くらいは構わんわい）

そんな話を話す正信と知子であった。そして新しく部屋を案内するとアリシアがワーとベッドにダイブする。

「こらアリシア」

「ごめんなさいリニス」

ベッドにダイブしたアリシアを猫耳とシツポが生えた女性リーリニスが怒るのである。当初、リニス（猫）は息絶えてしまったがアリシアが死んだりリニスを見て泣いてしまった事、またアリシアがプレシアにリニスを何とかしてほしいと懇願した事でプレシアはリニスと契約をして使い魔としてリニスは復活したのである。

なお、この時の過程で正信と知子も魔法を信じた。また、プレシアは地球の大気に『アンチマギックフィールド』ー通称『AMF』が散布されているのを発見したのである。

それはさておき、正信は政府のパイプを使って翌日にはプレシア、アリシア、リニス三人分の戸籍を完成させるのである。

「あら三好君。遅刻なんて駄目じゃない」

「……………」

また、プレシアらと出会った翌日、たまたま廊下で出会った新見に将和はジロリと恨めしそうな表情を送るだけだった。なお、新見は吐いて爆睡した事は覚えていないらしい。（知らない方が幸せかもしれない）

それはさておき、『ヤマト』の帰還後に地球の復興が加速してきたのは言うまでもない。民生企業の復活により各惑星、各衛星への資源輸送が活発化し防衛軍も護衛艦隊を創設して警護に取り組んでいく事になる。

無論、将和が司令官を務める第33護衛隊も例外ではなかった。

「では2時間後に出発とする」

「分かりました」

将和の言葉にチュン参謀達が頷く。相変わらずチュン参謀はサンドイツ等のパン系を食べているが将和は気にしていないしそれは他の乗員達でもある。なお、将和が付けたチュン参謀の渾名『パン屋

の二代目』は直ぐに広まり下士官や新しく入ってきた兵士達でさえそう言っていたりする。

また渾名を付けられたチュン本人も悪い気はせずむしろ喜んでいたりする。

「しかし……土方長官の左遷……か」

地球は復興の途中だったが新しく地球連邦を創設しその過程で地球防衛軍も創設されていた。だが防衛軍上層部は今回の成功は機械―波動エンジンの成功と受け止めており波動砲を搭載した新規艦艇の生産配備に忙しくしていた。

土方らも波動砲搭載艦艇の建造は必要だろうとしていた。しかし、乗員を削ったりと科学の力を主要に頼るのは如何な物かと物議を醸していたのだ。無論、『ヤマト』らの乗員も全ての自動化に反対していたが上層部の反応は土方長官らの左遷だった。

これにより土方は第十一番惑星く冥王星の護衛艦隊司令官として一先ず冥王星に赴任する事になったのだ。

「ま、今考えても仕方ないな……」

そして2時間後に第33護衛隊は出撃し輸送船12隻と共に土星宙域に向かうのであった。

「今回も資源は満載ですなあ」

「ああ。だがガミラスの残党が来るかもしれないからな、警戒はせんとな」

「ですな」

『ヤマト』が帰還する前まで残党のガミラス艦隊が小規模で攻撃する事は何度かあった。無論、その度に防衛艦隊は迎撃に成功していたが警戒は常時だった。

「レーダー、異常無いか？」

「はい。対艦対空タキオンレーダー、共に異常有りません」

「ん。引き続き警戒な」

レーダー手の言葉に将和は領き星の海を眺める。

(相変わらず……だな)

ガミラスとの戦争があつたのにも関わらず、星の海は静寂と光に満ちた世界に溢れていた。いや、戦争はあつたが星々がある世界にとつては取るに足らない事なのだろう。

「……やはり奴等は来るか……」

「何か言いましたか司令?」

「いや……何でもない」

チュンの問いに将和はそう答え、軍帽を深く被るのであつた。そして西暦2201年にそれが現実となるのであつた。

『此方太陽系外周第三艦隊旗艦『ヤマト』!! 現在、輸送艦隊がガトランティス軍の攻撃機に襲われている!!』

「三好司令、太陽系外周第三艦隊より緊急電です!!」

「何?」

『ヤマト』が全太陽系に向けて電文を発信したこの時、将和の第33護衛隊は衛星『エンケラドゥス』にて輸送船団の護衛をしていた。

『ヤマト』から電文です。敵ガトランティス軍の航空機と遭遇。これを撃退するも大部分を取り逃がしたと……」

「司令……」

「……来るかもしれんな。全艦戦闘配置!!」

久しぶりに『八雲』艦内に非常ベルが鳴り響く。そしてタキオンレーダーを見ていたレーダー手が叫ぶ。

「天王星方面に未確認反応!! 味方識別信号有りません!!」

「チツ、敵の行動が早い……」

「司令、船団は緊急ワープで逃がすべきです」

そこへチュン参謀がそう具申し将和も頷く。

「ん、船団は緊急ワープに移行せよ!! 第33護衛隊は船団がワープするまで時間稼ぎをするぞ!!」

斯くして第33護衛隊は天王星方面からの敵艦隊に備える。そして程なくして敵艦隊は襲来する。

「敵艦隊接近!! 識別は『ラスコー』級6隻、『ククルカン』級16隻!!」

「艦首陽電子衝撃砲準備!!」

「艦首のですか?」

「そうだ、急げ!!」

「成る程、艦首のは射程距離が長いですからな」

将和の言葉にチュンは頷く。その間にも艦首陽電子衝撃砲へのエネルギーが充填される。

「エネルギー充填、艦首陽電子衝撃砲射撃準備良し!!」

「敵艦隊、射程距離に入った!!」

「艦首陽電子衝撃砲撃エエエエ!!」

33護衛隊の四戦隊4隻から28サンチ陽電子衝撃砲が一斉に発射される。陽電子の弾道は突撃してくる『ククルカン』級4隻を撃ち抜き轟沈させる。それに動揺せずガトランティス艦隊は尚も突撃を選択した。

「ガトランティス艦隊、突撃してきます!!」

「軽空母が有ればなあ」

「無い物ねだりはしてはいけませんなあ。此処は受け流しましょう」

「ん、全艦波動防壁を展開。展開しつつ左右スラスターを噴射、奴等同道を開けてやれ」

ガトランティス艦隊からビーム弾が叩き込まれるも波動防壁によって全艦無傷であった。そして第33護衛隊は左右に展開してガトランティス艦隊の突撃を受け流す事に成功しそのまま後方に回り込む。

「砲雷撃戦始めエ!!」

「撃ちい方始めエ!!」

『八雲』ら四戦隊は20.3サンチ陽電子衝撃砲を連続斉射でガトランティス艦隊に叩き込む。後方からの射撃により『ラスコー』級3隻を撃沈、1隻を大破させる。更に十七駆と十八駆が突撃して近接か

らの多数の空間魚雷と陽電子衝撃砲を叩き込んで大破していた『ラスコー』級1隻、更に2隻を撃沈し『ククルカン』級も8隻を轟沈させる事に成功する。

「敵ガトランティス艦隊が反転します!!」

「まだやる気か」

「威力偵察ならここいらで引き上げる筈ですが……」

「奴等は死を恐れない……というわけか。だが此方もやられるわけにいかん。戦術長、容赦なくやれ!!」

「了解!!」

第33護衛隊は近づかず離れずを繰り返して1隻、また1隻とガトランティス艦を撃沈させていき、やがて『ククルカン』級3隻になった時にそのまま3隻はワープして離脱したのである。

「……敵残存艦の反応有りません」

「……終わったな」

「……そのようですな」

チュンの言葉に将和は提督席にゆつくりと座る。

「各艦の被害状況を確認。確認次第、輸送船団と合流して地球に帰還する」

「了解」

斯くして第33護衛隊は輸送船団と火星沖で合流するとそのまま地球に帰還するのである。無論、ガトランティス艦隊の事は全て艦隊司令部に報告するのである。

第六話

「……そうか、奴等はそこまで入ってきたか」

「ああ。至急、警備態勢を見直さないとな」

横須賀宇宙軍港の近くにあるとある料亭にて将和は報告していた。

「しかしな親父……やはり親父が現役復帰したのは土方長官の左遷が……っ？」

「まあ……仕方あるまい。土方は土方で筋を通した。ならワシはワシで筋を通すという事じゃよ」

将和の言葉に父親である三好正信はそう答え日本酒を飲む。正信は宇宙軍元帥大将として現役復帰をし地球連邦軍宇宙艦隊総司令長官に就任したのだ。

「まあ土方が早く戻ってきたらワシは宇宙軍令部総長になれるかな……そうすりゃ防衛艦隊もある程度は楽になるだろう」

「現場のが良くないか？」

「また過労で倒れるからやめとく。母さんを困らせたくはない」「成る程」

以前、激務によって倒れた経験を持つ正信は妻である知子に迷惑をかけたくなかったのだ。

「それとお前も暫くしたら異動するからな。今のうちに荷物を整理しておけ」

「異動？」

「ああ、一個艦隊司令官の予定だ」

「……まさかと思うが昇進も？」

「その予定だ」

まあ一個艦隊を率いるなら大佐では済まなくなると将和も踏んでいた。

「まあ二月後くらいの予定だから今のうちに身辺整理はしておけよ。」

お前さん、直ぐに部屋が汚くなるからな」

「へいへい。人使いが荒いこつて……」

「文句を言うな、今の防衛軍は人手がいないんだ」

「まあ仕方ないって」

将和と正信はそう言いながら酒を飲むのである。なお、翌日は二日酔いになり知子から怒られるのは些細な出来事であろう。

それから数日後、第33護衛隊は月基地に入港していた。たまたま月に物資輸送があつたので第33護衛隊が護衛していたのだ。

「……そっぴやあいつらは今は月基地にいるのか。参謀、済まんが月面航空隊のところに出向く」

「分かりました。お気を付けて……」

将和は何かを思い出したかのように月面航空隊を訪れた。

「おいつすー」

「おつ、三好隊長!？」

「よー加藤」

「三好隊長じゃないですか!？」

「何? 三好さん?」

「え、マジで?」

「あ、隊長だ!？」

月面航空隊隊長の加藤三郎少佐の言葉に篠原大尉や沢村中尉らがガンルームから顔をヒョコヒョコと出す。

「いつ月に?」

「ついさつきだ。たまたま月に支援物資を運んでな。此処に加藤らヒョッコどもが駐屯してると思い出したからな。序でに顔を出しに来たんだけ」

「そりやひでえ。俺達は序ですか」

『ハハハハハハッ』

将和が笑みを浮かべると加藤は苦笑する。それに釣られて篠原達も笑う。そこへ一人の女性がガンルームに入ってきた。

「お、玲」

「何ですか隊長?」

「紹介しとく。前にも言っていたろ、俺や明生の教官の人だ」

「三好将和だ」

「……山本玲です」

将和の挨拶に山本は頭を下げる。その反応に加藤はあり？とする。

「おい玲、明生の話でも……」

「いえ、これからまた錬成するので……」

「おい玲ッ」

「まあまあまあ」

山本の言葉に加藤は声を荒げるがそれを将和が制した。

「いやいいさ加藤」

「ですけど隊長」

「山本、これから飛ぶんだろ？ 相手になつてやる。加藤、飛行服を貸してくれ」

『えッ………』

将和の言葉にガンルームにいたパイロット達はざわめきだす。将和の飛行操縦を見れる久々の機会だったのだ。将和の申し出に山本は怪訝な表情をしていたがやがては了承した。

「構いません」

「よし、なら決まりだ。15分後にやろう」

そしてその話はあつという間に航空隊に広がったのである。

「さあさあさあッ!! ガミラス戦役撃墜王の三好将和隊長と『ヤマト』航空隊で活躍した山本玲少尉のドッグファイトが見れるぞ!! さあどちらに賭ける!!」

「俺、三好隊長!!」

「玲に!!」

「やっぱ隊長だよなあ」

等々、篠原らが主体となつて博打をやっていたりする。

「じゃあ三本勝負な。先に上からしいぞ」

『……後悔してもしりませんよ』

上がっていた2機のうちコスモゼロに乗る山本はそう言って更に上空に上がりードッグファイトが開始されたのである。

「ハッハッハ、いやあ勝った勝った。まあ腕は落ちてなくて良かった」
「相変わらずですな隊長……」

飛行服を脱いだ将和は朗らかに笑いながら加藤と話していた。ちなみに賭けは加藤にバレて篠原と沢村は拳骨を喰らっている。そして離れたところでは将和に五連敗した山本が意気消沈していた。

三本勝負だったが瞬く間に山本が負け山本の更に二本追加で頼んで五本勝負になったがそれでも全敗したのである。

「まあ山本の筋も良かったがな。だが明生くらいになるにはまだまだだな」

「……兄はどれくらいだったの？」

「まあ加藤とどっこいどっこいだな」

「けど、それなら何故兄は……」

山本の言葉に将和は深く息を吐いて山本に視線を向ける。

「パイロットなんてそんなもんだ。どれだけ機体を整備して万全の態勢を整えても一発の弾丸が機体と自身の運命を左右するんだ」

「ッ」

表情を変えた将和の言葉に山本は息を飲む。その顔はおちやらかな表情ではなく、ガミラス戦役をパイロットとして戦ってきた男の顔であった。

「山本……不思議なもんでな……何千発の機銃弾の真ん中を飛んでも当たらない時は掠りもしない。けどな、当たる時は一発の流れ弾でも当たるんだ」

「……………」

「俺はガミラス戦役の時は言い聞かせながら腕を磨き生き残るため必死の努力をしてきた。ハハハ、他から見れば大いなる矛盾だ。その矛盾を生きているのが俺やお前達パイロットなんだよ」

「……大いなる……矛盾……」

将和の言葉に山本はそう呟く。

「まっ、空戦の腕に悩みがあるなら何時でも相談に乗ってやる」

「……………ッ……………」

将和はそう言って山本の頭をポンポンと叩くのであったが頭を撫でられた事に山本はうつすらと頬を染めるのであった。

「じゃあ次の勝負は俺で隊長」

「いや俺だ」

「いや、俺だ!!」

「めんどいから皆で来いやア!!」

結局、将和は月面航空隊のパイロット達と空戦勝負をする羽目になるのである。

「バイバイアリシアちゃん!!」

「じゃあねアリシア」

「うん、また明日学校でねずかちゃん、アリサちゃん!!」

アリシア・テスタロッサは学校帰りであり途中で学友の二人と別れて一人帰路につく。程なくしてアリシアは自宅である三好正信邸の玄関の引戸を明ける。

「ただいまー」

「あらお帰りアリシアちゃん」

「うん、おばちゃんただいま」

アリシアは居間で洗濯物を畳んでいた知子に言うのとパタパタと階段を上がってこの4月から自身に宛がわれた部屋に入りランドセルを置いてまた階段を降りる。

「畳むの手伝うねッ」

「あらありがとうアリシアちゃん」

「ニヒヒヒ♪」

「今日はお母さんとリニスちゃんもはや上がりと言ってたし旦那も早くに帰るから五人での夕御飯よ」

「ホント？ でもお兄ちゃんは……」

「今は月にいるわ。明日帰ってくるからその時は六人での御飯ね」

「ホント？ ワーイッ」

知子の言葉にアリシアは喜ぶのである。

第七話

「ほれ、艦隊司令官の辞令だ。序でに准将の階級章もだ」

「拝受します。てか序でに渡さないで下さいって……」

地球連邦防衛軍司令長官に就任した正信は将和を呼び出して辞令書と階級章を手渡す。

「……第十三艦隊司令官兼戦艦『伊勢』艦長に任命する……第十三艦隊？」

「そのままの意味だ」

正信の左隣にいた参謀長の芹沢大将はそう告げる。

「第十三艦隊は冥王星を基地とする艦隊になる」

「……成る程。ガトランティス艦隊が来襲した際、各艦隊集結のための時間稼ぎですか」

「まあ手っ取り早く言えばそうだな」

将和の言葉に正信は苦笑しながら頷くが右隣にいる副司令長官の藤堂はコホンと咳払いをする。

「済まん済まん話がずれたな。おお、こいつが艦隊表だ」

正信はそう言っただタブレットを将和に渡す。

第十三艦隊

旗艦『伊勢』

戦艦

『伊勢』

巡洋艦

『妙高』『那智』『羽黒』『足柄』『平戸』『音羽』

パトロール艦

『エリトレア』『デンバー』
駆逐艦『初春』以下12隻

「流石に航空戦艦はいませんか」

「というよりも訓練中だから配備は出来ん」

建造中だった『ドレッドノート』級主力戦艦の後部主砲を取り外して飛行甲板へ改装し航空機運用を可能にした『レキシントン』級航空戦艦が就役はしていたがそれでも全艦艇の中でも5隻しか就役配備されていないのでありなんである。

「参謀とかはどうする?」

「……自分の希望で宜しいので?」

「そこは任せる。何せ今から説明する戦艦『伊勢』は実験艦に等しいのだ」

「実験艦?」

正信の言葉に将和は首を傾げ正信は再度将和にタブレットを渡す。中身は『伊勢』の諸元だった。

『ドレッドノート』級宇宙戦艦（通称 主力戦艦）

戦艦『伊勢』

全長 275 m

全幅 65 m

全高 100 m

主機 02式HWVE D型次元波動エンジン×1

補機 艦本式コスモタービンエンジン×2

武装 次元波動爆縮放射機×1（集束・拡散両モード可能）

48サンチ三連装陽電子衝撃砲塔×3基

6連装大型エネルギー砲×1基

4連装対艦グレネード投射機×2基（前甲板両側）

亜空間魚雷発射機×4基（艦首両舷）

小型魚雷発射管×8門（艦首両舷）

ミサイル発射管×8門（艦底）

短魚雷発射管×12門（両舷）
多連装ミサイル発射機×16基（両舷）
司令塔防護シヨックフィールド砲×3基（司令塔前部および基部）

近接戦闘用六連装側方光線投射砲×2基（司令塔基部）
対空パルスレーザー砲塔×8基（司令塔および基部）
拡散型対空パルスレーザー砲塔×3基（司令塔基部後方）
対空ミサイルランチャー（前甲板）

搭載 一式空間戦闘攻撃機『コスモタイガー2』×20機
内火艇×4

「実験艦と言ったのは新型波動エンジンを搭載しているからだ」
「ほう、新型波動エンジン……」

「数ある試作品の一つでな……試作品の中でも一番調子が良いのを『伊勢』に搭載している。それに伴い主砲も向上して『ヤマト』で搭載していた48サンチ陽電子衝撃砲を搭載している」

「成る程（うーん、チート主砲k t k r!!）」

正信の言葉に内心では喜ぶ将和である。何せ『ヤマト』の主砲は原作を見ていた者としてはそのチートぶりを知っているのである。

「まあお前なら使いこなせると思っっているからそうしたんじゃないよ」
「ハハ、それは嬉しい言葉だな」

正信の言葉に将和は苦笑するのである。

「参謀等の人事については後程メールで送ります」

「ん、『伊勢』は呉宇宙軍港に停泊している。頼むぞ。それと冥王星に着いたら土方に伝えてくれ。内容は……」

「はっ、分かりました。必ず伝えます」

将和は敬礼で正信に答えるのであった。その後、将和は呉行き電車で向かい夕方には呉に到着する。

「早かったですね」

「たまたま呉行きのが取れてな」

案内人の少尉に軍港を案内されながら『伊勢』が繋留されている第12バースへ向かう。

「それでは自分はこれで」

「ありがとう」

将和は少尉に御礼を言つて『伊勢』に乗艦、その日はそのまま『伊勢』で一泊するのであった。それから数日後……………。

「やあ三好司令、またお世話になります」

「やあチュン参謀長」

艦橋で事務作業をしていた将和のところに相変わらずパンを食べているチュンが現れる。

「止してくださいよ。まだ参謀長の階級には慣れていません」

「ハツハツハ、なあにそのうち慣れていきますよ」

「お手柔らかにお願いします」

そう話していると他の者達も次々と『伊勢』に乗艦してくる。

「全く……………処分持ちの私を引き抜こうとよくしたものね」

「真田の次に……………と思つたらお前しかいないんだよ新見」

第十三艦隊情報参謀として将和は新見を採用していたのだ。その後ろからヒョコと顔を出してきたのが大山だった。

「おいおい将和、俺を忘れちゃ困るな」

「おおトチロー、済まん済まん。思つてたより小さくてな」

「お前……………つてか俺を技術参謀にするなよ」

「いや、お前をそうしないと試作の新型波動エンジンの面倒を誰が見るんだよ」

大山は新型波動エンジンの関係者の一人だったのでこれ幸いと将和が技術参謀として呼び寄せたのだ。

「……………まあ仕方ないか。兎も角、これ以上の面倒事は勘弁してくれよな」

「……………それはガトランティスに言つてくれよ……………」

将和はそう答えるのであった。その後、将和が部屋で部屋の整理をしていると艦長室がノックされた。

「ん」

「失礼します」

そう言つて入ってきたのは地球連邦宇宙軍主計科の服を着込んだリニスであった。ただし猫耳とシツポは魔法によって視覚から消されるように施されている。

「リニス・テスタロッサ少尉、主計科副主計長として只今着任しました」

「ん。宜しく頼むよりニス。けど、地上勤務じゃなくて良かったのか？」

「ええ。代わりにプレシアが地上勤務ですからね」

三好家に居を構えたプレシアとリニスであるがせめての恩返しとして連邦軍宇宙軍入りを希望したのだ。将和は無論、正信も難色を示した。何せ彼女達は別世界の人間であり彼女達を巻き込みたくなかった。

だが、彼女達の魔法の技術も連邦軍宇宙軍の軍人からしたら正信も欲しかったのは本音であった。場合によっては人事不足の解消になるかもしれない踏み、正信は裏で手を回してプレシアを技術科の軍属にリニスを防衛軍大学に入学させる事にしたのだ。

そしてリニスは主計科を選択しこの程少尉に任官して『伊勢』副主計長に就任したのだ。

なお、リニスは戦闘技術も高く保安部長も兼任していた。ちなみに『伊勢』乗組にしたのは正信の手回しでもあった。

『伊勢』のメシは任せるよ。本当は幕之内に任せる予定なんだけど……アイツまた『ヤマト』乗組を命じられてさ」

『伊勢』主計長には将和と真田の同期でもある幕之内勉大尉に任せるとつもりで幕之内自身もその意気だった。が、『ヤマト』の主計長が前回の白色彗星軍の攻撃で負傷療養になったので幕之内が『ヤマト』に異動する事になった。

「分かりました。タップリと魚料理を出しますね」

「……程々にな」

なお、リニスは猫だった影響なのか魚好きであり『伊勢』のメニューの半分程は魚料理で占められるようになる。そして3日後に第十三

艦隊は冥王星に向けて出撃するのである。

「機関第二戦ソーク」

「第二戦ソーク」

(親父には感謝だわなあ……)

将和はそう思う。何せ『伊勢』乗員の半数は元『八雲』乗員であり波動エンジン等には熟知していたのだ。その点は正信に素直に感謝である。その後、第十三艦隊は一週間後に冥王星に到着するが到着するまでに1日12時間の猛訓練を行うのであった。

「第十三艦隊、到着しました。お久しぶりです土方長官」

「ん。だが今は護衛艦隊の司令官だ」

「長官は長官です」

「フツそうか」

冥王星の基地司令部で将和は外太陽系護衛艦隊司令官の土方大将と会っていた。

「うちの親父より伝言を預かっています」

「ん、正信から？」

「はい。『もう少しでアホどもの駆除が終わる。今暫くは我慢してくれ』との事です」

「……そうか」

将和の言葉に土方は苦笑する。

「やはり長官の左遷は……」

「正信の擬態だな。どうやら波動砲艦隊と自動化構想の反対を叫んでいたら私の命が狙われていたらしくてな……正信と芹沢が一芝居を打ったというわけだ」

「……芹沢参謀長もですか？」

「ああ……三好正信という中和剤が無ければ芹沢とは激突していたのは間違いないな」

(全く……三好家一つでこうも歴史が違うとはな……)

将和の言葉に土方はニヤリと笑みを見せ将和は内心で溜め息を吐いた。

「分かりました、取り敢えず伝言は伝えましたので」

「ん。それと訓練を入れてほしいならいつでも来い……いや、今からやるか」

「は、ハハハ……（、（；；；；；；；（ギヤアアア）」

ニヤリと笑う土方に将和は内心で叫ぶのである。なお、それは土方を知っている新見や大山も共通しているのであった。

それはガトランティスが地球に攻める数ヶ月前の事だった。

第八話

「…………さて、そろそろこの中にいるのも暇にはなってきたものだな」
衛星軌道拘置所の一室にて収監されているジェイル・スカリエツ
ティはふとポツリとそう呟いた。ただスカリエツティ本人も何とな
く呟いた言葉だった。

「…………ククク…………最高評議会の馬鹿どもを葬ったから意欲が無くなっ
たと思いきや…………成る程成る程…………これが人間の欲望というものか」
かつて、アルハザードの技術によって造られた人造生命体であるス
カリエツティは開発コードネームは『アンリミテッド・デザイア（無
限の欲望）』と呼ばれた。その名の通り、またしても欲望が沸いてきた
のである。といっても再び管理局に対して…………ではなくただ単に此
処が暇になったからであった。

そうと極ればスカリエツティは脱獄の準備に移行した。無論、協力
者は今も拘置所にいる娘達と『外』にいる極秘の者達であった。

実はスカリエツティの協力者は多種多様であり最高評議会や故レ
ジアスはその中でも多くの資金等を提供していたのだ。協力者達も
スカリエツティが「暇だから脱獄する」との事に当初は呆気にとられ
ていたが「まあスカリエツティのする事だから」と納得していた。

多くの者に忌み嫌われているという印象があると思いきや、家族で
あるナンバーズ等には一定の愛情があるので案外そこそこ憎めない
人物でもあったのだ。協力者達もそのところは認識していたのだ。

そしてスカリエツティが脱獄を思い付いてから数ヶ月後の朝方、ス
カリエツティら拘置所に収監されていた面々は忽然と姿を消して脱
獄するのである。無論、これは協力者達の協力があつての事だった。

「これからどうなさいます？」

「そうだねえ…………先ずは仮のアジトでも欲しいからなるべく管理外
世界に行こうかな」

「それは賛成ですわ」

それぞれの拘置所から脱獄し途中で合流したスカリエツティ達は協力者が用意した星間クルーザーで移動中だった。

「では一先ず転移を……」

そう決めた面々は転移をするのであるが星間クルーザーのエンジンが元々不調を抱えておりスカリエツティが入力した管理外世界ではなくランダムによる転移をしてしまうのであった。

そしてこれ以降、スカリエツティ達が表舞台に出てくる事はなかったのである。少なくとも『この世界』ではある。

「今日はチャードに定めるかな」

将和が司令官を務める第十三艦隊は訓練のために冥王星から出撃して太陽系外縁部に存在するエッジワース・カイパーベルトに来ていた。

このカイパーベルト、主な形成は氷でありテラフォース化が引き続き行われている火星の海等はこのカイパーベルトから引つ張ってきいたりする。また、冥王星等の基地への飲料水の供給もこのカイパーベルトに存在する氷等に使用されたりする。

それはさておき、将和は午前の訓練も終わった事で食堂に来て本日の昼食を注文していた。

（そろそろ訓練も終盤……か。ガトランティスは来ないしまだ行けるだろうな……）

将和の第十三艦隊が冥王星に赴任してから二月程経った。相変わらず訓練はするがまだ『ヤマト』が脱走した報告は無い。だが、元『ヤマト』乗員が何らかの動きをしているのは同期の真田からコツソリとは聞いていた。

「真田、古代らを抑えておけ。今、親父が『ヤマト』をテレザート星調査という特殊任務をするよう調整している」

『分かっている将和。だが古代らはそろそろ抑えきれないかもしれないかもしい』

「そこは何とかしろよ……」

映像先の顔をしかめる真田の言葉に将和は溜め息を吐くのであった。

(頼むから脱走はまだやるなよ……)

将和はそう思いながら炒飯を掻き込み午後の訓練も引き続き行うのである。なお、将和が魚ではなくチャー定を食べた事にリニスは若干ムカツとしていた。

そして訓練を終了してからの2032に新見からの連絡が入った。

『三好君、『ヤマト』が脱走したみたいだわ』

「……真田も抑え切れなかったか……」

『ええ。先生も『ヤマト』に乗艦しているみたいよ』

「分かった。取り敢えずは艦橋に戻る」

上着だけを脱いでいた将和だが再度着て艦橋に戻るのである。

「それで『ヤマト』はいつ脱走を？」

「連絡によれば5日前みただわ」

「第十三艦隊が訓練を始めた辺りか」

新見の言葉に将和は頭をポリポリと掻く。なお、大山は波動エンジンの調子を見るために機関室に籠りっぱなしであった。

「それで司令部や冥王星基地からは？」

『『ヤマト』はテレザート調査の為の特殊任務を帯びているので脱走ではない……三好君が来る25秒前に追加で来たわ』

「成る程。なら『ヤマト』を発見しても攻撃はしないぞ。むしろ補給が必要であれば支援をする」

「分かったわ」

将和の言葉に新見は頷く。

「全艦に通達、戦闘配置ではないが警戒配置につけ」

「まさか三好君……」

「分からん。『ヤマト』が出撃したならその脅威の敵が周辺にいるかもしれないという予想だからな」

「訓練は切り上げる?」

「いや、訓練は行う。ただの警戒で分からないからな」

「分かったわ。その旨を伝えておくわ」

それから第十三艦隊は残りの二日間、

エッジワース・カイパーベルトで訓練をしていたが『ヤマト』は元よりガトランティス軍が来る事はなかった。

(うーん、別ルートで抜けたかもな……)

将和はコーヒーを飲みながらそう思う。念のために警戒されて太陽系を脱出したのかもしれない。

(まあ良いか。遭遇しないなら仕方ない)

将和は一旦交代しようと席を立とうとしていた時だった。

「重力震……?」

「ん、どうした?」

「前方約60宇宙キロに重力震反応があるわ」

情報席に座っていた新見が目を細める。その瞬間、将和は動いた。

「全艦戦闘配置につけエツ!!」

艦橋に警報が鳴り響く。それは何処の艦艇でも同じ事だった。恐

らくは白色彗星ーガトランティス艦隊であろうと判断したのだ。

「新見、数は分かるか!」

「ちよつと待って……えっ?」

「どうした!」

「……単艦よ」

「何?」

「だから単艦!! 1隻しか反応が無いわ!!」

「はアツ!」

新見の叫びに将和は驚愕する。どういう事だ? 奴等の意図が分

からない……。

「……取り敢えずはこのまま確認が出来る位置まで前進。その後は映像で確認する」

斯くして第十三艦隊は周囲を警戒しつつ前進を開始するのである。そして前方にいたのは……。

「おやおや……何処の管理外世界だ……？」

「データでは太陽系外縁部のエッジワース・カイパーベルトと出ています」

「太陽系……成る程。第97管理外世界の地球に来たようだな。クアットロ、エンジンはどうだ？」

『ドクター、これは駄目ですわ。修理には時間が掛かります』

機関室で修理を当たっているクアットロに通信を入れるが状況は悪かった。

「ふむ……仕方ない。暫くはこのままか」

「……駄目ですねドクター。レーダーに反応です」

「おや、管理局かね？」

「分かりませんが多数の艦艇が此方に向かっています。ただデータベースにはどれも符合しません」

「フム……」

ウーノの報告にスカリエッティは考え込む。管理局にしては新型の次元航行艦を投入してきた……という事なのだろうか……？

「クアットロ、修理は続けてくれ。なるべく対話で時間を稼ごう」

『分かりましたわ』

そして彼等は10数分後に会合するのである。

「通信は出るか？」

「駄目です。向こうも周波数を出しているようですがよく分かりません」

「……発光信号に切り替える」

「相手は分かるかしら？」

「賭だな」

「ドクター、発光信号です」

「フム……地球のか。『我、地球防衛軍第十三艦隊。所属ヲ明ラカニセヨ』か」

「この船には信号機はありません」

「何、光るモノで可能だ」

「返信です。『我、機関故障中。我、救助必要。発、ジェイル・スカリエツテイ』」

「……………はっ？」Σ(。D。;)」

通信長の言葉に将和は唾然とした。

(……………どっかで聞いた名前……………つていやいや……………でもこれも元はアニメの世界だし……………てかプレシアやリニスもいるからなあ……………)

将和は平成の日本にいた時に知っている名前だった。思わず頭を抱えてしまうが取り敢えずは救助する事にしたのだ。

「再度返信。『我、救助ヲ開始ス』」

斯くして第十三艦隊は思わぬ珍客達を救助するのであった。救助されたスカリエツテイ達は『伊勢』に收容され客人用の応接室に案内された。

「ほほう……………管理外世界の地球がこれ程の宇宙艦艇を保有していたとはね……………」

「ですがドクター、地球は……………」

「うん。まだ月までの航行能力はなかった筈だな」

一応ながらスカリエツテイ達も違和感がある事に気付いていた。そしてスカリエツテイ達の前に二人の人間が現れる。

「地球防衛軍第十三艦隊司令官の三好将和准将だ」

「同艦隊情報参謀の新見です」

「これはこれは御丁寧に。私はジェイル・スカリエツテイ。此方は私が作成した戦闘機人の娘達です」

「ウーノです」

「トーレだ」

「クアットロです〜」

「……………セツテ」

「(拘置所組面々じゃねーか……………) まあ取り敢えずは椅子にでも」

将和は頭痛がしそうになるのを我慢しながら取り敢えずは椅子に

座らせる事にする。そして将和は椅子に座ると南部97式防衛軍制式拳銃を机に置く。

「これは？」

「なに、話し合いですからな。此方が丸腰だと分かれば話もしやすいでしょう？」

「成る程。貴方は道理が分かるですな。では話をしましょう」

そしてスカリエツティは話を始めるのである。

「とまあ、私達は脱出をしたのは良いですがエンジンの故障でランダムに転移してしまつたみたいですね」

「……成る程(うーん、ifルートみたいなものかあ……まあプレシアの前例があるからなあ)」

「……ですが魔法の世界とは俄に信じられないわ」

スカリエツティの言葉に新見はそう言う。まあスカリエツティもさもありなんという表情をしていた。

「だろうとは思っているので映像は用意している」

そしてスカリエツティは映像——ナンバーズとなのは達の戦いを見せた。新見はほほう(。A。)としていたが将和は……。

(なのはだ!! フェイトもいるしタヌキもいるぞ!! なのは完売!!)
色んな意味で興奮していた。(まあそうなるな)

「どうされました？」

「う、ウン。いや何でも(けど、フェイトがいたって事は……やはりプレシア達は平行世界の住人になるな)」

目の色を変えていた将和に声をかけるウーノであるが将和はそう濁すのである。

「取り敢えずは冥王星基地に戻るか……スカリエツティ達は……」

「面白そうだから同行を願いたいですね」

「デスヨネー」

斯くして第十三艦隊は珍客を乗せて冥王星基地に帰還するのであ

るがその途中、『ヤマト』からの通信が入ったのである。

『土方大将のパトロール艦隊がガトランティス艦隊の襲撃を受け艦隊は全滅、土方大将は負傷しそのまま『ヤマト』に救助され『ヤマト』に同行する』

事態は大きくなりそうであった。

第九話

「そうか、土方は『ヤマト』に乗ったか……」

「だが……こうなると防衛艦隊の司令長官に土方は乗せられませんな」

地球防衛軍司令部で防衛軍司令長官の三好正信大将と芹沢大将らはそう話していた。

「フム……司令長官は一艦隊のスコット中将に任せるしかないかの……」

「ですが長官、スコット中将は波動砲戦略に凝りすぎています。それが影響しないかあるかは……あると思います」

正信の言葉に藤堂はそう具申する。スコット中将は波動砲信者であり同じく信者である谷らと波動砲隊型のマルチ隊型を作ったのもスコット中将らであった。

「ム。それは俺も分かっている……が」

「やはり波動砲論者は根強いですか」

「波動エンジンも勝利の一つだろう。だが最大の勝利は人じやよ人」

芹沢の言葉に正信はそう言う。

「だがスコットの他に全艦隊を任せれるのは……」

「……息子に任してはみては？」

「駄目じやな、階級が低すぎる。それにガミラス戦役を生き残った中堅将校らが反発するだろうな。まあパエツタやカールセンなら賛同するのう」

正信は溜め息を吐きながらコーヒーを飲む。

「まあ艦隊はスコット中将に任せよう。それと冥王星基地……第十三艦隊からの報告だが……」

「悩みの種……ですな」

「魔法……か。まあ波動エンジンも魔法の部類に入るかもしれませんな」

「芹沢、上手い事言うな……。だが脱走者らしいから気にする必要は無いかもしれないな」

「ですが転移しているとなれば向こうも知っている可能性も……」

「まあそこは空想の類に入るだろうな」

「ガトランティスで手一杯ですので魔法が関わってくるとなると……頭が痛いですな。ああ、スミマセン。テストロッサ技術中尉の事では……」

「ハハハ、プレシアさんなら大丈夫じゃよ。それで奴さんらはまだ冥王星……第十三艦隊にいるんだな？」

「その筈ですが……地球に来させますか？」

「いや……将和に預かってもらう」

「成る程。監視も兼ねていると……」

「まあ。後、序でに押し付け易いからの」

「ハハハ。それは1本取られましたな」

正信はそう言うが藤堂は厄介者を押し付けた感触だったがそれ出口には出さずに胸の中に仕舞い込むのである。

「当面はガトランティスだ。奴等の警戒は厳にせよ」

「ハッ!!」

斯くして地球防衛軍の方針は決まったのである。そして冥王星ではというと……。

「フハハハハ!! これが、これが、これが波動エンジンという代物か!!」

「凄いですわドクター!?!」

「うーん、スカさんが狂喜乱舞してるなあ」

将和は波動エンジンを見て狂喜乱舞しているスカリエツティを見ながらコーヒーを飲む。第十三艦隊は現在、冥王星基地にて停泊しており将和は暇を見てスカリエツティらを『伊勢』の艦内を案内していたのだ。

その過程でスカリエツティらを機関室――波動エンジンを案内し

てからはスカリエツティとクアットロが狂喜乱舞していたのだ。本来は保全の関連で見せれないが将和は「まあスカさんだし良いや」と司令官権限で許可している。

なお、スカさんとは将和が勝手に付けた渾名であったりする。

「いよお将和。そいつらが例の珍客か？」

「おうトチロー。まあそんなところだな。それでエンジンの調子はどうだ？」

「ああ今日も大丈夫って事よ」

「そいつは良かった」

ヒョコツと物影から技術参謀のトチローが顔を出す。

「メシは食ったのか？」

「なーに、半日前にレーションを食ったさ」

「それは食ったとは言わんぞおめえ……」

「気にするな気にするな」

「三好司令、彼は……？」

「ああ済まない。彼は第十三艦隊技術参謀の大山俊朗、渾名はトチローで俺と同期だ」

「普通にトチローと呼んでいいぞ、宜しくな」

「これはこれは御丁寧ね。では私はジェイル・スカリエツティ。渾名はスカさんだ」

「スカさん、その渾名気に入ったのか……」

「中々だと思うぞ」

将和の言葉に笑みを浮かべるスカリエツティである。更にズイツと踏み込んだのはクアットロだった。

「ドクターの娘でもあるクアットロです。この波動エンジンは一体どのような粒子を動力にしているのですか？」

「お？ 興味があるのかい嬢ちゃん？ タキオン粒子というヤツさ。防衛軍もガミラス戦役前の内惑星戦争では核融合炉エンジン等を搭載していたけど火星で波動エンジンを搭載した宇宙艦艇の残骸を発見してなー」

（あ、これ長くなるパターンだ）

トチローはスカリエツテイとクアットロに波動エンジンを説明するが将和はその間にトーレらをコツソリと連れ出して戦略的後退をする事に成功した。

「済まないな、アイツは話が長くなる質なんだ」

「構わない。ドクターやクアットロも技術関連になると延々と話す事は何度もあった」

将和の謝罪にトーレは気にするなと言わんばかりに言う。

「ん。それなら次行こうか」

そして将和は食堂を案内する。

「此処が食堂な。主計科が管理する『O・M・C・S』によっていつでも食事が可能な食糧供給システムがあるんだ」

「成る程、いつでもか。私達の食事分量が多いから役に立つな」

(あ、やっぱ多く食べるのか)

「……………」

原作を知ってる将和からしたらナカジマ姉妹のを知っていたのでそこまで驚きはしなかった。なお、将和の様子をウーノがバレないよう観察していたりする。

「しかし、食糧ってそんなにあるものなんだな」

「ま、まあな……知らない方が幸せだわな(ボソツ)」

トーレの言葉に将和は頷くが最後の言葉だけはボソツと呟くのであった。そこへ料理の品を考えていたりリニスと出会った。

「あ、マサカズ。今日はさば味噌定食ですよ」

「チャー定で」

「チャー定は一週間に一回です」

「(…シ・ω・、)」

「彼女は……?」

「ああ、彼女はリニス・テストロッサ少尉。『伊勢』の主計長をしている」

「リニス・テストロッサです」

「テストロッサ……?」

頭を下げるリニスにウーノは『テストロッサ』という単語に引っ掛

かる。テストタロツサと言えばまさか……。

「ああ。もしかしてテストタロツサを知ってる？」

「エッあ、いや……」

「もしかしたらプレシアと会ってるかもしれないね」

「プレシア？ まさかプレシア・テストタロツサ!? あのPT事件の？」

「PT事件？」

「あー……（こりやまた説明せんとアカンヤツだな）」

そう思う将和であった。取り敢えず後で詳しく説明するとウーノに伝えて一行は下部の格納庫に来た。

「うちの『伊勢』は航空機を20機は搭載可能だ」

「ほう、あの機体か」

「ああ。と言つてもまだそんなに配備されてないんだけどな。全部で5機しかないや、ハハハ……」

トーレは納得したようにコスモタイガー2を見るが将和は乾いた笑みしか浮かべる事しか出来なかった。ちなみに冥王星基地にはコスモタイガー2は僅か20機しかなかった。

そして一行は前部砲塔に向かう。

「こいつが48サンチ陽電子衝撃砲ー通称『シヨックカノン』だ。本来の『ドレッドノート』級主力戦艦は41サンチのを搭載なんだが『伊勢』は実験艦の役割もあるから48サンチを搭載している」

「フム。アルカンシエルよりは劣るがそれでも次元航行艦の砲よりは優秀だろうな」

（そりやそうだ）

「……………」

トーレの言葉に将和は納得したように僅かに頷くがそれをウーノは見逃さなかった。そして最後に艦橋に向かう。

「此処が第一艦橋。まあ俺や新見らが勤務している場所だな」

「しかし司令部は艦の中心部とかに置いておくべきでは？」

「そうかもしれんけどな……まあ水上艦艇からの名残だわな……」

「フム、そういうものか」

取り敢えずは納得したトーレだった。そしてその日の夜、ウーノ達

はスカリエッツティと念話をしていた。

『それで彼はどうだったかね?』

『はい。やはり魔法を知っていた雰囲気の時折、トーレ達も気付かない程度に頷いたりしていました。それにプレシア・テスタロッサも地球にいるようですが……』

『ほう。彼女もいるのかね』

『ただ……何か事情があるようで……』

『フム……トーレはどうかな?』

『私も後からウーノに指摘された程でした』

『フム……管理局の関係者が若しくは……』

『元々魔法を知っていた……ですか?』

『だろうね』

スカリエッツティ達も最初に魔法の映像を見せた時、将和が異様な程興奮していたのが引つ掛かっていたのだ。その為、スカリエッツティもウーノらに頼んで調べていたのだ。

まあスカリエッツティ本人はクアットロと一緒に波動エンジンに夢中だったが……。

『まあ本人に聞くのが一番だが……向こうも向こうで忙しいからな。確かガトランティスと言ったかな』

『はいそうです』

『ならば今暫くは難しいだろう。だが監視は継続しよう』

『分かりました、なら私が……』

『いやウーノは私の補佐をしてもらう必要がある。そこで……トーレ』

『分かった。私が監視をするのだろうか?』

『その通りだ。まあ監視をするだけだ』

『了解した』

念話を切りスカリエッツティはベッドに寝転がる。

「さてさて……どうなる事やら……」

スカリエッツティはそう呟くが、面白そうな展開になるとは踏んでいたのである。

そして『ヤマト』からの定時通信連絡が入った。

「そうか、『ヤマト』はテレザート星には到着して帰還するか」

「そのようです。ただシリウス、プロキオン方面の監視衛星からの通信が途絶えたみたいよ」

「……来るか」

「そのようね」

将和は報告に來た新見とそう話しておりコーヒーを飲みながら頭をポリポリと搔く。

「防衛軍司令部は何と?」

「警戒は厳にせよと」

「艦艇の派遣は?」

「今のところは無いわね」

「おいおい……土方さんのパトロール艦隊が壊滅したんだから増強はしろよ……」

冥王星基地には太陽系外縁部を探索するパトロール艦隊（パトロール艦8隻）が元々は駐留していたがガトランティス艦隊の襲撃により壊滅しておりそこから増強は僅かに3隻しかいなかった。

「……最悪は冥王星基地も撤退だな」

「スコット中将は何と言ってるの?」

「……ガトランティス艦隊が出現すれば直ちに攻撃せよ……との事だな」

「呆れた……要は使い捨てね」

「まあな……だが命令は命令だから上手く利用するさ。冥王星基地の要員はガトランティス艦隊が太陽系外縁部に出現次第、直ちに基地を放棄させて撤退だな」

「それで第十三艦隊はどうするの?」

「なあに……こそこそとやろうというわけよ」

新見の言葉に将和はニヤリと笑うのであった。更に数日後、太陽系外縁部で索敵をしていたパトロール艦『天塩』がガトランティス艦隊を探知したのである。

「『天塩』からの続報は?」

「……19分前の『敵艦隊からの砲撃を受く』を最後に無いわ」

「……分かった。第十三艦隊の出撃準備は？」

「いつでも行けるぜ」

「よし、なら全艦出撃する。基地は手筈通りに頼む」

「分かりました」

将和の言葉に基地司令は頷く。そしてスカリエツティ達に視線を向ける。

「スカさん達は申し訳ないが……」

「いや私達も同行しよう。もしかしたら何かの役に立つかもしれない」

将和の言葉にスカリエツティはそう言う。

(確かに都市帝国に乗り込む時の白兵戦には分が……まあ良いか)

将和はそう考えてスカリエツティ達の同行を認めたのである。そして第十三艦隊は冥王星基地を出撃するのであった。

第十話

「速度第二戦ソオーク」

「速度第二戦ソオーク、ヨオーソロオー!!」

第十三艦隊が冥王星基地を出撃し太陽系外縁部のエッジワース・カイパーベルトに進入したのは翌日だった。

「タキオンレーダーに反応は無いか？」

「未だありません」

将和の問いにレーダー手はそう返し将和は制帽を深く被る。

（取り敢えずは遭遇はしてないが……今はカイパーベルトで監視するしかないか）

そして将和は艦内マイクを取り出す。

「コスモタイガー隊、発艦準備に掛かれ」

将和はコスモタイガー隊での搜索を決断する。なお、『伊勢』のコスモタイガーは5機しかなかったが冥王星基地が撤退する前にパイロットごと20機分（折り畳んだりしている）を搭載させているのである。

コスモタイガー12機は『伊勢』から発艦し四方に散る。無論、偵察のためである。

「それにしても……遅滞作戦ならもう少し艦艇を寄越せつての」

将和はそうぼやく。第十三艦隊は現在、戦艦1、巡洋艦6、駆逐艦12、護衛艦8、パトロール艦5までに増強されていたがそれでも将和としてはもう少し欲しかったのである。

「保護したスカさん達に波動エンジンを見せたのがスコット中将には気に食わなかったのよ」

「へえへい。どうせ帰れんつての（ボソツ）」

新見の言葉に将和はポツリと呟く。先日、将和の独断と偏見（どう

せスカリエツティ達も帰れないと思いこんで)で波動エンジンを見せたのが防衛軍艦隊司令部的にはNOだったのだろう。

「それでスカさんは？」

「ドクターならトチローさんとクアットロと共に武器の開発をしています」

将和の問いに答えたのはウーノだった。本来は作戦中に艦橋の立ち入りは制限されるがトチローらの連絡係兼新見の補佐をしているのでさもありなんであつた。

(というより僅か数時間で防衛軍のPC等の関連機器を使える事にハンプねえわ……)

今は厄介になっているスカリエツティ達一行だが将和としては敵にはなつてほしくないモノであつた。なお、ウーノはウーノで将和の監視任務があつたので艦橋での作業は願つたり叶つたりである。ちなみにスカリエツティらはというと……。

「トチロー、いっそのことミサイルに波動エネルギーを注入してみようはどうだ？」

「おおそれは良いかもしれんなスカさん!!」

「それなら三式弾にも波動エネルギーを入れてみるのも手かもしれないわね」

マッド達の愉快的な話が工作室で繰り広げられたりしていた。それはさておき、コスモタイガー隊が発艦してから48分後、6番機がガトランティス艦隊と遭遇したのである。

「敵艦隊の数は!?!」

「超大型戦艦1、戦艦150、巡洋艦駆逐艦多数との事よ」

「……どう思う参謀長？」

「そうですねあ……此処はやり過ぎして後ろから攻撃を仕掛けるのも手ですな。幸いにもまだ我々は敵に見つかっておりませんので味方の犠牲を少なくするのであれば……」

「だろうな」

チユン参謀長の具申は的確であり将和もそう思っていた。

「よし、艦隊はこのまま小惑星帯で身を隠す。新見」

「ええ、アステロイドシップね」

新見が笑みを浮かべて作業に取り掛かる。作業時間は30分程で終了し全艦艇にARGOシステムの岩盤が吸着され身を隠すのである。なお、ガトランティス艦隊ーバルゼー大将の第六遠征機動艦隊が第十三艦隊の付近を通過するも特に気にする事なく通過していったのである。

「ガトランティス艦隊通過しました」

「ん。更に15分待て。通信長、15分後に司令部にガトランティス艦隊の詳細を報告せよ」

「了解しました」

「……やりますか？」

「無論だな。全艦に到達、内容はー」

そして第十三艦隊は動き出すのである。

「バルゼー長官、後方で通信が飛び交っています」

「何？」

第六遠征機動艦隊司令長官のバルゼー大将は部下からの報告に首を傾げる。

「地球艦か？ それとも『ヤマト』か？」

「いえ、そこまでは分かりませんが……少なくともガトランティスで使用されている通信ではありません」

「……ならば地球か。恐らくは偵察だろう、全艦艇に到達。敵偵察艦を発見したら即座に沈めろ」

「はッ!!」

第六遠征機動艦隊は直ちに半臨戦態勢に移行したがそれは少しばかり遅かった。

「後方から重力震、極めて至近です!!」

「何!?!」

そして第六遠征機動艦隊の後方から現れたのはワープしてきた第十三艦隊だった。

「第四戦ソーク」

「第四戦ソーク!!」

「砲雷撃戦、用意!!」

「用意宜し!!」

「撃ちい方始めエツ!!」

ワープアウトしたと同時に『伊勢』の前部1、2番主砲が左右斜めに旋回し照準し将和の号令と共に砲撃を開始する。更に前部魚雷発射管から魚雷が発射される。それは他艦も同様だった。巡洋戦隊も次々と主砲とミサイルを連続斉射して『ラスコー』級、『ククルカン』級を沈めていく。

『伊勢』のショックカノンは『カラクルム』級戦艦を1隻ずつ砲撃してこれを撃沈していく。

「おのれエ!! 全艦態勢を建て直せ!!」

「敵艦隊、そのまま離脱。ワープしました!!」

「追撃だ、追撃の艦隊を組織しろ!!」

「ええ!? し、しかしこのまま進みませんと大帝の命により我々は此処まで来ておりますし……」

「ぬぐう……やむを得ん。艦隊はこのまま地球に向かう」

バルゼーは幕僚らの具申を取り入れ第十三艦隊を追わずに地球へ向かうのである。そして第十三艦隊はとうとう……。

「ワープ終了。現在地、シリウスまで2.3光年よ」

「ふう……何とかあったな」

「ええ。けど、太陽系に逃げるんじゃないわね。逢えてのシリウス方面にワープするなんて早々思い付かないわね」

「かもな。それと何隻やった?」

「現時点では戦艦3、巡洋艦8、駆逐艦19、空母5隻を撃沈させたわ」
「ん。通信長、司令部にも報告してくれ。『我、ゲリラ戦にて遅滞作戦を敢行す』ってな」

「分かりました」

なお、第十三艦隊の通信は大分ラグがあったものの司令部には通報されている。

「ハッハッハ。幸先は良いかもしれんな」

「ですが今は一刻も早く防衛艦隊と合流させませんと……」

「ん、それは分かっている。第十三艦隊にはなるべくの合流をと伝えろ」

「分かりました」

正信はそう指示を出す。そして太陽系の宇宙地図を見つめる。

「決戦は土星宙域か……」

「スコット中将も同様との事です」

「ん……さて、どうなるか」

正信は宇宙地図を見ながらそう呟くのであった。そして地球防衛艦隊とガトランティス艦隊——第六遠征機動艦隊は土星宙域で衝突したのである。

「敵ガトランティス艦隊接近!! 距離12万宇宙キロ!!」

「スコット長官、敵は航空機を出しています。我が方も出しますか?」
「構う事はない。全艦対空戦闘用意、射程距離に入り次第砲撃開始せよ」

地球防衛艦隊旗艦『アンドロメダ』の艦橋では防衛艦隊司令長官のスコット中将はそう指示を出す。地球防衛艦隊は接近してくるガトランティス軍の航空機——艦上攻撃機『アスバテーター』——に対し対空射撃を実施しその苛烈な対空射撃はガトランティス軍の航空機を消耗させていく。

『地球艦隊が第二次戦闘空域に入りました!!』

「フッフ、思う壺だ」

バルゼーはニヤリと笑う。それを証明するかのように地球防衛艦隊では何処からともなく現れる魚雷攻撃を受けていた。

「長官、敵魚雷は何処からともなく現れます!!」

「落ち着け。潜空艦だ、照明弾を上げよ」

各艦から照明弾が打ち上げられ光の先には黒色に塗られている潜空艦を発見した。

『敵潜空艦多数発見!!』

「ファイヤー!!」

『アンドロメダ』の51センチ陽電子衝撃砲が唸りを上げて砲撃を開始しそれによって主力戦艦の40・6センチ陽電子衝撃砲、巡洋艦

の20サンチ陽電子衝撃砲が次々と砲撃をして潜空艦を撃沈する。無論、潜空艦もただやられるばかりではなく沈む間際に魚雷を発射して巡洋艦を沈めたりしている。

『敵艦隊に第二空域を突破されました!!』

「慌てるな。敵艦隊は乱れている、包囲して一気に捻り潰せ!!」

バルゼーはそう言うがスコット中将の決断が早かった。

「先に仕掛ける。拡散波動砲発射用意!!」

「拡散波動砲発射用意!!」

新型の『アンドロメダ』は波動エンジンも新型であり『ヤマト』に比べたら波動砲のチャージする時間も短かった。そのため『アンドロメダ』は素早く拡散波動砲を整える事が出来た。

「拡散波動砲発射ア!!」

『アンドロメダ』から連装の拡散波動砲が発射される。波動エネルギーは第六遠征機動艦隊の直前で無数に分かれて第六遠征機動艦隊に襲い掛かったのである。

「あ……あ……」

バルゼーは第六遠征機動艦隊の状況に唾然とした。バルゼーが誇る第六遠征機動艦隊は瞬間に壊滅したのである。その時、バルゼーは通信が開いたのを感じた。

「た、大帝……」

『バルゼー、無様だぞ。もう良い、退けエ!!』

「は、はいッ!!」

残存の第六遠征機動艦隊は敗走し代わりに白色彗星が前面に展開した。地球防衛艦隊も白色彗星が現れた事で直ちに波動砲への展開をした。

「全艦マルチ隊形に展開せよ!!」

「スコット長官、後方にワープアウト反応有り。第十三艦隊です」

「やっと来たかミヨシの小僧め。早く戦列に加わるよう伝えろ」

この時、将和の第十三艦隊は漸くワープアウトを終えたばかりだった。

「スコット長官が早く戦列に加われと……」

「ワープアウトしてきたばかりに波動砲が撃てるか馬鹿野郎。左後方側面に移動して待機だ」

流石の将和もスコット中将の対応に呆れながら防衛艦隊の左後方側面に展開する。

「チツ仕方あるまい……」

「全艦拡散波動砲発射用意完了!!」

そこへ拡散波動砲の準備が完了した。スコット中将は直ちに発射させる事にしたのだ。

「全艦拡散波動砲発射ア!!」

生き残っていた地球防衛艦隊は一斉に拡散波動砲を白色彗星に向けて発射するのであった。

しかし、白色彗星は拡散波動砲を受けても健在だったのである。

「反転180度!! 全艦離脱!!」

止まらない彗星にスコット中将は退避命令を出す。しかし、将和は違う命令を全艦に出していた。

「司令、退避を!!」

「全艦に通信!! 最大出力で良いから入れろ!!」

「司令?」

「出力全開!! 速度一杯!! 左120度反転!! 全速離脱!!」

それが地球防衛艦隊の命運を分けたのであった。

第十一話

「反転180度!! 全艦離脱!!」

止まらない彗星にスコット中将は退避命令を出す。しかし、将和は違う命令を全艦に最大出力の通信で出していた。

「出力全開!! 速度一杯!! 左120度反転!! 全速離脱!!」

それが地球防衛艦隊の命運を分けたのであった。『伊勢』からの通信を受信出来た艦艇は第十三艦隊に続いた。しかし、通信を受信出来なかった艦艇はそのまま『アンドロメダ』に続いてしまった。

「被害……知らせ!!」

「あ、『アンドロメダ』が……」

映像で『アンドロメダ』ら以下の艦艇が次々と白色彗星に飲み込まれていったのである。

「振り返るな!! そのまま全速だ!! 俺達も巻き込まれるぞ!!」

「りよ、了解!!」

第十三艦隊及び残存艦艇は何とか白色彗星に飲み込まれる事は回避したのである。

「何とか……なったか……」

「……そのようね……」

「あ……あ……あ……」

将和と新見はそう話すが新見の隣の席にいたウーノは映像を間近で見た事もあり身体を震わせていた。

(幾ら戦闘機人と言ってもあの映像を見せられたらな……)

将和は溜め息を吐きながら新見に視線を向ける。

「白色彗星はどうなった?」

「以前として地球に向かっていているわ。このままだと後数分で火星沖に到着するわ」

「引き続き監視をしてくれ。全艦、態勢を整える。各艦の被害状況を

知らせ」

程なくして第十三艦隊及び残存艦艇の被害状況が纏められたのである。

「第十三艦隊に被害は無いわ。三好君が直ぐに指示を出したから難を逃れているからね。それと残存艦艇も以下の通りよ」

新見はそう言つてタブレットを将和に渡す。

地球防衛艦隊残存艦艇

戦艦

『ロイヤル・オーク』『アイダホ』『薩摩』『日向』

巡洋艦

『吉野』『高千穂』以下13隻

駆逐艦

『フレッチャー』『シムス』以下29隻

護衛艦

『松』『竹』以下52隻

「意外と小型艦艇は残っていたのか」

「潜空艦と航空機で沈没した艦艇の救助に当たっていたらしいのよ」

「成る程。それなら納得出来るな」

将和と新見がそう話しているとトチローとスカリエツティがやってきた。

「おい将和。白色彗星は地球手前で停止して降伏要求をしたらしいぞ」

「うおマジか。親父は何と言つてた？」

「まだ正式には返答してないらしいがあの大統領の事だ。降伏するわな」

「勘弁してくれよ……まあまだ『ヤマト』が何もアクションを起こしてないから勝機はあるだろう」

「じゃあこのまま……」

ズオーダー大帝はそう言って通信を切る。が、将和は動いた。

「集束波動砲発射用意!! 目標、都市帝国下部の岩盤だ!!」

「え?」

「いいから早くしろ!!」

「は、はい!!」

将和は戦術長を急かし波動砲のトリガーを握る。

「出力120%!!」

「対ショック対閃光防御!!」

将和の号令に艦橋にいた全員が閃光ゴーグルをかける。

「発射10秒前……5、4、3、2、1、撃エ!!」

『伊勢』から集束波動砲が発射された。波動エネルギーは都市帝国下部の岩盤に突き刺さり命中。下部の岩盤は大崩壊を瞬く間に起こすのである。

「な、何事だ!?!」

『ヤマト』の隣に展開していた戦艦からの波動砲攻撃です!! 下部岩盤に波動砲が命中して岩盤が崩壊しつつあります!!」

ズオーダー大帝の問いに答えたのは帝国支配庁宣伝軍事総議長のラーゼラーだった。

「岩盤を……だと!?!」

ラーゼラーの報告にズオーダーは眉を潜める。

(何故あの戦艦は都市帝国上部ではなく下部を狙ったのか……)

その理由は撃った本人の将和しか分からない。そして『伊勢』では将和が動いた。

「全艦降下しつつ都市帝国下部を集中砲撃せよ!! 『ヤマト』にも急いで伝える!!」

「下部を砲撃するの!?!」

「そうだ、上部を見てみる」

将和らが見ている前で上部はガス気流が生じていた。

「あれだと無理に攻撃すればガス気流で攻撃は届かない。しかも赤道に当たる部分が回転している」

「あつ……」

気付けば都市帝国の赤道に当たる部分が回転しており巨大ミサイルを次々と吐き出していた。

「ミサイル接近、大型です!!」

「対空防御!! 回避運動オ!!」

『ヤマト』『伊勢』らの地球艦隊は回避しつつ都市帝国下部に向かう。それでも数隻が撃沈されるが止まるわけにはいかなかった。

「新見、岩盤をよく分析してくれ」

「分かったわ」

そうしていると先頭を進んでいた『ヤマト』が被弾炎上しつつあった。

「『ヤマト』を呼び出せ」

『此方『ヤマト』だ……何だ三好か』

「土方長官、前に出過ぎです。後退して下さい」

『そもいかん。先程、森船務長が戦死した』

「ええ!?!」

土方が促す先には亡くなったと思われる森雪の遺体を抱いた古代の姿があった。

『我々が先頭に出る。三好はそれに続け』

「しかし長官」

『構うー』

その時、『ヤマト』の艦橋付近でミサイルが爆発し一瞬映像が途切れた。しかし次に映像が映った時、土方は倒れていた。

「土方長官!?!」

『土方さん!?!』

思わず将和が叫ぶ。倒れた土方を空間騎兵隊の斉藤が抱き起こす。

『生き恥を晒していた私も漸く……』

「土方長官!?!」

『古代、三好。あれを見ろ』

土方が指差す先には都市帝国下部の艦載機射出口があった。

『敵の艦載機射出口だ。彼処から中に入り込み彗星の動力部を破壊するのだ』

土方はそう言い将和に視線を向ける。

『三好……貴様は残存地球艦隊司令長官に任命する』

「土方長官ッ」

『貴様ならやり遂げる……それと古代、『ヤマト』艦長に任命する』

『土方さん……』

『頼むぞ……古代……三好……ッ……』

土方はそう言って息絶えたのである。その瞬間、将和は制帽を取り頭を下げ涙を流した。それは新見やトチローも同じだった。

「……土方長官の作戦を決行する!! 古代、志願者を募って都市帝国の動力部を破壊しろ!! 俺も出るぞ!!」

『了解!!』

「通信、他艦も志願者を募れ!! 『伊勢』はコスモタイガー全機を投入させる!!」

「三好君」

「スカさん、今は……」

「トーレとセツテを出してほしい」

「スカさん……」

「二人がいればある程度の犠牲は防げるだろう」

「だが二人は……」

「二人は殺しもした事はある。覚悟は備わっていると思う」

「……二人を呼んでくれ」

程なくして二人が艦橋に来て将和が事情を説明すると二人は了承した。

「分かった。多少は役に立つだろう。任せてくれ」

「……頑張ります」

「……無茶はしないでくれ」

生きては帰れない確率が高いのに無茶はするなと明らかに矛盾した言葉だが将和はそう言うしかなかった。

「チュン参謀長、艦隊の指揮を任せる」

「宜しいので?」

「構うもんか。こうなったら俺も自棄だ、やってやらあ!!」

色んな意味で将和は覚悟を決めた。将和自身も突入する事にしたのだ。

「三座のコスモタイガーを貰うぞ」

「ちよつと三好君!？」

「落ち着け新見。行かせてやれ」

「トチロー……………」

声を荒げる新見にトチローはそう言う。そして将和は叫ぶ。

「この戦いが最後の賭けだ。全艦命を賭けろ!!」

そして将和はパイロットスーツに着替えて同じく着替えたトーレとセツテを連れてコスモタイガーの格納庫に向かう。

「司令も行くんですか!？」

「当たり前だ。これでもまだ現役のパイロットだ」

将和は予備機の三座コスモタイガーに乗り込み、その後ろにトーレとセツテを乗せる。

「ほれ、突撃銃」

将和は二人にAK-01レーザー自動突撃銃とその予備弾倉を渡し操縦桿を握る。

「閉めるぞ」

「分かった」

将和の言葉にトーレは頷きヘルメットを被る。程なくして将和の番が来た。

「三好将和、出るぞ!!」

三人が乗る三座のコスモタイガーは『伊勢』を発艦し宇宙の空に躍り出る。そして『伊勢』飛行隊と編隊を組むと『ヤマト』飛行隊の後方に付いて都市帝国に向かうのであった。

第十二話

『ヤマト』『伊勢』等から発艦したコスモタイガー隊は全部で83機だった。その大編隊に下部岩盤から対空砲が襲い掛かり更には迎撃戦闘機『パラノイア』が大量に襲い掛かってくる。

「しゃらくせエ!!」

将和は機首の30ミリパルスレーザー砲で射撃して1機のパラノイアを撃墜する。その後、将和の視界の隅で山本が乗るコスモタイガー1を見かけた。

「山本!!」

『三好……司令!』

将和の言葉に山本は驚きながらも返事をする。更には将和がいる事に気付いた歴戦のパイロット達も反応する。

『三好隊長がいるぞ!』

『マジか!』

『三好隊長も来ているのか!! こりや勝ったな!!』

『隊長がいるんだ、恥ずかしい真似は出来んぞお前ら!!』

『ヨツシヤア!! 腕がなるぜエ!!』

『ちくわ大明神』

『誰だ今の……』

「こいつら……」

将和がいると分かった歴戦のパイロット達は途端にやる気を出し、まくり迎撃に来たパラノイアを落としまくるのである。

『凄いな……』

「馬鹿どもだが……面白い奴等だよ」

トーレの言葉に将和はそう返す。この時、将和は少しばかりの油断をしていた。下部岩盤の対空砲が此方に気付いて射撃してきたのを気付いた時、将和の機体に覆い被さる機体があった。

「山本!!」

それは山本のコスモタイガー1だった。山本のコスモタイガー1は右翼付け根にレーザーが命中して瞬く間に火を噴いた。

「山本!? クソツタレがア!!」

将和はミサイルを発射して下手人である対空砲を破壊した。

「山本!!」

『大丈夫です、脱出しますッ』

山本はもんどり打つように機体を操作しながらもコックピットから脱出をし無人になったコスモタイガー1はそのまま岩盤の対空砲に激突して破壊したのである。

「山本!!」

『何とか戻ります。大丈夫ですよ』

「……死ぬなよ!!」

山本の言葉に将和はそう返して『ヤマト』と『伊勢』の砲撃で破壊された艦載機射出口に突撃を開始した。

「あれが滑走路か!？」

将和は原作で見た滑走路を見つつ上空で群がるパラノイアを1機ずつ撃墜する。ある程度撃墜すると将和はそのまま滑走路に向けて降下する。

既に滑走路は『ヤマト』飛行隊が突入しており駐機場らしきところで激しく銃撃戦を展開していた。

「退け退けクソツタレどもオ!!」

将和は着陸する前に再度30ミリパルスレーザー砲をぶっぱなして出入口で銃撃していたガトランティス兵達を多数薙ぎ倒してから強行着陸した。

「此方だ二人とも!!」

将和は瓦礫を楯にして上部にいたガトランティス兵に射撃をして倒す。その間を縫ってトールレとセツテも滑り込む。

「そのまま隠れてろよ!!」

将和はそう言ってまだ生きて射撃をするガトランティス兵に射撃をする。将和が放ったレーザー弾がガトランティス兵の胸に命中し

てガトランティス兵は悲鳴を挙げて倒れる。

「ウワアッ!?!」

「先ずは一人!!」

将和はそう言うがその御返しは一斉射撃で返ってきたので慌てて身を隠す。

「ハハハ!! 中々の体験だな!!」

「だろう?」

「然らば……フンツ!!」

トーレはそう言って銃撃の合間を縫って破壊されたコスモタイガー2の機首を思いつきり持ち上げた。

『……………』

その様子に射撃をしていた加藤やガトランティス兵達は啞然とした。あの女性にどのような力があるのかと……。

「ドオオリヤアアアアア!!」

『ウワアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!』

トーレはそれを思いつきりガトランティス兵達がいる方向に投げてガトランティス兵達を押し倒したのである。無論、将和はそれを見逃す事なくガトランティス兵達にトドメを刺していく。

それを見たセツテもガトランティス兵を探して漸く一人のガトランティス兵を見つけた。まだ息はあったみたいだがセツテは銃口を向けたがそれを制したのは将和だった。

「……何故……?」

「トドメを刺すのは俺でいい」

「グアッ!?!」

首を傾げるセツテに将和はそう言っつてガトランティス兵の頭を撃ち抜いた。

「どうして……?」

「君らはまだやり直せるチャンスはある。俺の手は血まみれだからやってもいいがな」

「……矛盾している」

「だろうな。だがその矛盾をしているのは俺には良い事さ」

将和は笑みを浮かべ加藤の機体に駆け寄り声をかける。

「加藤!!」

「三好……隊長……」

「大丈夫か……っってお前……」

将和が機銃手のところにいた加藤の元に行くと加藤は腹から血を流していた。

「止血を……」

「スミマセン……」

「馬鹿野郎。お前、嫁さんを置いて死ぬのはやめろ」

加藤はリメイクと同じく原田真琴と結婚して一男を授かっていた。

「まだ……死ぬつもりはありませんよ」

「なら生きて帰れよ」

将和はそう言つて止血を終わらせる。多少の時間は稼げるだろう。

「よし、これでいい。後は古代達が帰ってくるまで辛抱しろよ」

「分かり……ました……」

そして30分後、戻ってきたのは古代一人だけだった。

「古代!？」

「加藤!! それに三好准将も……」

「古代、真田や斉藤はどうした?」

「……二人は……動力部に……」

「(あの馬鹿野郎が!!) ……そうか、分かった。直ぐに脱出しよう」

将和は動力部に行きたい一心だった。同期の真田がそこにいるのだ。助けてやりたい、だが動力部への通路は増援に来たガトランティス兵で溢れていた。将和は心の中で真田を罵倒しつつ動力部の通路に敬礼をした。

「行くぞ!!」

将和らは無事なコスモタイガーに乗り込んで離陸した。射出口から出るまで、浮遊する敵のパライノイアや味方のコスモタイガーの残骸があった。

「……………」

『これが戦争というやつか』

「まあな」

『……私達がしてきたのは……ただの遊びだった……』

トーレとセツテはそのように言い射出口から出るまでは無言だった。射出口から脱出した将和らは射出口付近で踏ん張っていた残存コスモタイガー隊から歓迎を受けた。

「残っているのは5機だけか」

『はい、残りは……』

「分かった。ああそうだ、山本を回収しないと」

将和は山本が脱出した辺りを搜索する。

「山本オ!!」

将和は無線に向かって叫ぶが周辺で返事をする者はいない。

(少し流されたか……?)

将和はパイロットに取り付けられている追跡機能で調べると反応は少し遠めのところにあつた。その場に向かうと流されている山本を見つけたのである。

「山本!!」

『三好……司令……』

「少し気を失っていたようだな。もう大丈夫だ」

コスモタイガーを止め風防を開けて山本を中に入れる。

「狭いが我慢してくれ」

『は、はい……』

隣にチヨコンと座る山本に将和は思わず苦笑するもエンジンを噴かせて『伊勢』に戻るのであつた。『伊勢』に戻ると山本は一旦医務室に預けて艦橋に戻る。

「あ、司令」

「新見……」

将和としては今一番会いたくなかつた。何せ新見は真田を慕っているからだ。その真田は今、都市帝国の動力部に残っており爆弾を仕掛けているからだ。

「司令、都市帝国が!？」

不意に航海長が叫ぶ。都市帝国が下部から爆発していたのだ。爆

発はどんどん大きくなる。

「真田……ッ」

将和が不意に呟いた言葉を新見は聞き逃さなかった。

「司令……まさかッ!」

「……………」

「そんな……嘘と言って下さい司令……嘘と言って……嘘と言ってよ三好君!」

「……………」

気付けば新見は泣いていた。同期の将和の前だからこそ新見はその心情を吐く事が出来た。

「……真田は動力部に残ったらしい」

「嘘よ!? 先生が……先生が死ぬなんて……」

「薫さん……」

膝から床について嗚咽を洩らす新見にウーノが寄り添う。そしてトチローは爆発する都市帝国を見ていた。

「あの馬鹿野郎め……」

「済まんトチロー。真田を連れ戻せなかった……」

「将和が悪いわけじゃないさ。残ろうとしたアイツが馬鹿野郎なんだ」

トチローはそう言って溜め息を吐く。新見程ではないがトチローも真田が戦死した事には幾分か堪えていた。

「司令、『ヤマト』が砲撃を開始しました!!」

見れば『ヤマト』は使用可能な武器で都市帝国を砲撃していた。

「将和、砲撃するなら完成した波動三式弾や波動ミサイルとか使用してくれ」

「よし、此方も砲撃するぞ!! 全艦砲撃用意!!」

「砲撃用意!!」

「撃ち方始めエ!!」

「撃ち方始めエ!!」

『ヤマト』に続くように『伊勢』『ロイヤル・オーク』『アイダホ』『薩摩』『日向』が砲撃を開始した。特に『伊勢』から放たれる波動ミサイ

ル等は威力が他のミサイルより大きかった。

「都市帝国、炎上しています!!」

(……原作ではあまり感じなかったが上部は都市だから民間人もいるわな……)

将和はそう思うが中止はしなかった。今、中止したら今度は此方がやられるかもしれないからだ。その為容赦はしなかった。

『ヤマト』が砲撃を止めても『伊勢』らは砲撃を続けた。そして都市帝国が途端に爆発する。

(……来るか?)

将和が思った時、爆炎からヌウつとした巨大な何かが現れた。

「あれは……」

爆炎の中から現れたのは原作で『ヤマト』を一番苦しめた超巨大戦艦だった。

将和達の死闘はまだ終わらない。

第十三話

都市帝国の中から出てきたのは全長約12キロにも及ぶ超巨大戦艦だった。その超巨大戦艦は砲塔（実はこれ、副砲）を旋回させ『ヤマト』等に照準しそれを見た将和は瞬時に叫ぶ。

「回避運動、取舵イッパアアア!!」

「と、取舵イッパアアア!!」

超巨大戦艦の副砲の射撃より『伊勢』の回避運動のが早かった。『伊勢』は回避するものの『ヤマト』らは回避出来なかった。

『アイダホ』轟沈!! 『コーンウオール』爆沈!!」

「応戦だ、波動ミサイルや波動三式弾も撃ち込め!!」

「無理だ将和!! 波動ミサイルも波動三式弾もさっきの岩盤破壊のため全弾撃ち尽くした!!」

「ええいクソツタレ!!」

トチローの言葉に将和は艦長席の机を叩く。

「構わん、砲撃だ。左砲戦展開!! 砲雷撃戦用意!!」

「砲雷撃戦用意!!」

『伊勢』ら残存地球艦隊は速度を上げて超巨大戦艦に向かう。そして超巨大戦艦では単装の主砲を取り出して砲撃した。砲撃先は月であり上部に撃ち込まれた月は瞬く間に上部が半壊し岩石等が地球艦隊に襲い掛かる。

「左舷損傷オ!!」

「損害に構うな!! 肉薄して敵艦橋に主砲を撃ち込め!!」

『伊勢』は48サンチ陽電子衝撃砲を連続して撃ち込むが装甲が厚すぎる超巨大戦艦にはダメージを与える事が出来なかった。

その御返しとばかりに副砲が連射して『伊勢』に砲撃が命中する。

「右舷損傷!! 右舷パルスレーザー砲群壊滅!!」

「二番主砲大破!! 一番主砲旋回不能!!」

「艦首魚雷発射管火災炎上中!!」

「隔壁閉鎖!! 消火急げ!!」

「駆逐艦『シムス』『Z42』『Z27』も轟沈!! 『キャンベラ』大破!! 同じく『那智』『足柄』も大破!!」

瞬く間に残存地球艦隊はその数を減らす。そして超巨大戦艦は射撃を終了し全包围に通信を入れてきた。

『伊勢』の通信パネルにもあのズオーダー大帝が映る。

(ズオーダー……)

『どうだ、わかっただろう。宇宙の絶対者は唯一人、この全能なる私なのだ。命あるものはその血の一滴まで俺のものだ。宇宙は全て我が意志のままにある。私が宇宙の法だ、宇宙の秩序だ!!!!よって当然、地球もこの私のものだ。ムハハハハ、アハハハハハハハ!!!!』

ズオーダーはそう言って高笑いをするがそこに割り込んできたのは古代だった。

『違うっ!! 断じて違う!! 宇宙は母なのだ。そこで生まれた生命は、全て平等でなければならぬ!! それが宇宙の真理であり、宇宙の愛だっ!! お前は間違っている!! それでは、宇宙の自由と平和を、消してしまおうものなのだ!! 俺たちは戦う!! 断固として戦うっ!!』

『フハハハハハ。良からう、だが『ヤマト』よ。満身傷つきエネルギーすら底を尽きたお前がどうやって戦おうというのだ? ンツハツハツハツハツハツ!!!! アハハハハハハハハハハ!!!!』

そう言つてズオーダーが通信を切る。そして単装の主砲が地球に向けて砲撃を開始するのである。

「モンゴルの平原に着弾!!」

「モンゴル及び大陸周辺でマグニチュード9クラスが連続して発生!!」

「南アメリカ大陸にも着弾!!」

「各地で地震と津波が発生中との事です!!」

「……………将和…………」

宇宙軍司令部では正信らが各地の映像を見つつ超巨大戦艦と戦闘する『ヤマト』や『伊勢』を見る。そして正信邸では特別に帰されたプレシアとアリシア、知子が地震の揺れに耐えていた。

「今のは震度5くらいもんかね。まあこれくらいならまだ大丈夫だよ」

「だ、大丈夫だよねママ……？」

「え、ええ……大丈夫よアリシア」

地震を経験した事が無いプレシア（アリシアはプレシアに抱きついている）は怯えながらも知子の言葉に気丈に振る舞うのである。

舞台は再び宇宙に戻る。主砲の砲撃を見ていた将和は直ぐに行動に動いた。

「各部、状況は？」

「主砲は後部三番しかありません。ミサイルも左舷しか残っていません」

「機関異状なしです」

戦術長はそう言うが将和は首を振る。

「まだ波動砲が残っている」

「波動……砲……」

将和の言葉にウーノが呟いた。その言葉に乗組員達はざわめき出す。そうだ、波動砲だ。まだ波動砲が残っているのだ。

「波動砲戦用意!! グズグズしているとあの超巨大戦艦が地球を破壊してしまうぞ!!」

『了解!!』

将和の激励に乗組員達は波動砲の準備に取り掛かるがそこへ新見が叫ぶ。

「司令、『ヤマト』から救命艇が発進しているわ!!」

「何!?! (不味い、その状況は不味いぞ!?)」

原作を知る将和にとって『ヤマト』から救命艇が発進する事は非常に不味い事態だった。

「古代の野郎、突っ込む気だ。それは阻止するぞ!!」

だが通信パネルの映像では『ヤマト』は超巨大戦艦に突き進んでい

く。そして『ヤマト』と超巨大戦艦の真ん中にテレサが現れた。

「……テレサ……」

映像を見ていた将和はそう呟く。

『ありがとう古代さん。私は貴方の中に勇氣と愛の姿を見せて頂きました。貴方のおかげで人々は目覚めより美しい地球と宇宙の為に働くでしょう。私はこの日を待っていたのです。反物質である私の身体がお役に立つでしょう。さあ……参りましょう……』

その言葉と共に『ヤマト』はテレサと共に往く。その様子に将和は席を立つ。

「やめろ古代!? 特攻なんてもんは俺が許さんぞ!!」

「司令……」

将和の表情に新見も思わず唾然としていた。いつもの将和からはそんな様子は見られない表情だったのだ。

だがそれとは裏腹に『ヤマト』は超巨大戦艦に突き進んでいった。

「古代!?!」

その時、突き進んでいく『ヤマト』の隣に『あの日』、マリアナ沖で『大和』と共に運命を共にした宇垣纏の姿が将和には見えた。

「宇垣……」

「宇垣……?」

思わず呟いた言葉を新見とウーノは聞いていた。それを知らない将和だが宇垣が将和に向かって微笑み敬礼をした。

「……………」

それに対し将和もそれ以上は何も言わず『ヤマト』に『大和』に涙を流しながら敬礼をしたのである。

そして『ヤマト』はテレサと共に超巨大戦艦と指し違うて巨大爆発を起こした。

「衝撃波、来ます!!」

「総員何かに掴まれ!!」

衝撃波が『伊勢』を襲う。しかし不思議と思っていた程の衝撃波は来なかった。

「各部、状況送れ!!」

「『伊勢』、機関は損傷しているが航行は可能だぜ」

「武装については先程お伝えした通りです」

「……分かった。他艦の救助を急がせろ」

「分かりました」

そしてある程度の指示を出すと将和は艦長席に項垂れるように深く座り込むのである。

(……結局、この結末は変えられなかったか……これからどうなる事やら……)

そう思いながら将和は溜め息を吐く。だが将和らは生き残る事は出来た。これは確かな事であった。

此処は……何処だ……私は……私は宇宙に身を投げた……

「……う……と……」

誰だ……誰だ……私を呼ぶのは……

「そう……そう……デス……」

そうだ……私は……総統……私は……

「私はアベルト・デスラーだ!」

ガバツと一人の男が目を覚ます。男の周囲には多くの肌が青白い者達がカーキやOD等の軍服を着ていた。

「おおデスラー総統!? よくぞ御無事で……」

「貴様は……タランか……」

「はい。ヴェルテ・タラン中将の弟、ガデル・タラン少将であります」
デスラーの問いに爆発に巻き込まれて戦死したヴェルテ・タラン中将の弟であるガデル・タラン少将はそう言って感涙の涙を流す。

「私は……宇宙に身を投げた筈だが……」

「勿論、そうでございます。されど我々の艦隊が総統をお救いしまし

た」

「救助……」

改めて周囲を見渡せば確かにデスラーはベッドにて横たわっており医官らしき者達が10数名程いた。

「しかし、どうやって私は……」

「はっ、ガトランティスの医療技術により……」

「そうか……私は大帝に三度も助けられたのか……」

かつて友情を結んだズオーダーとデスラー。その恩にデスラーは素直に感謝をした。

「しかし……我がガミラスで残っていたガミラス人は私とタランだけだと思っはいたが……」

「はっガミラス本屋は確かにそうかもございませぬ。しかしルビー、サファイア、オメガ等の各撤退した戦線からの残存艦艇が少なからずおりました故……」

「そうか……大ガミラスの神は私にまだ生きろという事か……」

デスラーは笑みを浮かべるもベッドに横になる。まだ自身の体力はそこまで回復出来ていなかった。

「総統、今は養生を……」

「分かっている……傷を癒えたならば我が大ガミラスの復活をせねばならない」

斯くしてデスラーは雌伏の時を迎えるのであった。

第十四話

『ヤマト』等の残存乗組員や沈没した艦艇の乗組員を救助した『伊勢』等の残存地球艦隊は威風堂々ではないが地球へ帰還した。

「出撃した艦艇で生還したのはたったこれだけか……」

呉宇宙軍港の第二ベースに到着し停泊した『伊勢』の艦橋で将和はそう呟く。

生還出来た艦艇は戦艦3、巡洋艦11、駆逐艦29、護衛艦37、パトロール艦11隻という非常に少なかつたのである。

「司令、戦死者の下艦を開始します」

「ん」

先に下艦をしたのは戦死者を載せた棺である。『伊勢』だけでも250名中51名が戦死していた。(負傷者は124名)

「司令、防衛艦隊司令部より明日への出頭命令が来ています」

「ん……準備出来次第向かうと伝えてくれ」

「それが……」

「どうした？」

「スカリエツティ氏らも来てくれとの事らしいです」

「はあ？」

通信長の言葉に将和は首を傾げる。

(一気に話を進める気なんかもしれんなあ……)

将和はそう思いながらスカリエツティ達に出かける準備を言うのである。翌日、将和ら一行は地球防衛軍防衛艦隊司令部に出頭した。

「先に三好准将からです」

「ん」

案内の少佐に言われ将和は正信がいる長官室に入る。

「三好准将、入ります」

「ん。よく来てくれたな」

部屋には多数の書類が山積みで置かれており正信を筆頭に藤堂、芹沢が政務をしていた。

「僅か数日で戦死者の書類がこんなになった。ガミラス戦役以来だよ」

「まあそうなりますな……」

将和は宛がわれた椅子に座り秘書からコーヒーを貰い一口啜る。

「それで地球の状況は？」

「混乱していた市民達も漸く落ち着いていた。被害はかなり酷いがの……」

「超巨大戦艦の砲撃で地震、津波の大量発生でかなり死傷者が出ている。救助を優先させてはいるが……それでも20000万の死傷者が現時点では発生している。恐らくは億に届くかもしれない」

（それはヤマト2だなあ……まあ『ヤマト』が撃沈したからなあ……）
『ヤマト』が撃沈した時点で『さらば』となってしまったこの世界である。

「話がずれたな。本題に入ろう」

正信はそう言って机の引き出しから少将の階級章を取り出して将和に渡す。

「おめでとう、明日付で少将に昇進だ」

「……半年前に准将に昇進したばかりなんですが……」

「スコット中将以下現場の将官が大量に戦死したのじゃ。お前が昇進するのもやむを得ない措置じゃよ。それにのう……制服組の将官では艦隊司令官が勤まらない」

「まあそれは……」

「防衛艦隊司令長官には現在宇宙士官学校校長の山南中将を大将に昇進させて当たらせる予定だが……山南中将本人が現在の生徒を卒業させてからと固辞したのもう暫くは空席じゃろうのう」

「ハハ、山南中将らしいですね」

正信の言葉に将和が笑う。

「当面、艦隊も一個艦隊の増強が限度だろう。何とか二個艦隊の創設を急がせるが……」

「資源が足りないのでは？」

「資源はある。月軌道上にな」

「ああ……都市帝国の残骸ですか」

都市帝国の残骸は月軌道に載り月を周回する形になっていた。その残骸を先程から調査はしているが、出てくるのは地球にとつても希少価値が高い金属や遺棄された艦船類だった。

「来月頭にはある程度の艦艇は就役するが人手が足らん。生き残っている第十三艦隊の乗員を移動させたりして人数を確保するしかない」

「宇宙戦士訓練学校の卒業を繰り上げるのは？」

「……本気か？」

「そうせざるを得ません。それか市民からの徴兵ですかな」

「……大統領はウンとは言わんな」

「なら大統領の能力もそこまですな」

「……聞かなかった事にしておくよ」

将和の言葉に正信は苦笑しながら肩を竦め藤堂と芹沢は深い溜め息を吐いた。

「それと艦隊だが貴様の第十三艦隊を第一艦隊に変更し残存艦艇を第一艦隊に集約させる。ガトランティス艦隊が簡単に引き上げたとは思わないからの」

「分かりました。最善を尽くしましょう」

将和はそう言って正信に敬礼をする。そして次にスカリエツティ達を連れてきた。

「お初に御目にかかります。地球防衛軍司令長官の三好正信大将です。貴方を保護した三好将和少将の父親になります」

「成る程、確かに似ていますね。私はジェイル・スカリエツティです。此方は私が作りあげた娘達です」

「ウーノです」

「トーレです」

「クアットロです」

「……セツテです」

「ハハハ、可愛いお子さん達だ。まあどうぞ」

正信はそう言つてスカリエッツィ達を座らせる。

「貴方方の境遇を簡単ながら息子から聞きました」

「なに、私どもはしがない犯罪者です」

「成る程。なら私達もしがない犯罪者ですな、何せ敵を殺したりしていますからな」

「ハハハ、ならばお互いしがない者同志ですな」

二人は互いに苦笑する。その様子に芹沢も釣られて苦笑するが直ぐに口を開いた。

「三好少将からの報告で貴方方は魔法……を使えらるとお聞きしましたが？」

「ええ。ただ魔法を使用するにもデバイスという機械が必要です」

「フム……杖を振るような魔法とかではないようですな」

「ええ。昔はそれでも使えたと聞きますが今は専ら機械化が進んでいます」

「成る程」

芹沢とスカリエッツィは魔法の事を話しつつ切り込んだ。

「これも何かの縁と私は考えます。……どうでしょう、この世界で暮らしてみても如何ですか？」

芹沢の言葉にウーノ達はスカリエッツィに視線を向ける。ウーノ達はスカリエッツィに任せただろう。

「……私達は所謂犯罪者です。それでも宜しいので？」

「犯罪者だろうと我等船乗りは困っている者には救いの手を差し伸べる……そういう事だと思います」

正信の言葉にスカリエッツィはポカンとするも笑みを浮かべる。

「成る程。この世界の人間は余程面白い人達ばかりのようだ」

「それは光栄ですな」

そう言つて二人は握手をする。此処にスカリエッツィ達の身の処遇は決まったのである。

「戸籍に関しては私の伝手で取りましよう。それと軍務ですが……特務という形にしましよう」

「軍人でなくて宜しいので？」

「特別の任務だから特務……そういう事です」
「成る程」

なお、部署についてだがスカリエツティとクアットロは技術班、トーレとセツテは戦闘班、ウーノは通信班となるのでそれぞれの特技課程が宇宙士官学校で行われるのである。

「そうそう、同じ境遇の方もおられますぞ」

「伺っております。プレシア・テスタロッサですね、彼女の事は知っています」

「ほう？ となると彼女と貴方方は同じ世界の方ですか？」

「ええ。そのようですが……実は少々異なります」

「……と言われますと？」

「私知知っているプレシア・テスタロッサは事故で失った娘を生き返らせるがため犯罪を犯します。最後は異空間に落ちて生死不明ですがね」

「成る程……プレシア嬢ちゃんの……何が起きるか分からないのが人生かのう……」

染々と話す正信であった。そして将和ら一行は呉に戻り『伊勢』の状況を確認する。

「そうですね、スカさん達は地球に……」

「まあ暫くは特技課程のため宇宙士官学校行きだがな」
「成る程」

「それで『伊勢』はどれくらいになりそうですか？」

「早くて2週間後に修理は終わるようです」

将和はチユン参謀長と話していた。

「ならそれまでは巡洋艦『妙高』を旗艦とするか」

「分かりました。『妙高』艦長にそう伝えておきます。……それと司令」

「ん？」

「……新見参謀なのですが……」

チユン参謀長の言葉に将和は目を細める。

「ヤバイ状況……ですか？」

将和の言葉にチユン参謀長は無言で頷く。

「司令が防衛艦隊司令部に出頭してから酒を飲む量が明らかに増えています。他の女性隊員からの報告では飲み過ぎてトイレに駆け込むのを何度も目撃しているとの事です」

「……そうか……」

チユン参謀長の言葉に将和は溜め息を吐いた。将和が思うよりも新見の精神は重傷だったのだ。

「その……最悪ですが一旦は休職等の手続きを取られた方が……」

「いや……俺が行こう」

「……大丈夫ですか？」

「曲がりにもアイツとは同期だからな」

チユン参謀長の言葉に将和はそう言いチユン参謀長も将和がそう言うならと引き下がるのであった。その後、将和は新見の部屋を訪れる。

「新見、入るぞ」

ドアをノックしても応答が無かったので開けるとカギは掛かってなかった。薄暗い部屋の奥に置かれた机と椅子があり新見は椅子に座って酒を飲んでいた。

「おい新見」

「……あら……三好君じゃない」

「何本目だそれ？」

机の下には空になった一升瓶が多数置かれていた。まだ合成酒ではあるがアルコール度数が高い日本酒ばかりだった。ウイスキーの洋酒も数本あったがどれもカラであった。

「三本目からは数えていないわ……」

「あっそう。まあいいや、用件だけ伝えるぞ」

「……休職手続きかしら？」

「んなわけあるか。身支度整えておけ、明日は『英雄の丘』に行くぞ」
そして翌日、将和と新見は有給を取得して『英雄の丘』に向かうのであった。

閑話その1

「グッ!?」

ドゥーエは騎士ゼストの攻撃によって吹き飛ばされ強化ガラスに叩きつけられた。その拍子に口から大量の血が溢れ出す。

「レジアス……」

ゼストはそんなドゥーエを気にせず事切れたレジアスに近寄るが……ドゥーエはまだ生きていた。

(まだ……まだ死ぬわけには……)

だが、ゼストの攻撃はドゥーエにとっては致命傷でありとてもではないが逃げれる事は不可能だった。

(……まだ見てない妹達を見てみたかったな……)

心残りがあるとするればまだ妹達を見れていない事だろう。だがドゥーエにはその時間はなかった。ドゥーエは懐からカプセルを取り出す。それはスカリエツテイから念のためと貰った自爆用の小型高性能爆弾であった。

そのカプセルをドゥーエは最期の力を振り絞って押した。そして一瞬の間を置いてカプセルは光だした。

「しまッー……」

レジアス達がいた部屋は爆発しゼストは無論、吹き飛ばされドゥーエも消息が分からなくなったのである。これにより公式ではドゥーエは死亡したとされる事になるのであった。

「守、この人を手術室に、急いでッ」

「わ、分かったスターシア!!」

地球から16万8000光年の先にある惑星『イスカンドル』。そこは死にゆく星であったが古代守とイスカンドルの女王スターシアが暮らす星でもあった。そしてその星に一人の珍客が招かれる事になるのであった。

「三好司令」

「ん？ どうした参謀長？」

薫と寝た数日後の『伊勢』艦橋、不意にチュン参謀長が将和に話し掛けた。

「実は女性乗員達から相談を受けたのですが……」

「何だ？」

「最近、新見少佐の機嫌が物凄く良くて逆に気持ち悪いと……」

「……………ほんとあの馬鹿が……………」

チュン参謀長の申し訳なさそうな表情に将和は頭を抱える。いくら恋人になったからとはいえ軍務に影響が出るのは将和も見逃す事は出来なかった。

「……………悪い、新見にはそれとなく伝えておくわ。あの馬鹿……………」

「感謝します司令」

謝る将和にチュン参謀長は苦笑するのであった。なお、後に将和は薫にそれとなくチュン参謀長からの言伝を伝え顔を真っ赤にする薫であった。

【地球における宇宙艦艇の変革その1】

地球における宇宙艦艇の変革はやはり第一次内惑星戦争と第二次

内惑星戦争の戦間期であろう。第一次内惑星戦争の終盤、地球の国連宇宙軍は火星自治宇宙軍の艦艇を拿捕した。これが戦争前に火星で発見、リバースエンジニアリングした異星文明の宇宙艦艇である『解放』型巡洋艦であった。

この月沖海戦で鹵獲した2隻の『解放』型巡洋艦を国連宇宙軍もリバースエンジニアリングを行い『金剛』型宇宙戦艦（日本名。北米では『テネシー』級、イギリスでは『プリンス・オブ・ウェールズ』等々）や『村雨』型宇宙巡洋艦（北米では『ノーザンプトン』級、イギリスでは『カンバーランド』級等々）、『磯風』型突撃駆逐艦等が生まれたのである。

その後が発生した第二次内惑星戦争で上記の艦船は活躍し火星自治政府を降伏に追い込める程であった。そして火星を占領した国連宇宙軍は火星の至るところを隈無く搜索した結果、火星自治政府宇宙軍が発見した宇宙艦艇とは別の宇宙艦艇を発見したのである。それは火星の極冠の奥深くにて氷漬けで眠る宇宙艦艇だったのである。

国連宇宙軍は極秘のうちに氷漬けの宇宙艦艇を回収し研究に当たるのであった。国連宇宙軍は運が良かった、氷漬けであった事もありエンジンはエネルギーを注入するだけで稼働したのである。

こうして国連宇宙軍はエンジンの解析を急がせ後に試験艦『飛鳥』に搭載し試験航行等を繰り返すのである。

【地球における宇宙艦艇の変革その2】

エンジンの解析を急がせた国連宇宙軍は西暦2191年末にエンジンー次元波動エンジンの解析に完了し量産型次元波動エンジンの製造にも成功する。日本宇宙軍の艦艇に最初に搭載されたのが『金剛』型宇宙戦艦の五番艦『扶桑』であった。『扶桑』はどの『金剛』型よりも強力な主砲ー41センチ三連装無砲身砲を搭載しており地球の宇宙戦艦では最強であっただろう。

それは同年から始まったガミラス戦役でも証明していた。西暦2192年の海王星沖海戦では同じく波動エンジンを搭載した『村雨』型、『磯風』型と共に奮戦しガミラス艦隊を壊滅に成功させるのである。

る。

国連宇宙軍は直ぐに波動エンジンを搭載した『金剛』型改、『村雨』型改、『磯風』型改の量産を開始した。

この改型は『ヤマト』におけるワープや波動砲の装備はしておらず、むしろ戦力化を間に合わせるがための措置だった事もあり冥王星までは約一週間掛かる程だったのだ。

だが、この改型の投入が無ければ国連宇宙軍は火星の絶対国防圏すら破られて地球周辺までガミラス艦隊が遊弋する程だったと後に専門家は語る。

そして西暦2199年の冥王星沖海戦時に長砲身型とワープ航法が可能となった改二型が投入される。しかし、改二型はコスモナイト90の消費が国連宇宙軍が想定していたのより大きくそのため改二型が本格的に投入されるのは『エンケラドゥス急行』によりコスモナイト90の輸送が安定した西暦2200年からであった。その為、改二型の投入は僅か短期間で終了となるのである。

そして『ヤマト』が帰還してから西暦2201年から第三世代型の宇宙艦艇が投入されるのである。

【以下、変革その3に続く】

第一世代型宇宙艦艇

- ・『金剛』型宇宙戦艦
- ・『村雨』型宇宙巡洋艦
- ・『磯風』型突撃駆逐艦

第二世代型宇宙艦艇（波動エンジン搭載なるもワープ及び波動砲の搭載無し）

- ・『金剛』型改宇宙戦艦
- ・『村雨』型改宇宙巡洋艦

・『磯風』型突撃駆逐艦

第二・五世代型宇宙艦艇（波動エンジン搭載。長砲身型主砲及びワープ航法可能。波動砲の搭載無し）

・『金剛』型改二宇宙戦艦

・『村雨』型改二宇宙巡洋艦

・『磯風』型改二突撃駆逐艦

第十五話

二人は朝早くから呉宇宙軍港を出て電車等乗り継いで『英雄の丘』に向かう。途中、花束と日本酒やツマミ等を大量に購入して丘に向かう。

「お久しぶりです沖田長官」

将和と新見は『英雄の丘』にある沖田艦長の銅像に敬礼をし花束を置く。『英雄の丘』は今はまだイスカンダル遠征時の戦死者の名前しか記載されていなかったが何れは今回の白色彗星戦役時の戦死者も記載されるだろう。

「さあ……飲もうか!!」

「……こんな昼間から良いのかしら？」

「おいおい、ずっと飲んでいたお前が言う台詞じゃないぞ」

「そ、それはそうだけど……」

新見の台詞に将和はツツコミを入れ指摘された新見は頬を紅く染める。そうは言いつつも持ったコップを一升瓶を持つ将和に差し出す辺りは飲兵衛なのかもしれない。

「じゃあ無事に生きて帰ってこれたのと真田達の霊に……」

「……………」

将和の言葉に新見は軽く頷きコップを高く上げて日本酒を飲む。

暫くは無言の酒盛りだったが杯が進むに連れて新見のテンションも上がってきた。

「ったくよう……先生も先生よう……思考がそこだけ短絡的過ぎたんじゃないのかしらあ……」

「せ、せやな（相変わらずの絡み上戸……）」

「ちよつと三好君、返事が疎かじゃないかしら？」

「そ、そんな事は無いぞ」

目が居座った新見がジロリと将和を睨む。将和も慌てて取り繕うが新見はジーつと睨んだままであるが案外可愛い。(おい作者)

「ほんとかしらあ?」

「本当やぞ本当。あー、そういや久々に新見のアレ聞きたいなー」

何とか話をはぐらかそうとする将和。アレと聞いた新見はニイつと笑みを浮かべる。

「えー、アレを聞きたいの? 薫ちゃんどうしようかな」

「薫ちゃんの!! アレを!! 聞いてみたい!! あ、ソレソレ!!」

将和は迷う新見にヨイシヨをするると新見は笑う。

「仕方ないわねえ……三好君の頼みだからやってあげましょう♪」

「よっ薫ちゃん良いぞー」

そして新見は注いだ日本酒のコップを一気に飲み干し満面の笑みを浮かべた。

「こにやにやちわー!!!!」

「待ってましたー!!」

「もつとするわよ、こにやにやちわー!!!!」

新見は『こにやにやちわ』を連呼する。何故新見が『こにやにやちわ』を連呼するのか? 無論、これは中の人に関係しているからである。

というのも宇宙士官学校時の飲み会で酔っ払った将和がこれまた酔っ払った新見に頼み込んで言い始めた事であった。なおこれを連呼してたら古代守や真田も爆笑していたのは今となっては将和と新見には懐かしい思い出でもあった。

それはさておき、昼間から飲んでいた二人だが気付けば日も落ちた夜になっていた。

「あー、酒無くなったな」

「えー、もう無いのお?」

「お前が飲みまくるからだろ……」

そう言っつて後片付けをする将和に新見が寄り掛かる。

「何だ? 吐きそうなのか?」

「……今日はありがとう三好君。先生が亡くなった事実は受け入れが

中々出来なかったわ……」

不意に新見がそう言ってきた。

「阿呆。同期の助けになれたらのならそれでいいよ」

「……そう……ならこれは御礼よ」

新見はそう言つてスツと将和にキスをする。

「新見……」

「お願い、何も言わないで……気の迷いだから……」

新見はそう言つて視線を反らす……将和は改めて新見を見る。

上縁が無い眼鏡にプルツとした唇、防衛軍の制服ながらも豊かに育った胸の膨らみ等々……将和の男を刺激するのは十分だった。

(……天国にいる夕夏達……済まん……)

将和はかつての嫁達に内心謝るがむしろ嫁達はサムズアップをして「もつとやれ」と言っている気がした。

そして将和は新見をゆつくりと抱き締める。

「ツ……三好君……」

今度は将和からキスをする。ただのフレンチキスからそのまま新見の唇を抉じ開けてディープキスに移行し互いに舌と舌をまさぐりあう。

やがて離れた時、二人の唾液が橋を形成するも重力に引かれて地面に落ちていく。

「……此処じゃなんだ。場所を変えよう」

流石に『英雄の丘』でそれ以上の事は将和もする気はなかった。将和の言葉に新見は頬を紅く染めながら無言で頷き、二人は宴会の片付けをしてからラブホへと向かう。

その道中、新見から寄り添ってきたので将和は腕を組んで返してラブホに入るのであった。

「……良いんだな？」

シャワーも浴びて寝間着姿の二人。将和の言葉に新見は頷きゆつくりと目を瞑る。それを見た将和は再び新見にディープキスをする。

ディープキスをしながら将和は右手で新見の髪を解くように撫でる。キスを終えるが新見から今度はしてきたのもう一回する。

「……お願い……薫って呼んで……」

「薫……行くぞ……?」

「ん……」

そして二人は――。

「……………」

翌朝、目が覚めると隣には毛布を被って寝ている新見――薫がいた。まあ分かるもがな、中身は裸であろう。将和は薫が起きないようベッドから這い出て時間を見ると0736を指していた。その為、将和はチュン参謀長に連絡を入れた。

「すみません、二日酔いなんで今日も休みます……」

『分かりました。それと……』

『どうしました?』

『首元……口紅が付いてますよ』

「あつ」

チュン参謀長の指摘に将和は思わず首元を抑えてしまいチュン参謀長は苦笑する。

『おめでとうございます』

「まあ……ありがとうございます」

『そうですね（まあ司令の場合は……）』

意外と観察眼はあるチュン参謀長であった。

『取り敢えず引き続き有給としておきますのでゆっくりして下さい』
「ん。頼みます」

そう言って通信を切るとモゾモゾと薫が起き出した。

「んっ……」

「悪い、起こしたな」

「良いわ……つう……」

欠伸をしようとした薫だが頭を抑える。完璧な二日酔いである。

「ほら水」

将和は冷蔵庫から水が入ったペットボトルを取り出して薫に渡す。

「ん、ありがとう。それで今日は？」

「今日も有給にしてもらった」

「そうでなきゃ困るわ……何せ腰が抜けたもの」

薫は水を飲みながら苦笑する。昨夜、二人は燃えに燃えてやりま

くったのでまあ……あれである。(何だよ)

「全く……五回もするなんて聞いてないわよ」

「仕方ないだろ……薫が可愛いんだから」

「……馬鹿っ……」

そう言つてソツポを向く薫だがその表情は嬉しそうである。

「まあ取り敢えずは……」

「？」

「メシを喰つてからにするか」

「……それもそうね」

なお、朝食前にも再びベッドで戦闘をしまい結局ラブホを出たのが昼前だったりするのであった。

将和と薫の関係が進んだのはさておき、二月後には『伊勢』の修理も完了し将和は旗艦を『妙高』から『伊勢』に変更したのである。

「お帰りなさい司令」

「やあ大村さん」

将和を出迎えたのは副長の太田だつた。

「修理され『伊勢』もすっかり元通りですよ」

「そいつは何よりだ」

「それと何人かが異動されてきています。後で艦長室にお連れします」

「ん、分かりました」

そして将和が艦長室に入り荷物の整理をしていたら太田がノックしてきた。

「大村入ります」

「ん」

そして大村が連れてきたのは将和も『原作』で知っている面々だった。

『伊勢』航海長に任命されました島大介大尉です」

「同じく『伊勢』砲雷長に任命されました南部康雄中尉です」

『伊勢』機関長に任命されました山崎奨中尉です」

『伊勢』気象長に任命されました太田健二郎少尉です」

『伊勢』戦術長に任命されました北野哲也少尉です」

『伊勢』通信長に任命されました相原義一少尉です」

「一応、元『ヤマト』メンバーが『伊勢』の各長になります」

「……親父め、どんな魔法を使ったのやら……」

将和は大村の説明に溜め息を吐いた。将和は島らの顔色を見たがそれ程でもなかった。

「島、古代の事は大丈夫か？」

「……正直、まだ吹っ切れてはいません。ですが古代が俺達に託した命を自分は後悔したくないモノにしたいと思っています」

将和は他の面々を見るが他の面々もそのように頷いていた。

「……分かった。ならこれから宜しく頼むよ」

『はいッ!!』

斯くして戦艦『伊勢』は新たなるスタートの幕を開けるのであった。

「おや三好君じゃないか」

「お、スカさん」

艦橋に降りると青い錨マークの技術班の制服から白衣を着たスカリエツティがいた。

「遅れたが今日から技術長になったよ」

「お、ならトチローとのコンビがやれますね」

「そうなんだよ!! 今からトチローと波動ミサイルの量産が出来るよ
う図面をしてくるさ!!」

「たのんます。終わったら久しぶりに飲みにも行きましょう」

「おや、新見情報参謀のところには行かなくていいのかね？」

「……話広まるの早くありません？」

「おいおい、俺がいるんだぜ？」

ヒヨコとスカリエツテイの後ろから顔を出したのはトチローだった。

「よしお前は後で一発殴るからな」

「おおクワバラクワバラ……」

そう言って逃げるトチローだった。

第十六話

戦艦『伊勢』の尉官室を歩く女性がいた。その女性は青い錨マークの技術班の制服を着てその上から白衣を着ていた。

そして目的地と思われる部屋の前に到着するとコンコンとノックをした。

「トチローさん、いらっしやいます?」

『……………』

だが中から部屋の住人であるトチローの返事はなかった。もう一回ノックをしても返事はなかったので女性は番号を入力して扉を開ける。

部屋の中に入ると部屋中が書類や食べた後のカップ麺の容器等が大量に置かれていた。その様子に女性は溜め息を吐いた。

「全く……つい先週も掃除したばかりなのに……」

女性はそう言いながらもベッドでグースカ寝ているトチローを叩き起こす。

「トチローさん!! 何時まで寝ているんですの!! もう0730です

よ!!」

「フガッ……あれ……」

起こされたトチローは目を擦りながら欠伸をする。

「ふわあ……あれ、クアットロじゃないか」

女性「クアットロは腕組みをしながら溜め息を吐いた。

「クアットロじゃないかじゃないわよトチローさん。今日は第一艦隊の出撃じゃないですか」

「ありや、しまった。忘れてた」

クアットロの言葉にニカツと笑うトチローである。

「全くもう。ホラホラ早く着替えて下さいな、それが済んだら朝食ですわ」

「俺はパンより……」

「お握りでしょう？　ちゃんと用意してますわよ」

「流石はクアットロだ」

「当たり前ですわ」

褒めるトチローに嬉しそうなクアットロである。そんな二人は慌てて身支度を整えて艦橋に向かうのであった。

「ようトチロー。また寝坊か」

「うるせえ。スカさんと研究してたんだから仕方ないさ」

「まあいいよ。0830に出撃する」

「あいよー」

将和の言葉にトチローはそう言っただけで作業に取り掛かる。そして0828、『伊勢』は発進準備に取り掛かるのである。

「補助エンジン動力接続」

「補助エンジン動力接続完了。両舷推進力正常です」

『伊勢』の底からゴゴゴと音がしてくる。補助エンジンに動力接続されたので補助エンジンの回転が動き出したからだ。

「よし、微速前進0.6」

「微速前進0.6」

航海席の島が発進レバーを引くと補助エンジンが噴射し『伊勢』はゆっくりと動き出す。

「波動エンジン内、エネルギー注入します」

「補助エンジン、第二戦速から第三戦速へ!!」

「波動エンジンシリンダーへの閉鎖弁オープン、波動エンジン始動五分前!!」

「波動エンジン内、圧力上昇エネルギー充填70%……80%……90%へ」

「補助エンジン最大戦速!!」

「補助エンジン最大戦速!!」

「波動エンジン内、圧力上昇エネルギー充填100%!!」

「現在補助エンジンの出力最大」

「波動エンジン内、圧力上昇エネルギー充填120%、フライホイール

始動」

「フライホイール始動!!」

山崎機関長の言葉に波動エンジンのフライホイールが回転していく。

「波動エンジン点火10秒前……5、4、3、2、1!!」

「波動エンジン接続、点火ア!!」

「『伊勢』、発進!!」

その瞬間、『伊勢』は艦尾から海水を後方へ押し出しつつ波動エンジンを点火させたのである。そして主翼を展開させつつ上昇し『伊勢』は再び宇宙へと向かうのである。

なお、発進の指示は戦術長に就任した北野にやらせていた。

「現在、月軌道に乗った」

「ん。北野、発進の指示は良かったぞ」

「ありがとうございます」

「しかし、北野が戦術長というのはやっぱり納得がなあ……」

分かつてはいるが北野の先輩である南部は苦笑しながらそう言う。「まあそうボヤくな南部。今の防衛軍艦隊は只でさえ人が少ないんだ。経験を少しでも積ませて他艦に送らないといけないからな」

白色彗星との戦いで防衛軍の人手不足はより鮮明化した事で乗員の確保を急いでいた。宇宙訓練学校や宇宙士官学校、宇宙防衛大学校等では繰り上げの卒業がなされて人を防衛軍に注いでいたがそれでも人手は足らず人材の確保までに無人艦の投入が確実視されていたのだ。

その中でも元『ヤマト』乗員は重要視されている。超ベテランの域にある元『ヤマト』乗員はなるべく広く分けて行う事になっていたがそれまでの依り代として『伊勢』が選ばれたのである。

何れは北野や南部、太田等も他艦へ異動するのは決まっていた事であった。

「ただ……今回に関しては砲雷長は南部にする必要があった」

「えっ……?」

「……各班長は1000に作戦室に集合。今作戦――『雷王作戦』を説

明する」

将和はそう言ったのであった。そして作戦室に各長達が揃っていた。その中には『伊勢』第一、第二戦闘班付になったトローレとセツテの姿もあった。

「集まってももらったのは他でもない。太陽系内に潜む残存ガトランティス艦隊を撃滅する『雷王作戦』を実行する事になった」

「『雷王作戦』……」

そして将和は画面を開く。

「先の白色彗星戦役で我々は都市帝国を破壊し敵将ズオーダーも最期はテレサと『ヤマト』の体当たりによって倒された……しかし、まだその貴下にあった残存ガトランティス艦隊が存在していたのだ」

「まさか……あの降伏勧告をしてきた艦隊……」

「そう、それだ。監視衛星でその艦隊を主力に残存ガトランティス艦隊が第十一番惑星を陣取り、今回は土星圏内まで進出してきたのだ」

「成る程。それで全艦艇が出撃を？」

「その通りだ。今回は第一艦隊が主力となる」

この時、第一艦隊は以下の艦艇で構成されていた。

第一艦隊

旗艦『伊勢』

第一戦隊

『伊勢』『薩摩』『ロイヤル・オーク』『メリーランド』

第二戦隊

『吉野』『高砂』『プリンツ・オイゲン』『ニユルンベルク』

第三戦隊

『ノーザンプトン』『ウイチタ』『クインシー』『カンバーランド』

第四戦隊

『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』

第五戦隊

『妙高』『那智』『足柄』『羽黒』

第一宙雷戦隊

- 『オマハ』
- 『フレッチャー』以下16隻
- 第二宙雷戦隊
- 『能代』
- 『吹雪』以下16隻
- 第二宙雷戦隊
- 『タウン』
- 『トライバル』以下16隻
- 第一航空戦隊
- 『日向』(コスモタイガー2×18 雷撃機×18)
- 『サラトガ』(同上)
- 第二航空戦隊
- 『蒼龍』(コスモタイガー2×36 雷撃機×36 100式空間偵察機×3)
- 『飛龍』(同上)
- 第三航空戦隊
- 『ワस्प』(同上)
- 『レンジャー』(同上)
- 第四航空戦隊
- 『イラストリアス』(同上)
- 『ヴィクトリアス』(同上)
- 第一護衛隊
- 『松』以下10隻
- 第二護衛隊
- 『樫』以下10隻
- 第一パトロール隊
- 『エリトレア』以下8隻
- 第二パトロール隊
- 『デンバー』以下8隻

以下の艦艇で構成されていた。そしてその将は将和であった。

「今回は航空戦力が中心になるだろう」

「どうと？」

『伊勢』らの主力艦隊を囷とする」

将和はそう言って画面を操作する。

「パトロール隊からの情報で敵ガトランティス残存艦隊は土星周辺に展開している事が分かった。そこで『伊勢』らの一戦隊等は土星にワープしてそのまま正面きつての艦隊決戦をする……と見せかける」

将和は画面で敵ガトランティス残存艦隊と一艦隊を正面で向き合わせるが一艦隊後方に艦隊を置いた。

「山口少将の航空戦隊は一艦隊後方に展開し攻撃隊を発艦、艦隊決戦をしようとするガトランティス残存艦隊の側面からこれを……叩く！！」

画面で航空戦隊から発艦した攻撃隊が側面からガトランティス残存艦隊を叩く様子を映し出す。

「一艦隊はこの航空攻撃で生き残った敵ガトランティス残存艦隊を更に追撃して全滅させる……何か質問は？」

『……………』

将和の問いに誰も質問はしなかった。

「無ければ作戦を開始する。別れ」

斯くして第一艦隊は準備を整えて土星宙域へワープを行うのであった。その一方で土星宙域にはガトランティス残存艦隊が集結していた。

「バルゼー司令、残存艦艇の集結が完了しました!!」

「よし、地球が油断しているこの時こそ大帝の恩顧に報いるのだ!!」

バルゼーは旗艦である『アポカリプス』級超大型空母で艦隊に向けて激励をしていた。そこへ通信兵がバルゼーの元にやってくる。

「バルゼー司令、火星沖に侵入していた潜空艦『ガリパル』より入電。敵地球艦隊がワープしたとの事です」

「何!?! 地球艦隊が?」

「はい」

「ぬう……奴等、此方に来る可能性は高いな」

「如何なさいますか？」

「勿論迎撃態勢に移行する。全艦戦闘準備につけ!!」

バルゼーの判断は正しかった。ガトランティス残存艦隊は戦闘準備をしている最中に重力震を感知したのである。

「クソッ!? 先手を打たれたか!! 全艦砲撃用意!!」

バルゼーは右拳を握りしめ命令を下すのである。そしてワープしてきた地球艦隊ではー。

「敵ガトランティス残存艦隊、正面30万宇宙キロ!!」

「ありや、少し前だったな。まあ仕方ないか、航空戦隊とその護衛艦艇は後方へ後退しつつ攻撃隊を発艦させよ!!」

「了解、直ちに航空戦隊に伝えます!!」

第一航空戦隊の『日向』以下の航空戦隊と護衛の第一、第二護衛隊は後方へ後退しつつ攻撃隊の発艦準備を行う。

「第一次攻撃隊発艦準備急げ!!」

航空戦隊を指揮するのは第二航空戦隊司令官の山口少将であり旗艦『飛龍』の飛行甲板から対艦装備を施したコスモタイガー2と雷撃隊の準備が急がれていた。

では後れ馳せながら航空戦隊を説明しよう。白色彗星戦役時、防衛軍艦隊には空母ー『ドレットノート』級戦艦を改装した航空戦艦は5隻就役していた。

しかし、肝心の中身である飛行隊はまだ錬成途中だったのでスコット中將は航空戦艦を戦艦としての運用にしたのだ。これが当初、副官が航空機を発艦させるか具申した時に拒否したのがこれが理由だった。

だがこれが土方大將だったのなら錬成途中であろうと飛行隊に組み込んで航空攻撃を行っていただろうと後の歴史家達はそう語っていた。

それはさておき、白色彗星戦役後に残っていたのは機関故障で最終決戦に参加出来なかった『サラトガ』だった。こいつは原作で言う空母と同じ艦型であり搭載機数は36機（コスモタイガー2×18 雷撃機×18）である。

なお、『日向』は大破していたのでそのまま航空戦艦として再就役を果たし戦闘機×27 雷撃機×18を搭載している。

そして第二航空戦隊からの空母はまた違っていた。艦は『ドレッドノート』級であるが上部構造物は全て取っ払い、艦橋も右舷側に寄せられており航空母艦型にした『グローリアス』級を地球防衛軍は就役させていた。それがこの6隻であり他にもネームシッフの『グローリアス』『鳳翔』が就役していたがパイロット育成のため第50航空戦隊に配備され地球にいたのである。

なお、搭載機数は75機であり(コスモタイガー2×36 雷撃機×36 100式空間偵察機×3)強力な航空母艦なのと言うまでもない。だからこそ将和は航空戦力を主力にしようとしていたのだ。

「航空隊の主目標は敵空母だ!! 空母だけを狙え!!」
「了解!!」

「二戦隊及び各戦隊に通達!! 味方航空隊が敵艦隊を攻撃すれば『伊勢』を先頭に突撃する!! 二戦隊と三戦隊は拡散波動砲の準備を急げ!!」

斯くして第一艦隊は攻撃を開始するのであった。

第十七話

「主砲発射準備だ急げ!!」

『伊勢』の前部第一砲塔では戦闘班付のトーレが砲員を鼓舞していた。砲員達も訓練通りに準備を行い射撃準備を整える。

「準備良し!!」

「よし、此方第一砲塔。射撃準備良し!!」

そう言つてトーレは艦橋に報告するのである。そして艦橋では……。

「味方攻撃隊が攻撃を開始します!!」

後方へ後退しながらも各航空戦隊が攻撃隊を発艦させ五月雨式ながらも攻撃を開始していたのだ。

「空母だけを狙うんや!! 奴等を飛び立たせるんやないで!!」

『了解!!』

攻撃隊隊長の淵田中佐はそう言いながらも雷撃機の操縦桿を握つて『ナスカ』級高速中型空母に大型ミサイルを叩き込み撃沈させるのである。

「バルゼー司令、空母部隊が攻撃されています!!」

「おのれえ……空母から先に叩いてきたか……」

バルゼーは右拳を握り締める。ガトランティス艦隊が得意とする航空攻撃を封じられたのである。

「バルゼー司令、これでは……」

「構わん、艦隊はこのまま前進せよ!! 我々には衝撃砲がある!!」

この衝撃砲、発射時は光線であるが命中すると螺旋状の衝撃波に変化して対象物を包み込んで破壊するという代物である。

一応、波動防壁でも防げる事は防げるがそれでも油断はならない兵器であった。

「衝撃砲は射程距離に入り次第撃ちまくれエ!!」

バルゼーはそう叫び、残存ガトランティス艦隊は衝撃砲の射程距離に入り次第砲撃を開始した。

「敵残存ガトランティス艦隊、砲撃を開始します!!」

「司令、此処は飛ぶべきかと思えます」

「……だろうな」

チュン参謀長の言葉の意味を理解した将和はニヤリと笑う。直ぐに将和は叫ぶ。

「第二宙雷戦隊に打電!! 『小ワープを敢行、突撃せよ』」

「了解!!」

将和の電文は第二宙雷戦隊旗艦『能代』に届けられ電文を聞いた二宙戦司令官の田中少将は爆笑する。

「ハッハッハ。三好の野郎め、宙雷屋の底力を見せてやるというわけか。宜しい、宙雷屋の底力を見せてやる!! 二宙戦全艦に命令、小ワープを敢行し突撃せよ!!」

『能代』以下の二宙戦は直ちに小ワープを敢行、ワープ場所は敵残存ガトランティス艦隊の左舷方向だった。

「左舷に重力震反応!!」

「何?! しまった!?!」

バルゼーがそれを理解した時は遅かった。残存ガトランティス艦隊左舷に二宙戦は小ワープを終えると最大戦速で突撃を開始し同時に主砲を魚雷を乱射しまくるのである。

「くたばれガト公!!」

駆逐艦『綾波』艦長の白石少佐は雄叫びをあげつつ突撃する。

「正面に大戦艦3隻!!」

「魚雷、撃エ!!」

ズズンと四連装魚雷発射管四基から連続して99式空間魚雷が発射される。発射された16本の空間魚雷は外れ弾無しで3隻の大戦艦に命中し大戦艦は炎上しつつ撃沈されるのであった。

「突っ込め突っ込めエ!! ガト公に二宙戦の恐ろしさを知らしめろ!!」

突撃に成功した二宙戦は駆逐艦『波風』『朝風』『清風』を喪失するも敵残存ガトランティス艦隊を混乱させる事に成功する。

「敵残存ガトランティス艦隊は混乱に陥っています!!」

「今だ、主砲撃ち方始めエ!!」

「撃ち方始めエ!!」

射程距離に入った『伊勢』は前部48センチ三連装陽電子衝撃砲2基で砲撃を開始する。その弾道はバルゼーが乗艦する『アポカリプス』級超大型空母の装甲を貫通させた。

「敵旗艦からの砲撃です!! 左舷損傷!!」

「又ウツ!」

揺れる衝撃にバルゼーは顔をしかめる。ただただ状況は不利になる一方であった。その為バルゼーの頭の片隅には撤退という二文字があつた。いや、ガトランティス軍人として撤退等到底出来ない代物であつた。

だがそれは『伊勢』の陽電子衝撃砲のエネルギー弾が艦橋に直撃する19秒前の出来事だつた。

「直撃、来ます!」

「こ、この私が……」

バルゼーはそう言つて光に消えていったのである。『アポカリプス』級超大型空母が撃沈したのは『伊勢』からでも確認出来た。

「敵旗艦の艦橋に命中弾!!」

「よくやった砲雷長（南部パネエ）」

将和は当てた南部を素直に褒めるのである。そしてバルゼーが戦死した事で敵残存ガトランティス艦隊は更に混乱の渦に陥つたのである。

「敵艦隊、混乱しています!!」

「落ち着いて砲撃を集中だ!! 1隻ずつ撃沈せよ!!」

第一艦隊は数の多さを利用して敵残存ガトランティス艦隊を1隻ずつ撃沈していく。だがそうは問屋が降ろさないのがガトランティス艦隊であつた。

「ふ、副司令官。如何なさいますか?」

「……やむを得ん。撤退だ撤退しよう」

流星のガトランティスでも特攻は躊躇された。というのもも残存ガトランティス艦隊の内部でも意地でも地球占領派とアンドロメダ星雲に帰還派に分かれていた。

第11番惑星を占領している白色彗星軍だが上層部……たまたま生き残る事が出来たレーザーやバルゼーは地球占領派だった。だが下士官や兵士達等は帰還派に多かった。この副司令官も帰還派だったので直ぐに撤退する事を決断が出来たのである。

「敵ガトランティス艦隊が撤退していきます!!」

「……………」

「司令、追撃しますか?」

無言の将和にチュン参謀長はそう具申するが将和は首を横に振る。

「罨の可能性もある。それにまだ第11番惑星の動向も確認出来ないから無理強いの強硬は出来んな」

「分かりました。なら向こうが撤退を確認次第、此方も撤退しましょう」

「ん」

チュン参謀長の言葉に将和は頷いた。斯くして第一艦隊は敵残存ガトランティス艦隊が撤退したのを確認してから沈没艦艇の救助等を行い撤退をしたのである。

「……………」

「司令」

「何だ参謀長?」

「二戦隊と三戦隊を下げたのはやはり敵艦隊が特攻してくると認識していたので?」

「……………まあそうなるな」

将和は溜め息を吐きながら従兵から出されたコーヒーを啜る。

「敵旗艦を撃沈した事で残存艦艇が特攻してくると思つたから二戦隊と三戦隊を下げて拡散波動砲の準備をさせていたが……向こうの指揮官も意外と優秀なのが残っていると見えるな」

将和が二個戦隊を下げたのは残存ガトランティス艦隊が場合に

よつては特攻をしてくると踏んでいたからだ。もし特攻してきたら艦隊も二個戦隊が待機している後方まで後退して拡散波動砲を……という構想だった。

だが現実に残存ガトランティス艦隊は撤退を決断して撤退したのである。

「ま、今回は此方の勝ちだから良いけどな」

「……ですな……」

ニカツと笑う将和にチュン参謀長も釣られて笑うのである。今回の雷王作戦で地球連邦軍第一艦隊は全体的に駆逐艦3隻を喪失し巡洋艦4隻、駆逐艦7隻が大破、航空機28機を喪失したのであった。「ムウ……完全撃滅は出来なかつたか」

「ですが土星圏内の制海・制空権を確保したのは事実です」

地球防衛艦隊司令部では正信達は今回の作戦結果を話していた。その中でも芹沢は将和を擁護する発言をしていた。

（実質の喪失艦艇は駆逐艦3隻に過ぎない……むしろ大型艦艇の喪失を避けてくれたのは有難い）

地球防衛軍の再編真っ最中の中での作戦だが大型艦艇の喪失を0にした将和を芹沢は評価していた。それに作戦もほぼ完勝に近く司令部では将和を評価する動きもあつた。

「パトロール艦隊の報告では根拠地に行っている第11番惑星に撤退しているとの事ですが……」

「そのままアンドロメダ銀河に引き揚げてくれたらワシらとしても万々歳だがのう」

「確かに」

正信の言葉に藤堂と芹沢は苦笑する。

「土星の衛星『タイタン』の基地の状況は？」

「白色彗星戦役時から比べて復興は終わりましたが……」

「宜しい。ならば第一艦隊は再度の出撃準備が整い次第、タイタン駐留とさせる」

「宜しいのですか？」

「敵の出方を探る。そのためにはタイタンに艦隊を置く必要はあるか

らな」

藤堂の言葉に正信はそう言う。確かに第十一番惑星に引き揚げたガトランティス艦隊の動向を調べるにはより距離が近い『タイタン』に駐留させる必要はあった。

「後は艦艇の増強だが……」

「二ヶ月後には戦艦4隻、巡洋艦7隻、駆逐艦18隻が就役します」

「ん。その艦艇と第一艦隊のを混ぜて第二艦隊を創設する」

「分かりました。そのように……」

「後は……アイツらにも休暇をせんと……」

第一艦隊は凱旋して帰還するのである。そして将和はというと……。

「よう真田」

将和は薫と共にまたしても『英雄の丘』に来ていた。なお、今回は宴会ではなく報告の為だった。

「まあある程度は勘づいてると思うが……薫とそれっぽくなってな。取り敢えずは付き合っている」

「取り敢えずはやめなさいよ。それだと古代君みたいになるわ」

「アイツ、そんな事してたのか」

「まああの時の取り敢えずはと言ったのは私からだから……」

「おいおい……」

そんなやり取りをする二人だが将和は内心違う事を考えていた。

(イスカandal行く時はどうなる事やら……)

『いや、そうよりかはお前の方が多くこさえると思うぞ』

(あー聞こえない聞こえない……)

そう思う将和だったがふと真田がそう言っているように聞こえたのであるが聞こえた振りをする将和であった。

「さ、行きましょう。また来ますわ先生」

「また来るよ真田」

そう言って『英雄の丘』を後にする二人だったが何処と無く二人は歩いていると気付けば腕を組んで歩く二人であった。

なお、この時の二人はまだ知らなかった。ちやっかり人数が増える

事に……。

「え、『タイタン』基地に臨時出向ですか？」

「済まんのう。2ヶ月程、行ってもらいたいのじゃ」

技術省に特別入りしていたプレシアは司令部で正信にそう言われた。

『タイタン』には第一艦隊が駐留する事になって試作の兵器類を積み込むのじゃが『伊勢』の技術長に是非協力してほしいとの要請なんじゃよ」

「はあ……分かりました。その代わりなのですが……」

「無論、アリシア嬢ちゃんも一緒に連れて行って構わないぞ」

「ありがとうございます」

正信の配慮にプレシアは頭を下げるのである。その後、正信の家に戻りアリシアに事情を説明するとアリシアは眼を輝かせて行く事を了承したのである。

「え、宇宙に行くの!? ワーイ!! 学校の皆に自慢出来るよ!!」

「……あまり自慢し過ぎるのも駄目よアリシア」

「はーん」

そうアリシアを諫めるプレシアであった。

第十八話

「宇宙って暗いんだねママ。もしかして宇宙は夜なの?」

「フフツそうじゃないわよアリシア」

二日後、荷物を纏めたプレシアとアリシアの二人は横須賀宇宙軍港に向かい待機していた巡洋艦『妙高』に乗艦して地球を出港してそのまま土星の衛星『タイタン』に向かっていた。その道中、二人は『妙高』艦長から記念にと火星く木星間でのワープを体験する事になる。(なお、『妙高』には新乗組員も大量にいたので表向きは新乗組員へのワープ体験としていた)

「あら、アリシアは飲まないの?」

「うん。大丈夫だよ、酔わないよ」

二人は衛生士の女性士官からワープの酔い止め薬を貰っていた。プレシアはそのまま服用したがアリシアは大丈夫と言って服用しなかった。

そして木星へワープ後、アリシアは酔い止め薬を飲まなかった事を盛大に後悔するのである。

「ブエエエエエエエ……ギモヂワルイイイイイイイイイ
……………」

「もうアリシアったら……」

「若い連中も半分は飲まずに酔ってますよ。まあ恐れを知らぬからですなあ」

ベッドに横たわるアリシアを看病するプレシアに軍医は苦笑しながらそう言う。

「まあ良い体験でしょうな」

「そのようですね」

その後、『妙高』は無事に第一艦隊が駐留する衛星『タイタン』に到着したのである。

「やあプレシアさん。わざわざ済まないな」

「いえいえ。娘にも良い体験が出来ると思いましたから……」

「あ、お兄ちゃん♪」

「ようアリシア。また大きくなったな」

「エへへへ」

第一艦隊司令部に出頭したプレシアとアリシアは将和と挨拶をする。そこへ扉が開いて入ってきたのはスカリエツティだった。

「プレシア・テストロツサ……そうか、要請が通つて来たのか」

「……もしかして貴方がジェイル・スカリエツティ？」

「如何にも。私が悪道と名があるジェイル・スカリエツティだ」

二人は互いに握手をする。どうやら同じ技術者同士もあり何か共感するのがあつたのだろう。

『スカリエツティ・レポート』で私とアリシアの経緯は存じています。あの爆発が私をも巻き込んでいたからこそ此処にいて今の私があると思うわ」

「人生……何があるかは分からないというモノかな」

「そういう事ですわね」

スカリエツティの言葉に苦笑するプレシアである。なお、『スカリエツティ・レポート』というのはスカリエツティ達と敵対していた時空管理局や魔法に関する事を詳細に記載されたレポートの事である。末端の兵士達にはまだ知られてはいないが将官達はレポートを見て知っていたのである。

後に防衛軍が時空管理局と接触した時はこのレポートを基に対処したのであつた。

「仕事は明日から頼むよ。なに、貴女もいれば開発もスムーズになるさ」

「そう願うわ」

（何で一触即発みたいな雰囲気です話すの君ら……？）

何故か二人の雰囲気は怪しくなりかけるのに内心、ツツコミを入れる将和である。そして遅れて薫も入ってきた。

「遅くなりました。二人の受け入れ部屋を点検していたので」

「ん。プレシアさん、彼女は情報参謀の新見少佐だ」

「新見です。お噂は予々聞いております」

「プレシア・テスタロッサ技術大尉です。プレシアで構いませんわ新見さん」

「此方も薫で構いませんよ」

薫とプレシアが仲良く握手をする中、アリシアがジーツと将和を見つめる。

「どうしたアリシア？」

「……何かお兄ちゃん、似合わないね」

「……本当はそれが一番良いんだけどね」

そう言いながらアリシアの頭を撫でる将和である。そして薫が二人を部屋に連れて行こうとした時、薫が将和に耳打ちをする。

(今夜……空いてるかしら?)

(……空けておくよ)

「??」

将和の言葉に薫はフフツと笑い、聞こえていたが意味が分からなかったアリシアは首を傾げるのである。そして薫が二人を部屋に案内した後、荷物の整理をしていたプレシアにアリシアは質問する。なお、途中でリニスも合流して手伝っていた。

「ねえママ、今夜空いてるってどういう事？」

「え、どうしたのアリシア？」

「さつきね、薫お姉さんがお兄ちゃんに今夜空いてる? って聞いてたの。お兄ちゃんは空けておくって言ったかな……?」

「……えくと、それは……」

「お茶をしようって事ですよアリシア」

「そうなのリニス? なら私もお茶飲みたいー」

「アリシアにはまだ早いですよ。にがくい紅茶ですからね」

「ウエツ、あのお茶なのね……なら我慢する」

「うん、アリシアは良い子ですね」

『ありがとうリニス』

『良いのですよプレシア……全く、将和さんと薫さんにも困ったもの

です』

『そ、そのリニス……二人って……』

『まあプレシアが想像している通りですよ』

『ッ』

リニスの念話にプレシアはズキツと胸を痛めた。その痛みは何の痛みかはプレシアもまだ理解していなかった。

『薫さんはガミラス戦役で恋人を亡くし、一旦は立ち直ってはいたんですが白色彗星戦役で今度は彼女の師匠的の上官を亡くしたよう……それで自暴自棄になっていたんですが将和が立ち直らせて今は半恋人同士のようなですよ』

『……そう……』

リニスの説明にプレシアは何か引つ掛かる思いをしつつもそう言葉を出さただけであった。そしてその日の深夜、プレシアはたまたま寝つけが悪かったのでタイタンの景色を見ようと部屋を出て廊下を歩いていた。

「あら、此処は……」

そして案の定、プレシアは道に迷い廊下を歩いてたがたまたま三好将和と記載されたプレートへのドアを見つけ、ノックをしようとしたが中から声が聞こえていた。それも将和だけではなく薫もいたのである。

(ッ)

プレシアは咄嗟に物陰に隠れると同時にドアがプシュツと開いて薫が先頭で出てきた。

「んー、良い気分転換になったわ」

「へいへい、そりゃよござんでしたね」

(あの二人……)

物陰から出てきた薫と将和にプレシアは眼を見開く。まさかとは思うが、夜戦をしていた後に出会ったのかもしれない。そう思っていたら薫が将和に抱きついてそのまま口にキスをしたのである。

(~~~~ッ!?)

叫びそうになるのを何とか堪えたプレシア。顔は既に真っ赤であ

る。

「……フフ、またお願いね♪」

「次も腰をいわすぞ」

「抜かさないようにお願いするわ」

将和の言葉に薫は苦笑してプレシアが来た廊下をスキップして歩くのである。

「全く……」

そう言う将和であるがその表情は迷惑そうではなかった。そしてドアを閉めると一瞬の間を置いて物陰からプレシアが出てきたのである。

(あの二人……くっくッ!?)

先程の光景を思い出したプレシアは顔を再度真っ赤にしつつその場を去るのであった。なお、道にはまた迷って何とか自室にたどり着いたのは一時間後の事であった。

「沢村、どんな感じだ?」

「あ、篠さん……見ての通りだよ」

月面航空隊に所属する旧『ヤマト』乗組員の沢村と篠原、二人は月面の滑走路でその上空を飛行する1機のコスモタイガー2を見ていた。そのコスモタイガー2は上手く飛行はしているがどうもぎこちない飛行であった。

「お嬢……表面上は平気そうにしているけど……」

「そりゃあ……そうか……宇宙に脱出したは良いがいつ救助が来るか分からない状況だったからな……三好隊長が救助したのが奇跡に近いところだな」

篠原と沢村はそう会話をする。上空を飛行するコスモタイガー2に乗って操縦する山本玲は白色彗星戦役の最終決戦時、乗機のコスモタイガー1が被弾して脱出したのは良いが救助されるまでの間は宇宙空間を漂流していた。いつ酸素が切れるか分からない状況であり、山本の精神がよく持ったと言われる程である。

軽傷だった事もあり直ぐに復帰して飛行したのは良いが操縦がどうもぎこちないモノとなり無理に行おうとすれば吐く有り様であった。

「ツ……オオツ、オオツ」

ところ代わって飛行中の山本、噎せたと思ったらそのまま吐き出した。おかげで昼間に食べたモノがヘルメットの中にぶち撒かれた。それでも山本は吐いた臭いを我慢しつつ操縦桿を握るが再び吐き出す。

結局、着陸は自動操縦に任せて着陸後はヘルメットのままトイレに駆け込むのであった。

「はあ……はあ……（どうしたら……私はどうしたら良い……？）」

便器に向かって吐く中、山本はそう自問するのであるが答えは見つかりそうになかったのである。

第十九話

将和の朝は0550から始まる。

「……………」

呉の宇宙軍港に停泊する戦艦『伊勢』の艦長室で将和は時計の音で目が覚める。その隣では裸で毛布にくるまって寝息を立てながら寝ている薫の姿があった。

晴れて付き合い出してから（なお、将和は「まだ付き合っていない」と主張している）薫の艦長室に入り浸るのは毎日の如くであった。気付けば艦長室には薫の私物もちよこちよこあったりする。

第一艦隊は昨日に呉宇宙軍港に帰還した。帰還したのは宇宙軍訓練学校の候補生の練習航海が終了したので候補生を地球に送り届けたのである。全員が下艦したのは夜であり将和も隊舎で寝るつもりだったが書類作成等もあったので全てが終わったのが0000を過ぎた事もあった。

その為そのまま艦長室で寝たのである。なお、将和が艦長室に入ったのを確認したかのように数分後には寝間着姿の薫が艦長室に凸したのであった。

それはさておき、将和は艦長服に着替えるとそのまま艦長室を出て食堂に向かうのであった。

「もう、起こしてくれても良かったのに……………」

「悪い悪い。気持ち良さそうに寝ていたからな……………」

食堂で朝食を取っていた将和の数分後、これまた着替えて食堂に来た薫が文句を言うと言った将和が苦笑して謝るのである。

その後、将和は横須賀の地球防衛軍艦隊司令部への出頭が命じられ将和は共に出頭を命じられたスカリエッティらと横須賀に向かうのである。

「スカさん、何かした？」

「いや何にも……いや待てよ。ワープミサイルとか開発を具申したからそれかも……」

「おい待てや」

「……………」

ブツブツと小声で話すスカリエツティに将和はそうツツコミを入れるがその光景をウーノがジッと見ていたりする。

（早く……聞かないと……）

というのもウーノは将和が呟いた『宇垣』等々の解明をスカリエツティから依頼されており暇を見つけたら調べてはいた。

その中でウーノは気になる記載を見つけたのだ。

『1945年6月、マリアナ沖海戦で戦艦『大和』撃沈。同艦に第一戦隊司令官宇垣中将が『大和』と運命を共にする』

確かにあの時、将和は『宇垣』と呟いていた。それは薫も確認している。

（全く……薫さんが三好司令に首つたけになるから……）

当初は薫もウーノと共に将和の呟いた言葉を調べていたが薫が将和とくつついた事で一抜けに等しい事だったのだ。

まあウーノもウーノで自身に訪れる未来に今は何も気付いていないのであった。

それはさておき、将和とスカリエツティ一行は横須賀の地球防衛軍艦隊司令部に到着すると先に将和から案内されたのである。

「土星沖海戦……ご苦労だったな」

「俺は命令しかしてませんよ。戦ったのは乗組員達です」

「だがその乗組員もお前の命令で動いているのだ。謙遜も良いが自身の影響を考える事だな」

「はっ、精進します」

「話がずれたが……第一艦隊は第二艦隊が創設されるまでは土星の衛星タイタンで引き続き駐留してもらう」

「……第三艦隊の創設まででは無く……ですか？」

将和の指摘に藤堂と芹沢は目を見開いた。目の前の男はまだもう

一個艦隊の創設を訴えてきたのだ。そしてそれを聞いた正信は大爆笑をした。

「ハツハツハツハツハツハ。お前はまだ足りんと言うか？」

「まあそうですね。せめて空母艦隊でも……と思います」

「ほう、空母艦隊か……」

将和の言葉に正信は興味を得たように身を乗り出す。それは芹沢もであった。

「ええまあ……今の第一艦隊は残った艦艇でかき集められた混成艦隊ですし……それに空母艦隊は必要でしょう」

「フム……では貴様ならどう編成をする？」

「……宜しいので？」

「あくまでもお前の考えだ」

そして将和は正信に言われて空母艦隊の案をタブレットに記入して正信に渡す。

第一航空艦隊

第二航空戦隊

『蒼龍』（コスモタイガー2×36 雷撃機×36 100式空間偵

察機×3）

『飛龍』（同上）

第三航空戦隊

『ワस्प』（同上）

『レンジャー』（同上）

第四航空戦隊

『イラストリアス』（同上）

『ヴィクトリアス』（同上）

第一護衛隊

『松』以下10隻

第二護衛隊

『樫』以下10隻

「現在の戦力で編成出来る空母艦隊です」

「フム……妥当な線だな……」

将和の言葉に芹沢は頷く。

「……良く分かった。取り敢えずは一週間の休暇だ」

「一週間もですか？」

「暫くは地球には帰れんだろう。その為の処置だな」

正信はそう言つて話を締め括るのである。そしてスカリエツティ達が呼ばれた。

「実は君達には改めて辞令を通知する」

そう言つて正信は通知書をトーレ達に配付する。

「ウーノ・スカリエツティ。本日付で戦艦『伊勢』通信長に任命する」

「トーレ・スカリエツティ。本日付で戦艦『伊勢』戦闘班長に任命とする」

「クアットロ・スカリエツティ。本日付で戦艦『伊勢』副技術長に任命する」

「セツテ・スカリエツティ。本日付で戦艦『伊勢』砲雷長に任命する」

「こいつはまた……」

「なに、彼女達には十分な素質があるからだ」

将和の言葉に正信はニヤリと笑う。

「ああ、戸籍はちゃんと親子としているから何の問題は無い」

（私的濫用に近いが……黙つとこ……）

そう思う将和である。知らぬが仏であるのだ。

「てかそれなら南部達は……」

「ああ。新造される艦艇の方に異動してもらう。人事不足なのは仕方ない事だ」

まあ彼等も『ヤマト』が無いので仕方ないかもしれない。だが、将和としては彼等を引き留めはしたかったので後にそれを実行するがそれは先の話である。

「なに、君達なら十分やれる。それに後ろには息子がいるしな」

「あまり過大評価はちよつと……」

（過大評価では無いと思うがなあ……）

将和の小声に藤堂はそう思うのである。そして一旦は司令部での用事は終わったと思う将和であったがウーノに呼び止められた。

「どうした?」

「……御相談があります」

「相談?」

「はい……司令があの時仰った『宇垣』についてです」

「ッ……」

ウーノの言葉に将和の表情が少しだけ変わった。無論、その様子をウーノは見逃さなかった。

「……………はあ……………」

そのウーノの視線に将和は観念したかのように溜め息を吐いた。

「……………この事を知っているのは?」

「新見情報参謀くらいです」

「……………分かった。薫……………いや、アイツにはまだ早いか。取り敢えずウーノだけには喋っておこうか。呉に戻ったら艦長室に来てくれ」
「分かりました、ありがとうございます」

そして一行は呉に戻り将和が艦長室でウーノが来るので片付けをしているとノックをされた。

「ウーノです」

「おう、開いてるよ」

ガチャリと扉を開けてウーノが入ってくる。将和は椅子を出してウーノを座らせ自身も椅子に座る。

「さて……………何処から話そうかな……………」

「三好司令が話しやすいところからでも大丈夫です」

「いや……………そうすると全部話す必要になるからな……………よし、最初から話すか」

将和はコップにコーヒーを入れてウーノに渡す。砂糖とミルクは入っていない。どうせ眠れなくなるのだ、それならコーヒーだけで良い。

「さてウーノ。君はタイムスリップを知っているか?」

「タイムスリップ……………確か人が時を越えるというのは聞いた事は……………まさかッ」

「そう、そのまさかだ」

目を見開くウーノに将和は頷きゆつくりと口を開く。

「俺はかつて……タイムスリップをした経験を持つ人だ。昔、この地球にある日本の平成という時代から俺は過去……約100年以上前の明治という日本にタイムスリップをしたんだ」

「平成……この日本の年号ですね。平成、昭和、大正、明治と記憶があります」

「博識だなウーノ、まあその通りだ。俺は約100年以上前の時代の時を越えた……」

そして将和は語り出す。己が経験したかつての出来事を……。その話は夜も更け時刻は0200を指していた。

「とまあ……これが俺が経験した出来事だ」

「……俄には信じられませんが……確かにあの時、『宇垣』と呟いたのも納得出来ます」

「あの時はなあ……俺には『ヤマト』が『大和』に見えた。そしてその隣には宇垣が笑っていてそのまま超巨大戦艦に向かっていった……」

今でも思い出すあの時の事を……。どうして宇垣が現れてあの行動を移したのか、もしかしたらテレサが将和の事に気付いて『大和』に関連する人物として宇垣を現れさせたのかもしれないがテレサは『ヤマト』と永遠の旅に出たので答えは永遠に謎であった。

「さて、此処からが本題だ」

「本題……ですか？」

「俺が魔法を知っている事だよ」

「ッ……それは確かに本題ですね」

「……何で魔法を知っているか……それはなウーノ、君達は元よりこの世界が創作物語の世界だからだよ」

「創作……物語……？」

将和の言葉にウーノは目をパチクリとさせた。今、目の前にいる男は何と言ったのだろうか？

「アニメ……は分かるか？」

「はい、それは……まさか三好司令……」

「勘づいたか？ 俺がタイムスリップ前の平成の世界……そのアニメ

の中に君達や『ヤマト』が登場するアニメ作品があるんだよ」

「……………」

ウーノは目眩を覚えた。じゃあ何か？ スカリエツティや妹達はアニメの中で戦わされてスカリエツティが復讐する理由もアニメの展開で作られたのか？

まあスカリエツティなら「そいつは面白い!!」とか言いそうではあるが…………。

「…………私達は一体…………何者なんですか？」

ウーノはそれしか言えなかった。自分達が存在する意義は何なのか？

「ウーノはウーノだよ。それ以上でもそれ以下でもない」

将和はそう言って残り少ないコーヒーを飲み干して再度入れる。

「俺はこの世界を平行世界と思っているからな」

「平行…………世界…………？ パラレルワールドというものですか？」

「ああ。そもそも君達はアニメの中では脱獄をする展開は少なくとも俺がタイムスリップするまではなかった。もしかしたらタイムスリップ後にはあったかもしれないがな」

将和はそう説明をする。だが、続編でもスカリエツティらが脱獄する話は無かった。だからこそ将和は平行世界と位置づけたのである。

「パラレルワールドというのは作品の中でもポピュラーなモノになっているからな。それこそ…………此处で君達と俺が出会っているのも奇跡だしな」

「はあ…………」

「ま、要約すればだが…………俺が魔法を知っていたのは君達のアニメ作品を見ていたから。だから俺は驚く事はしなかったというわけよ」

「…………納得は分かりませんが話の内容は理解しました。ですが質問があります」

「何かな？」

「三好司令がこの後の…………この世界の展開は知っているのですか？」

「…………そう来たかあ…………」

ウーノの言葉に将和は苦笑する。『ヤマト』を知る者としては確か

にこの後の展開は知っていたのだ。

「この世界……『ヤマト』がいる世界と『ヤマト』がいない世界に分かれるんだよ」

「『ヤマト』が……?」

「そう。何せ『ヤマト』という戦艦が主人公だからな。そして今、『ヤマト』はいない。『ヤマト』がいない世界はね………映画だけで終わっているんだ」

「……それじゃあ……」

「今後の展開は予測は付かない……というわけさ」

「……そうなんです……だからこそかも……」

「ん?」

「いえ何も……（もしかしたら博士が脱獄しようと言ったのはそういった何かしらの事が結び付いた……からかしら?）」

将和の言葉にそう思うウーノであった。少なくとも脱獄しようと言い出す前までスカリエツティは何も行動はしていなかった。だからこそウーノの脳内では点と点が線で繋がった気がしたのだ。

「これは……博士にも報告しても宜しいのですか?」

「構わないよ。どうせスカさん達がこの世界にいる時点で未来は予測付かないからな」

アツハツハツハと笑う将和である。

「分かりました。今日は夜中まですみません」

「良いよ良いよ。また聞きたい事があったら来てくれて構わないし」

その日はこれで終わりとするのであった。

「ちよつとウーノ!? 夜中に将和の部屋から出てきたのってどういう事よ!!」

「い、いやそれは……（見られてた……）」

バツチリと薫に将和の艦長室から出ていくのを見られたウーノである。

第二十話

「ハアツ!!」

「オイシヨツ!!」

戦艦『伊勢』の格闘場（戦闘時は簡易遺体安置所にもなる）で将和とトーレが格闘の錬成をしていた。宇宙空間での戦闘が主である地球防衛軍だが万が一に備えての格闘錬成もあったりする。

白色彗星戦役時でも『デスラー』艦に白兵戦で突撃したり都市帝国にも突撃しているのだから必要なのは必要である。

「よし、今日は此処までだ」

「あいよ。あー無理、疲れたあ……」

なお、指導教官はトーレであるがトーレ自身もかつてはミッドで殴り合いの乱戦をしていたので納得の役割である。

「トーレく、また頼むよ」

「それは構わないが、少しは体力をな……」

「それは三十路にはキツイ相談だな……」

トーレの言葉に将和はガツクリと項垂れるのであった。

その後、トーレはシャワー室で汗を拭い食堂に赴く。最近、一仕事を終えた後は食堂で甘い物を取るのが日課になってきているトーレである。（なお、他のウーノ達も共通しておりセツテもよく食堂でパフェを食べたりしている）

「フム……今日は……」

トーレがメニュー表を見ていた時、視界の隅に二人の女性が見えた。ウーノと薫だった。二人は宇宙軍は元より地球でも大人気のマゼランパフェを食べていた。

「ム、ウーノと薫じゃないか」

「あらトーレ」

「空いてないでしょ？ 此方に来なさいよ」

「済まないな」

トーレはマゼランパフェを頼み程なくパフェが到着しトレイを持って二人の席に歩み寄りウーノの隣に座る。

「それで……今日は二人してどうしたのだ？」

「それよトーレッツ」

トーレの言葉に薫が強く反応してズイツと身を乗り出す。

「ウーノったら昨日の夜中……艦長室から出てきたのよ!!」

「ブツ」

「ちよ薫、それは誤解だつて何度も……」

「じゃあ何の目的で行つてたのよ」

「そ、それは……」

『何かの用事だつたのだろ?』

『……三好司令の正体を聞いたのよ。それに今の時点で薫にはまだ早いと思うの……』

念話で理由を聞いたトーレだが返してきたウーノの返答に些か対処に困った。トーレもある程度はウーノから将和の正体を知っていたが全てを知っているわけではなかった。

だからこそ、だからこそトーレは聞きたい好奇心に負けてしまったのである。

「フム……それは私も聞きたいな」

「ちよ、トーレ!？」

「ほら、これで2対1よ。どうする?」

思わぬ味方を得た薫はクスリと笑う。此処までは誰も予想はしていなかっただろう。

だがそこへウーノに味方する者が現れた。

「新見情報参謀、大山技術参謀から波動エンジンの調子を見てほしいとの事です」

現れたのは砲雷長のセツテだった。セツテもトレイにはマゼランパフェが置かれていた。ただし数は三つである。

「んもう。トチローったらまた何かしたのかしら……ウーノ、また後で聞くからね!!」

薫はそう言つて食堂を後にするのである。食堂から出た薫を見てウーノが深い溜め息を吐いた。

「ほんと勘弁してよトーレ……」

「ハハハ、済まない。だが私も気になっていたらつい……な？」

「トーレ、その好奇心……セツテが来なかつたら後悔していたわよ」

「後悔……？」

「まあいいわ。セツテも聞くかしら？」

「いや……私は特に興味が無い」

セツテはそう言つて別の席に座るのであつた。一応はウーノが怒っているのを感じたのだろう。だがウーノはセツテの言葉を見無視した。

「良いわ、聞きたいのなら聞かせてあげるわ」

「あ、私の……というか私は別に聞く気は……」

ウーノはトーレのマゼランパフェを奪い食べ出すだがそれを気にせずウーノは語り出すのであつた。そしてその話題の中心である将和はというと……。

「ブエックシユン!! ブエックシユン!! ……誰か噂でもしとんかな……」

将和は艦長室でそう呟いた。そして時計を見ると時刻は1300を指していた。

「……そろそろかな」

「失礼します」

「ん、開いてるぞー」

ノックする音が聞こえ将和が許可するとガチャリと扉が開いた。入ってきたのは元『ヤマト』飛行隊の山本だつた。

「お久しぶりです」

「ああ、あの時以来だな」

将和の言葉に山本は頷き敬礼をする。

「山本玲大尉、本日付で戦艦『伊勢』飛行隊隊長に任命されました」

「ん。宜しく頼むよ」

将和はそう言うが山本の表情は以前よりかは無であつた。流石の

将和も山本の表情には気付いていた。というより篠原や沢村から内密の相談があったから元々気付いていたのだ。

「山本、何かあったのか？」

「いえ……」

将和は問うが山本はそう答えなかった。その様子に将和は溜め息を吐いて閃いた。

「よし、なら久しぶりに空戦をしようか」

「えっ……？」

「来い、飛行場に行くぞ」

「あつちよ、ちよつと……」

善は急げとばかりに将和は山本の手を引いてタイタンの地上飛行場に向かうのである。将和も相談は受けていたがやはり一回は飛んでみないと分からなかった。

「ほら、飛行服だ」

「ど、どうも……」

飛行場に着いた将和は基地司令に空戦許可を貰いパイロット待機所から飛行服やヘルメット等を借りて山本に渡しそのまま格納庫に向かう。格納庫にはコスモタイガー2が勢揃いしていたが手前にあった2機に乗る事にした。

「山本はそれを使え。俺は此方を使う」

「は、はい」

そして二人は乗り込んで2機はあつという間に離陸するのである。

「さて……山本から仕掛けていいぞ」

『わ、分かりました』

山本はそう言つて高位を取ると仕掛けてきた。無論、将和もそれを交わして空戦を展開するのである。

「……………」

三回の空戦をしたが三回とも将和の勝ちだった。だがコスモタイガー2から降りてきた将和の表情は無表情だった。

同じくコスモタイガー2から降りてきた山本も無表情だったが将和は山本に歩み寄り……胸ぐらを掴んだ。

「おい……何だあの腕は……?」

「……………」

「黙るか?」

「……………」

(これは思ったよりも重症か……)

黙る山本に将和は溜め息を吐いた。山本の容態は将和が思っていた以上だったのだ。

「服を着替えたら『伊勢』の食堂に來い」

そう言つて将和はその場を後にするのである。その後、服を着替えて『伊勢』に戻り食堂に行くと入口に顔を暗くしたトーレと少し気分が晴れていたウーノが出ようとしていた。

「よう」

「あ、お疲れ様です」

「あ、ああ……」

「??」

トーレの表情が暗かった事に将和は不審を覚えたが入れ替わりに山本が来たので頭の片隅に入れておくのである。

「俺の奢りだ、食え」

「……ありがとうございます」

将和はマゼランパフェを二つ注文してトレイに載せてテーブルで待っていた山本に一つを渡す。

「……意外ですね」

「んあ?」

「三好司令も意外と甘い物は好きなんですね」

「まあな。あまり食べ過ぎると太るから日頃はそんなに食わんけどな」

苦笑する山本に将和はそう言いながらパフェを食べる。

「それで……何があった?」

「……………」

「操縦桿を握ると『ヤマト』で死んだ奴等を思い出す……か?」
「ッ」

将和の言葉に山本はハツとして将和を見る。

「何で分かるか……そりや俺もガミラス戦役で経験しているからだ。後、篠原や沢村から相談を受けていた。お前の事だな」

「三好司令も……」

「ガミラス戦役は波動エンジンがあつたからそこまでは酷くない……と思っっているだろうが航空戦はそうではない。地球とガミラスはお前が思っている以上の死闘を繰り広げていた」

パフエを食べながら将和は語る。

「昨日まで一緒に飛んでいた同期が次の日には未帰還となつて帰つてこない。年下のパイロットは敵のビームに焼かれて撃墜され、その時の絶叫は今でも忘れない。結婚する約束をした上司のパイロットは機体が被弾炎上し、そのまま敵『デストリア』級に体当たりをした。体当たりする間際、上司の最期の言葉が「済まない」だった……パイロットは一步外に出れば宇宙空間だ。宇宙空間は死だ、だがその宇宙空間を飛行するのもまたパイロットの役目だろう」

「……………」

将和の言葉に山本は俯くがやがてはポツリ、ポツリと口を開いた。

「思い出すんです……皆があの時……都市帝国に突入した時、撃墜されていく光景を……そして宇宙空間に脱出して酸素がいつ無くなるかの不安が……」

「……………」

「頭では分かっています……けど、握れば……私が宇宙空間に出されて彷徨った事も思い出して……いつ酸素が無くなるかも分からない……あの時を……」

気付けば山本は涙を流していた。そんな山本に将和は残り少ないパフエを食べて席から立ち上がり山本の頭をポンポンと撫でる。

「よく頑張ったな」

「ッ……………」

「まあいきなりとは言わん。少しずつ克服していけばいい（まさかとは思っていたが……PTSDの類いか……）」

そう言う将和だか内心ではどうするか悩んでいた。

(だがこればかりは山本自身で解決する必要があるからなあ……俺
がやれるのは支援だけだな)

「ッ……………」

だがそんな事は裏腹に山本は涙を袖で拭う。

「……………ありがとうございます。頑張ってみたいと思います」

「おう、いつでも相談に乗るぞ」

「はいッ」

そして山本は勢いよくパフェを食べ出すのであった。

第二十一話

銀河系とマゼラン星雲のほぼ中間にあるバラン星、そのバラン星から約3万光年離れた位置に存在するビーメラ星系。その主惑星となる『ビーメラ4』にはマゼラン星雲や銀河系に散らばっていた残存ガミラス艦隊が集結していたのだ。

「総統、ドイツ大将の艦隊が戻ってきました」

「そうか……」

『ビーメラ4』には大型化した昆虫らが複数いたが何れもガミラス艦隊の攻撃によって全て駆除されており遺跡もあつたがそれもガミラスには必要無しと破壊され今では仮の総統府が設営されていた。

「ドイツ大将に帰還次第の出頭をと命じたまえ」

「ザー・ベルク」

タラン少将はデスラーに敬礼で答えて下がるが程なくしてドイツ大将が総統室に入室する。他にも参謀総長のキーリング大将らも入室する。

「今回はどうだったかね？」

「はい。今回は天の川銀河の伴銀河方向を探索しました」

ドイツ大将はそう言ってパネルを操作し画面に伴銀河を映し出す。

「その中でいて座矮小楕円銀河を探索しましたところ……ガルマン星という惑星を発見。慎重に慎重を重ねて原住民と交流を持ったところ……我々がガミラス人と同じ身体的特徴を持つ人種である事が判明しました」

「何……」

ドイツ大将の言葉にデスラーは目を見開いた。

「ではドイツ大将……我々は……」

「はい、我々は……新たな移住先を見つける事が出来ました」

「おお……」

ドイツ大將の言葉にタラン少將は目に涙を浮かべる。だがドイツ大將本人の表情にデスラーは違和感を感じた。

「ドイツ君、何かガルマン星に懸念事項でもあるのかね？」

「……実は先程のガルマン星は……ボラー連邦の資源惑星として活用されているらしく、原住民であるガルマン人はボラー連邦の奴隷になっているとの事です」

「……成る程……ボラー連邦……か」

ドイツの言葉にデスラーはフツと笑う。その様子にタランはデスラーはボラーに吹っ掛ける気と思つた。

「総統ッ」

「ム……ボラー連邦との戦端もやむ無しだが……まずは会談をすべきだろう。上手くガルマン星を貰えれば御の字だが……」

「ですが向こうが抵抗すれば……」

「可及的速やかな電撃作戦を以てガルマン星を解放するしかあるまい。ドイツ君、現在のガミラス艦隊で解放は可能かね？」

「可能……であると思います。御覧下さい」

ドイツ大將は再びパネルを操作して画面を切り替える。その画面は現在のガミラス艦隊の総戦力を表していた。

「現在、我がガミラス艦隊は総旗艦である特一等航空戦闘母艦『デウスーラ三世』を筆頭に約500隻程の戦闘艦艇、400隻程の非武装民間船があります」

「非武装民間船は使えない……なら約500隻のみか」

「……『ヤマト』との戦闘や叛乱軍の離反もありました故……」

「嘆いていても仕方ない。我々は約500隻を上手く運用するしかあるまい」

なお、内訳は以下の通りであった。

総旗艦

『デウスーラ三世』

直率艦隊

『ガイデロール』級航空戦艦×6

『メルトリア』級航空巡洋戦艦×5
『デストリア』級航空重巡洋艦×18
『ケルカピア』級航空高速巡洋艦×36
『クリピテラ』級航空駆逐艦×72
『ガイペロン』級航空母艦×4
ドイツ艦隊
『ゼルグート』級航空戦艦×1
『ハイゼラード』級航空戦艦×4
『メルトリア』級航空巡洋戦艦×7
『デストリア』級航空重巡洋艦×24
『ケルカピア』級航空高速巡洋艦×42
『クリピテラ』級航空駆逐艦×90
『ガイペロン』級航空母艦×8
ヒステンバーガー艦隊
『ハイゼラード』級航空戦艦×1
『メルトリア』級航空巡洋戦艦×7
『デストリア』級航空重巡洋艦×12
『ケルカピア』級航空高速巡洋艦×20
『クリピテラ』級航空駆逐艦×40
『ガイペロン』級航空母艦×2

五個警務艦隊（一個艦隊20隻）

「……………」

「何か……お考えでも？」

無言のデスラーにキーリングはそう問い掛ける。タラン達もデスラーが何か考えていると判断した。

「キーリング参謀総長、現時点で足りないのは艦艇かね？ 人かね？」

率直で構わない。君の意見を聞きたい」

「はっ……やはり艦艇かと……」

「フム……参謀総長、地球から艦艇を購入出来ないだろうか？」
『地球……』

「デスラーの言葉にタラン達はポツリと呟いた。だが地球とは……。
「ですが総統、地球とは……」

「国交を結べば良い。恐らく向こうは技術力を欲するだろう」

「しかし……地球市民の感情がそれを許しますか？」

「許さざるを得んよ……我々の技術力は地球より上だからな」

「それは……そうですが……」

「ですがそうなる……誰を地球に向かわせるかです」

タランの言葉に誰もが唸るがドイツはデスラーに視線を向ける。

「一人……適任者がいます」

「名は……？」

「ヒス副総統の下で勤務しておりましたローレン・バレルです」

「ほう……バレルか」

ドイツ大将の言葉にデスラーは納得したように頷く。デスラーもガミラス星にいた頃からバレルの名は知っていた。

「バレルを呼び出してくれ。それと……地球に連絡だ」

「はっ直ちに」

デスラーの言葉にタラン少将はそう頷くのであった。

『御初にお目にかかる地球連邦の諸君。私は大ガミラス帝星の総統アベルト・デスラーである』

その通信は数日後に地球連邦にもたらされた。宿敵とも言えるガミラスからの通信からだったのだ。地球政府は元より正信ら防衛軍司令部にも緊張が流れた。

『過去に我が大ガミラス帝星と地球が戦争をしていた記憶はまだ新しいであろう。その大ガミラスも『ヤマト』によって壊滅された。それは良い、戦争だから些か仕方ない事でもある。だが今回、私が地球に

通信をしたのは我が大ガミラス帝星が滅亡の危機だからである。我々は滅亡の危機に移住先の惑星をいて座方面で発見した。しかし、移民船を護衛する戦闘艦艇が少ない。その為、地球艦艇の購入を求め、無論、対価を払おう。そこで我が大ガミラスは地球が艦艇を引き渡してくれるのであれば我が大ガミラスの技術力を提供する。また、交渉に向けて少数ながらの艦艇を派遣する。交渉には我が大ガミラスから派遣するローレン・バレルを地球大使として差し向ける。我が大ガミラスは地球連邦政府の良い返事を期待する』

そこで通信は終わるのである。

『……これが先日届いた通信映像だ』

「成る程。ガミラスからの救援依頼ですか」

『いや交渉じゃな』

将和は正信と通信していた。

「政府はどのようにするつもりで？」

『交渉には応じるつもりのようにじゃな。流石に全方位に敵を作るつもりは無いようだわい』

「ほう、政府にしては賢明な判断ですね」

『まあそうじゃのう。そこで第一艦隊はガミラス艦隊を出迎える為に出勤してほしい』

「いつ頃に到着する予定なので？」

『一週間後には冥王星に到着するとの事だ』

「分かりました。それまでに艦艇を選抜して出勤します」

『ん。頼むぞ』

正信はそう言つて通信を切り、将和は椅子に深く座る。

『……こりゃ展開が分からなくなってきたなあ……』

将和はそう言いながら温くなったコーヒーを飲む。『答え』を知る。将和でさえどれが正解なのか予想が分からなくなってきたのだ。

(しかし……アベルト・デスラーか……2199や2202と同じ氏名になっている……という事は……この交渉によっては暗黒星団帝國編にも繋がりそう……か。うわあ……俺、タイムスリップしたのは平成31年度だからなあ……2202以降の物語は分かんねえな。

あ、序でに言うのと2202はクソ、ハッキリとわかんだね)

今明かされる将和のタイムスリップ時期である。(おい)

(取り敢えずは出迎え艦隊を編成しとくか……)

そして将和は作業に取り掛かるのである。5日後にタイタンから数隻の艦艇が出動した。

艦艇は旗艦に『伊勢』護衛として『薩摩』に四戦隊と『日向』の一航戦と一宙戦である。

(さてさて……どうなる事やら……)

出動する『伊勢』の艦長席で将和はそう思うのであった。

「宇宙人!? お兄ちゃん、私宇宙人を見てみたい!!」

「ちよつとー、リニスさん? アリシアの教育はどうなってるの?」

「スミマセン……何せプレシアと同じ血筋のヤンチャなので……」

コツソリと『伊勢』に乗り込んだアリシアに将和とリニスは溜め息を吐いたのであった。

第二十二話

「司令、前方約100宇宙キロに重力震です」

「……来たか」

冥王星の沖合で選抜した艦艇で待機しているとガミラス艦隊がワープアウトしてきた。程なくして旗艦らしき『ゲルバデス』級航宙戦闘母艦から通信が入ってきた。

通信画面には二人の男女が映し出された。

『この度、地球連邦と交渉の任につきましたローレン・バレルです』
『バレル大使を護衛する警務艦隊司令官のネレディア・リツケ大佐です』

「地球防衛軍宇宙艦隊所属第一艦隊司令官の三好将和少将です」

将和は二人に敬礼を送り二人もガミラス式の敬礼を送る。そして将和はフツと笑う。

「長旅、お疲れ様です。本来であればそのまま地球へ……と行きたいのですが一先ずは地球の衛星である月までご同行致します」

『地球……ではないのですか？』

「そうしたいのは山々なのですが……先の白色彗星戦役もありますしガミラス戦役の事もあります。市民の感情が爆発すればテロ紛いが続発するのは目に見えてますので。それに比べて月は軍しかいませんのでね」

『成る程、分かりました。我々へのご配慮に感謝します』

そして混成艦隊は月基地まで航行するのである。なお、アリスアもバレルらからは見えない位置でバレルらを見て眼を輝かせていた。

「お兄ちゃんお兄ちゃん!! 凄いね宇宙人!! 色が青色だよ!! 皆病気なのかな……?」

「違うぞアリスア。そういう環境でそうなたただけだからな」

「フーン……それにタコやグレイ型じゃないんだね。テレビでは昔の

宇宙人はそう言われてたのに……」

「昔はそう言われてたんだよ……」

「へー」

将和の説明にそう納得？したアリシアである。なお、プレシアには報告済みでありプレシアと会った直後に頭に手痛い一発を食らうのをアリシアはまだ知らなかったのである。

「大ガミラス帝星内務省次官のローレン・バレルです」

「地球連邦防衛軍司令長官の三好正信大将です」

月基地司令部で司令官室でバレルと正信が会談をし握手をする。

「地球の復興はどのようになっていきますか？」

「まだまだ復興の途中ではありますが人々の表情にも笑顔が出てきています」

「成る程」

当初は軽い挨拶から入り互いの状況等を確認してから本題に入つた。

「さて……ガミラス側が求める護衛艦艇ですが……残念ながら我が防衛軍から出せる艦艇はありません」

「ッ……」

正信の言葉にバレルは落胆したが直ぐに我に返った。そう『我が防衛軍から出せる艦艇は』である。であるならば……。

「……まさかガトランティス艦艇のを……」

「その通りです」

そう言つて正信はタブレットをバレルに見せた。

讓渡艦艇一覧表

『カラクルム』級大戦艦×8

『ラスコー』級突撃型巡洋艦×15

『ククルカン』級殲滅型駆逐艦×34

「多少しかありませんが……」

「いえ、これだけあるなら問題はありません」

「おや、まだ終わりではありませんよ」

「え……？」

正信はニヤリと笑い、更にタブレットを操作して再びバレルに渡す。

地球防衛軍譲渡艦艇一覧表

『フレッチャー』級駆逐艦×60

『フラワー』級護衛艦×60

「これは……」

「まだ建造途中の艦艇です。まだ『正式な防衛軍の艦艇では無い』のです」

『我が防衛軍から出せる艦艇はありません』この真意をバレルは漸く理解したのである。

「……いやはや……貴方は中々の官僚向きですな」

「ハハハ。ですが私は軍人の方が性に合っていますよ」

バレルの言葉に正信は苦笑する。過去に日本の総理をも歴任していた正信だがやはり現場のが良かったのだ。

「成る程。では我が大ガミラスもそれに答える技術力の提供をしましょう」

バレルがそう言ってタブレットを渡す。

・長距離ワイプのデバイス等の設計図

・長距離空間通信の技術データ

・瞬間物質輸送器等々

「瞬間物質輸送器もとは……いやはやデスラー総統は気前が良いですな」

「いえいえ……総統は地球と和平を、それが無理なら技術協定を結びたいとまで言っております」

「ほう……成る程」

バレルの言葉に正信の眉がピクリと動く。その様子にバレルも感触は良いと掴んだ。

「即決は難しいですがより良い返事を返す事は約束します」

「ありがとうございます」

斯くして最初の交渉は上手く事が進んだのであった。そして月基地で停泊している『伊勢』ではというと……。

「久しぶりだな玲」

「久しぶりねメルダ」

かつての旧友であるメルダ・ドイツ大尉と山本が格納庫で再会していた。元は銀河方面第707航空団に所属していたメルダだが『ヤマト』との接触を経て今では『ヤマト』に最も信頼している一人であった。

「腕の方はどうだ？」

「……………ツ……………少し……………ね……………」

「??」

山本の歯切れが悪い口調にメルダは首を傾げる。

「よく分からないが……………時間があるならやらないか？」

メルダは山本を空戦に誘う。山本は断ろうとしたが人の目もあつたので承諾してしまうのである。

翌日、話を聞き付けたパイロット達が集まる中には将和もいた。

「山本」

「あ、三好司令……………」

「大丈夫か？」

「……………正直分かりません。あまり食べれてないので……………」

あれから（白色彗星戦役）山本は軽い拒食症に陥っていた。将和もそれを知っていたのでパフエなると思っていたが食してから戻していたらしい。将和もそれを聞いてからは一緒に食事をしたりしているがそれでも雑炊なら食べれる方だった。

「まあ今日も雑炊は食べていたから取り敢えずは大丈夫だろ。だが無茶はするなよ？」

「はい、それは勿論です」

将和の言葉に山本は頷いて駐機してあるコスモタイガー2に乗り込んで離陸していくのであった。だが……結果は山本の負けだった。三本勝負だったが一勝一敗まではもつれ込ませたがそこで限界だった。

「ゲホッゲホッ!? ヴェツ、ヴォロロロ……（こ、こんな時に……）」

山本は空戦中に戻してしまいヘルメットの中がゲロまみれになりそこをメルダに突かれたのである。メルダも山本の様子に流石に気付いたのか降りるよう合図をし山本も自動操縦に切り替えて滑走路に着陸したのである。

「山本!!」

着陸後、将和は山本のコスモタイガー2に走り寄り風防を開けると操縦桿を右手で握りカタカタと震える山本の姿がそこにあつた。口周りはゲロまみれでありその表情は青白かつた。

「取るぞ」

将和は一言言ってからヘルメットを取りハンドタオルで山本の口周りを拭う。

「済まんツ。無理矢理でも止めさせておけば良かったな」

「いえ……でもメルダとの勝負はやりたかつたですし……」

「馬鹿野郎、それで死んだら元も子もないわ!!」

「玲!？」

そこへ着陸してきたツヴァルケからメルダも降りて走ってきた。

「お前……」

「ごめんなさいメルダ。ちよつとトラウマ持ちになっちゃってね……」

「馬鹿。そう言う事なら早くに言え!!」

（デスヨネー）

「ごめん……でも安心して。空戦は私の代わりにこの人がしてくれるわ」

「ん?」

山本はそう言つて将和に指を指す。指された将和も目が点とする。

「お前な……」

「この人は私以上の腕前よ」

「ほう……玲にそう言わせるとは……中々の腕と見たツ」

（勝手に話を進めないでくれ……）

とまああれやこれやと話が進んで将和とメルダの空戦がされる事に決定された。その話は基地中のパイロット達にも知れ渡った。

「おい聞いたか!? 三好隊長がガミラスの嬢ちゃんと空戦をするらしいぞ!!」

「よし賭けをやるぞ賭けを!!」

「俺、隊長に10ドル!!」

「俺も10ルーブル!!」

「じゃあ俺はメルダ嬢ちゃんに3ポンド!!」

「俺は隊長に諭吉を出すぞ!!」

古参パイロット達（篠原や沢村達）は賭けを始めてしまい将和はコスモタイガー2に乗る羽目になるのであった。

「何でこうなったのやら……」

離陸して月基地上空に上がるとメルダのツヴァルケも離陸してきた。

『どちらからでも構わないぞ』

「ならディッツ大尉が先に仕掛けてくれ。三本勝負な」

『了解した』

そう言ってメルダ機が上昇して高位を取ってから攻撃を開始するのである。

「はあ……やるかツ!!」

急降下してくるツヴァルケを銃撃する寸前で回避してからコスモタイガー2のショットルを最大にするのであった。

ちなみに勝負は三本とも将和の勝ちであった。

「待て待て!! あれは狡いだろう!!」

「え、隕石の銃撃?」

「目眩ましをさせるとか狡くはないか!」

「いやだって勝負なんだから出来る範囲の事をするのは当たり前だろう」

「ヌグググツ……」

「ハハハ、悔しがるドイツツ大尉を見るのも珍しいな」

「フム……（ガミラスとの友好を考えて将和とドイツツ大尉か……）」

（な、何か寒気が……）

正信の考えに将和は寒気を覚えるのであった。

第二十三話

結局のところ、ガミラスとは技術協定という形に最初は落ち着いた。正信や軍関係者達はガミラスとの軍事同盟を望んでいたが地球連邦の大統領や右派の議員達は「連邦市民の感情を逆撫でにする気か」と現時点での同盟締結は反対したのである。（自分達の持狙いは明らかでもあった）

その為、技術協定であった。また更に月にガミラス大使館を置く事も決定されバレルはそのままガミラス帝星在地球大使としてそのまま赴任する事になったのである。

「取り敢えずはパ☒フェ☒エエなるモノを食べたいものだ」「プツ」

バレルの言葉に駐在武官として赴任したメルダ・ディッツ大尉は見えないところで吹き出すのである。

それはさておき、ガミラスと技術協定を締結してから一月後、第一艦隊は駐屯星である土星の衛星『タイタン』に駐屯していた。

「将和、入るぞ」

「ん？ トチローか。いいぞ」

艦長室にいた将和だがその艦長室に珍しく艦長室にトチローがやってきた。

「どうしたトチロー？」

「実はよ……暫くの間、衛星『エンケラドウス』に行かせてほしいんだ」「『エンケラドウス』に……？ そうか『雪風』か」

「ああ。『雪風』のところに行かせてほしいんだ」

「……古代の墓参りか？」

「それもあるけどよ……『雪風』を復活させたいんだ」

「ほう、『雪風』をか……（まさかのゲームルートキター）。△。△。三。△。）」

トチローの言葉に将和は唸りながらも内心はwktk状態であった。

「……仕方ないな。定時連絡は欠かさずやれよ？」

「良いのか将和？」

「馬鹿野郎。友人の頼みなら叶えてやるのが友人だろうが。フネか輸送機を用意してやるからそれで行ってこい」

「……ありがとう将和」

トチローは一瞬、顔を伏せるが直ぐにいつものニカツと笑う。

「なら早速『エンケラドウス』に行かせてもらうぜ。お前なら直ぐに許可を出してくれると思っていたから準備は完了しているからな」

「はえーよホセ……」

トチローはそう言つて艦長室を出るがトチローが出てから将和はニヤリと笑い何処かへと電話するのである。

「あ、しもしもー？ 俺だよ俺、将和。うん、トチローが『エンケラドウス』に行くつて事だけど行くだろ？ 了解了解。なら二人……え、三人分の糧食を？ あ、はい。分かりました、はい」

そして翌日、トチローは輸送機に乗り込んで『エンケラドウス』に行こうとするが二名の者が同乗していた。

「……何でお前達も来るんだ？」

「あら、改装に夢中になり過ぎて定時連絡を寄越さないと思うから三好司令が私達を差し向けたのよ？」

「……そう……トチローは寝坊するから……」

トチローの操縦席の左右にクアットロとセツテが陣取っていた。クアットロはそうは言うが将和に三人分の糧食（半年余り）の用意や着替え等々の準備をやらせていたのである。

「ちえっ（・ε・、）」

「あ、通信だわ」

クアットロが通信を弄ると通信画面にはスカリエッティが出た。しかも画面一杯である。

「ウヒャッ!？」

『おいトチロー!! 良いか、クアットロとセツテに変な事をしてみる

!! 私が開発中の波動ミサイル改二を貴様のケツにぶちこんでやるからな!! 良いな!?!」

「す、スカさん。そんなに怒らなくても……」

『良いな!?!』

「お、おう……」

スカリエツティの剣幕にトチローも思わず頷くとそれに満足したのかスカリエツティは通信を切るのであった。

「……良いのかこれ?」

「良いんじゃないかしら。でも博士からは許可は出たから行きましょ行きましょ」

「レッツゴー」

そう言つて輸送機は離陸して衛星『エンケラドゥス』に向かうのであった。

「……良いのかスカさん?」

「……仕方あるまい。娘が選んだ道だ……」

『伊勢』の艦橋では将和とスカリエツティがいたがスカリエツティは大量の涙を流していた。

(そのうち血涙になりそうだなあ……)

嗚咽を漏らすスカリエツティに将和はそう思うのである。

「……だが娘の選んだ道を華々しく見送るのもまた父親の務めだ。将和、今日は飲むぞ」

「飲み過ぎて吐くなよ……」

そう言う将和だった。その日、将和とスカリエツティは明け方近くまで飲むのである。

「参謀長……有給二人分で……」

『分かりました。ゆっくりお休みください』

艦長室で将和は二日酔いながらチュン参謀長にそう言うのであった。なお、酔い潰れて完全に死んでるスカリエツティの引き取りはウーノとトーレが来るのである。

「済まないなウーノ」

「いいえ、此方こそありがとうございます」

「大丈夫かドクター？」

「ううん……」

将和に頭を下げるウーノにトーレはスカリエツティの肩を持っている。

「気をつけてな」

「はい」

そう言つてウーノ達は自室へ向かう。

「ううん……ウーノ……トーレ……」

「寝言か」

「そのようね」

「……将和なら……将和なら……」

聞こえるか聞こえないかで呟いている。

『??』

「……ゆ……す……」

そこからは寝息を立てて寝るスカリエツティだったのでそれ以上の解読は不可能であった。

そして翌日、将和が出勤するとチユン参謀長がいた。

「おはようございます司令」

「おはようです参謀長。何か変化とかありましたか？」

「新たな配備艦艇がありました」

チユン参謀長はそう言つてタブレットを将和に渡してくる。

新規配備艦艇一覧表

戦艦×4

『オクラホマ』『山城』『ヘルゴラント』『ナツサウ』

巡洋艦×7

『エムデン』『ドレスデン』『須磨』『アキリーズ』『パース』『衣笠』『那珂』

駆逐艦

『朝潮』以下12隻

護衛艦

『撫子』以下8隻

「フム……」

「一個艦隊程度にはあります」

「だな……」

「では……艦隊を……増やしますか?」

笑みを浮かべるチユン参謀長の言葉に将和もニヤリと笑う。

「成る程。これで第十一番惑星を攻略せよと親父は言うわけだな」

「ですな……しかしそうなると司令官には……」

「誰かいらないかな……」

「一人、適任者はいます」

「誰だ?」

「……今は宇宙訓練学校長をされている山南中将です」

チユン参謀長の言葉に将和は頷く。

「それしかないか……親父に相談してみるか」

将和は直ぐに通信を防衛軍司令部に入れて正信と相談をする。

『フム……確かにそれは我々も思っていてな。それとなく打診はしてみたんだ。だが山南君はまた固辞してなあ……』

「ありやま……」

正信の言葉に将和は溜め息を吐く。

『まあ人員不足だからこそ後方職に付くのが重要……だからな……』
「ですね」

『というわけだ。此方から二人の司令官を送り込む。それで新規艦隊を編成してほしい』

「司令官をですか?」

『ウム。ガミラス戦役以来の猛者だが山南中将と共に防衛大学の教官をしていた者でな。依頼したら快く承諾してくれた。恐らく一週間以内に到着すると思うからな』

「分かりました」

そう言って通信を終える将和であった。

「さて……どんな奴が来るやら……」

そして数日後、『伊勢』に二人の人物がやってきた。

「失礼します」

そう言って入ってきたのは髭面の中年男性と英国風の中年男性だったが将和は髭面の男性を見た瞬間、「ゲツ」と表情をひきつらせた。

「久しぶりだな三好候補生？」

「……お久しぶりですカールセン教官」

入ってきたのは将和が防衛大学校時代に土方大将ら共に生徒をしごいていたラウルス・カールセン少将であった。

「ガミラス戦役、白色彗星戦役はご苦労だったな」

「ですが多くの同期や土方教官を亡くしました」

「馬鹿者。戦争だから仕方ない事だ、ワシら生き残った者は地球を守る使命があるのだ」

早速注意をされる将和である。

「だが……よくぞ生き残ってくれたな。三好」

「……ありがとうございます教官」

カールセンの言葉に将和は頭を下げる。そして将和はもう一人の将官に視線を向ける。

「パエツタ少将もお久しぶりです」

「ああ。土星沖海戦後は負傷療養を兼ねて防衛大学校にいたからな。それにアドミラル・ミヨシには大変世話になっている。あの人への恩返しのためなら任せたまえ」

「はい」

「さて、此処での先任は貴様だ。ワシは貴様の手足となって動いてやるぞ」

「はっ、それでは……カールセン教官には第一艦隊司令官、パエツタ少将は第三艦隊司令官となっております」

「んう？」

「フム」

「それで自分は第二艦隊司令官として動きます」

「……ハッハッハ。早速ワシを一艦隊司令官にするか。そこは三好長官とは変わらんものだな」

「良からう、任せたまえ」

将和の言葉に高笑いをするカールセンとパエツタである。だが直ぐに表情を変える。

「……残存ガトランティス艦隊がいる第十一番惑星を攻略するつもりじゃな？」

「……………」

カールセンの言葉に将和は無言で頷く。

「良からう。貴様の腹案、聞かせてくれ」

「はい、我々は……」

そして更に一月後、ラウルス・カールセン少将の第一艦隊、三好将和少将の第二艦隊、ヘンリー・パエツタ少将の第三艦隊、そして山口少将の第一航空艦隊の四個艦隊は『タイタン』を出撃、経路を第十一番惑星に向かうのであった。

第二十四話

「ワープアウト完了しました。現在、冥王星沖約300宇宙キロです」
「ん」

『タイタン』を出撃した地球防衛軍の第一・第二・第三の各艦隊と第一航空艦隊は冥王星沖にワープアウトしてきた。四個艦隊の陣容は以下の通りであった。

第一艦隊

司令官 ラウルス・カールセン少将

旗艦 『ヘルゴラント』

戦艦

『ヘルゴラント』

『ロイヤル・オーク』

『ナツサウ』

巡洋艦

『カンバーランド』

『アキリーズ』

『パース』

『吉野』

『高砂』

第一宙雷戦隊

『ブラック・プリンス』

『Z31』以下16隻

第二艦隊

司令官 三好将和少将

旗艦『伊勢』

戦艦

『伊勢』（コスモタイガー2×16）

『薩摩』

『山城』

巡洋艦

『高雄』

『愛宕』

『妙高』

『那智』

『足柄』

『羽黒』

第二宙雷戦隊

『能代』

『吹雪』以下16隻

第一航空戦隊

『日向』（コスモタイガー2×18 雷撃機×18）

『サラトガ』（同上）

第三艦隊

司令官 ヘンリー・パエッタ少将

旗艦『メリーランド』

戦艦

『メリーランド』

『オクラホマ』

巡洋艦

『ノーザンプトン』

『ウイチタ』

『クインシー』

第三宙雷戦隊

『オマハ』

『フレッチャー』以下12隻

第一航空艦隊

司令官 山口少将

旗艦『飛龍』

空母

『蒼龍』(コスモタイガー2×36 雷撃機×36 100式空間偵

察機×3)

『飛龍』(同上)

第三航空戦隊

『ワस्प』(同上)

『レンジャー』(同上)

第四航空戦隊

『イラストリアス』(同上)

『ヴィクトリアス』(同上)

巡洋艦

『プリンツ・オイゲン』

『ニユルンベルク』

第四宙雷戦隊

『タウン』

『トライバル』以下16隻

第一護衛隊

『松』以下10隻

第二護衛隊

『樫』以下10隻

第三護衛隊

『撫子』以下6隻

「全艦隊に通達。前衛は第二艦隊、中間を第一艦隊、後衛は第三艦隊と

第一航空艦隊の手筈通りに行い第十一番惑星へ向かう」

「了解」

「しかし……我々を先陣に切らせるとはな……」

将和の言葉に戦闘班長のトーレが呟く。その言葉に将和は苦笑する。

「なあに、俺達は前線にいる方が性に合ってるからな」

「ハハハ、それは違ういな」

斯くして四個艦隊はそのまま進撃する。そしてそれは哨戒していた潜宙艦に発見されるのである。

「何!?! 地球艦隊だ!?!」

「はい。戦艦だけでも9隻を確認したと……」

第十一番惑星ローではなくシリウス恒星系で残存ガトランティス艦隊を纏めていた帝国支配庁長官のラーゼラーはやはりと思った。

(おのれ……しかし第十一番惑星から撤退をしないで良かった……)

当初は再度の地球侵攻計画を練っていたラーゼラーら残存ガトランティス艦隊だったが本拠地であるアンドロメダ星雲からの緊急電を受信したのである。

「何!?! 暗黒星団帝国が!?!」

「はい、我がアンドロメダ星雲との輸送航路を妨害してくるようになりしました」

アンドロメダ星雲を制圧したガトランティス帝国だがそれでも二重銀河にある暗黒星団帝国と紛争は続いておりズオーダーも地球攻略次第、暗黒星団帝国と戦う腹であった。

だがズオーダーは『ヤマト』とテレサに破れガトランティスも地に落ち戦闘したアンドロメダ星雲でも再び内乱が起こっている有り様であった。流星にその中で地球再侵攻をと言っている暇はなかったのである。

その為の第十一番惑星からの撤退だったが……功を制したのは言うまでもない。

(何れはこのシリウスとプロキオンからも撤退せねば……)

今、両宙域に駐留する残存艦隊をアンドロメダ星雲に帰還させるのがラーゼラーの急務であった。それはさておき、第十一番惑星の攻略に向かった将和ら防衛軍艦隊だかもぬけの殻だった事に些かの拍子

抜けだった。

(奴等に何かがあったのか……?)

将和はそう思う。なお、敵が逃げた事に第一艦隊ではガトランティスを侮る者もいたが問答無用でカールセンの雷を喰らっているのは言うまでもない。

それは置いておき……防衛軍としては第十一番惑星を無傷で取り返したのだから良しとするのである。

「問題は駐留する艦隊と空間騎兵隊だな……」

「暫くはパトロール艦隊と一個中隊規模ですな。まだ冥王星基地も復興しておりません故……」

地球防衛軍司令部で正信は芹沢らと会議をしていた。

「それと徴兵の件も議会では拒否られましたからな」

「……となるとガミロイドの量産だろう」

ガミラスとの技術協定の中にガミロイドの技術提供もあったのだ。

「ガミロイド……地球で言うところのアースロイドか。ガミラスの技術で運用か……惨めなものだな」

「芹沢……」

「申し訳ありません」

芹沢は直ぐに正信に頭を下げる。藤堂も重苦しい表情だったが正信は二カツと笑う。

「おいおい大丈夫だよ芹沢。心配なら今夜飲みに行くか？ 久しぶりにキャバクラでも行ってバニーガールを見るか？」

「三好長官!？」

ニヤニヤと笑う正信に芹沢が顔を真っ赤にしながら怒るのであるが正信はハツハツハと笑う。

「まあそれだけ怒れるのであれば大丈夫だな」

「本当にもう……」

肩から息をする芹沢であった。

「ですが……問題は山積みですな」

「防衛圏内の再構築も課題だな……」

「民間企業等は開拓に移行したいと言ってきています」

「馬鹿かアイツらは……また内惑星戦争やガミラス戦役の悲劇でも繰り返すつもりか」

正信は悪態をつく。民間企業の惑星開拓に少なからずの市民の悲劇は付き物だった。内惑星戦争しかりガミラス戦役しかりである。

「今度そんな事を言ってきたらワシのところ连接到い。奴等の理由くらいは聞いてやる」

(あーあ……担当者も心労で倒れるな……)

正信の言葉に芹沢はそう思う。何せ正信は防衛軍司令長官をする前は元日本国総理である。今は行政区長官でもある藤堂に引き継ぎをしているが正信の首を縦に振る事はまず無いだろう。

(まあこれで奴等の声も下火になれば良いが……)

コツソリと溜め息を吐く芹沢であった。そしてガミラスはというと……。

「そうか。地球とは技術協定は結べたか」

「はい。地球との関係も一先ずは一歩前進したと言えます」

惑星『ビーメラ4』の総統府でタランはデスラーに報告をする。仮の首都に定めてはいるがデスラーも自然が多いので避暑地には良いかもしれないと考えていたりする。

「だが問題は……」

「ボラー連邦ですな。奴等、ガルマン星を取られた事によつぽど腹を立てたようです」

ガミラスは電撃作戦を以てガルマン星を攻略し奴隷となっていたガルマン人を解放した。そしてデスラーは圧倒的人気を以て『大ガルマン・ガミラス帝星』の樹立を宣言しガルマン星のクレーター内に首都を建設中であつた。

デスラーも首都の建設が終了次第、ガルマン・ガミラス星に移動してボラー連邦と全面戦争に移行する予定であつた。

「ガルマン星の守備にはドイツ大將とヒステンバーガー中將の二個艦隊に任せる。ガミラス人の避難船団には警務艦隊を当てよう」

「分かりました。直ちに」

タランは頷き退出する。デスラーは椅子から立ち上がり『あのグラ

ス』（分かる人には分かるグラス）を取り出して酒を注ぐ。

「……スターシア……」

ガミラス星は滅んでしまったがその隣ー双子星ーにあるイスカンドル星も古い逝く星であるがそこにはまだイスカンドル人でありイスカンドルの王家の血を受け継ぐ女王スターシアと地球人でありスターシアと結婚した古代守がまだ住んでいたのだ。

そうだ、スターシアに移住する星が見つかった事を報告しなければならぬ。デスラーはタランを呼び出してイスカンドルとの直接回線を入れた。

程なくして出たのはやはりイスカンドルのスターシアであった。

「……久しぶりだねスターシア……」

『デスラー……』

「心配しないでほしい。今日は君に報告する事が出来たのだよ」

『何でしょう、改まって……?』

「移住する星が漸く見つかったのでね。その報告に通信を入れたままだよ」

デスラーの言葉にスターシアの表情が和らいだ。

『そう……それはおめでとうというべきなのかしらねデスラー』

「いや君からその気持ちを貰えるだけで十分だよ」

『デスラー』

そこへ画面に入ってきたのは古代守だった。守の腕にはスヤスヤと眠る二人の愛の証である赤子がいた。

「古代守か……」

『デスラー。君にも見せたくてね、スターシアとの子どもだよ』

スヤスヤと眠る赤子にデスラーは珍しく笑みを浮かべる。そうか、君は幸せなのだな……。

「元気に立派に育てくれ古代」

『勿論だ。そうだデスラー。つい先ほどなんだがガミラス星に艦艇が入っていったのだが……』

「何……?」

『てつきりガミラス艦艇かと思ったのだが……見覚えが無い艦艇だっ

たから写真に収めている』

守はそう言つてスターシアに赤子を預けて通信機械を操作してデスラーに写真を送る。

「こ、これは……」

写真にはデスラーが見た事も無い艦艇が映っていたのだ。円盤型の艦艇であるからガトランティス艦隊かと思つたが彼等のカラーリングは白と薄緑でありこれは濃い青とオレンジのカラーリングであつた。

「……守、ありがとう。スターシア、私はこれから其方に向かう」

『デスラー?』

「もしかしたら……もしかしたらコイツらは……」

一旦、デスラーは口を閉口してから再度口を開いた。

「……我等の地下資源を狙っているのかもしれない」

新たな戦乱が巻き起ころうとしていたのである。

人物及び兵器設定その1

三好将和

ヤマトの世界に転移した将和君。冥王星沖海戦では巡洋艦戦隊を率いておりガミラス艦を多数撃沈する戦果を挙げている。また艦長職の前には戦闘機パイロットで名を挙げており350機以上のガミラス機を撃墜している。

白色彗星戦役では物語が『さらばヤマト』に気づきヤマトを自分の艦隊である第十三艦隊旗艦にして『ヤマト2』の道筋にしようとしたがその前にヤマトが脱走したので計画が水の泡となる。

その後は地球艦隊の一個艦隊司令官として白色彗星に立ち向かい全艦無傷にて彗星を滑る形で遁走に成功しヤマトと共に再度波動砲にて彗星のガスを吹き飛ばす。

決死隊が動力部の破壊に成功し超巨大戦艦にヤマトがテレサと共に体当たりをするのを目撃する。

白色彗星戦役後は地球連邦軍を建て直すため少将に昇進して第一艦隊司令官に就任する。

山南中将が第一艦隊司令長官に就任するまで太陽系内に残存する敵白色彗星艦隊を相手取る。

山南中将が→に就任すると自身は新設されたばかりの第五艦隊司令官に就任し旗艦を改『春藍』級艦隊旗艦級『三笠』（ミカサ）とする。

なお、女運に関してはー。

モチーフに関しては旧作銀英伝のワルター・フォン・シェーンコッ

プ

新見薫

ここにやにやちわーではないがそうである。(意味分からん) 宇宙防衛大学からメ号作戦までは古代守と原作同様に恋人関係だったが同期である将和の事も気になっていた模様。白色彗星戦役では第十三艦隊情報参謀として赴任しヤマトの最期を目撃する。

真田戦死後、暫くは荒れていたが何か将和と寝た事で復帰した模様。その後は将和の情報参謀として第五艦隊に異動する。将和の恋人1の位置付けになる。

山本玲

グデーリアンは言った……ではないが元『ヤマト』乗組パイロットである。『ヤマト』乗組前(ガミラス戦役)の時に将和が飛行教官として赴任した時の練習生の一人であった。その後、『ヤマト』に乗艦し帰還後は月基地航空隊飛行隊長をしていた。乗機はコスモタイガー1であったが白色彗星戦役後はコスモタイガー2に乗り換えている。

白色彗星戦役後は第五艦隊に異動し『ミカサ』飛行隊長となっている。

ちなみに2202では将和に空戦勝負を挑んだが完膚なきまでに叩き落とされ一時は自信喪失したが今は持ち直している。

なお、その過程でチャッカリと将和と寝ていたりする。将和の恋人2の位置付けになる。

大山トチロー

真田や将和らの同期。技術技官ではあるが変人なため白色彗星戦

役時には第十三艦隊技術参謀として着任。『ヤマト』の最期を見届ける。

将和の良き相談役でもあり将和が「二人（新見と山本）と寝ちまつた」と相談すると「年貢の納め時だな」と返すのである。なお、もう一人と寝たと報告を受けた時は笑うしか無かった模様である。

チュン・ウー・チャン

元は宇宙士官学校の教授であったがガミラス戦役時に現役復帰を命じられ将和の第33護衛隊参謀に就任する。なお、第二次内惑星戦争では火星宇宙軍に対しその知能を活かして活躍したが国連宇宙軍の火星に対するその後の対応に嫌気が差していた。

だが将和がチュンの案を悉く採用するので「面白い人だ」とやる気を見せたりする。

またよくパン系を食しているので将和から「パン屋の二代目」という渾名を頂いている。

元ネタは勿論銀英伝のチュン・ウーチェン。

土方竜

将和の良き理解者の一人でもある。『ヤマト』発進後は日本宇宙軍連合艦隊司令長官に就任し『ヤマト』が帰還するまで太陽系を防衛する。

だが、頑固一徹過ぎる性格が祟ってしまうのか白色彗星戦役時には冥王星外周の第11パトロール艦隊司令官に左遷されてしまう。後に白色彗星艦隊が襲ってきた時には脱走した『ヤマト』に乗艦、後に二代目『ヤマト』艦長に就任し白色彗星相手に奮闘するも艦橋被弾の時に致命傷を負い古代に艦長を任命、通信してきた将和に「残存地球

艦隊司令長官」を任命し戦死した。

芹沢虎徹

将和の理解者の一人。ガミラスとの開戦を主張しているがこれは第二次内惑星戦争後に回収した異星文明の艦艇（イスカンダル）に恐怖し三好正信総理と共に波動エンジン搭載を強く主導したからである。

白色彗星戦役時には地球連邦軍総参謀長に就任し『波動砲艦隊』を白色彗星艦隊に当てるが壊滅してしまい意気消沈するも負けじと地球のためにと獅子奮迅する。

藤堂平九郎

極東管区行政長官兼日本国副総理

元は三好正信の下で行政について学んだ文官であり何かと『ヤマト』側の人間である。

三好正信

日本国総理大臣↓地球連邦防衛軍統括司令長官。将和の父であり多忙であるが将和の事を何かと気に掛けている。

総理から統括司令長官に格下げとするも元々は宇宙軍軍人であるがため気にはしていない。

元ネタは銀英伝のアレクサンドル・ビュコック

メルダ・ドイツ

元はガミラス軍の銀河方面軍に所属していたが今はイスカンドル星王室付き近侍武官として、スターシャとユリーシャに仕えていたが本国からの要請で地球の派遣武官となる。

ジエイル・スカリエツィ

元は『リリなの』の人物。ふと思い立った脱獄に娘共々成功し逃げ出すも星間クルーザーの機関故障によるランダム転移により太陽系外縁部であるエッジワース・カイパーベルトに転移してしまう。そこへ将和の第十三艦隊が救助した事でそのまま『ヤマト』世界にお世話になる。

白色彗星戦役時には第十三艦隊に民間人として乗り込み（この時点では）大山、クアットロと共に波動ミサイルの開発や波動三式弾（後に波動カートリッジ弾に改良）を開発したりと役に立つ展開をし正信公認で特務少佐となる。

『新たな旅立ち』の時にも『伊勢』に乗艦している。

意外と父親の面を見せる時もあるがクアットロと共にマッドなのは言うまでもない。

渾名はスカさん。（将和命名）

ウーノ

元は『リリなの』の人物。白兵戦はそれ程出来ないがスカリエツィの秘書としてこの世界でも活躍する。

当初は将和を魔法関係者と疑っていたが将和からの告白もあり白色彗星戦役時にはトーレ達の裏方でサポートしていた。

『新たな旅立ち』では特務大尉として引き続き第十三艦隊に乗艦する。

トーレ

元は『リリなの』の人物。白色彗星戦役時には『ヤマト』らの突撃隊と共に突撃、古代らを動力部まで導く。その後はセツテと共に生還している。脳筋と思いきやスイーツが好きだったり案外乙女な一面もある。

固有武装は無いもののコスモタイガー2を操縦して興味がある。またよく将和と組手をしているが将和に食われた模様。なお、スカリエツティにその事を報告をした時にスカリエツティが突撃銃で将和のところに行こうとしたとか行かないとか。

『新たなる旅立ち』では特務中尉として引き続き第十三艦隊に乗艦する。

クアットロ

元は『リリなの』の人物。白色彗星戦役時にはトチローらと共に武器の開発をしたりしている。また科学者に近い特性なのかよくトチローとつるんでいたりしているがトチローに愛情があるとか無いとか。なお、それを聞いたスカリエツティは将和を飲み会に誘ったとかないとか。

将和曰く「ありやダメンズだわ」

『新たなる旅立ち』では特務中尉として引き続き第十三艦隊に乗艦する。

セツテ

元は『リリなの』の人物。無口に近いがスイーツは大好物らしい。白色彗星戦役時にはトーレと共に都市帝国に突撃して無事に生還している。

『新たなる旅立ち』では特務少尉として引き続き第十三艦隊に乗艦する。

サーダ

デザリアムの人物。多分出る。

プレシア・テストロッサ

原作ではアリシアを亡くしフェイトを誕生させ「PT事件」を起こすがアリシアと一緒に爆発事故に巻き込まれて世界を跳び将和に拾われた。その後、防衛軍に入隊し技術者として従事している。スカリエツティから事件の話は聞いており「恐らく、私も生きていたらそうなっていたと思うわ」と否定はしなかった。

将和と薫のやり取り後からは急激に将和を意識しだしている。（多分一番甘いんじゃないか……）

アリシア・テストロッサ

原作では爆発事故で亡くなるが、今世界では世界を跳び将和に拾われる。父という人物がいなかったので（プレシアが別れたから）将和を兄と慕っている。

好奇心旺盛であり勝手に船に乗り込んだりしてプレシアを悩ませている。

リニス・テストロッサ

山猫で拾われてテストタロツサ家にいたが爆発事故で死んだ。その後、プレシアが使い魔として生き返らせてその後はプレシア共々防衛軍に入隊し主計長として『伊勢』に乗り込んでいる。
猫だった事もあり魚料理が多く、いつもチャーハン定食を注文する将和に魚料理へすり替えたりしている。
最近のブームは猫マンマ。

艦艇

『ドレッドノート』級宇宙戦艦（通称 主力戦艦）

戦艦『伊勢』

全長 265 m

全幅 65 m

全高 100 m

主機 次元波動エンジン×1

補機 ケルビンインパルスエンジン×2

武装 次元波動爆縮放射機×1（集束・拡散両モード可能）

48センチ三連装陽電子衝撃砲塔×3基

6連装大型エネルギー砲

4連装対艦グレネード投射機×2基（前甲板両側）

亜空間魚雷発射機×4基（艦首両舷）

小型魚雷発射管×8門（艦首両舷）

ミサイル発射管×8門（艦底）

短魚雷発射管×12門（両舷）

多連装ミサイル発射機×16基（両舷）

司令塔防護ショックフィールド砲×3基（司令塔前部および基

部）

近接戦闘用六連装側方光線投射砲×2基（司令塔基部）

対空パルスレーザー砲塔×8基（司令塔および基部）

拡散型対空パルスレーザー砲塔×3基（司令塔基部後方）

対空ミサイルランチャー（前甲板）

搭載 一式空間戦闘攻撃機『コスモタイガー2』×20機

内火艇×4

【概要】

第十三艦隊旗艦となる『ドレッドノート』級宇宙戦艦。当初は第十三艦隊に戦艦は無かったが芹沢の配慮により1隻ではあるが戦艦が配備される事になった。『伊勢』はそれまでの『ドレッドノート』級とは異なり波動砲は拡散タイプのみから拡散・集束の両方が使用可能となり主砲も『ヤマト』と同じ陽電子衝撃砲である。

波動エンジンとバイパスが新型に換装され巡航性能、主砲性能等が向上されている。

また、装甲については積層装甲を採用しており防御力も他の『ドレッドノート』級に比べて格段に向上している。

乗艦した将和からは「ゲームの乙型と丙型を交ぜ合わせたような戦艦」と評されている。

第二十五話

「ではガミラス星のガミラシウムを採掘する盗掘集団がいると?」

急遽招集された仮総統府でキーリング参謀総長がタランに問うがデスラーが視線を向ける。その表情は俄に信じがたいとしていたがそれはタランや他の將軍達も同様であった。

「参謀総長、私の報告では不服かな? 私はスターシアから直に聞いたのだよ」

「い、いえそうではありません……」

「いや構わない。確かにガミラス星のガミラシウムを狙う集団はマゼラン星域の中ではまずいないだろう」

マゼラン星域の覇権を担っていた大ガミラス帝星だがその地下資源を狙う盗人はガミラスが健在の時は誰もいなかったのは事実である。

「反ガミラス派閥の艦艇を調べましたがこの艦艇はデータベース上は存在していません」

「……では……」

「我々が遭遇した事ない新たなる敵だろう」

デスラーはそう断言したのである。

「タラン、直ちに直卒艦隊の出撃準備に掛かれ」

「はッ!!」

「キーリング、君は引き継ぎ避難民の移送に当たれ。残っている警務艦隊を上手く使うのだ。必要であればヒステンバーガーを呼び戻せ。ドイツの艦隊だけでも何とかなるだろう」

「ザー・ベルク!!」

「……タラン」

「はッ」

「この事態……地球に知らせるべきか?」

『……………』

デスラーの言葉にタランやキーリングは悩んだ。もし知らせても地球がそれを貸しに何やら言ってくる可能性もあるのだ。

なお、地球ー防衛軍からしたら「バツカ、そんな要求するなら艦隊の復活に力を注ぐっての」だろう。

だがそんな事は知らないガミラス首脳陣はどうするか悩んだがタランは思い付いたように口を開いた。

「ならば……バレルを通じて警戒をするようにしては如何でしょう？」

「フム……警戒をか……」

「もしかすれば奴等は地球を狙うかもしれません。その為の事であれば……」

「……分かった。そのように伝えよ」

「はッ!!」

斯くしてガミラスの盗掘の件についてはバレル大使も頭を悩ますのである。

「……どう伝えれば……」

「普通に三好長官にお伝えすれば宜しいのでは？ 少なくとも三好長官は其なりの便宜を行うと思います」

「ウム……それはそうだろう。だが他の者がどう思うか……」

「……それも心配ないのでは？」

「何故そう思うのかね？」

バレルは対応しているメルダに問う。

「三好長官の傍にいる藤堂副長官と芹沢参謀長は三好長官側ですので……」

「まあ確かに……ならば言ってみるのも手か」

そう言つてバレル大使は通信機を操作して正信との緊急の会談に臨むのである。

『分かりました。ならば我々も選りすぐりの艦艇を選抜して派遣艦隊の創設に当たります』

「宜しいのですか？」

『過去にいがみ合いはありましたが今の我々は関係修復の最中です。借りを作るとかではありません。仁義に悖るモノです』

それは日本人の価値観かもしれない。これが外国ローアメリカやヨーロッパの人間が防衛軍司令長官なら動かなかったかもしれない。

だが正信は日本人でありかつて日本を救った一族の血筋を引く者の一人だ。

だからこそ正信は手を差し伸べたのである。

「……感謝します」

バレルは正信に頭を下げて通信を切るのである。

『というわけで艦隊を派遣する』

『それは分かりましたがどの艦艇を派遣するのです？』

『無論、お前が選んで向かえ』

(また俺に押し付けるう)

『というよりカールセンとパエッタの艦隊までは出せないだろう』

『だろろうな三好長官』

『第十一番惑星を無傷で取り返しはしましたがガトランティスが来ないとは言いい切れませんか』

『タイタン』基地で将和とカールセン、パエッタの両少将は防衛軍司令部と通信をしていた。

『一応、長期航海になるから補給艦を2隻は出すぞ』

『あの戦艦を改装した……？』

これまで補給艦は民間輸送船を改装したものが就役して防衛軍司令部直卒であった。しかし、武装強化等を目的に建造中であった『ドレッドノート』級2隻を補給武装艦として再就役させたのである。

それぞれ艦名は『サクラメント』『速吸』と名付けられ火星沖で完熟訓練中であつた。

「ですが艦艇はそこまで派遣はさせません」

『フム……具体的には？』

「今送ります」

将和はタブレットを操作して正信に送信する。

派遣艦隊

旗艦『伊勢』

戦艦

『伊勢』『メリーランド』『ロイヤル・オーク』

航空戦艦

『日向』『サラトガ』

巡洋艦

『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』『妙高』『那智』『足柄』『羽黒』

パトロール艦

『天塩』『足摺』『襟裳』『デンバー』

補給艦

『速吸』『サクラメント』（臨時追加）

『……駆逐艦は出さないか?』

「駆逐艦は足が短いので。それにワープ機能も制限されますしパトロール艦以上の艦艇で占めさせているのもそれが理由です」

『フム……空母は出さなくてもいいのかな?』

「航空戦艦の2隻を投入していますし『伊勢』『メリーランド』の飛行隊も入れたら100機近くにはなるので良いかなと……」

『よし分かった。ただ、万が一もあるから『サクラメント』も連れていけ』

「分かりました。それと自分が行く間の艦隊司令官には誰が……?」

『ああ……モートン少将に任せる事にした』

「成る程。モートン少将ですか」

ライアネル・モートン少将、ガミラス戦役からの軍人であり白色彗星戦役でも欧州艦隊の第四艦隊副司令官として参戦、その後の残存艦艇での突撃時は乗艦が大破した事もありガニメデ基地に残らざるを得なかった。

その後は火星基地司令官をしていたがこの度の異動で第二艦隊司令官に就任する事になったのだ。

「分かりました。それなら心置きなく行ってきます」

『ん。それと将和』

「はい？」

『将和……生きて帰れよ。この戦いで死ぬには馬鹿馬鹿し過ぎる戦いだ』

「……無論だよ親父。俺は少なくとも最期は畳の上で死ぬと決めてるからな」

『フハハハ、なら良い。じゃあな』

「はいっ」

二人は互いに敬礼をして通信を切るのであった。

「カールセン司令、モートン少将が来るまではお願ひします」

「任せておけ。ついでだから鍛えておいてやる」

「ハハハ……お手柔らかにお願いします」

数日後、戦艦『エンジンコート』に乗艦したモートン少将が『タイタン』基地に来訪し司令官の引き継ぎを行ったのである。また、『伊勢』にも新乗組員達が乗艦するのである。

「後はお願ひします」

「ウム。艦隊の事は任せてくれ」

二人は互いに敬礼をし将和は退出するのであった。そして『伊勢』艦橋に登るが何故かそこにはメルダがいた。

「ドイツツ大尉、何用だ？」

「バレル大使からも許可を貰っている。ご同行を頼みたい」

メルダはそう言うって頭を下げる。将和としてはどっちでも良かったが山本の気も晴れるかもしれないと思い乗艦を許可するのである。なお、ツヴァルケも『伊勢』に搭載される事になる。

そこへ新乗組員代表として機関士がやってきた。

（ん？ あいつは……）

「ほ、報告します!! 徳川機関兵長以下48名。只今『伊勢』に着任しました!!」

「……そうか、徳川さんの息子か」

「は、はい。次男です」

機関長の山崎がジロリと徳川を睨むと徳川は震える。

「分かった、俺がしっかりと鍛えてやる」

「は、はい!! お願いします!!」

太助は山崎の言葉にそう言っただがるのである。

「司令、発進準備完了しました」

「ん……派遣艦隊全艦発進せよ」

そして派遣艦隊は『伊勢』から順に発進していくのである。

「……そーいやトチローはどうしたっけ? まだ『エンケラドウス』だったよな?」

「そう言えば……ああ、予定では太陽系外縁のオールトの雲にいるわね」

「オールトの雲に? 何でまた……」

「修理と改装を終わらせた『雪風』を試運転で行ったらしいわ」

将和の言葉に薫はそう報告する。

「……………」

「……トチローも序でに拾うか」

技師長席に座るスカリエツティが将和に視線を向けていたので将和もそうする事にしたのだ。

決してスカリエツティの表情が『娘を拾え、娘を拾え、娘を拾え』としていたわけではない……筈多分。

「よし、島。航路をオールトの雲に行くように設定してくれ」

「了解」

将和の言葉に航海長の島は頷き、経路はオールトの雲に向かうようされたのである。

第二十六話

「さて、遅めの夕食を取らせてもらうか。トーレ、艦の指揮は頼む」
「了解、任された」

冥王星を通過して第十一番惑星から太陽系外縁部のオールトの雲へ向かう派遣艦隊（正式名は『イスカンドル表敬艦隊』）だが将和も一息つこうとしたのだ。そして艦の指揮を戦闘班長のトーレに任せて食堂に向かうのである。

「あ、まさ……三好司令」

食堂では薫とウーノが休憩のためお茶をしていた。そこに将和がやってきたのを見かけた薫は声をかけようとしたがそれに気付く前に将和はとある人物に声をかけた。

「おう山本。お前もメシか？」

「あ、三好司令……」

将和が声をかけたのは御盆を持った山本だった。山本は御盆にうどんを載せていた。

「お、うどんか……よし、うどんとメシにするか」

「司令もうどんは好きなので？」

「ラーメンのが好きだけどな。たまにやあうどんも良いさ」
「……………」

「薫、落ち着いて。コップが震えているわ」

愕然として震えている薫にウーノは冷静に伝える。そして将和と山本が席に座ると薫とウーノ（無理矢理）は二人から見えない席に座り偵察を開始するのである。

「食事はどんな感じだ？」

「漸く……麺類は食べれる事は出来ました。ただ、御飯系はまだ無理みたいで……」

「そうか。パンとかは？」

「パンは何とか……」

「そうか……ま、パンがいけるならまだ何とかなるわな」
「ですわね」

将和はそう話しながらもおかずとして鶏天とタマゴを入れて天かすを大量に入れて七味を入れ麺を啜るのである。その様子を山本は微笑ましそうにクスリと笑い山本自身も麺を啜るのであった。

「~~~~~ッ!?」

「はいはい落ち着いてね薫」

今にも飛び出しそうな勢いをする薫にウーノはどうどうと言う。薫が振り返れば若干、目に涙を溜めている。

「~~~~あれは狡いと思うわよッ」

「だから落ち着いて薫……」

「私ね……ウーノやトーレなら良いと思ってるのよ……」

「……急に何を言い出すの貴女……?」

「ほら、貴女達って戦闘機人だから将和の夜戦による攻撃に耐えられるでしょ?」

「本当に何を言っているの貴女……?」

若干おかしくなってきた薫にウーノは頭痛がしてきて頭を抑えるのである。

「大丈夫大丈夫。最近、夜戦でやられ過ぎて腰が痛くなってきたから丁度リリーフが欲しかったのよ」

「ちよつと医務室に行きましよう薫。疲れてるのよ貴女……」

「大丈夫よ、将和も最初は優しいから!!」

「ほら、医務室行くわよ薫!!」

「……あいつら何してんだ?」

「さあ……?」

食堂から薫を引っ張って出ていくウーノを将和と山本が見守るのである。それと入れ替わりにコスモタイガーのパイロット達が食堂に入ってきたのである。

「おや、そこにいるのは隊長じゃありませんか」

「それに三好司令……」

「何だヒヨコの坂本達か」

「ちよ、司令……ヒヨコだなんてヒデエや……」

将和にヒヨコと呼ばれた坂本茂少尉はウヘエと嫌そうな表情をす
る。

「俺からしたら全員がまだまだヒヨコだわな」

「……三好司令はガミラス戦役からの大ベテランですから……」

将和へのツツコミを坂本の隣にいた椎名晶少尉がそう返すのであ
る。

「というよりも隊長……食堂デートですかい？」

将和と山本を見た坂本がニヤニヤしながら聞いてくるが将和は溜
め息を吐いた。なお、山本はニヤニヤする坂本にイラツとしたのであ
る。

「あのなあ坂本……」

「坂本、便所掃除な」

「ゲゲツ」

山本には気に食わなかったのか坂本に罰を与えるのであった。

「じ、じゃ俺達はこれで……」

これ以上余計な事をしたら余計な仕事を増やされると想定したの
か坂本や他のパイロット達はそそくさと後退するのである。

「坂本め……それで椎名はどうした？」

「いえ、体調の方だと思いますが……大丈夫そうですね」

「心配かけて済まないな」

「いえ、大丈夫です」

椎名はそう言って頭を下げ御盆を持って坂本達のところに向か
うのである。

「良いパイロット達だな……（ゲームの椎名もいるんだな）」

将和は食後のお茶（カフェイン無し）を飲みながらそう言う。

「ええ……まだヤンチャばかりな奴等ばかりですけどね」

「そこがまた良いところだよ」

山本の言葉にクツクツクと笑う将和である。

「分かっていると思うが……無駄に散らすなよ？」
「無論です」

将和の言葉に山本は力強く頷くのである。その後、派遣艦隊はオールトの雲まで進出しそこで電波を発したのである。

「さて……トチローは何処にいるかなと……」

「案外至近にいてくれたら良いのだけれど……」

「……これは……」

その頃、セツテは改装した突撃駆逐艦『雪風』の艦橋で操縦していた。そこへ電波が入ってきたので解析すると派遣艦隊からだった。

「……行かないと……」

セツテは操縦を派遣艦隊方向に向かうよう自動操縦に切り替えて艦橋を降りてトチローの部屋に向かう。

「……」

トチローの部屋の前に着くとソツと扉を開ける。中には布団で軽くイビキをかいて寝ているトチローがいた。隣には毛布にくるまっていた何かがいる。

「……トチロー……トチロー……」

「んが……」

セツテがゆさゆさとトチローを起こすとトチローが眠りから目を覚ます。

「あれ……セツテ、どうした？ まだ交代の時間じゃ……」

『伊勢』からの通信をキャッチした」

『伊勢』？ 将和か？」

「うん、だから早く着替えてね」

なお、トチローはパンツ一丁で寝ていた。そこへもぞもぞと毛布に

くるまって寝ていた塊ークアットロ（裸）も起き出したのである。
「ふぁ〜……あれ、セツテじゃないの……」

「……おはよう……」

裸のクアットロにセツテはム〜と若干のお怒りの表情である。それに気付いたクアットロが寝起きなのに元気に騒がしくする。

「オホホホ。今日は私なんだから良いじゃないの」

「……分かってる……トチロー、次は私だから……」

「お、おう」

顔を紅く染めるセツテの言葉にトチローも視線を反らすがその顔も真っ赤である。それはさておき、トチローらは急いで着替えて艦橋に向かうのである。

艦橋に向かい通信機を操作すると直ぐに将和が出た。

『ようトチロー。生きてたか?』

「将和じゃないか、どうしたんだこんなところに?」

『ちよつとマゼラン星雲まで行く事になってな。それでお前がオールトの雲にいるからついでに拾おうと思って通信を出したんだよ』

「成る程な。艦隊は何処にいるんだ?」

『座標を送る』

ピピッと通信が鳴る。座標を見ると近くだった。

「此処から約250宇宙キロのところだな。分かった、直ぐに行くよ」

『よっしゃ、待ってるぞ』

そう言つて将和は通信を切るのである。

「よし、準備が出来次第行こうか」

「分かりましたわ」

「……了解」

そして準備が出来た『雪風』は発進して派遣艦隊に向かうのである。

「よし、トチローが来るまで周辺警戒をしつつ待機だ」

「了解」

（しかし……）

将和は指示を出してから艦長席に深く座る。

（……ありや買ったな……）

通信画面を見るとトチローの後ろにクアットロとセツテがいたが二人の表情は変わっていた。むしろトチローに寄り添って笑みを浮かべていたのだ。

こういう時だけ将和は自分の事は棚にあげて置きながら勘が良いのである。

ちなみにスカリエツティは久しぶりに会った二人を見て感無量なのか頷いていた。

(ま……当人達に任せるか……)

そう思う将和である。そして一時間半後に『雪風』と合流するのである。

「久しぶりだな将和」

「相変わらず元氣そうで良かったぞトチロー」

「まあな。『雪風』も生まれ変わったからな」

ニヒヒヒとトチローが外に視線を向ける。

「ほう……良い艦だな」

「だろ？」

『雪風』の性能は以下の通りであった。

全長 125 m

全幅 27 m

全高 25 m

主機 03式試作HWVED型次元波動エンジン×1基

補助機 ケルビンインパルスエンジン×2基

武装 50口径48サンチ連装陽電子衝擊砲×3基

突撃戦闘用連射ミサイルランチャー×4門

長射程空間ミサイル魚雷四連装ランチャー×2基

外装式大型決戦ミサイル×2発

「タイタンに置いてあった試作のHWVED型を1基頂戴したんだよ。そしたら上手く調整がいつてな。巡洋艦級の旋回能力はあるし武装は主力戦艦級だからな。それに艦橋と寝る所以外は無人数用に

改装してるから防御力も並大抵のもんじゃないぜ」

「よくそこまで仕上げたものだな」

「なあに、クアットロとセツテが手伝ってくれたおかげだよ」

「オホホホ、おちやのこさいさいですわ」

「……………」

トチローの言葉にクアットロは微笑み、セツテは頷く。

「成る程。まあ頼むよ」

「あいよ」

そして艦隊は前進を開始するのであった。

第二十七話

「それじゃあ皆も集まった事やしイスカンドルへの航路について説明をする」

将和はスカリエッティ達らを作戦室に集めて説明をする。

「目標星域はイスカンドルとガミラス星。まあ怪しい盗掘船団がいるからという理由もあるが名目上はイスカンドルの表敬だな」

「新たな敵……というヤツか」

「暫くは勘弁してほしいんだが……だがそうもイカンのが現実というヤツだな。そこで今回は連続ワープのテストも兼ねる」

「連続ワープ？」

「ガミラスとの技術協定で超ワープ機関の開発が進んでね。連続ワープの使用も可能になったんだよ」

島の問いかけにスカリエッティが補足する。

「ただまだテストはしていないから今回で……という事だろ？」

「まあな」

スカリエッティの問いに将和は頷く。

「ただ、何隻かの艦艇は超ワープ機関を搭載していない。そこが問題なんだが……」

「簡単な事だ、引つ張りやいいんだ」

「何？」

そこへ口を挟んだのはトチローだった。トチローはスカリエッティに視線を向ける。

「スカさん、同調型の空間偏向弁は余ってるのかい？」

「空間偏向弁かい？ 確か波動砲に使うタキオン粒子収束筒用のストックパーツが幾つか余ってるな」

「エネルギーバイパスの予備は？」

「それも充分だが……成る程。そういう事か」

トチローの言葉にスカリエツテイがニヤリと笑う。流石の将和も分からず首を傾げる。

「どういう事だトチロー?」

「今回は急ぎの旅だろ? 本格的な超ワープデバイスの搭載とか波動エンジンの改良なんかやってたら間に合わない……じゃあそのまま使えばいいんだよ。ちよつとだけ弄つてな」

「弄る?」

「ああ。超ワープ機関を今すぐ一つに纏めて完成させようとするのが間違いなんだ。だけどよ、二つでなら簡単だぜ」

「そう、トチローが言うのは曳航型にするんだ」

「曳航型……」

「超ワープ機関搭載の艦を先にワープさせてその艦が作り出す空間歪曲口に同調させた艦艇を送り込むのだよ。紐で手繰り寄せるに正確なワープも可能になるって事なんだよ」

「そういう事だな。先導して空間の穴を曳航する無人艦なら『雪風』がいるさ。歪曲された空間の深遠……遙かイスカンダルにいる守の元までちゃんと引つ張って行ってくれるさ。何しろアイツの船だ……」

「成る程な……」

「……ちよつとさつぱりですがやれるって事ですな」

トチローの言葉に山崎機関長は頷く。

「トチローとスカさん、どれくらいでやれそうだ?」

「まあ……各艦でなら……二時間ありやられるぞ」

「よし分かった。作業はトチローとスカさんらに任せる。艦隊はそのまま改装が終了するまで待機とする。改装が完了次第、艦隊は連続ワープに移行する」

『ハッ!!』

艦隊の方針は決まった。艦隊はオールトの雲で引き継ぎ待機して超ワープ機関の同調等の作業を開始する。

「さて、少し休憩とするか……島、此処は頼む」

「了解しました」

「……………」

艦橋には将和らがいたが将和も少しだけ休憩をしようとしたのだ。艦橋の事は島に託して将和は艦長室に戻るのである。そしてそれを薫は視線で追っていた。

「流石に艦橋ではコーヒーを飲めんな……」

「将和君」

艦長室に戻る廊下、将和はテクテクと歩きながらコーヒーの準備でしようとしていた。そこへ薫が後から追いかけてきた。

「ん？ どうした薫？」

「……………」

将和の言葉に薫は無言で抱きついたのである。咄嗟の事だったが将和は薫の意図を理解して抱き締める。

「……そういや最近の中々二人きりになれなかったな。済まん」

「良いのよ……仕事だからね。でも私も嫉妬持ちなんだと改めて思ったわ」

「……むしろ気付いてなかったのか？ 防大の時の古代と真田のやり取りをいつも左右から聞いていた癖に……」

「あ、あれはまだそこまで古代君の事とか……んっ」

将和の指摘に薫は顔を紅く染めつつ反論するがそれを将和はキスをする事で防いだのである。薫は両手を将和の頭に回して深くキスを求める。ふと目を明けて廊下の隅を見たら誰かいた気配がした。目を凝らして見るとそこにはパイロットのジャケットを着た山本が目を見開いて将和と薫のキスを見ていたのである。

「……………」

山本は薫と視線が合い、そのままゆっくりと後退してそのまま小走り逃げ出す。薫は逃げていく山本にフツと笑みを浮かべる。

「どうした？」

「いえ……何でもないわ。それと今は此処だけにしとくわ」

「良いのか？」

「だって……貴方、短時間で終わるのかしら？」

「……………」

薫の指摘に将和は気まずそうに視線を逸らすのである。その後、薫は将和と別れた後、山本を探しに行くのである。

「え、隊長ですか？　　そういや見てないですねえ……椎名、隊長をどこかで見たか？」

「そう言えば……さつきコスモタイガーのところにいましたよ」

「そう……ありがとうね」

薫は坂本と椎名に礼を言つて格納庫に向かう。格納庫には16機のコスモタイガー2が翼を休めていたが山本の愛機は直ぐに見つかった。彼女の機体の尾翼は黄色でカラーリングされているからだ。「こんなところでサボりかしら？」

「……………」

薫が空いている風防を覗くとそこにはパイロット席にチヨコンと座つて丸まる山本がそこにいた。

「……何か……？」

「そんな暇まないで……別にどうしようというわけじゃないんだから」

薫はそう言つて山本に正対する。

「好きなんですよ？　　……三好将和の事を……？」

薫はそう言い、長い沈黙の末で山本は無言で頷いたのである。それを見た薫は笑みを浮かべる。

「じゃあ良いじゃない」

「えっ……？」

薫の言葉に山本は目を見開く。彼女は何を言っているのだろうか？

「私も彼の事は好き、大好きかな。でも彼……時々、遠くを見つめるのよ。遠く、遠くをね……」

「……………」

「だから理解したの。彼、私の事も好きだけど、本来は別の好きな人がいるのかもしれないって。最初、そう思った時は勿論嫉妬したわ。で

も彼が私の事も愛してくれるのは事実。だから私も彼の事をもっと理解しようと思つて……まあ他の子が手を出すのは容認しても良いかなつてね♪」

「て、手を出すつて……」

「あら、生物学的に優秀な雄が多く雌に子孫を残すのは重要だと思つうわよ?」

「~~~~ツ」

薫の子孫を残すという言葉を理解した山本が顔を真っ赤にしてアタフタする。

「あら、じゃあ私が独占しておくわよ?」

「……………困ります」

長い沈黙の末、山本はそう答えを出す。それを聞いた薫は微笑む。

「宜しい。なら今夜辺り一緒に艦長室にでも行く?」

「か、か、か、艦長室に……」

「あら、さつきは廊下にいたじゃない」

「そ、それは……(食堂にでもと思つていたけど……)」

薫の言葉に山本は反論する事が出来ずゴニョゴニョ言うだけだった。

「分かったわ。じゃあ今度……ね♪」

「……………はい……………」

(よし、これでそうなた時は多少の回復は出来るわ!! 後はもう一、二人くらい……)

主導権は薫にあると山本はそう感じるのであつたが内心の薫は悪魔の表情をしているの言うまでもない。

「ブエックシユン!! ブエックシユン!! ……誰か俺の噂でもしてるんか?」

艦長室でコーヒーを飲んでいた将和は突然のくしゃみにそう呟くのであつた。

アンケート

改『春藍』級艦隊旗艦級宇宙戦艦『三笠』

基準排水量 128,000t

全長 470m

全幅 56m

全高 150m

乗員 850名

機関 主機 03式HWVE型大型次元波動エンジン×1基

03式HWVE型中型次元波動エンジン×2基

補助機 ケルビンインパルスエンジン×4基

兵装

次元波動爆縮放射器(400センチ口径。集束・拡散・拡大可能)×1基

50口径51センチ三連装陽電子衝撃砲×4基(上部3基、艦底1基)

50口径30.5センチ三連装陽電子衝撃砲×5基(前後部2、側面2 艦底1)

速射魚雷発射管×12門(艦首・艦尾合わせて)

側面短魚雷発射管×24門

艦底ミサイル発射管×12門

四連装対艦グレネード投射機×2基

12.7センチ四連装対空パルスレーザー砲塔×12基

8.8センチ連装対空パルスレーザー砲塔×8基

7.5センチ三連装対空パルスレーザー砲塔×8基

7.5センチ連装対空パルスレーザー砲塔×20基

司令塔防護ショックフィールド砲×3基

近接戦闘用六連装側方光線投射砲×2基

航空機

コスモタイガー2×36機(『三笠』のみ。他は18機) 100式

空間偵察機×2機 コスモシーガル×2機

同型

『フッド』『Iowa』『ウォースパイト』『三笠』以下10隻

【概要】

地球連邦防衛軍が設計建造配備した艦隊旗艦級の宇宙戦艦である。2203年に一番艦『三笠』が就役してから現在(2220年)まで幾度の改装が施されながらも現役を続けている。

当初、これが防衛軍の中で上がったのは白色彗星戦役時に建造が開始された『春藍』級の建造であった。

『春藍』級のコストが高すぎる」

『春藍』級は『アンドロメダ』級以上の総旗艦を目指して建造が開始されたが51サンチ四連装陽電子衝撃砲や三連装艦首波動砲は財務省に言わせたら高コストの塊であった。財務省の友人からも苦言を言われた防衛軍司令長官の三好正信もさてどうするかと悩んでいた時、一人の造船中佐が正信の下を訪れた。

『春藍』級のコストを下げた量産型の生産は可能です」

男の名は将和の同期である牧野滋造船中佐だった。牧野中佐はかつて『ヤマト』『アンドロメダ』等の設計に携わっており『春藍』級の設計も彼がしていたのだ。

牧野が新たに提示したのは確かに『春藍』級の量産を意識した戦艦であった。主砲は四連装から三連装に戻し艦首波動砲も三連装から単装に戻っていた。

「それで肝心のコストは？」

『春藍』級より21%の削減です」

それだけでも財務省は削減出来た事に一安心だったが、牧野の話はそれだけではない。

「削減はしましたが有事にはそれは必要ありません」

「ではどうするんや？」

「主砲や波動砲は提示したそのままです。その代わりに、防御力に重点を絞ります。つまりは不沈艦とするのです」

確かに『春藍』級に比べたら砲火力は多少は下がっただろう。だが牧野は『アンドロメダ』の最期を見ていた。政府の命令とは言え、自動化し過ぎたのは牧野の痛恨のミスであった。その為、乗員を増やしてその分の防御力を高めたのである。

以下は説明である。武装は三連装51センチ陽電子衝撃砲を4基にしているがターレットは拡張しやすいように大きめにされていた。その為2218年の改装で50口径56センチ三連装陽電子衝撃砲を搭載していたのである。

副砲は新型巡洋艦(『アラスカ』級)の主砲である30.5センチ陽電子衝撃砲を採用しており更には対空射撃も可能であった。

最大の武装と言えば艦首波動砲であるがこの波動砲、口径は『ヤマト』の200センチより倍の400センチを採用していた。

三連装と比べたら……どっちもどっちだが財務関係者に言わせたら一門のがコスト削減と思うので結果オーライである。

そして波動砲だが集束・拡散の他にも試験的に『三笠』には拡大型も搭載していた。これは拡大型の発展型であり後の

話を戻す。エンジンは波動エンジンだが三つ搭載している。それが『春藍』級で採用されたのが大型次元波動エンジン一つと後に新型巡洋艦(『アラスカ』級)で採用される中型次元波動エンジン二つである。

これは『春藍』級が大型次元波動エンジン二つ搭載したのに対しコスト削減で大型のは一つとし左右に中型エンジンの炉心を取り付けた形である。その為噴射口は一つだけである。だが、中型エンジンを二つ取り付けているので機動力の低下は僅かに済み、波動砲を撃つても中型エンジンからのエネルギーで供給すれば問題なかったのである。

防御力については『三笠』は防衛軍の中で二番目の堅牢性能である。一番は後にドイツ宇宙軍が建造配備した『ビスマルク』級である。(ドイツ宇宙軍はこれを4隻も建造する)装甲は通常のと、装甲に帯磁性

特殊加工をしたモノ。ガトランティス戦役で終盤に発生した超巨大戦艦による砲撃で津波が発生して損傷した記念艦『出雲』『加賀』『三笠』の一部解体した資源をも使用した三重装甲としており更にはそこに波動防壁も加わるので実質的に四重装甲でもある。

この装甲をした事によりちよつとやそつとでの航行不能や大破はしなくなったのである。特にデインギル戦役時にはデインギル軍が使用するハイパー放射ミサイルを五発命中しても重要部分の装甲は破壊されず放射能汚染だけで済み（直ぐにコスモクリーナードで除去）尚且つ戦闘から離脱する事は無かつたのである。

試作大型航空指揮戦艦『三笠』

全長 525 m

全幅 126 m

全高 150 m

機関 主機 03式試作HWE D型三連次元大波動エンジン×1基

のみ) 03式HWE D型中型次元波動エンジン×2基(炉心のみ)

補機 03式艦本式コスモタービンインパルスエンジン×4基

乗員 870名

武装

次元波動爆縮放射器(400センチ口径。集束・拡散・拡大可能)×1

50口径56センチ三連装陽電子衝撃砲×5基(前部3基 後部1基 艦底1基)

55口径30.5センチ三連装陽電子衝撃砲×5基(前部1基 後部1基 艦底1基 側面2基)

速射魚雷発射管×12門(艦首・艦尾合わせて)

側面短魚雷発射管×24門（両舷）

艦底ミサイル発射管×12門

四連装対艦グレネード投射機×2基（前後）

12・7サンチ四連装対空パルスレーザ砲塔×12基

8・8サンチ連装対空パルスレーザ砲塔×8基

7・5サンチ三連装対空パルスレーザ砲塔×8基

7・5サンチ連装対空パルスレーザ砲塔×20基

司令塔防護シヨックフィールド砲×3基

近接戦闘用六連装側方光線投射砲×2基

波動爆雷発射器×12基（前後）

航空機

コスモタイガー2×52機

コスモタイガー3丙×2機

コスモシーガル×2機

艦載艇

90式内火艇×6隻

特殊装備

波動防壁

亜空間ソナー

同型艦

『三笠』のみ

【概要】

地球連邦防衛軍の日本宇宙軍が開発建造した次世代型試作大型航空指揮戦艦である。当初は『春藍』級のコストダウンした各艦隊旗艦級戦艦としての計画が成されていたがそこへ口を挟んできたのが日本宇宙海軍艦政本部だった。

『ヤマト』のような単独行動及び単艦決戦行動、地球艦隊総旗艦を可能とする戦艦の建造を求める」

艦政本部はガトランティス戦役時の単独行動をしていた『ヤマト』の活躍を評価していた。だからこそ『ヤマト』とはいかないまでも『ヤ

マト』級のような戦艦を欲したのである。それを聞いた防衛軍司令長官の正信は当初は懐疑的だった。

『ヤマト』は『ヤマト』じゃよ。だからこそ『ヤマト』は作れないのじゃよ」

だが正信を説得したのは『ヤマト』設計に携わった福田造船中将与牧野造船大佐であった。

「確かに『ヤマト』はもう作れないでしょう。ですが『ヤマト』のような戦艦は保有していた方が良い。我々はそう判断しました」

「新たな敵に備えてかの？」

「人類の滅亡を回避するためにも」

それを聞いた正信は建造を了承したのである。建造は雷王作戦前に認可され建造が開始された。

『三笠』は以下の特徴であった。

- ・『ヤマト』より倍の艦首波動砲
- ・『アンドロメダ』級を上回る主砲
- ・三個飛行隊を搭載
- ・試作の三連次元波動エンジン
- ・『ビスマルク』級と同等の装甲の堅さであった。

まず、波動エンジンは試作ではあるが三連の次元大波動エンジンであった。この三連により波動砲の連続二回の射撃が可能となった。また、波動砲も集束・拡散と切り替え可能であり更には試作ではあるが拡大波動砲の射撃も可能となったのである。

また、三連の波動エンジンを補佐するようにその左右には『アラスカ』級巡洋艦で採用された中型波動エンジンの炉心を備えておりこれにより中型の波動エンジンは波動防壁等の裏方をサポートするのである。

次に主砲は『アンドロメダ』級や『春藍』級の51センチ陽電子衝撃砲から威力が増大した56センチ陽電子衝撃砲を搭載している。本来は『春藍』級にも改装で搭載予定だったが『三笠』が先行試作を兼ねて搭載する。後に航空戦艦『ブルーノア』もこれを継承している。

次に航空機は三個飛行隊でコスモタイガー2が52機で試作のコ

スモタイガー3乙改が2機搭載されている。これは航空戦艦の運用も模索していたので『ヤマト』より多く搭載されている。

試作の三連次元波動エンジンはその名の通りで波動エンジンの炉心が三連大炉心1基に増設されたモノでありこれを主導したのがトチローやスカさん達であり試作ながらも搭載されたのである。なおこれは改良され続けてデインギル戦役の時には六連大炉心に改装されてはいるが量産が出来るかと問われたらコストが高いと言わざるを得なかった。そのため『ブルーノア』級の建造が認可される西暦2215年までは『三笠』のみが搭載するのである。

防御力については『三笠』は防衛軍の中で二番目の堅牢性能である。一番は後にドイツ宇宙軍が建造配備した『ビスマルク』級である。(ドイツ宇宙軍はこれを4隻も建造する)装甲は通常のと、装甲に帯磁性特殊加工をしたモノ。ガトランティス戦役で終盤に発生した超巨大戦艦による砲撃で津波が発生して損傷した記念艦『出雲』『加賀』『三笠』トラツク諸島沖で戦没した『武蔵』の一部解体した資源をも使用した三重装甲としており更にはそこに波動防壁も加わるので実質的に四重装甲でもある。

この装甲をした事によりちよつとやそつとでの航行不能や大破はしなくなったのである。特にデインギル戦役時にはデインギル軍が使用するハイパー放射ミサイルを五発命中しても重要部分の装甲は破壊されず放射能汚染だけで済み(直ぐにコスモクリーナーDで除去)尚且つ戦闘から離脱する事は無かったのである。

というわけで二通りの『三笠』です。

改『春藍』級は『春藍』級のコストダウンを図った所謂量産型『春藍』になります。そして艦隊旗艦機能を追加したので銀英伝で言う『アイアース』『パトロクロス』みたいなもんです。

航空指揮戦艦の方は『ブルーノア』の試作を兼ねたモノなので劣化『ブルーノア』みたいなもんですがその分主砲を56センチに倍増しています。更に波動エンジンも復活編を見越して六連の炉心を試作し

た形での三連炉心にしています。

第二十八話

「司令、全艦艇同調の準備整いました」

「ん。先に『雪風』をワープさせよ」

「了解だぜツ」

トチローが機械を操作して『伊勢』の左舷にいた『雪風』はワープしたのである。

「これでOKだ。後はワープアウトした『雪風』から空間座標のデータを送ってもらえば完璧だ」

「よし、『雪風』からのデータが届き次第連続ワープに移行する」

その後、『雪風』から空間座標のデータが届いたので全艦にデータを送り艦隊はそのまま連続ワープに移行するのであった。

「クロノ君」

「ああ、はやてか」

「脱獄したスカリエツティ達……まだ見つからんの？」

「ああ……残念だが手掛かりが何も無いのが現状だな……」

第一世界『ミッドチルダ』にある時空管理局の本局でたまたま用事があったクロノ・ハラオウンは呼び止められた八神はやてと話す。

「けどなあ……管理局の中からの協力者もいたとはなあ……」

「ああ……時空管理局も一枚岩では無いと証明されてしまったよ」

クロノは溜め息を吐いた。スカリエツティ達が脱獄した時、管理局からも手引きした者数人が検挙されていた。何れも闇に手を染めていた者達であり何れは司法の下で処罰は下されるだろうとクロノ達は踏んでいた。

「それにマスコミやら一般市民の声も管理局への疑心も強くなってきてもうたなあ……」

「スカリエツティらを脱獄させたからな。奴等を逮捕するまでは沈静化も難しい……かもな」

クロノはそう言つて何度目か分からない溜め息を吐いたのであった。

「ブエックシユン!! ブエックシユン!!」

「汚ツ!? 風邪かスカさん?」

「ズズツ……おかしいな……私は風邪やは引かない筈なんだがな……」

「じゃあスカさんの悪口でも言ってるんじゃないか?」

「むう……管理局には心当たりが多すぎて誰かまでは分からない」

「おいこら。多分エースオブエースやプロジェクトFの人じゃないのか?」

「……だろうなあ……(何と……将和はそこまで知っていたのか)」

一応はウーノからも将和の正体は聞かされていたし将和もスカリエツティとの飲み会で喋つてはいたからスカリエツティも知っていたがそこまで知っているとは思つてもみなかったのだ。

(だが……それでこそ将和は……この男は面白い人間だ)

(……まーた良からぬ事を考えてそうだなスカさん……)

そう笑みを浮かべるスカリエツティだが将和は違う事を考えているのであった。

「取り敢えずは連続ワープは成功……でいいな」

「はい、目標のα星『ベテルギウス』です」

艦隊の左舷にはα星『ベテルギウス』が存在していた。

「予定航路との誤差、0.0021。オリオン・α星系に到着です」

「後続艦にも異状なし。全艦のワープアウトを確認しました」

「ん」

「艦長、念のため波動エンジンの停止をお願いします」

「ん。機関長、機関停止」

「了解しました。出力制御弁閉鎖、波動エンジン停止」

だが『伊勢』は停止する事なく航行している。流石に不審に思ったのか山崎機関長は機関室に声をかける。

「おい、停止だ。聞こえんのか!？」

『は、はいイイイツ!？』

その声に押されて『伊勢』は停止するがガクガクツと揺れたのである。

「馬鹿モン!! まず制御弁だ、制御弁!! 順番を間違えるな!!」

『はいいいい!! 了解、制御弁閉鎖!!』

機関室にいる徳川の声が聞こえるが焦っている様子なのは間違いない。

「機関停止もロクに出来んのか徳川!? 全く親父さんが見てたら泣くところだぞ!!」

『はいいいい!!』

機関室では徳川達新人達が奮闘していた。

『親父さんが見てたら泣くところだぞ!!』

「はいいいい!! たくつ、いちいち親父親父と言われたんじやかなわないなあ……」

『何イ!? 何か言ったか!？』

「い、いえ!! 別に……」

山崎にどやされながらも何とか作業をする徳川であった。

「いや、監督不行き届きで全くお恥ずかしい……。機関部の者には後で厳しく言っておきます」

「構わんよ機関長。俺達も最初はあんなものだったよ」

謝る山崎機関長に将和はそう言う。

「しかしスゴいモノだな。500光年の距離を10分も掛からずに来

てしまったな……」

α星を見ながらトーレは唸るように呟いたがスカリエツティも頷いた。

「ウム。一先ずは成功のようだが……簡単に安心するわけにはいかないな。各艦艇とも見た目は無事かもしれないが超ワープで何か影響を及ぼしていないかちゃんと調べないといけないしな」

「分かったスカさん。頼むよ」

そう言つて将和は艦長席に座るが、何か思い出した。

（そういや……確かゲームだこのα星に暗黒星団帝国艦隊がいたよ
うな……）

その時、パトロール艦『天塩』から通信連絡が入った。

「パトロール艦『天塩』より緊急連絡です!!」

「ん、メインパネルに切り替えろ」

『此方パトロール艦『天塩』です。α星の向こう側に大きなエネルギー反応を捉えました』

「何?（早速かよ……）」

「α星の重力レンズ効果で星が放出するエネルギーが屈折して見えて
いるだけじゃないのか?」

『違います。エネルギー源が移動しているんです。もうすぐα星の陰
から出てきます』

「艦長、此方のレーダーでも今捉えました」

「よし、α星に映像を切り替えろ」

レーダー手もそう答えた。そしてメインパネルにα星を映し出す
が何かが見えてきた。

「何だあれは……?」

「黒い……モヤのような……ガスのような……」

「もしかして……『ヤマト』がイスカンダルに行った時にこのα星で
戦ったガス生命体の生き残りか?」

トーレの呟きに将和は首を傾げるがスカリエツティは機器を操作
して分析をしていた。

「空間スキャナーでも捉えたぞ。凄いエネルギー密度だな……だが生

命反応は感じない。ガス生命体ではない……そうか、これは暗黒物質で出来た原始星そのものだな」

「原始星かよ……」

スカリエツティの報告に将和は啞然とする。島達もその言葉に騒然としていた。

「確か『ヤマト』の航海は数年前の筈……高々数年でこれだけの自然現象は起こる筈はない……明らかに人為的なものだ」

「……まさかと思うけど……ガミラスかな？」

「移民に忙しいガミラスが此処まで来てやるわけないだろ」

「じゃあガトランティス」

「アイツらなら艦隊を率いて地球に直で来る」

セツテの言葉に将和はそう答えた。そこへスカリエツティが更に口を開いた。

「皆、見てくれ。α星ベテルギウスのエネルギーがああ暗黒原始星に次々と吸い込まれていつている」

映像では暗黒原始星にベテルギウスのエネルギーが吸われていた。そこへ薫が叫ぶ。

「ちよつと待つて!! ああ暗黒物質周囲に艦影を捕捉したわ!! しかも強力な磁力線がその艦隊から暗黒物質へ、そしてベテルギウスに向けて放射されているわ!!」

「採掘……しているのか……。将和、あの艦隊はベテルギウスからエネルギー資源を抜き出そうとしているんだ。そして……これは少し厄介だぞ」

「厄介というのは？（ゲームしてたから覚えているな……確か……）」
将和はスカリエツティの言葉を聞きながら思い出そうとしていた。

「将和、このままではベテルギウスはエネルギーバランスを崩して何万年も早くに超新星化してしまう。しかもただの超新星爆発じゃなくハイパーノヴァだな」

「ドクター、ハイパーノヴァというのは？」

「極超新星とも言われている。所謂超新星爆発の10倍以上の爆発エネルギーを持つものだよ。普通の恒星は寿命を終えると超新星爆発

を起こして星間ガスへと還るが……皆で例えると太陽の30倍以上の大きさを持つ恒星はケタ違いの大爆発を起こす可能性があるのだよ」

「うひゃあ……」

「それがハイパーノヴァだ。確か地球にいる時に天文学者の資料を見たが……地球から3000光年以内でハイパーノヴァが起これば地球は壊滅的被害を被るだろうと書いていたな。しかもベテルギウスは太陽系からたったの500光年しか離れていないからな……そしてベテルギウスは直径だけでも太陽の500倍以上、比重が軽いとはいえ質量比でも優に数10倍……という事からベテルギウスはハイパーノヴァを充分に起こしうる超巨星だな」

「嘘だろ……」

スカリエツティの報告に島達は啞然とする。

「ならばあの艦隊は……」

「まあ……他の星系の生命体の事など意に介さない。傲慢な資源採取の手段も同じだな」

「ウーノ、あの艦隊に電文を入れる。エネルギーの採掘中止の電文だ」

「了解しました」

ウーノは直ぐに通信機器を操作する。

「全艦に到達。臨戦態勢を整えろ」

斯くして艦隊は臨戦態勢に移行するのであった。

地球連邦防衛軍の編成

地球（国連宇宙軍）は第一次、第二次内惑星戦争を乗り切り、更には西暦2191年からのガミラス戦役をも乗り切った。

『ヤマト』が帰還した時の国連宇宙軍は以下の戦力であった。

- 『ドレッドノート』型主力戦艦
- 『ドレッドノート』『テキサス』
- 『金剛』改型
- 『霧島』『比叡』『扶桑』『山城』
- 『金剛』改二型
- 『メイン』『ベンボウ』
- 『吉野』型主力巡洋艦
- 『吉野』『高砂』『コーンウォール』以下13隻
- 『村雨』改型
- 『八雲』『愛宕』以下9隻
- 『村雨』改二型
- 『最上』『阿武隈』
- 『フレッチャー』型主力駆逐艦
- 『フレッチャー』『ジョンストン』以下28隻
- 『磯風』改型
- 『初霜』『初瀬』以下16隻
- 『磯風』改二型
- 『谷風』『野分』以下9隻
- 『松』型護衛艦
- 『松』『竹』『梅』以下21隻

国連宇宙軍はこの時、『五カ年計画』を始動させていた。第一次計画では総旗艦級1隻、主力戦艦40隻、主力巡洋艦96隻、駆逐艦18

0隻、護衛艦210隻の建造となりこれは近海型艦隊となっている。これは直ぐに成立した地球連邦防衛軍に構想を受け渡しておりこれを元に防衛軍は艦隊整備に移行した。

・ 太陽系外周艦隊

【第一〜第七艦隊】

・ 内惑星防衛艦隊

・ 火星、木星、土星防衛艦隊

・ 冥王星圏内防衛艦隊

・ 地球本星防衛艦隊

しかし、これらは直ぐに正信らによって破棄される事になる。正信が提唱したのは土星以降の外惑星艦隊と木星以内の内惑星艦隊であった。それぞれ五個艦隊が担当する事になり総旗艦として建造されていた戦艦『アンドロメダ』は総本部の土星の衛星『タイタン』にて駐屯する事になる。

だがガトランティス戦役では『アンドロメダ』を含めた戦艦37隻、巡洋艦81隻、駆逐艦護衛艦270隻で挑む事になる。結果として地球防衛軍は戦艦4隻、巡洋艦17隻、駆逐艦98隻、護衛艦72隻が残存し『ヤマト』はテレサと共に超巨大戦艦へ体当たりをして永遠の旅に出た。

その後、防衛軍は再度編成に当たる事になる。此处で防衛軍は艦隊整備を各州事に委ねる事にした。

第一艦隊（北米）

第二艦隊（日本）

第三艦隊（欧州）

第四艦隊（欧州）

第五艦隊（アジア）

第六艦隊（南米）

第七艦隊（日本等の実験艦多数で編成）

第八艦隊（アフリカ）

『五カ年計画』は北米や欧州、更には中国等の先進国が当初は推進して計画を急がせていたが艦艇のコンペ等に賄賂を送ったりと色々や

らかして自国へ有利にさせようとしていたのを正信が発見したのだ。
「あのアホども、ガミラス戦役から何も変わっておらん」

ガミラス戦役初期で北米等は日本の指示を無視して勝手に行動した挙げ句に艦隊を壊滅させて自国も被害に遭っていたのは当の昔に忘れていたようである。

その為正信は各州に負担させる事で日本の負担も軽くさせる事にしたのである。

そんな互いの思惑はさせておき、各州は自己負担で艦艇の建造を開始する。それが護衛戦艦の始まりでもあった。

それはさておき、ガトランティス戦役後の防衛軍では自動化の推進を取り止めなるべくの有人化を進めていた。事情があったとはいえ、可能な限りの自動化はやめる事にしたのである。

『ドレッドノート』級主力戦艦

前期型

『アイル・オブ・スカイ』『メリーランド』

後期甲・乙型（集束波動砲搭載）

『テネシー』『アーカンソー』

丙型（装甲強化・集束波動砲搭載）

『ヘルゴラント』『マルクグラフ』

特殊実験艦

『伊勢』

『吉野』級主力巡洋艦

前期型

『吉野』『高砂』等々

後期型（人員増加・集束波動砲搭載）

『青葉』『古鷹』『妙高』『那智』等々

艦隊旗艦型

『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』

『フレッチャー』級主力駆逐艦
『フレッチャー』以下160隻

『松』型護衛艦

『松』以下110隻

【地球における宇宙艦艇の変革その3】

ガトランティス戦役後での防衛軍の宇宙艦艇の変革は上記で記載した通りである。ガトランティス戦役後、防衛軍はガトランティス軍が放棄したシリウス、プロキオン恒星系の基地を接收した。接收した際、補給艦が同行していた事で艦隊の道中の補給は何とか可能であったが接收に同行した艦隊司令官（パエツタ少将）からの報告で遠洋型の艦艇開発が急務となった。

一応、補給艦を同行させれば近海型の艦艇も長距離進出は可能ではあるが補給艦の数にも限りがある。その為、防衛軍艦政本部は遠洋型宇宙艦艇の設計開発に乗り出すのである。量産性を求めるがため各国にコンペという形で提出を促した。

しかし、北米や欧州各国は上記の護衛戦艦の開発に躍起になっておりあまり返答は芳しくなかったが手を挙げたのがドイツであった。ドイツも『ビスマルク』級護衛戦艦の設計開発をしていたがドイツでも艦艇開発で有利になりたい思惑があったので手を挙げたのである。更に補佐的に手を挙げたのがイタリアであった。

イタリアは自国独自の護衛戦艦の開発を諦め量産型で有利になるうと思惑があった事もあり両国は互いに連携して艦政補佐的に動いていたのである。艦政本部も他国がコンペを出さなかった事もありドイツ、イタリアの設計図案が採用されたのである。

それが後に『リットリオ』級主力戦艦、『ブリュッヒャー』級主力巡洋艦、『乙』級主力駆逐艦になるのであった。

第二十九話

将和の艦隊は正体不明の艦隊――暗黒星団帝国艦隊――に電文を送りつけた。

「クーギス司令、星系に突然出現した謎の艦隊より電文を受信しました。言語解読完了まで後65メルを要します」

「うむ、続けよ」

「それとプラント稼働ですが32%まで到達しました。熱核エネルギーから暗黒物質へのエネルギー変換、順調です」

部下からの報告にマゼラン星雲方面第三艦隊副司令官のクーギス少将は頷いた。

「うむ。これだけエネルギー変換率が高い恒星もまた珍しいもの……わざわざ銀河系の辺境まで出向いた甲斐があるというものよ」

そうやってクーギスはニヤリと笑う。

「これで本隊が例のイスカンダリウム採掘に成功すれば我等が帝国の戦闘資源は事実上無尽というわけだな」

「クーギス司令、電文の解読が終了しました」

「構わん、読み上げよ」

「はっ……『貴艦隊ハ星系ノ平穏ヲ脅カシテイル。採掘続行スレバハイパーノヴァノ可能性大ナリ。即時二恒星カラノえねるぎ―採掘ヲ停止スルコトヲ求ム。』以上です」

「ククク……フハハハッ!! ……兄上、どう思う?」

クーギスは艦隊司令官で兄であるルーギスに通信を送り質問をする。

『無視するわけにもいくまい。反応からするとちゃんとした武装艦隊のようだぞ』

「では兄上、こんな戯けた通信を聞き入れると?」

『フツまさか……』

クーギスの言葉にルーギスは笑みを浮かべる。その表情はどう見ても採掘を停止するとは思えなかった。

『だが丁度採掘任務ばかりで退屈していた所だ。ちゃんと相手をしてやろうではないか。言葉ではなく力を以て……な』

「フハハハ。それでこそ兄上よ」

そう言ってクーギスは通信を切り視線を前方に向ける。

「左翼艦隊、砲撃準備しつつ敵艦隊に向かって突撃せよ!!」

斯くして採掘艦隊は臨戦態勢を整えつつ将和の艦隊に突撃を開始するのである。

「三好司令、敵がレーダー妨害を開始したようです」

「長距離用コスモレーダーも沈黙しました。全艦近距離用メインレーダーに切り替えます」

「レーダー手、ジャミングされる前の敵配置を出してくれ」

「了解しました」

レーダー手はそう言ってメインパネルに敵配置を映し出す。画像には左右にそれぞれ12隻ずつが展開していた。

「航空戦艦とパトロール艦、補給艦は後方へ退避せよ。残りは左右に分ける。全艦砲雷撃戦用意!!」

「砲雷撃戦用意!!」

「……『高雄』と『愛宕』に連絡。両艦とも左右に展開し拡散波動砲の準備だ。無論、ベテルギウスに影響が無い配慮でだ」

「了解しました。2隻に伝えます」

「航空戦艦は急ぎコスモタイガーを上げろ!! 無論『伊勢』からもだ!!」

「了解。コスモタイガー隊、発進準備だ!!」

将和の言葉にトーレが領きコスモタイガー隊に出撃準備を告げる。

「司令、右翼艦隊ですがベテルギウスを後方に構えているので拡散波動砲を撃てる可能性は低いわ」

敵艦隊を分析していた薫がそう具申する。

「……よし、ベテルギウスから離れている左翼艦隊は拡散波動砲で攻撃するように伝えろ」

『此方、山本。コスモタイガー隊発進準備完了しました』

「よし、コスモタイガー隊全機発進!!」

『伊勢』から次々とコスモタイガー隊16機が発艦していく。

「発艦完了次第、『伊勢』は敵右翼艦隊に突撃する!! 右翼を攻撃する艦艇は単縦陣で『伊勢』に続け!!」

「了解!!」

「波動防壁展開!!」

『伊勢』は態勢を整えて右翼艦隊―ルーギス―の元へ突撃を開始するのである。

「敵艦隊突撃してきます!!」

「敵も自棄になったか? 砲撃しろ!!」

ルーギスは突撃してくる『伊勢』に砲撃するが波動防壁により無傷であった。

「敵先頭艦無傷です!」

「何だと!? ち、バリヤーか……」

波動防壁など知らないルーギスにとってはそれくらいしか分からない。ルーギスは砲撃を集中させるが『伊勢』は無傷だった。

「敵艦隊、距離120宇宙キロ!!」

「砲撃準備よし!!」

「撃ちい方始めエ!!」

左右斜めに旋回した前部2基の48センチ三連装陽電子衝撃砲が砲撃を開始する。陽電子衝撃砲のエネルギー弾は照準した暗黒星団帝国艦艇の装甲を次々と貫通させ爆発させていく。

「護衛艦『タリドラ』『マツデル』轟沈!! 『ガツサラ』大破炎上!!」

「ええいクソ!!」

部下からの報告にルーギスが舌打ちをする。だが将和の攻撃は終えていない。

「敵艦隊の中央に穴を開ける。艦首魚雷全門発射ア!!」

「艦首魚雷撃エ!!」

ズズンと『伊勢』の艦首魚雷が6本発射され前方に展開していた敵護衛艦を轟沈させる。

「主砲斉射三連!! 食い破れエ!!」

「主砲斉射三連!! 撃エ!!」

トーレが叫ぶ。前方に照準し直した主砲が斉射三連を繰り出す。合計12本のエネルギー弾は確実に敵艦に命中した。

それはルーギスの旗艦『エルドラA』も同様だった。

「左舷損傷!! エンジン出力低下!!」

「ヌヌツ!」

命中の衝撃でルーギスは床に倒れ伏す。その僅かな時間をルーギスは永遠に見逃してしまふ。再度放ってきたエネルギー弾は『エルドラA』の艦橋に直撃したのである。

「直撃、来ます!」

「ば、馬鹿な……馬鹿なアアアアアアアアアア!」

ルーギスはそう絶叫しながら原子に還っていったのである。それを見届けるかのように旗艦『エルドラA』も爆沈したのであった。

「右翼艦隊旗艦『エルドラA』の通信途絶しました!」

「な、何だと!? そんな馬鹿な事があるか!!」

「駄目です、右翼艦隊全艦との通信途絶しています!!」

「や……やられたのか……兄上がやられたというのか!」

だがクーギスも直ぐにルーギスの下に送られるのである。

「拡散波動砲発射準備良し!!」

「拡散波動砲、発射ア!!」

巡洋艦『高雄』『愛宕』から拡散波動砲が発射された。二本の拡散波動砲のエネルギー弾は左翼艦隊との中間で無数に分かれて左翼艦隊に襲い掛かるのである。

「こ、これは……ツ!」

エネルギー弾は『エルドラB』の装甲を貫き爆発していきその爆発はルーギスがいる艦橋を包み込んだのである。

「お、おのれエエエエエエエエ!」

ルーギスもクーギスの後を追って原子に還っていったのである。残ったのは数隻の護衛艦のみであるが護衛艦艇は反転して逃走を開始した。

「敵残存艦艇が逃走します」

「行かせてやれ……」

「良いのか？」

将和の言葉にトーレが問う。

「ああ……俺達の任務は敵を殲滅する事じゃないしな」

将和はそう言つて艦長席に座る。

「全艦警戒態勢に移行せよ。それと全艦の被害状況を知らせ」

「……将和、全艦の被害状況は無傷だな。だが問題はあある」

「全艦は無傷なのか？」

「ああ……あの暗黒物質……あれはどうも敵のエネルギープラントらしいのだが敵がいなくなった直後から暴走を開始している。徐々に軌道がずれてベテルギウスに近づきつつあるからこのままだとベテルギウスにぶつかつてしまうぞ」

「だが元はベテルギウスのエネルギー物質なんだろう？ それ元に戻るだけじゃないのか？」

将和の言葉にスカリエツティは首を横に振る。

「そうもいかないんだ。あれだけの高圧縮エネルギーが一気にベテルギウスに戻ればそれこそハイパーノヴァが起きてしまう。かと言つて波動砲で吹き飛ばすにしても相手は高密度なエネルギーの塊だ……危険過ぎる……何か手はある筈だが……」

「分かつた。スカさんは探ってくれ。クアットロ、どれくらいでプラントは落ちるか分かるか？」

「このままだと計算では八時間後ですね」

「八時間……か……（どうやったかな……大分昔やから正確には思い出せんな……）」

将和は原作ゲームを思い返すが昔過ぎた事もありおおよっぱにしか思い出せないのである。なお、解決したのは機関室にいた徳川太助であり親父から耳にタコが出来るくらい聞かされた航路データの中にかつて『ヤマト』が最初の航路の時にデスラーが α 星に追い込む時に使った電磁バリヤーの装置が設置されている小惑星の座標を徳川機関長がイスカンドルからの帰り道の時に調べていた事で電磁バリ

ヤーを発見、それをプラントに張り付かせる事でベテルギウスに落ちない事に成功する。

なお、電磁バリヤーが使用するエネルギーについてはスカリエツティが手を加えて暗黒物質プラントなら直接引き出すようにしているのであった。何れにせよプラントはエネルギーをバリヤーに食いつくされて消滅するのである。

「ま、何にせよハイパーノヴァの起こる事は一先ずは無くなったわけだな」

「そういう事だな」

将和の言葉にスカリエツティはニヤリと笑うのであった。

第三十話

「ワープアウト完了しました。七色星団です」

「懐かしいな……あの戦いからもう数年が過ぎたのか……」

航海長の島は航海席から身を乗り出して七色星団を見つめる。

「島、感慨にふけるのも良いがまずは先に周囲をチェックだな」

「あ、すみません。この宙域は暗黒ガスが多いので敵が待ち伏せするにはもってこいの場所ですからね」

（でも……クーギス死んだしなあ……）

島はそう言うが将和は原作ゲームだとクーギスが雪辱を晴らそうと戦いを挑む筈なのだが肝心のクーギスはα星ベテルギウスで戦死しているのだ。

（ま、用心に越した事はない……か）

だが艦隊は七色星団を警戒していたが敵艦隊が襲来してくる事はなかったのである。

「やはり奴等はいなかったか……まあいないなら良いんだけどな……」

将和は艦長室でそう思う。結局は敵艦隊は発見されなかった。やはりα星で討つたのが幸いだったのかもしれない。

そこへノックする音が聞こえた。

「空いてるよ」

将和はそう声をかけるが入ってこない。

「空いてるよ」

もう一度声をかけるが入る気配はなかった。

（空耳か……？）

将和は扉を開けるとそこには顔を真っ赤にした山本とニヤニヤする薫がいたのである。

「……何してんだ……？」

「褒めてあげなさいよ。勇気を振り絞ってきたんだからね」

「えっ……っ？」

顔を真っ赤にしてじつと将和を見る山本に将和は視線を向ける。

「……………」

「……………」

じつと見つめられる山本は更に顔を真っ赤にしゆでダコ状態になるが此処で漸く将和はその意味に気付いたのである。

「……………まさか……………そういう事か……………」

「他にどういう事があると思ってるのよ……………」

将和の言葉に薫は溜め息を吐いたがトンと山本の背中を押した。

「キャッ」

「おい薫……………」

「まどろっつこしいから早く抱きつきなさい」

「えっ……………こうか？」

「……………」

薫の言葉に将和は山本を抱き締めるが抱き締められた山本はゆでダコ状態で混乱している。ふと山本を見るとゆでダコ状態の山本と視線が合う。

「……………」

そのまま山本は目を閉じ唇を出すようにする。将和はその唇に自身の唇を合わせるのである。

(第三者がいるのによくやるわね……………)

焚き付けた本人が何を言うかである。そして将和は山本を抱き締めたまま薫も引き寄せて部屋に入れさせる。

「山本はそれで大丈夫なのか……………」

「えっ……………」

「その……………こういう関係になるのは……………」

将和は気まずそうに山本に言うが当の山本はクスリと苦笑する。

「そりゃあ嫉妬はあるかもしれないけど……………司令が好きなんだからそれもまた良いかなって……………」

「おいおい……………」

将和はそう言うが今度は山本からソツとキスをする。

「だから……お願いします」

何をとは将和も聞かない。将和は無言で頷き再度山本にキスをしてベッドに招き入れるのである。なお、ちゃっかり薫も参戦するのであった。

そして翌日、格納庫では表情が明るい山本ー玲が目撃される。

「~~~~~♪」

「……おい椎名」

「何、坂本？」

「山本隊長……えらくご機嫌だけど……何かあったのか？」

「さあ………？（もしかして……）」

坂本にはそう言う椎名であるがヒョコヒョコとがに股に近い歩きをする玲に何かの目星を付けるのであった。

そして艦隊が大マゼラン銀河サレザー恒星系の入口にワープアウトするとガミラス艦が出迎えていた。

「三好司令、右舷二時の方向にガミラス艦です」

「ガミラス艦より電文です。『我、道案内ス』」

「……ガミラス艦に電文。『道案内感謝スル』」

そしてガミラス艦の先導の下でサレザー恒星系第四惑星のガミラス星に向かうわけだが、そのガミラス星では既にデスラー総統率いる直卒艦隊と正体不明の艦隊が交戦していたのである。

それは将和の艦隊がサレザー恒星系の入口に到着する六時間前の事だった。

「総統、ワープアウト完了しました」

「ム……タラン、先行艦を派遣しガミラス星の状況を調べる」

「分かりました。小規模の戦隊をガミラス星に急行させます」

直ちに直卒艦隊から『デストリア』級1隻と『クリピテラ』級4隻の小戦隊を先に先行させ本隊は陣形を整えていた。

「総統、先行艦からの通信です」

『総統』

「ガミラス星の様子はどうか？」

『……これを御覧下さい』

『『デストリア』級の艦艇はデスラーに映像を見せた。それはガミラス星の地殻付近で作業をする謎の盗掘集団の艦隊であった。』

『これは……』

『現在、盗掘を止めるよう呼び掛けてはいますが……向こうが応じる気配は今のところありません』

「ムウ……宜しい。我々が到着するまで監視せよ。無闇に発砲は禁じる。隠忍自重するのだ」

『ザー・ベルク!!』

「……タラン、このまま怒りに身を任せて艦隊を突撃させたいところだが……」

「総統……」

「分かっている。もし戦闘で万が一ガミラス星を傷つけてしまえば誘爆を起こしてしまう危険性がある。そうなればガミラス星は……」

実はデスラー、艦隊を起こそうと幾度となく準備をしていたがその都度にタラン達から出撃を控えるよう具申されていた。

というのも、もしガミラス星近辺で戦闘しガミラス星に被害が及んだ場合、寿命を迎えつつのガミラス星が何らかの作用で誘爆し大爆発をすると双子星であるイスカandal星が互いに引き摺りあっていた片方が無くなった事で星が移動する暴走の可能性もあったのだ。その為、デスラーはタラン達の具申を受け入れ隠忍自重をしていたのである。

だがその隠忍自重も先行艦からの悲鳴のような通信が入ってきた事で殻破ったのである。

『敵の増援艦隊が出現!! 増援艦隊からの砲撃を受け我が戦隊は……』

戦隊は敵探掘船団の増援艦隊からの砲撃を受けて瞬く間に全滅したのである。

「総統……」

「……全艦突撃隊形に移行せよ」

デスラーは突撃を選択した。デスラーの選択にタラン達もこれ以

上の異議を唱える事はやめる事にした。艦隊は直ちに突撃隊形に整えて前進を開始したのである。

無論、それは増援艦隊も長距離レーダーで確認していたのである。

「むう……ガミラス艦隊か……」

「如何なさいますかデーター司令官?」

暗黒星団帝国イスカンドル方面軍第一連合機動艦隊司令長官のデーター中将は接近してくるガミラス艦隊に眉を潜める。

「採掘船団はそのまま採掘作業を続けよ。全護衛艦は『プレアデス』に続行せよ。敵ガミラス艦隊と対峙する」

データーは乱戦になる事を避けるためガミラス星から多少離れた宙域での艦隊決戦を選択するのである。無論、暗黒星団帝国艦隊の動きをデスラーも確認しておりむしろそれは望むところであった。

「全艦、射程距離に入り次第……砲撃始めエ!!」

「全艦射程距離に入り次第砲撃開始せよ!!」

先に攻撃を開始したのはガミラス艦隊だった。砲撃をするガミラス艦隊だが暗黒星団帝国の艦艇は装甲が厚く命中はするが撃沈する艦艇は少なかった。

「……奴等の装甲は厚い……か」

「はっ」

(……厳しい戦いになるやもしれんな……)

そう思うデスラーであった。

第三十一話

「総統、バーガー大佐の機動部隊から第三次攻撃隊が来ます」
「ん。……バーガー達はよくやってくれる」

タランの言葉にデスラーは頷く。既に戦端が開いてから二時間が経過していた。両艦隊は互いに最大射程距離からの砲撃を展開していた事もあり崩れる事はまだなかったのである。その為戦線は膠着状態に陥っていたのだ。

「……地球からの援軍はまだ来ないのかな？」

「はっ、まだ一報はありません」

デスラーは通信兵に問うが通信兵はそう答えるのみである。地球艦隊の迎えに駆逐艦1隻を差し向けたデスラーであるがサレザー恒星系で合流した以後の通信はまだ無かったのである。

「総統、このまま膠着状態が続けば敵の増援が来る可能性も……」
「分かっている」

タランの言葉にデスラーは遮るように言うがデスラー自身もタランの言葉は理解しているつもりではいる。

(やはり警務艦隊も連れてくれば良かったか……)

そう思うデスラーだが避難船団の警護にはやはり艦隊は必要であるのでデスラーはその考えは捨てた。

(しかしこのままでは……)

そう思うデスラーだがレーダー員が声をあげた。

「重力震……?」

「どうした?」

レーダー員の眩きをデスラーは見逃さず声をかける。

「は、はっ。敵艦隊後方に重力震反応があります!!」

「何ッ!? 敵の増援か!」

「そ、そこまではまだ……」

タランの叫びにレーダー員はそうとしか答えられなかった。

(新たな敵……どうすれば……)

「敵艦隊後方にワープアウト反応……来ます!! ……こ、これは……」
「どうした!?! ちゃんと報告せよ!!」

「は、はっ。テ、テロン……地球艦隊です!! 地球艦隊がワープしてきました!?!」

「何……?」

レーダー員の言葉にデスラーは目を見開くも直ぐに敵艦隊後方を見る。そしてそこにはデスラーが待ち望んでいた地球艦隊……派遣艦隊がワープアウトしてきたのである。

「座標通り、敵艦隊の後方にワープアウトしました!!」

「そのまま急速反転!! 反転後は機関最大戦速で突撃するぞ!!」

ワープアウトしてきたのは派遣艦隊でも大型艦艇……つまりは『伊勢』『メリーランド』『ロイヤルオーク』『日向』『サラトガ』の5隻だった。

だがその5隻でも強力な武装を保有する5隻である。

「全艦反転完了!! 機関最大戦速!!」

「機関最大だ太助!!」

『りよ、了解!!』

将和の命令を山崎機関長は機関室にいる太助に怒鳴って伝える。

「砲雷撃戦、用意!!」

「砲雷撃戦、用意!!」

5隻は最大戦速で敵暗黒星団帝国艦隊の後方から突撃を開始する。レーダーの第一連合機動艦隊は突然のワープアウトで正体不明艦隊に混乱していた。

「正体不明艦隊が後方から此方に向かって突撃してきます!!」

「正体不明艦隊は敵と認識しろ!! 全門開け!!」

「駄目です、後方の敵艦隊からエネルギー反応!! 砲撃してきます!!」
「ぬうツ!?!」

そして5隻は第一連合機動艦隊に向けて砲撃を開始したのである。

「撃ちい方始めエ!!」

「撃ちい方始めエ!!」

『伊勢』の前部2基の48サンチ陽電子衝撃砲が砲撃を開始する。それに続いて艦首魚雷も連続発射して第一連合機動艦隊に穴を開けようとする。ミサイルが着弾した敵艦艇は次々と誘爆をして宇宙に花火を咲かせるのである。

「命中確認!!」

「連続斉射!! 撃ちまくれエ!!」

「撃エ!!」

将和の命令にトーレが吠える。それが『伊勢』に乗り移ったのか瞬く間に巡洋艦級を4隻も沈めるのである。

「砲撃を前方に集中!!」

「準備良しッ」

将和の命令に砲雷長のセツテが主砲を前方に照準し直す。

「主砲斉射三連!! 食い破れエ!!」

「撃エ!!」

5隻が主砲による斉射三連を繰り出す。その砲撃の結果は敵艦艇の多数撃沈だった。

「味方巡洋艦隊、全滅です!!」

「おのれエ!! 主砲、照準を敵旗艦に定めろ!! 撃ちまくれエ!!」

デーダーの旗艦『プレアデス』は主砲を連続斉射して『伊勢』に砲撃を叩きつけるが波動防壁の展開で無傷である。

「セツテ、奴に挨拶をしてやれ」

「了解。かなりのデカブツですが……要は同じところを狙えばいいのです」

セツテは照準をし直して斉射三連をする。砲撃は『プレアデス』の前部艦載機発艦口を集中させた。装甲が厚かったが『被弾箇所と同じところ』をセツテが集中して砲撃した事で『プレアデス』は被弾炎上したのである。

「な、何事だ!?!」

「て、敵旗艦からの砲撃で艦載機発艦口が損傷!! 発艦不能です!!」
「何だと!?!」

だが『プレアデス』はまだ砲撃は可能であるがためデーダーは気にする事なく砲撃を続けさせ一矢報いようとする。

『ロイヤルオーク』に直撃弾!! 『ロイヤルオーク』が戦列を離れます!!」

『伊勢』の左舷を航行していた戦艦『ロイヤルオーク』は波動防壁が貫通して左舷にビーム弾が命中し瞬く間に戦列を離れたのである。

『ロイヤルオーク』は後方へ退避せよ。『伊勢』を先頭に単縦陣へ移行せよ!!」

「単縦陣へ移行!!」

「艦隊、取舵一杯!!」

「取舵ですか? そうなるとガミラス星に進路を……」

「そうだ、取舵だ!!」

「は、はい。取舵一杯!!」

5隻はガミラス星へと進路を取る。その様子にデーダーは首を傾げる。

「何をする気だ……?」

「もしかしたら採掘船団を攻撃を……?」

首を傾げるデーダーに幕僚が具申をするがデーダーは頭を振った。

「馬鹿な。それこそ最初にガミラス艦隊がすべき行動だ。だが奴は何を……」

5隻がガミラス星を背にして主砲を第一連合機動艦隊に照準した時、デーダーは全てを理解したのである。

「しまった!?! 奴はガミラス星を楯にする気か!?!」

「……これでは砲撃が……」

「もし万が一、エネルギー弾がガミラス星に着弾して誘爆すれば大変な事になる……」

その光景はデスラー達も確認していた。

「……些か不服だが戦術的には利に叶っているなタラン……」

「はっ正に……」

自分達の星を楯にするには不服だったがそれでも味方の損害を抑える事には利に叶っているのだ。

(地球艦隊の司令官……中々の人物かもしれないぬな……)

地球艦隊司令官「将和に興味を覚えるデスラーであった。そんな事は知らない将和はというところ。」

「右砲戦用意よし!!」

「撃ち方始めエ!!」

5隻は右砲戦を展開していた。5隻から放たれる陽電子衝撃砲のエネルギー弾は次々と残りの艦艇を撃沈させていく。

「側面魚雷も使え!!」

「側面魚雷、撃エ!!」

「その調子だ、撃ちまくれエ!!」

攻撃する5隻だがデューダーもただ黙って事を見ているわけでは無かった。

「全艦上昇しつつ敵艦隊の上空に躍り出るのだ。そこから降下しながらの砲撃だ!!」

「ハッ!!」

「ぜ、前方からガミラス艦隊接近!!」

「何!?!」

デューダーは声を荒げる。彼等も地球艦隊だけ任せるつもりはなかったのである。

「全艦……突撃!!」

デスラーはガミラス星に被害が及ばないよう考慮しつつ突撃を開始しデューダーの第一連合機動艦隊は瞬く間に壊滅してしまうのである。

「ぎ、残存艦艇は?」

「ほ、本艦の他には護衛艦8隻を残すのみです……」

「踏ん張るのだ。メルダース総司令には連絡はしてある。『ゴルバ』が来るまで踏ん張るのだ!!」

デューダーが放った『ゴルバ』という言葉に兵士達も顔を上げた。

「そ、そうだ」

「まだ我々には『ゴルバ』がいるんだ……」

「こんな奴等に負けてなるものか!?!」

士気を上げ始める兵士達だったが現実には非情だった。オペレーターが叫びだしたのだ。

「て、敵ビーム弾直撃します!!」

「か、回避イ!!」

「間に合いません!!」

将和の艦隊は旗艦『プレアデス』を集中砲撃した。その効果はあったようであり『日向』が放った41センチ陽電子衝撃砲のエネルギー弾が『プレアデス』の艦橋に直撃したのである。

「こ、こんな馬鹿な事がアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?」

デーダー達は原子のサイズまで変換されるのである。それを見た他の護衛艦艇も降伏しようとしたがガミラス艦隊はそれを許さずに残りの8隻も攻撃して撃沈するのである。

アンケートの結果及び再度アンケートのお知らせについて

アンケートの結果について及び再度アンケートのお知らせ先週からアンケートをしていた将和の新旗艦についてですが……。

航空指揮戦艦

13票

改『春藍』級艦隊旗艦級

16票

これにより将和の新旗艦は改『春藍』級艦隊旗艦級となります。

投票して下さった29人の読者の皆様

作品へのアドバイスを提供してもらった3人の皆様

作品への罵倒しかなかった6人の皆様

大変にありがとうございます。まさか改『春藍』が巻き返すとは……。自分もどちらを出すか、当初は迷っていたのでアンケートを出しましたが……今は改『春藍』で良かったかなと思います。

というのもこの作品は『宇宙戦艦ヤマト』ではありませんが『宇宙戦艦ヤマト』では無いんですね。意味分らないでしょ？

じゃあ何故『ヤマト』じゃないのか？それはこの作品の元が『さらば』を元にしてるからです。

原点回帰ですけど、『さらば』で『ヤマト』は永遠の旅に旅立ちまし

た。後に残ったのは残存の『ヤマト』クルーと地球だけです。なので主人公は『ヤマト』から地球と地球防衛軍になるわけです。その為主軸は地球防衛軍……じゃあ→の将和の新旗艦とどう繋がるんだという事ですけど、航空指揮戦艦は活躍によっては所謂劣化『ヤマト』になります。別に『ヤマト』を再びというわけではないですが個艦主義になるので地球防衛軍が活躍する場所が狭くなるのかなと……。まあなので改『春藍』に決まってホツとしてるかなと思います。でも航空指揮戦艦はどっかで出したいのは出したいですねえ。

改『春藍』級艦隊旗艦級宇宙戦艦『三笠』

基準排水量 138,000t (他は128,000)

全長 480m (他は460m)

全幅 56m

全高 150m

乗員 850名

機関 主機 03式HWVED型大型次元波動エンジン×1基

03式HWVED型中型次元波動エンジン×2基

補助機 ケルビンインパルスエンジン×4基

兵装

超大型次元波動爆縮放射器 (500センチ口径。集束・拡散・拡大可能) ×1基

50口径56センチ三連装陽電子衝撃砲×4基 (上部3基、艦底1基。ただし『三笠』のみであり他は50口径51センチ)

50口径30.5センチ三連装陽電子衝撃砲×5基 (前後部2、側面2 艦底1)

速射魚雷発射管×12門 (艦首・艦尾合わせて)

側面短魚雷発射管×24門

艦底ミサイル発射管×12門

四連装対艦グレネード投射機×2基

12・7サンチ四連装対空パルスレーザ砲塔×12基

8・8サンチ連装対空パルスレーザ砲塔×8基

7・5サンチ三連装対空パルスレーザ砲塔×8基

7・5サンチ連装対空パルスレーザ砲塔×20基

司令塔防護ショックフィールド砲×3基

近接戦闘用六連装側方光線投射砲×2基

航空機

コスモタイガー2×34機（『三笠』のみ。他は18機）

コスモタイガー3乙×2機

100式空間偵察機×2機

コスモシーガル×2機

同型（諸外国）

『フッド』『Iowa』『ウォースパイト』『三笠』以下8隻

【概要】

地球連邦防衛軍が設計建造配備した艦隊旗艦級の宇宙戦艦である。2203年に一番艦『三笠』が就役してから現在（2220年）まで幾度の改装が施されながらも現役を続けている。

当初、これが防衛軍の中で上がったのは白色彗星戦役時に建造が開始された『春藍』級の建造であった。

「『春藍』級のコストが高すぎる」

『春藍』級は『アンドロメダ』級以上の総旗艦を目指して建造が開始されたが51サンチ四連装陽電子衝撃砲や三連装艦首波動砲は財務省に言わせたら高コストの塊であった。財務省の友人からも苦言を言われた防衛軍司令長官の三好正信もさしてどうするかと悩んでいた時、一人の造船中佐が正信の下を訪れた。

「『春藍』級のコストを下げた量産型の生産は可能です」

男の名は将和の同期である牧野滋造船中佐だった。牧野中佐はかつて『ヤマト』『アンドロメダ』等の設計に携わっており『春藍』級の設計も彼がしていたのだ。

牧野が新たに提示したのは確かに『春藍』級の量産を意識した戦艦であった。主砲は四連装から三連装に戻し艦首波動砲も三連装から単装に戻っていた。

「それで肝心のコストは？」

「『春藍』級より21%の削減です」

それだけでも財務省は削減出来た事に一安心だったが、牧野の話はそれだけではない。

「削減はしましたが有事にはそれは必要ありません」

「ではどうすると？」

「主砲や波動砲は提示したそのままです。その代わりに、防御力に重点を絞ります。つまりは不沈艦とするのです」

確かに『春藍』級に比べたら砲火力は多少は下がっただろう。だが牧野は『アンドロメダ』の最期を見ていた。政府の命令とはいえ、自動化し過ぎたのは牧野の痛恨のミスであった。その為、乗員を増やしてその分の防御力を高めたのである。

以下は説明である。武装は三連装51センチ陽電子衝撃砲を4基にしているがターレットは拡張しやすいように大きめにされていた。その為各艦は2218年の改装で50口径56センチ三連装陽電子衝撃砲を搭載していたのである。ただし、『三笠』は試作という形ではあるが就役当初から56センチ陽電子衝撃砲を搭載していた。

副砲は新型巡洋艦（『アラスカ』級）の主砲である30.5センチ陽電子衝撃砲を採用しており更には対空射撃も可能であった。

最大の武装と言えば艦首波動砲であるがこの波動砲、口径は『ヤマト』の200センチより倍の500センチを採用していた。

三連装と比べたら……どっちもどっちだが財務関係者に言わせたら一門のがコスト削減と思うので結果オーライである。

そして波動砲だが集束・拡散の他にも試験的に『三笠』には拡大型も搭載していた。これは拡大型の発展型であり後の『バイエルン』級主力戦艦にも搭載される。

話を戻す。エンジンは波動エンジンだが三つ搭載している。それが『春藍』級で採用されたのが大型次元波動エンジン一つと後に新型

巡洋艦(『アラスカ』級)で採用される中型次元波動エンジン二つである。

これは『春藍』級が大型次元波動エンジン二つ搭載したのに対しコスト削減で大型のは一つとし左右に中型エンジンの炉心を取り付けた形である。その為噴射口は一つだけである。だが、中型エンジンを二つ取り付けているので機動力の低下は僅かに済み、波動砲を撃つても中型エンジンからのエネルギーで供給すれば問題なかったのである。

防御力については『三笠』は防衛軍の中で二番目の堅牢性能である。一番は後にドイツ宇宙軍が建造配備した『ビスマルク』級である。(ドイツ宇宙軍はこれを4隻も建造する)装甲は通常のと、装甲に帯磁性特殊加工をしたモノ。ガトランティス戦役で終盤に発生した超巨大戦艦による砲撃で津波が発生して損傷した記念艦『出雲』『加賀』『三笠』トラック諸島で戦没した『武蔵』の一部解体した資源をも使用した三重装甲としており更にはそこに波動防壁も加わるので実質的に四重装甲でもある。

この装甲をした事によりちよつとやそつとでの航行不能や大破はしなくなったのである。特にディングル戦役時にはディングル軍が使用するハイパー放射ミサイルを五発命中しても重要部分の装甲は破壊されず放射能汚染だけで済み(直ぐにコスモクリナーDで除去)尚且つ戦闘から離脱する事は無かったのである。

なお、諸外国でも同級クラスの建造を開始し北米では『Iowa』『モンタナ』、欧州では『フッド』『ウォースパイト』『マッケンゼン』『ソビエスキー・ソユーズ』、極東では『三笠』『長門』の8隻が建造され各艦隊旗艦に配備されるのである。

また、当初は8隻だったが太陽危機では更に『リットリオ』『リシユリユー』、ディングル戦役時では『陸奥』『ミズーリ』が建造配備される事になる。

(取り敢えず56サンチに手直しました)

再度アンケートのお知らせについて

今度は何のアンケートやねんって思いですけども……まあヒロインの事なんですね。

リメイク前に管理局の魔王（N氏）をヒロインの一人にしていたんですが……まあリメイク前、最後の話で敵を殺すような描写をさせてから批判が続出したのでそのまま御蔵入りしたんですが………やっぱり出したかった気持ちはあるんですね。

でもそうなるかと折角ボツして復活したプレシアが枠を無くしそう……あ、ドゥーウエは別ヒロイン枠になったので。
てなわけでアンケートになります。

- ・ N氏のヒロイン枠復活
- ・ N氏ではなくF氏のヒロイン枠昇格
- ・ N氏、F氏ではなくH氏のヒロイン枠昇格
- ・ 無しで

一先ずはこの形でアンケートします。（本来はね、年増のR氏だったのよね。でもCVが被るからボツになった）

第三十二話

「敵艦隊の全滅を確認しました!!」

「……引き続き、ガミラス星にいる敵採掘船団を攻撃する。しかし、まずはガミラス星退去の勧告を出す」

「宜しいのですか総統?」

「奴等を許す事は出来ない……しかし、ガミラス星を壊す事なくするとすればこれくらいしかあるまい……」

「はっ……心中お察します」

デスラーの言葉にタランはそう答える。直ちにガミラス星で採掘している船団にガミラス星退去の勧告を出した。採掘船団も護衛艦隊であるデーダーの艦隊が全滅した事で退去を決意しガミラス艦隊にそう通告し作業機械等の全てを破棄して二時間後にはガミラス星から離脱するのである。

(……一先ず第一ラウンドは此方の勝ちか。ガミラス星も破壊されずに済んだしな……)

『伊勢』の艦長席で将和はそう思う。原作ではガミラス星での戦闘で火山活動が再誘発して噴火の連続で結局ガミラス星は爆発してしまっているのである。

「各艦の被害は?」

『ロイヤルオーク』以外は無傷です。『ロイヤルオーク』は左舷の損傷で中破しています」

「……そうか……(もしかしたらこいつは………使えるか……?)」

薫からの報告に将和はそう思案する。そこへウーノが将和に声をかける。

「司令、ガミラス艦より通信が来ています。メインパネルに切り替えます」

「ん」

将和は頷きウーノは通信回路を開いてメインパネルに切り替える。メインパネルには二人の男が映し出された。

「貴方は……」

『……大ガミラス帝星総統アベルト・デスラーだ』

『同じく副官のガデル・タラン少将』

「……地球防衛軍イスカンドル派遣艦隊司令官の三好将和少将です。まさかあのガミラスの総統に会えるとは思いませんでした（ウヒョー（。▽。）!?! 生デスラーと生タランだ?!）」

内心、将和は原作を知るからこそ興奮していた。しかし、将和は不審に思う。『さらば』を基準にヤマト世界だからこそデスラーは死んでいる筈だったのだ。

「時にデスラー総統、一つ質問があるが宜しいか？」

『……何かね?』

「実は『ヤマト』からのデータでデスラー総統は最期に、宇宙に投げ出されたと記載されていたが……」

『ほう……古代はそこまで詳細に纏めていたか。フム、確かに私は宇宙へ二度目の身を投げた。だが私はタラン達に助けられ蘇生手術を受けた』

「……そうか、彗星帝国の医療技術……」

『ほう……君は中々利口なようだ』

「光栄ですな。成る程、それなら理由も分かる。とても良い答えです。『では私からも質問をしよう……古代は……』『ヤマト』は来っていないかね?』

『……』

デスラーの言葉に将和はどう言っていないか分からなかったがどうせ直ぐに分かる事だから将和は言う事にした。

「……『ヤマト』はズオーダー大帝が乗艦していた超巨大戦艦にテレサと共に体当たりをした。無論、古代とその妻である森……古代雪も亡くなったよ……」

『……』

将和の言葉にデスラーは目を閉じ幾分かの時が流れて再び目を開けた。

『そうか……そうだったか……』

「……………」

『ミヨシ……と言ったな。二人の最期を伝えてくれてありがとう』

「いえそんな……」

『何れ……何れ地球に赴き二人の墓標を訪ねたい』

「分かりました。伝えておきます」

『ウム……だが今の問題は敵艦隊の動向であろう』

「はい。イスカンドルのスターシア女王と古代守はまだイスカンドルに？」

『ああ。説得をして二人を乗艦させたいところではあるが……』

まず以て説得は無理だろう。星の女王としてのプライドがあるのだ。それは原作も然りゲームでも然りである。

『あの艦隊……また来ると思つかね？』

「来るでしょう。恐らく次は大艦隊かもしれませぬ」

『フツ、そこは臨むところだ』

（まあ多分……コケシは来るだろうな）

コケシこと自動惑星『ゴルバ』は必ず来るだろう。『ゴルバ』にはメルダースも乗っているから100パー来るのは間違いない。

（まあ一月、二月……くらいかもな）

将和は長丁場と計算してそれくらいの試算を出す。此処に駆逐艦を以て来なくてマジで良かったくらいである。

「デスラー総統、本格的な作戦会議をしたいと思うので直接其方に向いても宜しいですか？」

『……………君は良いのかね？』

「過去の経緯はどうする事も出来ません。ただ今言えるのは……変えられるのは未来だけです」

『未来……か。分かった、来たまえ』

将和の言葉にデスラーは深く頷いた。斯くして将和はデスラーの乗艦である『デウスーラ三世』に連絡艇で向かうのである。なお、供

にはチュン参謀長、薫、トーレ、スカリエツティが同行し案内人にはメルダが付き添うのである。

「……………」

『デウスーラ三世』に乗艦した将和達は作戦室に案内はされたがまだそこにはデスラーやタラン達はおらずただ待っていた。そこへデスラーがタランを伴って入ってきたのである。

「いや遅れて済まない。スターシアにもう一度回線を繋いだがやはり拒否をされてしまった」

「そうですか……………」

そして将和はデスラーに対して敬礼を、デスラーは返礼で返した。

「地球防衛軍イスカンダル表敬派遣艦隊司令官の三好将和少将です」

「同じく参謀長のチュン准将です」

「同じく情報参謀の新見少佐です」

「同じく技術参謀のジェイル・スカリエツティ特務少佐です」

「同じく戦艦『伊勢』戦闘班長のトーレ・スカリエツティ特務中尉です」

「大ガミラス帝星の総統アベルト・デスラーだ」

「副官のガデル・タラン少将です」

タランはそう言って将和達を椅子に座らせ将和達も椅子に座る。

「単刀直入に言おう。ミヨシ司令、どう思うかね？」

「一月、二月の長丁場になるのは間違いないでしょう。そして奴等は援軍で来る筈です」

「根拠はあるのです？」

「此処に来る前、ベテルギウスで奴等の採掘艦隊と遭遇して一戦を交えている…………太陽系方面まで進出している奴等だ。来るのは確実と自分は認識しています。ただ、奴等がいつ来るのかまでは分かりません」

「フツ、そこまで分かれば君は魔女の類いだろうな」

（実は直ぐだったりして…………）

デスラーはそう言って苦笑するが将和は内心でそう思うのである。

「デスラー総統、質問があります」

「何かな？」

「もし、奴等が再度侵攻してこのガミラス及びイスカンドルの付近で戦闘となった場合、万が一にガミラス星等に砲雷撃等の誘爆が発生し星が爆発する……そういう事はありますか？」

「……………」

将和の言葉にデスラーは表情を変えてタランが口を開く。

「それはつまり……戦闘の影響でガミラス星かイスカンドル星が爆発する事も貴方は考慮している？」

「……最悪の想定をしているまでです（睨むなつてデスラー……怖いぞ）」

ジロリと睨まれる将和は内心、冷や汗を掻きつつも口を開く。

「此方に来る途中で参謀長と思った事なのですが……ガミラス星とイスカンドル星は双子星、互いに引力に引かれ合っていると認識しているのですが……」

「……そうか……そういう事か」

将和の説明にデスラーは目を見開いて納得した。

「互いに引力で引かれ合っている……ならばどちらかが爆発した場合……軌道を外れて暴走してしまう可能性がある。いや暴走するだろう」

「ガミラス側がその認識ならば我々も合っているでしょう。もし暴走した場合、どちらかの大気は剥がれてしまい生物が生存する確率は非常に少なくなります」

デスラーの言葉にチュン参謀長はそう補足するように口を開く。

「むう……それは厄介だな……」

「いえ、総統。暴走を止める手段はまだあります」

「何？ タラン、それは本当か？」

「はい。ただ非常手段ではありますが……」

「構わん、申せ」

「はっ」

デスラーの問いにタランは力強く頷いた。

「地球に一時期使用した遊星爆弾の原理を利用するのです」

「遊星爆弾……」

タランの言葉に薫は首を傾げる。将和達地球側からすれば遊星爆弾は放射能を含んだ小惑星である。タランは立ち上がり説明をする。「遊星爆弾の原理はまず小惑星の前方にマイクロブラックホールを作ります。そしてマイクロブラックホールは質量誘導により小惑星に連動するエネルギーを加え遊星爆弾とします」

「……そうか、そのマイクロブラックホールとやらで星を牽引するというのがか」

「その通りだ」

合点がいったスカリエツティの言葉にタランは頷く。

「しかしタラン、マイクロブラックホールの材料となる超質量物質を今は有していない。かつてのガミラス領であったサファイア戦線跡にはまだ超質量物質が多数残っている筈だが……」

「はい、その為採取に赴く必要があります」

「良かろう。ならばタラン、お前が行くのだ」

デスラーの言葉にタランは驚愕する。

「そんな……このタランに総統を残して行けと申されるのですか？

此処に留まっていれば敵艦隊が来襲する可能性は高いです。その事を考えるとサファイア戦線跡には総統が向かわれるのが宜しいかと思われまます」

「ならん。私は此処に留まり我がガミラス星とイスカンドル星を見続けていなければならないのだ」

「しかし総統……」

「ガミラス星とイスカンドル星はサレザーの太陽を回る二連星だ……謂わば我等は兄弟!! その二つを例え一時足りとも眼を離したくはないのだ……」

「総統……」

「それにタラン、君はかつてサファイア戦線で戦っていたではないか？ ならば私が赴くよりサファイア戦線を知っている君が赴くのが利に叶ってはいる。タラン……お前にしか頼めぬのだ」

「……分かりました」

「……フフフフ……」

そしてデスラーは苦笑する。

「皮肉なものだなタラン。地球を我がガミラスのものとするために造り出した遊星爆弾の技術がガミラスとイスカンドルを救うかもしれないとは……」

「総統……」

「タラン、サファイア戦線跡へと向かう準備をしろ」

「はっ……」

「タラン……頼んだぞ。無事、帰ってきてくれ」

「はっ、総統こそ御無事で……。このタラン、必ずや任務を果たして帰ってまいります!!」

「ウム」

(急な浪花節でワロタが……。この二人はこれで良いんだよなあ……)

デスラーとタランのやり取りに将和はウンウンと頷くのである。

その後、タラン率いる艦隊はサファイア戦線跡に向かいデスラーと将和の艦隊は引き続き宙域に留まるのである。

『何？ デーダーが戦死し第一機動艦隊が全滅だと？』

「はっ、ガミラス艦隊に加え新たな敵艦隊が現れたと避難してきた探掘船団からの報告です」

『新たな敵……。してその正体と分からぬという事か？』

「いえ、判明しています。銀河系宇宙の外れ第30等級太陽系の惑星『地球』に所属する艦隊との事です」

『地球か……。フッフ、何れ見る事もあるうよメルダース。ところでイスカンドリウムはどうなっている？』

「は、はい。かくなるうえはこの私めが『ゴルバ』を以て小癩な敵どもを撃滅し必ずや採掘を完了して御覧にいきます」

『ウム……。吉報を待っているぞ……』

そして物語は最終局面に掛かろうとしていたのである。

第三十三話

「三好長官、只今アメリカより帰って参りました」

「おお芹沢。待ってたよ」

その頃の地球連邦、横須賀にある地球連邦軍宇宙艦隊司令部では正信がアメリカから帰国した芹沢を労っていた。

「それで……奴さんはどうだったかね？」

「八割程の建造状態です。このままいけば予定通りの二ヶ月後には竣工するでしょう」

「戦艦『アリゾナ』……か。性能的には良いと思うが……」

「名前が……その……」

「真珠湾で爆沈しているからなあ……ワシの祖先がやったとはいえ負い目はあるがのう」

芹沢から貰った書類を見ながら正信はそう呟く。正信からしてみれば御先祖様が真珠湾を叩いた時にやられた印象があるのでどうも不安であったのだ。

「ですが性能は優秀です。既にこれを元に『ドレッドノート』級戦艦に代わる新たな戦艦の開発もアメリカ主導でなりました」

「相も変わらず大国は戦艦は譲らん……」

芹沢の報告に正信は溜め息を吐いた。地球連邦各国では各艦艇のコンペを毎回行っており芹沢はそのコンペに参加のためにアメリカに行っていたのだ。

ちなみに前回のコンペで採用されたのが以下の通りである。

『ドレッドノート』級戦艦（イギリス案）

『吉野』級巡洋艦（日本案）

『フレッチャー』級駆逐艦（アメリカ案）

『撫子』級護衛艦（日本案）
『天塩』級パトロール艦（日本案）

そして今回決まった艦艇が以下の通りである。

『アイオワ』級戦艦（アメリカ案）
『アリゾナ』級戦艦（同上）
『バイエルン』級戦艦（ドイツ案）
『プリンス・オブ・ウェールズ』級戦艦（イギリス案）
『ハルバード』級自動大型艦（ロシア案）
『アマリリス』級自動中型艦（ドイツ案）
『シャルンホルスト』級大型巡洋艦（ドイツ案）

次期主力戦艦は『アリゾナ』級を元にした『バイエルン』級が採用となり各国が建造していた戦艦は統一化を図るために建造予定の艦艇のみとなった……がその後の銀河系動乱で結局は各国も建造していた独自の戦艦を再建造したりするのである。

「それで都市帝国の残骸はどうすると言っている？」

「やはりある程度の再構築はさせて補給と移動が可能な要塞補給基地にさせるのが一番と決定されました」

白色彗星戦役後、月軌道では都市帝国要塞の残骸が未だに浮遊していた。無論、空間騎兵隊等が乗り込んで使える武器や資源等は再利用していた。その他にも都市帝国要塞が崩壊の時に取り残された民間のガトランティス人の遺体等も収容はしていたがまだまだ多くの遺体が要塞内部にあると想定されており遺体回収には時間が掛かるのが見積もられていた。

その中でも要塞をどうするか毎回の議題に上がっていたが漸くは決着が付きそうではあった。

「一先ずは火星と木星の間にあるアステロイドベルトまで曳航をしそこで岩石や波動エンジンの取り付け等を行う予定です。……まああくまでも予定なので」

「その分の予算がなあ……」

「艦艇の予算が無くなりますからな」

予算に頭を悩ませられる正信達であった。そして将和らであったが……。

「やはり離れる事は出来んか守?」

『済まない三好……俺達はイスカンドルの住民だから離れる事は出来ない』

デスラーとの会議が終わってから翌日から将和は『伊勢』からイスカンドルと通信をしていた。これまでも将和やデスラーがイスカンドルに通信を入れて危険だから退去を促していたがスターシアと古代守は退去を拒否していた。

まあ将和も予想はしていたのでこれ以上の説得はしないつもりだった。

「よし分かった。これ以上の説得はせんよ古代」

『三好……』

「というのも当てがありそうなんだよ古代」

『どういう事だ?』

「トチローと話していたんだがガミラスの物質縮退技術を使えばイスカンドリウムの組成自体を変化させられるんじゃないかと思っただけ。無害な安全な物質にな」

『か、可能なのか三好?』

「トチローがガミラスの技術士官と話しているところだよ」

なお、この時点でトチローとスカリエツティはガミラスの技術士官リーリヒャルト・フラウスキー少佐と会談しており計算上では変化させれる公式を教えていた。無論、デスラーもこれを認知しており協力していたのである。

『ありがとう三好』

「気にすんな、同期だろ?」

『ありがとう……そうそう、実は預かってもらいたい人がいるんだ』

「預かってもらいたい人?」

『ああ。今はリハビリ中だから後で紹介するよ』

古代守はそう言って一旦は通信を切る。

(まあ問題はそれまでにコケシが来る事は想定しているしな……)

それは現実になる。更に翌日、サレザー系の入口にて哨戒していたガミラスの警戒部隊が敵艦隊と遭遇したのである。

「それで警戒部隊からの連絡は？」

「……『敵超大型艦及び大艦隊接近』との連絡以降は途切れた模様です」

「総統……」

「奴等め……一気に攻めとるつもりか……」

この時、警戒部隊が発見したのがメルダース大将率いる『ゴルバ』とマゼラン方面第三艦隊であった。第三艦隊はメルダースが直卒を取り巡洋艦72隻、護衛艦120隻で編成されていたのだ。更にその後方には採掘船団も引き連れていたのだ。

「……惑星『アスタル』を絶対防衛圏とする。地球艦隊にもそう伝えよ」

「ハッ、直ちに」

イスカンダルとガミラスの隣に位置するアスタルで迎え撃とうとデスラーは思っていたのだ。デスラーからの電文に将和も直ぐに理解した。

「先手を打つ。航空隊は発艦準備急げ!! 『メリーランド』と全巡洋艦は拡散波動砲発射用意!!」

「了解!! 航空隊発艦準備急げ!!」

将和の言葉に玲らパイロット達は格納庫に降りてコスモタイガー2に乗り込むのである。

「……『ロイヤルオーク』に連絡してくれ」

「何と……?」

「内容はー」

斯くして両艦隊は惑星『アスタル』宙域にて暗黒星団帝国艦隊を迎え撃ったのである。

「砲撃始め」

「撃ちい方始めエ!!」

地球・ガミラス艦隊は距離五万宇宙キロで砲撃を開始する。何隻かに命中して爆沈するがそれでも暗黒星団帝国艦隊はめげずに砲撃をしこれまたガミラス艦艇を撃沈させてくる。

「超大型艦がないぞ……」

「速度が遅いとか……?」

「まあいい。『メリーランド』及び巡洋艦隊は拡散波動砲発射せよ!!」
9隻の艦艇が拡散波動砲を発射する。9発のエネルギー弾は途中で幾つものエネルギー弾に分散して暗黒星団帝国艦隊に襲い掛かるのである。

『ウワアアアアアアアアア!!』

「……成る程。あれがクーギスらの生き残りが報告していた超エネルギー砲か……」

味方艦艇からの通信の傍受をしていたメルダースは感心するように頷く。メルダースが乗艦する『ゴルバ』はまだサレザー系の入口にいたのだ。というのももより戦況を全体から確認するがためである。

それのおかげか超エネルギー砲――拡散波動砲の威力を確認する事が出来たのだ。

「だが『ゴルバ』の装甲には問題無かろう。ワープ準備に入れ、奴等の目前に出てやる」

「了解しました。直ちにワープに移行します」

斯くして『ゴルバ』はワープするのである。その一方で地球・ガミラス艦隊は暗黒星団帝国艦隊の八割を撃沈する戦果を収めていた。

だが将和は『その後』を知っていたので警戒はしていた。

(遅い……もしかしてコケシに何らかの不足の事態でも起きているのか? それならぶっちゃけ良いんだけどなあ……)

そう思う将和だったがレーダー手が急に呟いた。

「重力震……?」

「どうした?」

「あ、はい。敵艦隊と我が艦隊の中間付近で重力震……ワープアウト反応があります!!」

「何……? (来たか……)」

そしてワープアウトしてきた物体——『ゴルバ』にデスラー達は呆気にとられる。そこへ『ゴルバ』から通信が入ってきた。

『地球とガミラスの艦隊よ。お見事な戦いぶりだった』

「貴官は何者か？」

『私は暗黒星団帝国マゼラン方面軍総司令官のメルダース大將だ。我々が欲しいのはイस्कンダルにあるイस्कンダリウムだ。これ以上邪魔立ては許さん』

表情は穏やかなメルダースであるが目はそうではなかった。

「ちなみに……イस्कンダリウムは何に使用するつもりで？」

『我が帝国が現在戦っている宇宙間戦争に必要なエネルギーだ。それさえ手に入ればイस्कンダルに用は無い。お前達は即刻立ち去れ』

「残念ながら断る」

『何……？』

メルダースの言葉に将和はそう返すとメルダースは表情を歪める。「残念ながら貴官達が此方に来る間にイस्कンダリウムとガミラシウムの組成を変化させてね。安全無害な物質に変えさせてもらった」

『何……だと……』

将和の言葉にメルダースは驚愕しつつも将和とデスラーを睨み付ける。

「とういわけなのでさっさと帰ってもらいたい。後、戦争の相手が白色彗星のガトランティスなら応援するぞ」

『……あくまでもそう邪魔立てをするなら此方も容赦はしないぞ。ちなみに相手はガトランティスも含まれている』

「うわ、メチャクチャ応援してえ。ガトランティスは滅びろ、慈悲は無い」

「司令……」

『……………』

将和の言葉に薫は表情をひきつらせ、デスラーは何とも言えない表情をしていた。

『それはさておき……容赦はしない。そう警告したからな』

そう言つてメルダースは通信を切ると地球・ガミラス艦隊に対し攻

ンに向けて砲口が開いた。そして『ゴルバ』の主砲が発射されマザータウン付近に着弾したのである。

「さあ……二人の最期だ。よく見ている」

勝ったと思っていたメルダースであった。そしてそのチャンスを将和は見逃さなかった。

「今だ!! 『ロイヤルオーク』を最大戦速で突撃させろ!!」

「了解!! 『ロイヤルオーク』波動防壁艦首方面に最大展開!! 最大戦速!!」

デスラーが突撃を命令する前より早くに将和は動いた。中破していた戦艦『ロイヤルオーク』の乗員を密かにパトロール艦の『天塩』や『デンバー』等に移乗させ無人とさせていたのだ。

「目標はあの砲口だ!! あの砲口が閉じる前に体当たりだ!!」

将和の命を受けた無人の『ロイヤルオーク』は最大速度で宙域を駆け抜ける。

「あの愚か者……砲口に突っ込んでくる気か!? 主砲発射を急げ!!」

メルダースはそう叫ぶが主砲が発射される前に『ロイヤルオーク』は砲口に体当たりする事に成功し砲口の内部にいた暗黒星団帝国の兵士達を薙ぎ倒すのである。

「駄目です、主砲が撃てません!?!」

「ぬウツ?! 急ぎ取り除くのだ!!」

メルダースはそう叫ぶ。しかし、将和はそれだけでは終わる事はさせなかった。

「山崎機関長オ!!」

「はい、波動砲……収束波動砲は何時でも撃てます!!」

「よし、俺が撃つ!! ターゲットスコープオープン!! 目標、『ロイヤルオーク』!! 対シヨック対閃光防御!!」

艦長席から発射トリガーが出てきて全員が対閃光防御のゴーグルを付ける。

「発射10秒前……8……7……6……5……4……」

『止せ、止めるのだ。分かった、この方面からは撤退する!! 約束しよう!!』

第三十四話

『この度は何と言って良いのか……』

「いえ、それには及びませんスターシア女王」

『ゴルバ』を波動砲で倒した後、将和は改めてスターシアらに通信を開いた。

「それで……現在、イスカンダリウムの安全無害化の物質に変換中でありませんが……本当に宜しかったのですか？」

『……構いません。争いの元になるモノが一つでも無くなれば……イスカンダル人として嬉しい事はありません』

思うところはあるだろう、だがイスカンダルの女王としてスターシアはそう言う。

「分かりました、全力を尽くします。それと古代」

『どうした三好？』

ヒョコと出てきた古代に将和はニヤリと笑い日本酒が入った一升瓶を艦長席の下から取り出す。

「久しぶりに飲もうぜ。あの出撃した時以来だろ？」

『……そうだな。飲もうか』

ニヤリと笑う将和に古代も笑みを浮かべるのであった。なお、飲み の事を記載しておくとして古代は将和だけが来ると思っていたかまさかの薫も同行していた事に驚きを隠せず狼狽していた。

狼狽する古代に薫はクスリと笑い「大丈夫よ。だって今は……」
そう言つて将和に抱きついて笑みを浮かべ口を開き「こういう事なのよ」とそう言うのである。

古代もその言葉に安堵の息を吐いたのもつかの間、薫はスターシアに「この人の元恋人なんですけど、取り敢えず一発この人殴つていいですか？」の問いにスターシアも何かを察したのか「勿論ですわ」と満面の笑みを返しそのまま薫が古代に右ストレートを叩き込むので

ある。

なお、薫は「あー、これで長年の想いはスッキリしたわ。サヨウナラ守」と満面の笑みを浮かべるのであった。

「……女って怖いな……」

「……同感と言っておこう……」

将和の呟きに飲みにお邪魔していたデスラーはそう返すのみであるが将和はあつと思う。

(そーいや松本漫画では妻子がいたなこいつ……)

スターシアを想っているデスラーだがよくよく考えれば浮気に近い事であった。取り敢えず将和も前世の事もあり人の事も言えなかったので黙っておくのであった。

それはさておき、イスカンドルの滞在は約一月程でありトチローやスカリエツテイらの努力によりイスカンドリウムとガミラシウムは安全無害な物質に変換へ完了したのである。

「イスカンドリウムとガミラシウムは安全無害な物質になったぜ。これでもう奴等も二度と攻めてくる事はないだろ」

ニカツと笑うトチローである。

「ん。それは一安心だな」

「そういうこった」

『三好』

そこへデスラーからの通信が入った。

「これはデスラー総統」

『フラウスキー少佐からの報告が届いてな……地球には……君達には感謝もしきれない』

「そんな事はありません」

『いや事実だ三好……礼まで行かないかもしれないがガミラスの技術者等を地球に派遣も視野に入れよう』

「それはありがとうございます (総統からの直接の言葉だから案外現実化するな……)」

そう思う将和である。

『だがガミラス星の寿命は変わらない。移民は継続するが……一段落

すれば艦隊を派遣して一定の守備をするしかあるまい』

(そんな余裕、地球には無いです)

『心配するな、うちからの話だ。流石に今の地球からは……無理であるろう?』

「察して頂いてありがとうございます」

デスラーの言葉に将和は頭を下げる。

『ではスターシア、我々はそろそろ行くとする』

『……行くのですかデスラー?』

『別れではないスターシア。これはガミラスと地球、イスカンドルの新たなる旅立ちなのだよ』

『デスラー……気を付けて』

『……ありがとうございます。三好、君達も気を付けてな』

「ありがとうございますデスラー総統」

『フッフ。敬語は止したまえ、君になら構わない』

「そうか……気を付けてなデスラー」

『ああ……三好、お前の事を私は決して忘れはしない……』

デスラーはそう言って通信を切る。

「ではタラン、行くでしょう」

「ハッ、全艦発進せよ!!」

そしてガミラス艦隊は順次出発していくのである。

(……あれ? このやり取りってまさか俺、古代の代わりなのか?)

それは今更過ぎではないかと思う。(全くだ)

「……よし、俺達も準備出来たら地球に帰還するかあ」

「あ、司令」

「どうした新見?」

「取り敢えずもう一発古代君を殴っても良いですか?」

「……加減はしとけよ」

「お、なら俺も写真取りに行こ。真田の墓前に添えてやるか」

「わあ、面白い。良いぞやれやれ」

何故か同期組が盛り上がる『伊勢』の艦橋であった。それはさておき、将和達は再度大宮殿『クリスタルパレス』に赴いた。薫が守を再

度殴るのは置いて……守が言っていた保護した人の収容をするためだった。

「いや、意識が回復しても本人はあまり話さないから俺もスターシアも困っていたんだ」

「しかし……急に現れたとなあ……」

病室まで守が将和らを案内する。なお、守の両頬が赤く腫れていたのは言わぬが仏かもしれない。そして病室に入ると一人の女性が手すりに掴まって歩いていた。

恐らくはリハビリの一環なのだろう。だが、将和と同行していたスカリエツティは女性を見て眼を見開いた。

「なあ……スカさん……？」

「ああ……そうだな」

スカリエツティはそう言ってツカツカと女性まで歩いていくと誰か来た事に気付いた女性が顔を上げる。そしてスカリエツティを見て此方も眼を見開いたのである。

「ド……ドクター……？」

「……生きていたんだな……『ドゥーエ』」

驚く女性を尻目にスカリエツティは死に別れていたと思っていた自身が生み出した二人目の戦闘機人であった。そこからはウーノやトーレ達とも再会するドゥーエ、それを尻目に将和は古代守に視線を向ける。

「それで？ いきなり現れただったな？」

「あ、ああ。スターシアと散歩をしていた時に倒れていたのをスターシアが見つけて治療室で治療していたんだ。彼女、真田と同じく機械の部品が至るところに点在していたからそれを聞こうとしても名前だけは答えてくれるけどそれ以外は喋ろうとしなかったからな」

「まあ……そんな事だろうな……」

そう言っただけでウーノ達と再会の抱擁をするドゥーエを見る将和であった。

その後、地球艦隊も帰還準備出来たので地球艦隊はドゥーエを収容してイスカンドルを発進するのである。

「全艦発進せよ。目標は地球だ」

そしてスターシアと両頬がまたしても紅く腫れた古代守が見守る中、将和らの地球艦隊は発進していくのである。どうやら薫とスターシアにも叩かれた模様であった。

(さてさて……次はどうなる事やら……)

今回はガミラス星の崩壊は元よりイスカンダルの破壊とスターシアの命を救う事が出来た。地球艦隊の代償は主力戦艦1隻と複数のコスモタイガー2であった。

(問題は暗黒星団の重核子爆弾なんだが……何とかしないとなあ……)

そう思う将和であった。そして地球では、正信の元に1隻の戦艦の凶面が机に置かれていた。

「フム……これが新型戦艦の凶面と？」

「いえ、正確には拡大改良とした戦艦です」

正信の前に立つのは牧野茂造船中佐であった。彼はガミラス戦役中に福田造船中将と共に『ヤマト』を建造した事で有名だった。現在は小型艦艇の設計を担当していたがやはり戦艦の設計に血が騒いだのだろう。『アイオワ』級主力戦艦の凶面を入手するとあれやこれやと僅か一週間で新たな戦艦の凶面を完成させて正信の元に持ってきたのだ。

「次代の主力艦艇のコンペが採用する前、各国が独自で設計建造する戦艦がありましたね？」

「ウム。コンペのが採用されてからは建造中のは就役させてそれ以降は主力艦艇に注ぐ筈だが……？」

「実は日本もそれに参加していて建造中という事にしましょう」

牧野の言葉に正信は一瞬啞然とするも直ぐに笑いだした。

「ファハッハッハッハッハ。成る程、貴官は『ヤマト』と同じく象徴を造れと言うんじゃない？」

「象徴ではありません。技術の継承です」

「成る程……だが『アンドロメダ』級の事例もあるじゃろ？」

「あれは真田と共に反対したのにそのまま建造を承認させた者どもの

自業自得です」

牧野は『アンドロメダ』級の建造を巡って同期の真田と共に反対をしていたが結局は押し切られてしまいその結果が撃沈という事だった。

「今、建造中の『春藍』は『アンドロメダ』の意地かね？」

「作り出してしまったのならそれを最良の形で終わらせたい。それが造船技官としての意地です」

正信の言葉に牧野はニヤリと笑う。牧野の表情に正信も笑みを浮かべる。

「……諸外国には上手く調整しておこう。なに、アメリカは五月蠅いかもしれんがイギリスとロシアを味方にすればアメリカも大人しくなるじやろう」

「ありがとうございます」

「じゃがの…っだけ……艦名は何とするのじや？」

「実はもう決めていきます」

牧野はそう言つて一枚の紙を正信に渡し正信は中身を見るとニヤリと笑う。

「フアハツハツハツハツハ。成る程のう……分かった、此方の事は任せておけ。お主は沈めにくい……不沈性能を高めた戦艦にするのじやよ？」

「勿論です」

牧野は力強く頷いたのである。そしてこの日、正信は諸外国の軍部要人と映像での会談を行い日本も独自の戦艦を設計建造していた事を表明した。諸外国も『春藍』と思っていたが正信の口から『春藍』とは違う事が言われた。

『ではその戦艦はどのくらいの建造率で？』

「フム。『春藍』を優先していたのでな、まだ7%なのじやよ」

実はまだ0%だったが正信は嘘をついた。諸外国の軍部要人らも『春藍』の建造率が98%と知っていたので成る程と納得したのである。

『ちなみに艦名は……？』

『まさか『ヤマト』ですか？』

「いやいや……『ヤマト』はあの艦しか無理と思うておる……『ヤマト』に代わる戦艦じゃよ」

『ほう。ですが『シユンラン』のコストを下げた艦隊旗艦級とはな……』

「諸外国らも保有していた方がよい……そう判断したまでじゃ。それに設計図のデータは渡しておる」

『確かに……。それで艦名は……？』

そう言つて正信は口を開いた。

「戦艦『三笠』。かつて日本の荒廃の一戦を輝かしい戦歴に変えたあの戦艦じゃよ」

改『春藍』級戦術指揮戦艦『三笠』、此処に建造が開始されたのであった。

第三十五話

「……………」

ジリリリリとケータイにセットした目覚ましの音が聞こえる。将和はゆっくりと目蓋を開けると見知った天井がそこにあつた。暫くの後、頭が覚醒してくると将和は身体を右横に向けた。そこには裸でスウスウと小さな寝息を建て寝ている玲の姿があつた。なお、左横には薫が高イビキをかいて寝ている。

(あー……そういや昨日入港したんだつたな……)

将和の艦隊はイスカンダルから約二月かけて帰還した。連続ワープもしていたがやはり暗黒星団帝国艦隊が奇襲をかけてくるかもしれないと用心をしての二月だったのだ。そして昨日、漸く地球に帰還し『伊勢』は呉宇宙軍港に入港したのである。

(時間は……もう7時か。10時には司令部に到着しとかないな……)

将和はごそごそとベッドから抜け出して艦長服に着替えてソツと艦長室を出るのである。

「おはようございます司令」

「おはようですチュン参謀長」

「食事はどうされますか？」

「移動中に食べるよ。サンドイッチが良いかな？」

「サンドイッチが良いですね。私のオススメはタマガゴサンドです」

「成る程。ならそれにするか」

司令部への出頭には将和とチュン参謀長だった。その為チュン参謀長も朝食用のパンを用意していた。

その後、将和とチュン参謀長は電車で横須賀の司令部まで移動する。

「モグモグツ……たまにはパンも良いな」

「でしよう？　時間が経ったパンもちよつと湯気に当てれば美味しくなりますからな……モグモグツ……」

サンドイッチを食べながらそう話す二人であった。そして司令部に到着すると二人は長官室に案内された。

「お来たか。まあ座れ」

「失礼します」

正信の言葉に二人はそう言ってソファに座る。

「二人に来てもらったのは他でもない。例の新たな敵の事についてじゃな」

「……長官は敵と認定しますか」

「まあ話し合えば別じゃがな。それに大統領は話し合えばと言っているが……あやつは白色彗星の時にどうなったか忘れとる」

正信は皿に盛られた煎餅をバリバリと食べながら茶を啜る。

「相変わらずの大統領嫌いですな」

「フン。たかが運が良い男なだけじゃな」

バリバリと煎餅を食べ終えると正信は将和に視線を向ける。

「そこでお前を呼んだわけじゃ」

「……皆目見当もつきませんが？」

「何を抜かすんじゃ……ホレ」

そう言つて正信は一枚の辞令書を机に投げる。それを将和が拾い中身を見る。

「ケンタウルス座方面艦隊司令長官に任命する……宇宙開拓をするところ？」

「表向きはな……じゃが裏は暗黒星団帝国への備えじゃな」

「幾らコンペで新型艦艇が採用されたかと言つてもまだ配備されてはないからな」

正信の言葉を補足するように芹沢がそう言う。

「ですがケンタウルス座は……」

「いや当てはあるのじゃよ……まあ接收したに近いかの」

正信の言葉に将和はピンと来た。隣に座るチュン参謀長も何かに気付いたようで先に口を開いたのはチュン参謀長だった。

「成る程。ガトランティスの置き土産ですか」

「その通り。パトロール艦等の艦艇でケンタウルス座を調べた時にガトランティスがとある惑星に基地を構えておつてな。もぬけの殻じゃったがそのまま再利用しようとな」

「既に軍も一個大隊規模の空間騎兵隊や警備隊を派遣しているが……やはり守備方面艦隊を編成した方が良いと判断されたのだよ」

「成る程……」

「艦隊と言つても現時点で出せるのは数が限られておるが……ホレ」

正信はそう言つて艦隊編成表を将和に渡す。

ケンタウルス座方面艦隊

司令長官 三好将和少将

参謀長 チュン・ウー・チャン准将

旗艦 『伊勢』（後に新型戦艦に変更）

戦艦

『伊勢』『メリーランド』『ナツサウ』『タイガー』

空母（鹵獲空母）

『ホワイトスカウト』『神鷹』『ヴィラート』『ハーミース』

巡洋艦

『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』

『妙高』『那智』『足柄』『羽黒』

『ウイチタ』『エメラルド』『五十鈴』『長良』

駆逐艦

『朝潮』以下24隻

パトロール艦 『手塩』以下8隻

自動戦艦

『エクスカリバー』以下18隻

自動駆逐艦

『A-1』以下48隻

「……大盤振る舞いでは？」

「今回の艦隊編成には無人艦艇の実験も兼ねておるからの。何々、ワシらの予想範囲内じゃよ」

「成る程……この新型戦艦に変更とは？」

「そのままの意味じゃ。新型戦艦に変更するからの。まだ建造中じゃが近いうちにはな……」

「どれくらいの建造率で？」

「お主達がイスカンダルに行っている時に決定しての建造じゃから……約40%程じゃな。牧野君が己の誇りと自信をかけてやっとなるわい」

「そうか、牧野がな……」

正信の言葉に将和は納得するように頷いた。将和の同期でもある牧野は『ヤマト』の設計や『雪風』の改装にも手を出していたりする。「一週間程の休暇をやる。それまでは地球を堪能しておくようにの。暫くは帰れんからな」

「……ガトランティス艦隊の襲来も視野に入ってますか？」

「シリウスとプロキオンにはまだ残留しているらしいからの。ひよつとするとひよつとするかもしれないから」

「了解です。上手く艦隊を運用します」

「フハツハツハツハツハ。お主がそういう玉かね」

「モートン少将やカールセンの親父に比べたらまだまだですよ」

「フアハツハツハツハツハ。二人には言っておこうかの。ああそれと参謀達も変わらんからな」

「おいそれと変えれませんわな」

そして出頭は終わり呉宇宙軍港に戻るのである。なお、一週間の休暇を聞かされた乗員達は喜びつつも次の任地に驚きつつ休暇を楽しむのである。

「やて……」

「あ、司令」

久しぶりに将和も休暇を楽しむ事にした。なお、薫は一度実家に帰

る事でありもう帰っていた。将和も準備して艦内の廊下を歩いていく時に玲、ウーノ、トーレと出会ったのである。なお、ドゥーエは防衛軍学校に入校する事が決まったので江田島にある防衛軍学校に行っていたのである。

「司令も休暇を？」

「休暇というか……戦場に行くんだけどな」

「戦場？ 宇宙にでも行くのか？」

将和の言葉にトーレが首を傾げる。

「いやあ……そうじゃないんだけど……それなら皆で来るか？」

めんどくさくなくなった将和は冗談半分でそう言うがまさかの三人は首を縦に振ったのである。

「えっ……来るの……？」

「誘ったのは貴様じゃないか」

「まあそうなんだが……」

「ちなみにドクターも暇だから行くと言っていただぞ」

「暇なんかい」

とまあ……将和も入れて5人は呉宇宙軍港から電車で広島まで向かいそのままリニア新幹線で大阪まで向かうのである。

「戦争するんは明日だから今日はホテルに泊まるか」

「司令はこの辺りを御存じで？」

「地元やぞ」

『えっ？』

何故か全員に驚かれる将和である。そしてその日はホテル泊後の翌朝0600、4人は将和に急かされる形でホテルをチェックアウトをする。

「何で朝早くから移動なんて……」

「早くしないと並ぶ可能性はあるからな」

「並ぶ……？」

「ああ」

そして一行は電車を乗り継いで海沿いの埋め立て地のところに降り立つ。

「目的地は彼処だ」

「……何か大きい建物だな」

そして目的地に着くとそこには大量の人が並んでいたのである。

「あちやー、少し遅かったか……」

「将和、これは何の集まりなんだ？」

「直に分かるよスカさん」

そして数分後、放送が流れた。

『御待たせしました。只今より第334回同人誌即売会を開催します』

「同人誌……」

「即売会……？」

「そうだぞ」

そして5人は建物の中に入るのであった。

第三十六話

「霊夢×魔理沙本完売しました!!」

「まだ紫×藍本は五部残っています!!」

『幽々子の近畿地方食巡り』本も後八部ありまーす!!」

「よし、次は彼処のブースに突撃するぞ!!」

「ま、まだ……行くのかね……」

「まだまだ目当ての本は取り押さえてはいないからな!!」

「此方で幽香本残り三部でーす!!」

「しまった!?! まだ幽香りん本が残っていたか!? 着剣(ワンコイン)

良し、突撃イイイイ!!」

「……元気だなあ……」

両手に紙袋を携えて突撃する将和にスカリエツティはそう呟くのである。そして外にある臨時コスプレ広場では何故かウーノとトーレ、玲がコスプレをして盛り上がっていた。

「何で私は腹ペコキャラなのかしら……」

「知らん。私は鬼のキャラだぞ」

「私は刀を持っているんだが……」

それぞれウーノは西行寺幽々子、トーレは星熊勇儀、玲は魂魄妖夢のコスプレをしているがカメコからは大いにウケていたりする。

「此方に目線をお願いしまーす!!」

「片目ウインクでお願いしまーす!!」

「刀を構えてくださーい!!」

それでも三人はカメコ達の要求についつい答えてしまうのであった。そして夕方……。

『お知らせします。本日の第334回同人誌即売会は終了とします』

『ワアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

放送に出展していた者や売り子、買い物しに来たオタク達は歓声を

あげて終わりを告げるのである。その様子を将和らは遠めで見ている。

「大丈夫か皆?」

「……私は明日筋肉痛だろうな……」

グツタリするスカリエツティだが何故か右手の紙袋には多数の同人誌があつたのは言うまでもない。

「しかし……活気はあつたな」

「ああ……ガミラス戦役から中止が相次いでいたから今回のが久しぶりの開催だったしな……」

そう言つて将和はチラツとウーノ達を見るが三人はまだコスプレをしていた。

「……着替えないのか?」

「仕方ないでしょう。貸してくれた人達が「似合うからそのままあげます」と言ってくれたのですから」

「ああ……あのサークルとは知り合いだから御礼でも言っておくかな」

ウーノの言葉に将和はそう答えて立ち上がる。

「さて、荷物は宅配便で送らせてメシでも食べに行こうか」

「ふむ……ならお好み焼きとやらを食べたいな。一度食べてみたいと思つていたのでよ」

「流石はスカさん、目ざといな。だがそこが良い」

その後、五人はお好み焼きで夜御飯を済ませるとホテルに向かい分かれて部屋でそのまま寝る……筈だった。

「……………」

ふと将和は目を覚ました。最初はトイレで起きたがトイレから帰ってベッドに潜り込んだがどうも寝付きが悪い。それに腹の虫が鳴いている。

「……0100過ぎか……仕方ない」

将和は隣のベッドで寝ているスカリエツティを起こさないよう着替えて部屋を出てホテルの受付で「少し出てくる」と一言告げてからホテルを出る。

「……………星が綺麗だな……………」

上を見上げたら星の海がそこにあつた。自身がつい先日までの星の海を航行していたのが信じられないくらいの夜空だった。

「あら、司令……………」

「ウーノ？」

後ろから声をかけられ思わず懐に入れた南部拳銃に手を沿えたが、振り返るとウーノだった。

「珍しいな、夜更かしか？」

「寝付きが悪かったの……………司令もですか？」

「奇遇だな、俺もだ。そして腹の虫が鳴いているからラーメンでもと思つてな」

「あら、なら御一緒しても？」

「エスコートをするのは久しぶりだがそれでも？」

「勿論構わないです」

やり取りに二人は思わず苦笑するが二人は近くにラーメン屋を見つけて入る。そこまで広くはない店舗だがテーブル席に案内されて二人はラーメンを注文する。

その後、ラーメンが来るまでは他愛ない話をし注文したラーメンが来ると二人は無言で食べるのであつた。

「ありやりやしたー」

二人はラーメン屋を出ると将和はどうするか悩みウーノに視線を向ける。

「バーでも行くか？」

「喜んで」

そして二人はこれまた近くのバーに転がり込む。丁度バーにはマスターしかいなかった。

「何になさいますか？」

「ジントニックで」

「私はキールを」

マスターが二人分のカクテルを作りそれぞれに渡す。そのまま将和とウーノは乾杯をする。

「何の乾杯かしら？」

「さあ……夜中に出会った事にかな」

「まあ……キザらしいわね」

「言うな……。俺も馴れてない」

「あらあら」

恥ずかしいのか視線を逸らす将和にウーノは笑みを浮かべカクテルを飲むのである。そして以てウーノはお代わりをする。

「それで……これからどうなるのかしら……？」

「どうなる……とは……？」

ウーノの言葉に将和はジントニツクに口を付ける。

「敵が……来る……かどうかよ」

「さてねえ……」

店内はマスターしかいないとはいえ、聞き耳を立てていると思つた将和はそうぼかした。だがその返答にウーノは少し気に入らなかつた。

「貴方は知る者……そうでしょ？」

「知る者だが俺が知る物語からは逸脱しているのは確かだがな。お前達やプレシア達の存在だからな」

将和はジントニツクを飲み干してラム酒をお代わりする。ウーノも張り合うようにラム酒をお代わりするがその様子を見て将和は眉を潜める。

「おいおい……ラム酒は……」

「貴方と張り合うならこうするべきかしらね」

そう言うウーノだが将和も仕方ないとばかりに将和はラム酒を飲み干してウオツカをお代わりする。

「悪いが……生憎と……酒は強い方なのでな」

「フツッ負けないわよ」

いつしか飲み干し合いをするようになった二人である。ちなみにマスターは我関せずを通して二人にカクテルを注ぐのである。

なお、勝利したのは将和の方である。一応ながら将和は前世で酒が好きな国の者と結婚していた事もありよくウオツカは勿論洋酒等は

飲まされていたので酒には強いのである。（作者本人は飲めるが身体が弱いが……）

「全く……お前を送るのは俺なんだぞ……」

ウーノをおんぶして歩く将和。ホテルまでおんぶして歩く道中、不意にウーノが口を開いた。

「左」

「ん？」

「左に行つて」

「へいへい」

突如の進路変更に将和は従い歩くがやがて立ち止まった先はホテルだったがそのホテルはワーオなホテルだった。

「……ウーノさん？」

「……私は貴方にそういった感情があるかは今の段階では分からないわ……でも、貴方とそうしたいという感情は少なからずあるわ」

将和の言葉にウーノは将和のうなじに鼻を押し付けグリグリとする。その行為を許可が出たと判断した将和はウーノを降ろすとそのままキスをする。

「ちゆるっ……んっ……んぐ……ちゆるるるっ……あむっ、んっんっ……じゆるっ、んは、んにゅっ……」

フレンチキスの筈が気付けば舌と舌が絡み合うデープキスへと発展していた。だが不意にウーノがペタリと地面に座る。

「どうした？」

「……今ので腰が抜けたわ」

「……ククツ」

「キヤツ」

将和の言葉にウーノは顔を紅くしながらそう答える。そんなウーノに将和は苦笑しつつもお姫様抱っこをしてウーノを抱えホテルに入るのであった。

「もっと腰を抜かしてやるよ」

「……お手並み拝見とするわ」

翌朝の0500には二人とも夜戦は終了して元々のホテルに戻っていた。ちなみに将和によるシャツシャツシャツドーンは三回はあった模様である（おい

「……ウーノ……」

「何、玲？」

「首もとに赤いマークがあるわよ」

「ッ!？」

ニヤリと笑う玲の指摘にウーノはハツとして慌てて首もとを抑えるが時既に遅しである。

「ウーノ」

「……何よ、文句でもあるのかしら？」

「いいや。むしろいつ来るのか薫と話していたところだったよ」

「クツ……薫にまで読まれているのは納得はいかないけど……」

「まあそれよりも……此方側によろこそウーノ」

「……歓迎はしてくれるのかしら？」

「むしろ大歓迎かな……二人掛かりでも腰が撃沈されるから早く三人目が欲しかったところよ」

「……やっぱり納得いかないわね」

そう言うウーノであるがその表情は笑っていた。そして離れたところでは……。

「……昨日、何処に行っていたかな？」

「……ラーメンを喰いに」

「その後は？」

「……バーで酒を飲み」

「その後は？」

「……ホテルに戻ったけど……」

「成る程成る程……最後に質問、良いかな？」

「ああ……いいぞ」

「ウーノとはやったんだな？」

「……君のような勘の良いスカさんは嫌いだな」

「野郎オブクラツシャー!?!」

「魔法は使うなよ!?!」

「大丈夫だ、貴様の首をかつきるだけだ!!」

「それは無茶と言うモノだぞ!!」

将和とスカリエツティ（魔法装備）による鬼ごっこが始まっていたのである。

「クソツタレ!! クアットロとセツテが親離れして悲しんだ矢先にこれか!?!」

「あ、気付いていたのか……」

「気付くき!?! これでもクアットロ達の親だからな!!」

大量の涙を流すスカリエツティだがそのうち血涙を流しそうな程である。

「クソ、これで残りはトーレだけじゃないか!!」

「向こうに置いてきた子達もいるだろ!!」

「彼女達は自立しているから問題無いさ!! 取り敢えずはお前の首をかつきる!?!」

「だからやめえい!!」

「……止めなくていいの?」

「暫くはそうしておきましょう」

玲の問いにウーノはそう答えるのであった。

第三十七話

「皆久しぶりやなあ」

「あの六課が解散した時以来なの」

「でもまさかももう一度六課を再編成するとはね……はやての要望なの？」

「そんなわけがないで。陸海空の各部署が共通の認識で六課を再編成を望んだわけやから」

第一管理世界『ミッドチルダ』そこには各管理世界を管理する時空管理局の本部があつた。その本部で新たに機動課が再編成された。それが機動六課である。かつての機動六課はジェイル・スカリエツィを逮捕するために結成された課であつたがそれは今回も同じであつた。

「お偉いさん……ロルトリンゲン地上本部長は六課再編成に賛成してくれたけど……オーリス・ゲイズ三尉の復帰を条件やったからなあ」
「まあ……でもオーリス三佐……三尉の書類処理能力は有名だからね……」

『J・S』事件後に階級を降格されていたオーリスだが本部に復帰をしていた。色々とあると思うところではあるが復帰した事で溜まっていた書類に光が指したのは言うまでもない。

「そんな代わり、海も大盤振る舞いしてくれたやん」

「確か専用の次元航行艦が配備されるとか……」

「最新鋭のXX級だよね。大盤振る舞いなのは良いけど……皆に重圧が掛からないか心配かな」

「まあそこは上手くやっていくしかないわな」

そう話すなのは、フェイト、はやての三人であつた。だが三人はまだ知らなかつた。何れ起きる宇宙戦争に巻き込まれ……る事はなく結局、管理局はスカリエツィを探し

続けるも発見する事が出来ずスカリエツティらを死亡扱いするのが約150年後であった。

「え、艦隊は削減するのですか？」

『いや……上下はそんなしないが……いや削減にはなるのか……』

将和は通信相手の芹沢と話していた。つい先程、芹沢から通信が入り将和が応対していたのだが……。

『取り敢えずはこれが現段階での編成だ』

芹沢はそう言って将和にデータを送る。タブレットにデータが来た将和は編成を確認する。

ケンタウルス座方面艦隊

戦艦

『伊勢』

『コロラド』

『ナッサウ』

空母（鹵獲空母）

『ホワイトスカウト』

『神鷹』

巡洋艦

『高雄』『摩耶』

『妙高』『羽黒』

『五十鈴』

駆逐艦

『朝潮』以下12隻

パトロール艦『手塩』以下6隻

自動戦艦

『エクスカリバー』以下28隻

自動駆逐艦

『A-1』以下72隻

「……自動艦艇を増やした……というわけですか」

『ウム……諸外国の反応が思ったより強くてな……』

芹沢は溜め息を吐きながらそう答える。というのもケンタウルス座方面艦隊には予め各国に通達はしていた。しかし、本決定したその日の夕刻に宇宙艦隊司令部にクレームを入れる始末であった。

『ケンタウルス座も重要なのは理解するが今は太陽系防衛を優先すべきである』

『ケンタウルス座への配備艦艇が多すぎであり削減すべきである』

『そもそも火星への植民を再開すべきである』

等々のクレームであり狙っていたかのようなクレームに正信もキレている程であり落とし前をどう付けるか悩んでいるのであった。

「まあ何とかしてみましよう」

『頼む。それと出発する時には練習艦隊と同行をしてほしい』

「練習艦隊もですか？」

『ウム。練習戦艦2隻、練習巡洋艦3隻と練習空母3隻の計8隻だがな』

そう言つて芹沢が練習艦隊のデータを送信し将和はタブレットを確認する。

練習艦隊

練習戦艦

『比叡』『ユタ』

練習巡洋艦

『香取』『鹿島』『香椎』

練習空母

『鳳翔』『龍鳳』『ハーミース』

『大体は約一万近くは乗艦している』

「……大盤振る舞い過ぎやしませんか？」

『山南もそう懸念はしている。我々も理解はしているよ山南が頑張っているのはな……だが上が煩いのだ』

「……また上層部の誤判断が起きそうですね」

『あの大統領はまた過ちを犯しそうで此方もヒヤヒヤしているところだな』

そう言つて芹沢は溜め息を吐く。どうやら軍上層部はポンコツ大統領に大分頭を抱えているようである。

『兎も角……道中は元より向こうでは気を付けたまえ』

「御配慮感謝します」

芹沢の言葉に将和はそう言つて敬礼をして通信を切るのであった。そして数日後、ケンタウルス座方面に向けて艦隊は出撃をするのである。

「月軌道上に艦影多数確認。識別信号では練習艦隊になります」「ん」

新しくリーダー手になった西条未来中尉の報告に将和は頷く。月軌道で待機していた練習艦隊から通信が入りビデオパネルに切り替えると練習艦隊司令官である安田俊太郎少将が現れる。

『久しぶりだな三好』

「これは安田の親父さんじゃないですか。今は練習艦隊司令で？」

『ああ、尾崎と共にな。そう言つても尾崎は今回地球に居残りでな。短い期間だが宜しく頼むよ』

「任せて下さい」

安田の言葉に将和は敬礼で返すのである。その後、合同艦隊はケンタウルス座方面に向かうのである。そして合同艦隊は一週間程でケンタウルス座に到着し駐屯する恒星『プロキシマ・ケンタウリ』の周囲を公転している惑星『プロキシマ・ケンタウリb』軌道上に到着する。

『此方『プロキシマ・ケンタウリc』駐屯の第28空間騎兵隊隊長古野間中佐です。ようこそケンタウリへ』

「ケンタウルス座方面艦隊司令官の三好です。此方こそ宜しくお願い

します（まさかの古野間さんキター（。▽。）——）」

将和は第28空間騎兵隊隊長の古野間と話すが内心はゲームキャラに会えた事で喜んでいた。

『まあ俺らも後一月で交代の空間騎兵隊が来ますので直ぐ帰るんですけどね』

「いやいや貴方が頑張ってくれるからこそ我々も頑張れるのです」

『褒め言葉として受け取りましょう。どうです、今夜一杯？』

「ハハハ、ご馳走になります」

そして艦隊は駐屯基地に入港する。基地と言っても基地は地下で建設されていた。白色彗星戦役時の第11番惑星での戦訓等を取り入れており防備に関しては充分過ぎるようであった。

「斎藤達の二の舞は避けたいという信念で建設しましたからね。同期のアイツにああいう形で先を越されたのはアレですけど」

「ほう、あの斎藤と同期だったのか」

「ええ。白色彗星戦役の時は火星基地で空間騎兵隊を率いていましたが……俺らは後詰めとして後方に待機していたんですが……『ヤマト』と斎藤らが決めちゃったんでね……」

「そうか……あの時は俺も遅れてだが都市帝国の中に突入したな」

「おお、その話は俺も耳にしていますぜ。トーレ特務大尉が破壊されたコスモタイガーを奴等に投げ飛ばした事も聞いてますよ」

「ハハハ、あれは面白かったな……」

そうやって二人は明け方近くまで飲み明かすのであった。なお、此処でケンタウルス座について軽く説明をする。

ケンタウルス座は α 星、 β 星、 θ 星等21の一等星等で形成されている。その中で将和の艦隊は α 星の赤色矮星 α 星c『プロキシマ・ケンタウリ』の3つある惑星のうち惑星bに駐屯しているのだ。

（詳しくはwikiへ）

なお、この惑星には水が存在するが幾つかの小さな海にあったり薄く凍っていたりしており水分に関しては問題は無かった。

「ま、暫くはパトロール艦が主体の哨戒任務だろう。序でに自動艦艇の運用を此処で熟知させて運用マニュアルを作ろうか」

「フム、確かにそれが良いかもしれないな」

将和の言葉にスカリエツティは賛成を表明する。ガジェットドローンをかつて製作したスカリエツティのお墨付きなら問題ないかもしれない。

「それか此方でも警戒用でガジェットドローンを製作しようか？ 通報用の無線機の出力を最大にして製作して後はその航路にステルス機能で置いておけば哨戒ルートは短縮出来ると思う」

「ん。それは良いな、一先ず試作を作ってくれ」

「よしきた。任せておきたまえ」

「ああそれとだ将和」

「どうしたトチロー？」

最近、作者により影が少なかったトチローが声をあげる。

「悪いが『伊勢』は暫く出撃は不可能だ」

「……何か悪いのか？」

「波動エンジンの調子が悪い。原因を究明中だが……まあ第二世代のHVED型波動エンジンだからな……もしかしたらガタが来ているのかもな」

「そうか……分かった。ならエンジン関係は頼むぞトチロー」

「任せておけ」

斯くして『伊勢』は暫くの間は出撃不可能となるのであった。

「あ、お兄ちゃんツ」

「ん、おうアリシア」

将和が暇潰しに廊下を歩いていると前から歩いてきたアリシアに声をかけられ将和も手を挙げて挨拶をする。

「凄いねこの星。まるで前にテレビで見たカウボーイが出てきそうだよ」

「カウボーイは出てこんどと思うけど、まあ雰囲気はなあ」

喜ぶアリシアに将和はヨシヨシと頭を撫でる。アリシアとプレシ

アも今回の派遣に付いてきた。というよりもプレシアとスカリエツ
ティが開発中の兵器類の実験も兼ねてだった。

「ところでプレシアは？」

「ママならまだお部屋にいるよ。またリニスに怒られていたよ」

「……まあたか……」

アリシアの報告に将和は溜め息を吐くのである。

第三十八話

「グレーアンス司令、そろそろケンタウルス座に到着します」

「ん。いよいよか……」

ガトランティス軍第八機動艦隊司令官のニプアレス・グレーアンス中將は第八機動艦隊旗艦『インディポリス』の艦橋で頷く。

「諸君、今回は地球艦隊の撃滅ではないが油断はするな」

「ハッ、何せシリウス・プロキオンの撤退支援ですから……」

アンドロメダ星雲に本拠地があるガトランティスは戦線の縮小及び整理のため太陽系（地球）の攻略を無期限に延期をしシリウス・プロキオン方面からの撤退を始めていた。しかし、地球からの反撃も予想されたのでアンドロメダ星雲から一個機動艦隊が派遣された。それがグレーアンスの機動艦隊であった。

「フフフ……撃滅ではないが我が友バルゼーの仇を漸く取れるな……」

グレーアンスと先に戦死した第六遠征機動艦隊司令官のバルゼーとはガトランティス軍の同期であり共に切磋琢磨した仲間でもあった。そのバルゼーが地球攻略作戦が中止後に戦死したと聞いた時、グレーアンスは友の為に涙を流したのである。

「ケンタウルス座に到着次第、奴等を攻撃するぞ!!」

第八機動艦隊は意気揚々と進撃するがそれを見守る小さなモノがいたのである。

「んっ……」

目覚まし時計の音で将和は目を開ける。左に視線を移せばこれまで裸のウーノが寝ていた。三人に増えて以降、交代制で寝るように

なっていた将和である。例を出すのであれば月曜日は薫、水曜日は玲、金曜日はウーノといった具合であり将和は中四日の休みを貰っていたのである。(違う、そうじゃない)

取り敢えず将和はウーノを起こさないようベッドから這い出ているもの艦長服に着替えてから部屋を出て艦橋に行くのである。

「おはようございます艦長」

「おはよう副長」

艦橋に行く副長の副長の大村が作業をしていた。

「もう朝食は済まされましたか？」

「いやまだかな」

「自分は済ませているので行ってきても大丈夫です」

「ありがとうございます」

将和はそう言っただけで艦橋を後にする。食堂は基地の食堂に赴き朝食を食べるのであった。

「おや司令じゃないですか」

「古野間」

一人で卵かけご飯で食べていると同じくお盆を持って出ようとしていた古野間が将和に声をかける。

「今日は遅いですな」

「なに、残り物には福があるというヤツかな」

「ハハハ、そう受け取っておきましょう。ああそうそう、今日はウチの連隊も演習をするので派手にドンパチをやると思います」

「分かりました。派手にドンパチして下さい」

「了解です」

古野間はニヤリと笑って食堂を出るのであった。その後食べ終わると将和も食堂を出るのであった。

「さて、今日もこんな日が続けば良いと思うが……まあフラグにしかならんよな」

そう呟く将和であった。そして日中、将和はスカリエツティに呼ばれた。

「どうしたスカさん？」

「ウム。私達のデバイスが完成したのでね、そのお知らせだよ」

「あー成る程」

スカリエッツィはそう言いながらカギ爪型のデバイスを見せながら説明をする。

「んで、デバイスを作って何かするのか？」

「いや特にはどうこうするつもりはないかな。まあ強いて言えば自衛用かな」

「あー、白兵戦を考えたらそうなるかな。都市帝国に突っ込んだ時もトーレが破壊したコスモタイガーを投げてくれたのは助かったけどデバイスはあればまた変わっていたかもな」

「まああの時はまだ作っていなかったからねえ……。一先ず娘達のデバイスは以前のを作成した上で所有してもらおうさ」

「了解した」

「ああそれと……将和もデバイスいるかい？」

「(´ω´) ファツ!？」

スカリエッツィの言葉に将和は目を見開いた。それは一体どういう事だろうか？

「意味がよく分からんのだが……」

「そのままの意味だよ。私なりの見解だとDからCかな。まあ詳しくは調べてみないと分からないが……多少なりとも有るよ」

「へー俺にもあるんやな……(何でだろ……?)」

「それに地球はやや中規模のAMF—アンチマジックフィールド—に覆われているから魔導師達にはやりづらいところだろうね」

「そうなのか？」

「ああ。まあ原因は何となく分かるだろ？」

「……成る程。遊星爆弾か」

スカリエッツィの言葉に将和は納得したように頷いた。原作よりマシンとはいえ地球は遊星爆弾の被害を幾らか受けていた。その影響でAMFが発生したのだろうとスカリエッツィは判断していた。

「ま、何にせよ。管理局がわざわざこんな世界を取るような事はしないだろう。滅亡するようなモノだよ」

「……それをフラグって言うんだよスカさん……」

将和はスカリエツティにそう言うのであった。そして戻ろうとした時、警報が鳴り響いた。

「これは……」

「ちよつと待ってくれ……うん、ガトランティスが網に引っ掛かったようだ」

キーボードを操作するスカリエツティは将和にそう告げると将和は制帽を被る。

「なら出撃だな。『伊勢』に戻るから詳細なデータを送ってくれ」

「よし分かった」

将和はスカリエツティの部屋を出て『伊勢』に向かうのである。

「状況は？」

「スカさんからの情報では一個機動艦隊程度のガトランティス艦隊との事です」

薫がキーボードを操作してパネルに画像を送る。

「監視ガジェットドローンの報告では指揮官級1、大戦艦12、巡洋艦29、駆逐艦48、空母6の艦隊です」

「成る程な……艦隊の出撃は？」

「後19分で完了します」

『おい将和、『伊勢』は出せないぞ』

そこへ機関室からトチローの声が聞こえてくる。

「出せない？ どういう事だ？」

『出力が7割しか出せないんだ。戦闘中の全力発揮は難しいぞ』

「だが出撃は可能なんだろう？」

『そりやあまあ……そうだが……』

「緊急事態だ。このまま残ってガトランティスに破壊されるよりはマシだ」

『……分かった。俺とクアットロはこのまま機関室で波動エンジンの調子を見ておくぞ』

「頼むトチロー」

そして準備を整えた艦隊は順次出撃していく。

「『伊勢』発進!!」

『伊勢』もいつもより少し重たい様子で出撃していくのであった。

「それで敵艦隊は？」

「無人偵察機からの最後の報告ではこのままプロキシマ・ケンタウリCに向かっているとの事だ」

「うーん……偵察のコスモタイガーを出すか」

「何機出しますか？」

「空母のは置いておきたい……『伊勢』『コロラド』『ナッサウ』のコスモタイガーで偵察に出す」

「分かりました。それが宜しいかと思えます」

将和の言葉にチュン参謀長も頷き直ちに三戦艦に搭載されたコスモタイガー36機が爆装して発艦したのである。ただし、山本の一個中隊9機は念のため待機となったのである。

「さて……奴さんらの出方だが……」

「やはり先に航空機で叩いて空母は沈めるのが得策と思われませう。上空援護があるのと無いのでは差が違いますからな」

「だろいな」

チュン参謀長の具申に将和も頷く。将和自身もかつては機動艦隊を率いていたしその状況は承知していた。

「増援要請はしたが……」

「今すぐに来るかは分かりませんなあ」

ケンタウルス座からのタキオン超空間通信は地球防衛軍も受信しており、正信は冥王星に駐屯していたパエッタ少将の第四艦隊を救援に差し向けたが間に合うわけがなかった。

「ま、何とかするのが俺達の仕事だな」

「それもそうですな」

将和の言葉にチュン参謀長は頷くのである。

第三十九話

「索敵のコスモタイガーより入電。『我、敵機動艦隊発見』」

「発見したコスモタイガーからは約8万宇宙キロからの通信です」

『伊勢』の艦橋では薫らが将和に慌ただしく報告をする。その報告を聞いた将和は直ぐに決断をする。

「先手を取る。『ホワイトスカウト』『神鷹』に発光信号、『第一次攻撃隊発艦セヨ』」

「了解。『ホワイトスカウト』『神鷹』に連絡します、第一次攻撃隊発艦せよッ」

「山本、『伊勢』残りのコスモタイガー隊も全機発艦だ。……行けるな？」

『勿論です艦長』

「ん。但し無茶はするなよ」

『伊勢』から発光信号が飛び交い、待機していた鹵獲艦である『ホワイトスカウト』『神鷹』から第一次攻撃隊が発艦を開始する。次いで『伊勢』からもコスモタイガー9機が発艦して攻撃隊に加わったのである。

第一次攻撃隊90機は約20分程度の飛行で現場宙域に到着すると確かにそこには白色彗星艦隊が味方艦隊に向かって航行していた。「全機突撃隊形!!」

玲の命令に各中隊は突撃隊形を取る。

『何時でも行けますぞ隊長!!』

『はしやぐな坂本』

はしやぐ坂本に椎名はそう言う。そして玲は命令を発する。

「突撃!!」

玲は操縦桿を倒して降下する。狙うは艦隊真ん中を航行する大型空母であった。降下する中、玲は胃から食べたモノが逆流してくるが

それを吐かずに再度飲み込んでO2式射爆照準器で狙いを定めた。

「食らえ!!」

両翼下から2発の対艦ミサイルが発射されミサイルは飛行甲板に突き刺さって命中する。列機も次々と対艦ミサイルを発射して6隻の空母に命中させていくのである。更にはその周囲に展開していた巡洋艦や駆逐艦にもミサイルを叩き込んで離脱するのである。

「司令、空母部隊が!」

「チツ、小賢しい真似をするわ。被害は!?」

「駄目です。空母は全て大破炎上、総員退艦が発令されました。他にも巡洋艦4、駆逐艦13隻が撃沈されました」

「流石はバルゼーを倒した星か……構わん、艦隊を再編しつつ全速前進せよ!! 火炎直撃砲の射程距離に入れば此方のモノだ!!」

「対空レーダーに反応!! 地球艦隊の第二次攻撃隊です!!」
「クツ!」

そう士気を上げるグレーアンスだったが第二次攻撃隊の攻撃で更に戦艦3、巡洋艦5、駆逐艦12が撃沈されるのである。

「司令……そろそろやりますか?」

「ん、そうだな」

チユン参謀長の具申に将和は領き席を立つ。

『高雄』の三木大佐に連絡。予定通り『プラン乙』を発動する」

「了解しました」

将和の言葉にウーノは領き『高雄』に連絡を入れる。報告を受けた

『高雄』艦長三木幹夫大佐は領いた。

「了解した。別動隊は『高雄』に続け!!」

『高雄』以下巡洋艦隊と駆逐隊は『伊勢』らの艦隊から列を崩して左右に分かれていくのである。そして残ったのは『伊勢』、空母2隻にパトロール艦『天塩』以下6隻と無人艦隊だけであった。

別動隊と分かれてから一時間後、将和の艦隊はガトランティス第八機動艦隊と接敵をした。

「全艦砲撃開始イ!!」

「撃ちい方始めエ!!」

先に砲撃をしてきたのは将和の艦隊であった。『伊勢』の砲撃は駆逐艦2隻を瞬く間に轟沈させたがグレーアンスは冷静だった。

「火炎直撃砲発射用意」

「火炎直撃砲発射用意!!」

「エネルギー充填60……70……80……90……100……エネルギー充填120%!!」

旗艦『インディポリス』の火炎直撃砲がエネルギーの充填を行うがそれは『伊勢』でも探知されていた。

「敵旗艦らしき艦から高エネルギー反応!! 火炎直撃砲です!!」

「回避運動準備」

「了解。データを航海長に渡します」

「データ受け取りました。回避運動!!」

『伊勢』は島の操作の元で回避運動を開始する。そして『インディポリス』では火炎直撃砲が発射された。

「火炎直撃砲発射ア!!」

『インディポリス』が火炎直撃砲を発射する。エネルギー弾は瞬間物質輸送され将和の艦隊前方にワープアウトするが……将和の艦隊は全て回避に成功したのである。

「回避成功!!」

「よし、その調子だ」

「はい!!」

回避に成功した島に将和はそう言って褒める。そして『インディポリス』では外れた事に焦りを感じた。

「チツ相変わらずのコントロールが無い兵器だな。次弾装填急げ!!」

しかし、『インディポリス』が五射程しても将和の艦隊が回避した事でグレーアンスはトリックに気付いたのである。

「そうか……そういう事か!?!」

「何か分かりましたか司令?」

「……火炎直撃砲は役に立たん。火炎直撃砲の技術は元々何処の国の兵器だ?」

「元々はガミラスの……ああそうか!?!」

グレイアンスの言葉に参謀は納得したように頷いた。

「地球とガミラスは技術協定を結んでいると聞いています。それなら……」

「ウム。ガミラスを通して瞬間物質輸送器の原理を聞いて火炎直撃砲の対策をしているだろう……だからこれでもう火炎直撃砲は役に立たない……ッ」

グレイアンスは悔しさを滲ませるよう右拳を強く握り締めるがそれも一瞬の事であった。

「ならば……ならば我々はこのまま前進する。敵地球艦隊との艦隊決戦で血路を開くしかあるまい!!」

「ハッ!! 全艦全速前進!!」

第八機動艦隊は速度を上げて将和の艦隊に向かうのであるがそれはパトロール艦の大型タキオン対艦レーダーで捕捉されていた。

「敵艦隊が突っ込んでくるようですッ」

「ん。全艦、緩やかに小惑星帯まで後退せよ」

ケンタウルス座にも多数の小惑星帯が存在しておりその中の一つ付近で今回、地球艦隊とガトランティス艦隊が戦闘していた。その小惑星帯付近まで将和は後退を指示した。

「地球艦隊が後退をしています!!」

「後退だと?」

「何か罠があるのでは……?」

「……………」

グレイアンスは偵察機を出すか悩んだが空母は全隻撃沈されているし偵察機を出したとしても直ぐに落とされると踏んだ。その為このまま行く事を選択したのである。

「このまま行こう。但し、罠と分かった場合は直ぐに撤退は出来るよう準備だけはしておけ」

「ハッ!!」

第八機動艦隊は積極的な突撃をせず、やや劣る形の突撃をしてきた。その様子に将和も舌打ちをする。

(チツ、猪突猛進なガトランティスにしては利口な奴もいるか……)

「司令、プラン乙はどうしますか？」

「……奴等が線を越えたら発動しよう。無理に撃滅する必要はない。追いつ返す事に切り替えよう」

「分かりました」

チユン参謀長の言葉に将和はそう返す。第八機動艦隊が所定の位置に到達すると……プラン乙が発動された。

「ガトランティス艦隊、線を越えました!？」

「全艦に打電。『プラン乙発動』」

『伊勢』からの打電を受信した『高雄』は直ちに準備に取りかかる。

「小ワープの準備急げ!!」

「小ワープ準備宜し!!」

「よし、全艦小ワープ!!」

小惑星帯で潜んで左右に分かれた『高雄』以下の艦艇は小ワープを敢行、第八機動艦隊の左右側面に躍り出るのである。

「左右に重力震!! 敵地球艦隊です!!」

「やはり罠だったか!? 直ちに迎撃せよ」

グレイアンスは舌打ちをしながらそう指令を出す。オペレーターが更に叫ぶ。

「前方にいた艦隊が陣形を変形しつつ砲撃してきます!!」

「何!？」

グレイアンスらガトランティス艦隊は地球艦隊が展開した陣形は知らなかったが地球側ーアジアからしたら鶴翼の陣と呼ばれる陣形だった。将和はパトロール艦を無人艦の指令艦とし小戦隊を編成して鶴翼の陣形に展開していた。

無論、中央は『伊勢』と自動戦艦4、自動駆逐艦8の戦隊であった。

『高雄』達の支援砲撃を展開!! 『高雄』達の攻撃が終われば然るの後、我々も突撃する!!」

『高雄』以下突撃隊、突撃を開始!!」

見れば『高雄』達は左右から突撃していた。

「突撃!! 突撃!! 突撃!!」

「撃ちい方始めエツ!!」

三木はそう叫びながら砲雷撃を敢行、大戦艦を沈める。

「敵戦艦撃沈!!」

「よしよし、そのまま一直線に突き進め!!」

左右からの突撃で第八機動艦隊は戦艦3、巡洋艦7、駆逐艦11隻を喪失していた。対して将和の艦隊も巡洋艦『摩耶』『羽黒』が大破離脱、駆逐艦4隻が撃沈されていたのである。

そして最後には前方に展開していた将和の自動艦隊による突撃であった。結果的に第八機動艦隊は戦艦9、巡洋艦19、駆逐艦23隻を撃沈されたのである。グレーアンスは直ちに撤退を指令したが何隻が帰れるかは分からなかった。

「何たる事だ……バルゼーの仇を取れぬまま撤退か……」

「前方に重力震!!」

「何、またか!?!」

だがこのワープアウトは将和も予期していなかった。

「何だあの船は……?」

「民間船でしょうか?」

「……あれは……」

ポツリと呟いたウーノに将和は見逃さなかった。

「何か知っているのかウーノ?」

「……あれは恐らく時空管理局の艦船かと……」

「……………はあ? (。D)」

ウーノの言葉に将和は啞然とする。そのウーノが言った時空管理局――XX級次元航行艦『テンペスト』はいきなりの戦闘に驚いていた。

「な、何だこの戦闘は……」

艦長も思わずそう呟いた程であった。本来、というよりも『テンペスト』は次元の海を航行していたが小規模の次元震が発生したのである。当初はそのまま航行をしても問題は無さそうだったが『テンペスト』艦長は万が一を考えて通常空間に出る事を選択し通常空間に転移したのだ。

そうしたらまさかいきなりの戦闘である。驚くのも無理はない。

「ぜ、前方から正体不明の艦船が接近!？」

「何!？」

それは撤退中のグレーアンスの旗艦『インディポリス』ら10数隻の残存第八機動艦隊だった。グレーアンスは突如現れた『テンペスト』に驚きつつも僅か1隻な事に失笑した。

「僅か1隻ではないか!? 構わん、砲撃して撤退だ!!」

「ハッ!!」

『インディポリス』が砲撃をするとそれに遅れて他艦も砲撃を開始した。砲撃をされた事に『テンペスト』艦長は直ぐに行動を起こした。「障壁展開急げ!! それと本局に至急緊急連絡しろ!!」

「は、はい!!」

『テンペスト』は障壁を展開するも一発目は耐えきった。しかし、二発目は右舷に着弾したのである。

「う、右舷被弾!! 火災発生!!」

「隔壁降ろせ!! 反撃だ、砲撃開始!!」

直ちに魔砲（ビーム砲）で砲撃をするもガトランティス艦船の装甲を貫通する事はなかった。

「何という厚い装甲だ!？」

「三発目直撃来ます!？」

そう言わや否や艦橋付近に着弾、艦橋の窓ガラスや装甲が割れ空気は外に出されてしまう。

『ウワアアアアアアアアア!？』

その反動で座席に座っていない者、座っていたがベルトをしていなかった者が先に宇宙空間に吸い出されてしまった。そして座席も座ってベルトをしていた者は座席が衝撃で外れて吸い出されてしまい艦橋にいた全員が宇宙空間に投げ出されたのである。

その為、『テンペスト』は操艦不能となり漂流するのである。

それを見た将和は直ぐに発した。

「機関最大!!」

「機関最大へ!!」

「良いのか……将和?」

「構わん、俺達は防衛軍軍人である前に船乗りだ。全艦、ガトランティス艦隊を砲撃しつつあの民間船を救え!!」

『おい将和!? あまりエンジンを苛めるなよ!!』

「今やらなくていつやるんだトチロー!?!」

『今なんだろ!! 畜生、無茶はさせるなよ!?!』

機関室からの叫びに将和はそう答え『伊勢』は最大戦速で突撃するのであった。

第四十話

「後方から敵旗艦が最大戦速で突撃してきます!!」
「迎撃だ!!」

『伊勢』が突撃してくるのを知ったグレーアンスの残存第八機動艦隊は突撃してくる『伊勢』を攻撃する。当初『伊勢』は波動防壁で防いでいたが20分という防御出来る時間が過ぎてしまった。

「波動防壁臨界点!! 波動防壁喪失します!!」

「構うな!! 取舵20、主砲右砲戦用意!!」

「了解、主砲右砲戦用意!!」

『伊勢』の48サンチ陽電子衝撃砲3基が右舷に旋回してガトランテイス艦隊を照準する。

「用意よし!!」

「撃ちい方始めエ!!」

「撃ちい方始めエ!!」

『伊勢』の48サンチ陽電子衝撃砲が一斉砲撃を開始して『伊勢』が吼える。9本のエネルギー弾は巡洋艦、駆逐艦をそれぞれ貫通させて薙ぎ払い、更には数隻を轟沈させる。

「主砲斉射三連!! 右舷短魚雷撃エ!!」

トーレが吼える。それに応えるように『伊勢』は主砲を斉射三連し右舷から短魚雷を次々と発射していく。

「ちよこざいな!! 撃てエ!!」

『インディポリス』の艦首大砲塔がゆっくり左舷に旋回して砲撃する。5本のエネルギー弾は2本は外れはしたが残り3本は『伊勢』の右舷側面に命中する。

被弾の衝撃で艦体が揺れるも将和は指示を出す。

「被害報告!!」

『右舷兵員室被弾炎上!!』

『右舷パルスレーザー砲塔群損傷!!』

『機関室、火災発生!!』

『各部、消火及び隔壁閉鎖急げ!!』

「トーレ!!」

「分かっている!! 主砲、民間船を狙う敵艦のみに集中しろ!! ミサイルは『伊勢』を狙う艦だ!!」

まだ民間船（次元航行艦）を砲撃している艦船がいたのでそれを追いつくようトーレは命令を出して攻撃する。

「グレイアンス司令、味方の被害が……」

「クソツ、敵旗艦に砲撃を集中してからワープしろ!!」

残存艦艇は再度『伊勢』に攻撃を叩きかけてからワープしていくのである。

「敵残存艦艇、ワープしていくわ!!」

「……追撃は無用だ。他艦は周辺宙域の警戒だ」

ワープしていくガトランティス艦隊を見つつ将和は艦長席に深く座り込み、左目の隅の視界に映る炎上する次元航行艦に視線を移す。

「取り敢えずは救助するぞ救助」

「果たして生きているのかねえ」

「全員戦死してくれたら助かる件」

「艦長、流石にそれは……」

「というよりも艦長と技師長は知っているのですか?」

「技師長の元故郷の船かな」

「……あつ（察し）」

何かを察する島であった。それはさておき『伊勢』からも救助隊が出されるが機関室からの通信に将和は頭を悩ませた。

『おい将和。波動エンジンが完全にオシヤカだ』

「……まあ仕方ない……か」

『三割の航行で済んでいるのが奇跡の状態だな』

「トチローのおかげだな」

『よせやい照れるじゃねーか……ってそれで誤魔化そうとするなよ』

「バレたか（・ωく）」

そう言う将和であった。そして『伊勢』からの救助隊には玲がリストに連ねていた。

「一班はあっちの通路を、二班は向こうのを、三班は私と一緒に行くわよ」

『ウィーツス』

野郎どもを指揮する玲は煙で見えなくなりそうな通路を進む。辺りはどいつもコイツも死んでいたがどう見ても幼い子どもらしき者も死んでいたのを玲は確認して眉を潜める。

「……奴隷船かしら……」

思わずそう呟いたが沢村の叫びに掻き消されたのである。

「隊長、駄目だ。何処もかしこも皆死んでるよ」

「そうか……」

沢村の報告に山本は溜め息を吐いた。もう少し早ければと思っていたが此方も戦闘中だったのだ。仕方ないのかもしれない。

「……そうか、生存者はいなかったか」

「ええ……それと……あのフネはまだ沈む気配は無いわ」

「つまりは曳航は可能……と」

「そういう事ね（*ゝω・*）」

（歳考える薫）

将和の言葉に薫は正解とばかりにウインクをするが内心で将和はそうツツコミを入れる。

「……民間船の曳航には『妙高』でやってくれ」

「分かったわ」

斯くして『テンペスト』は回収され『妙高』に曳航されて惑星『プロキシマ・ケンタウリc』に向かうのである。

「なあスカさん」

「なんだい将和？」

「人は全員死亡だが……デバイスとかは無事なヤツあるよな？」

「おやおや奇遇だな……それは私もそう思っていた事だよ」

「成る程……なら使えるよな？」

「成る程……そう言ってウーノに近づいたんだな？」

「何でそうなるんですかねー」

血涙を流して将和の胸ぐらを掴むスカリエツティであった。それはさておき、艦橋に戻るとトチローがいた。

「よう将和」

「ん。エンジンの具合は？ やはり駄目か？」

「ああ、やっぱ駄目だな。地球に帰ってエンジンごと取り換えた方が早い」

「そうか……なら親父に言わないとな……」

「それと他のところもガタが来ている。本格的な修理か改装か……若しくは……」

「若しくは？」

「……解体した方が早いかな」

「……そうか……」

トチローの言葉にそう言う将和であった。なお、正信には直ぐに通信を入れ状況を説明すると正信も二つ返事で承諾するのである。これにより『伊勢』と損傷艦艇は地球に帰還する事が決定するのであった。

「スミマセンね三好司令、我々も便乗させてもらって……」

「なに、旅は道連れとも言うしな。構わないよ」

地球に帰還する『伊勢』だが古野間の空間騎兵連隊も交代で帰還する事になり将和が許可を出して『伊勢』に便乗させていたのだ。

「狭い艦内だけどゆつくり寛いでくれ」

「そうさせてもらいます」

将和の言葉に古野間はニヤリと笑い敬礼をして下がるのであった。

「副長、休憩ですよ」

「ん、ありがとうございます。なら休憩してきますね」

主計副長のリニスは部下にそう言われ白のエプロンを脱ぐ。朝の0400から1300までリニスは働き詰めだったのだ。主計長の

幕之内はいるがやはり戦艦なので食堂に来る乗員の数は多い。主計科だけではにつきもちもさつちもいかなかった。

(やはり幕之内主計長を通して主計科の増加をしてもらいませんと……身体が持ちませぬ……)

廊下を歩きながらリニスはそう思う。娯楽室で休もうと入った時、先客がいた。将和であった。

「艦長」

「ん？ おうリニスか。リニスも休憩か？」

「ええ。艦長もですか？」

「まあな。大村さんに任せたら安心だよ」

将和はそう言いながらコーヒを啜る。リニスは自販機の前に立ちお茶を購入してソファに座る。

「晩飯は？」

「今日はさば味噌ですよ」

「お、おう」

リニスが主計副長に就任してから1日一回は魚が出るようになった。それまでは肉料理を占めていたがリニスが「青背魚を食べないと血糖値上がりますよ!!」と将和に直談判してからは魚料理も対等に増えたのである。

「艦長もしつかり食べて下さいね」

「ああ。プレシアにも言っとけよ」

「勿論です」

将和の言葉に笑みを浮かべて頷くプレシア。ちなみにプレシアは魚料理が苦手らしく先日も秋刀魚の骨を取るのに悪戦苦闘していた。なお、その隣では上手に骨を取るアリシアがいたとか……。

「ふぁッ」

不意に来た眠気にリニスが思わず欠伸をするが将和がいた事を思い出して顔を赤くする。

「ス、スミマセン……」

「ハハ、俺は気にしないぞ」

そう言って将和は立ち上がる。

「暫く娯楽室に入らないように立て札をしておくよ。ゆっくりと寝るといいさ」

「ありがとうございます」

将和はリニスに手をヒラヒラと振って娯楽室を後にする。リニスは将和に感謝しつつ目を閉じると数秒後には寢息が聞こえてきたのであった。

そして約一時間と30分後、将和が娯楽室に入るとまだソファでリニスは寝ていた。

「よく寝てるな……リニス」

「ん〜」

将和は肩を揺らすがリニスは顔を歪める。そして徐に将和の手を取ったと思ったらそのまま抱き寄せたのである。

「ちよ、おま……」

将和は逃げようとするが力が思ったより強いリニスは更に腕の力を強めて将和の脱出を阻んだ。それにより将和は完全にリニスの抱き枕化としていたのである。

「……どうしよう……」

なお、15分後に寝ていたリニスが漸く目を覚めて覚醒した時に付近に将和の顔があつて更に顔を真っ赤にして将和の頬を叩くのであった。

「何でや……」

哀れ将和であった。

第四十一話

「そうか……将和も厄介な事に巻き込まれたものだな……」

横須賀にある防衛軍総司令部では地球連邦防衛軍司令長官三好正信元帥宇宙軍大將は芹沢からの報告に苦笑いしながらもそう頷いた。「ですが長官、今回ののは厄介過ぎる事です」

「ウム……スカリエツィ博士らは亡命者という形で受け入れたが……今回は時空管理局の大破した艦艇じゃからのう……」

「それと今回のケンタウルス座海戦で損傷した艦艇もあるのでやはり交代すべきかと……」

「ウム。自動艦艇の実戦データは取れたかの？」

「はい。三好司令のおかげである程度のデータは取れています。これなら各艦隊にも小規模ではありますが盾要員として運用は可能かと思えます」

「ウム……よし、カールセンの艦隊を入れ換えてケンタウルス座方面艦隊とする」

「……成る程。万が一の時空管理局の接触を考慮して……ですな」

「若い将和やモートンでは侮られるかもしれないから。強面のカールセンなら大丈夫じゃろ」

「ハハハ、もし接触した時の時空管理局の顔が目に浮かぶますな」

正信の言葉に藤堂と芹沢が笑い合う。

「それで……艦艇の事はどうしますか？」

「……将和に任せよう。あやつなら何とかするじゃろ、スカリエツィ博士の時もそうじゃったからの」

「……ドイツ嬢の時と言い……押し付け過ぎませんか？」

「なーに、三好家の血筋を引いているんじや。あやつが独身で終わるわけは無い」

将和と駐地球武官のメルダとくつつつけようと模索している正信と

バレル大使は中々と策略していたりするがメルダの父親であるガル・ドイツ大將は渋い表情をしているのは言うまでもない。

「それと……『春藍』と『三笠』の具合はどうじゃ？」

「『春藍』については後数日で竣工します。ただ『三笠』は……」

「何かあったのか？」

「資材が不足してしまして……他艦艇の建造等を遅らせるわけにはいきません」

「ムウ……『例の資材』を活用してもか？」

「はい、8%程足りないと牧野造船中佐が申しています。遅らせるなら更に半年は……」

「それはイカン。暗黒星団帝国の事もあるし遅らせるわけにはイカン」

「それについては……些か強引なやり方もあります」

そこへ声を出したのは芹沢だった。

「何か当てはあるのか虎徹？」

「はい。ただこれには三好司令本人からの許可がいります」

「……成る程。そういう事か」

「はい。これには牧野中佐で説得してもらうしかありません。技術者としての役割があります」

「成る程……分かった。そこについては牧野中佐に一任する」

「分かりました」

そう言っ頭を下げる芹沢だった。そしてそれから数日後、『伊勢』や損傷艦艇等は地球に到着したのである。

「さてさて……『伊勢』の具合を見て貰わんとな……」

その後、『伊勢』はいつもの呉宇宙軍港に入港する。そして入港後作業が終わりタラップを降ろし将和らが降りると牧野中佐が出迎えていた。

「よう牧野」

「よう将和。早速だが『伊勢』を見たいが良いな？」

「ああ、それは構わない。修理にはどれくらい掛かりそうだ？」

「……修理は最早……無理かもしれんぞ……」

「……………」

牧野はそう言つて艦内に向かい、牧野の言葉に将和は察したのか何も言わなかった。そして二時間後くらいに牧野が呉宇宙軍港の司令部室で待機していた将和を見つけると開口一番にこう告げたのであった。

「済まん。やはり『伊勢』は解体するしか無いだろう……」

「……………」

牧野は開口一番にそう告げると将和は予め予想していたのか、溜め息を吐いた後にそう返したのである。

「薄々は感じていたよ……トチローが波動エンジンがヤバイとは言っていたからな」

「それもだが艦体も所々でガタがきていた。いつ戦闘中に爆発四散してもおかしくはなかった……」

「……………」

「それか八百万の神々の力じゃないか？ 艦内神社は伊勢神宮からのだろう？」

「まあそりゃあな……それでいつ解体するんだ？」

「出来れば今からしたい」

「……………」

「とある新型戦艦を建造しているんだが……予算の都合で予定していた竣工日に間に合わなくてな……どうしても資材が足りないんだ」

「そうか……それなら仕方ない。直ぐに総員退艦をさせよう」

牧野の説明に将和は頷く。

「良いのか？」

「構わんよ。『伊勢』には色々が無茶させていたからな。それにな……新型戦艦の礎になるんだ、『伊勢』も喜ぶだろう」

「……ありがとう将和。早速作業に取り掛かるよ。乗員の荷物とかの移動は頼む」

「分かった」

そして将和は『伊勢』に戻って艦内放送で事情を説明し乗員に総員退艦を発令したのである。

（済まんなあ『伊勢』……史実と同じく解体になるのは宿命なのかもしれないなあ……）

将和は荷物を出した後、艦橋で一人で酒を飲みながら『伊勢』と語っていた。

（ただ今度は新型戦艦の資材になるからお前は生きている……それを忘れないでくれ……）

将和は『伊勢』のためにおちよこをもう一つ用意してそれに日本酒を注ぎ、自身のおちよこにも注いだ後、献杯という形で上に挙げて飲み干すのであった。

「ありがとう『伊勢』」

そう言つて将和は艦橋を後にする。そして人がいなくなった艦橋に白く人間規模の物体が浮遊する。

『ありがとうね長官!! いやー、まさか長官と宇宙戦争をするとは思わなかったけど貴重な体験かな。『加賀』には申し訳ないけどね。でもま、次も長官とこにお世話になるし役得役得♪』

謎の物体はそう言つて消えていくのであった。その後、『伊勢』は僅か五日で解体され新型戦艦の資材になるのである。

そして同日、将和が司令部に入り正信からある辞令書を貰うのである。

「……宇宙戦艦『三笠』艦長に任命する……『三笠』とは？」

「その言葉通りだ。新型戦艦である『三笠』艦長に貴様を任命した。そういうわけだな」

「……成程。そうになると『伊勢』を解体せざる得ない理由はもしかして……」

「ウム、そういうわけじゃったのじゃよ」

将和の言葉に正信は頷く。

「こいつは今、佐世保宇宙軍港の方で建造中じゃ。休暇をやるからついでに見学してくると良い」

「分かりました」

「ウム」

「それと貴官が曳航してきた時空管理局の艦艇は現在、舞鶴宇宙軍港の地下ドックに回航されて修理しつつ調査をしている」

「調査の方は？」

「死亡した武装局員とやからかの？ 其奴らが保有していたデバイスを10数個程の回収は成功しとるよ。今はテストタロツサ技術少佐とスカリエツティ博士が解析中じやがの」

「成る程。ちなみに時空管理局が来た場合はどうするの？」

「『この世界は戦争をしたがる人々しかいないから直ぐに帰って関わらない方が得策』と伝えて後は無視の一点張りじやの。スカリエツティ博士の事を聞かれても惚けるぞ。スカリエツティ博士らは亡命者じゃからな。亡命者を日本が受け入れたまでの事じやよ。それに向こうとは国交も結んでおらんし引き渡す条約も締結しとらんのにホイホイと渡す馬鹿は何処におる？」

「それもそうですな」

「ファツファツファと笑う正信に将和も笑い部屋を退出するのであった。そして将和はその足で佐世保宇宙軍港に向かうのである。」

第四十二話

「待っていたぞ将和」

「牧野か」

佐世保宇宙軍港に到着した将和を出迎えたのは『伊勢』解体を指揮した牧野造船中佐だった。

「それで……新型戦艦はどれだ？」

「ああ、地下ドックの方さ」

牧野はそう言つて将和達を案内しエレベーターで降りていくが大分下がっていた。

「大分下がっているな？ 旧地下都市くらいか？」

「まあその手前だな」

そしてエレベーターが止まり地下ドックに入る。そこには1隻の宇宙戦艦が鎮座していたのである。

「これは……」

「そうだ、『三笠』だ」

将和の眩きに牧野はニヤリと笑みを浮かべる。将和がポカンとしていたのがよっほど面白かったのだろう。

「取り敢えずは艦橋に行こう。性能の話はそれからでも遅くはない」

「あ、ああ……」

そして艦橋に上がるとそこにはチュン参謀長と大村副長がいた。

「ありや、参謀長と副長もいるじゃないか」

「自分達は先程到着しました。スカさん達も後程到着するようです」

「成程な」

将和が感心するように頷いていると牧野がタブレットを持ってきてそれを将和に渡す。

「コイツが『三笠』の諸元だ」

「ん……」

そして将和はタブレットの諸元を確認するのである。

改『春藍』級戦略指揮戦艦『三笠』

基準排水量 128,000 t

全長 480 m (他は460 m)

全幅 56 m

全高 150 m

乗員 850名

機関

主機 03式HWVE D型大型次元波動エンジン×1基

03式HWVE D型中型次元波動エンジン×2基

補助機 ケルビンインパルスエンジン×4基

兵装

超大型次元波動爆縮放射器(500センチ口径。集束・拡散・拡大可能)×1基

50口径56センチ三連装陽電子衝撃砲×4基(上部3基、艦底1基。ただし『三笠』のみであり他は50口径51センチ)

50口径30・5センチ三連装陽電子衝撃砲×5基(前後部2、

側面2 艦底1)

速射魚雷発射管×12門(艦首・艦尾合わせて)

側面短魚雷発射管×24門

艦底ミサイル発射管×12門

四連装対艦グレネード投射機×2基

12・7センチ四連装対空パルスレーザー砲塔×12基

8・8センチ連装対空パルスレーザー砲塔×8基

7・5センチ三連装対空パルスレーザー砲塔×8基

7・5センチ連装対空パルスレーザー砲塔×20基

司令塔防護シヨックファイールド砲×3基

近接戦闘用六連装側方光線投射砲×2基

航空機

コスモタイガー2×34機(『三笠』のみ。他は18機)

コスモタイガー3乙×2機

100式空間偵察機×2機

コスモシーガル×2機

同型（諸外国）

『フッド』『Iowa』『ウォースパイト』『三笠』以下8隻

【概要】

地球連邦防衛軍が設計建造配備した艦隊旗艦級の宇宙戦艦である。2203年に一番艦『三笠』が就役してから現在（2220年）まで幾度の改装が施されながらも現役を続けている。

当初、これが防衛軍の中で上がったのは白色彗星戦役時に建造が開始された『春藍』級の建造であった。

『春藍』級のコストが高すぎる」

『春藍』級は『アンドロメダ』級以上の総旗艦を目指して建造が開始されたが51サンチ四連装陽電子衝撃砲や三連装艦首波動砲は財務省に言わせたら高コストの塊であった。財務省の友人からも苦言を言われた防衛軍司令長官の三好正信もさてどうするかと悩んでいた時、一人の造船中佐が正信の下を訪れた。

『春藍』級のコストを下げた量産型の生産は可能です」

男の名は将和の同期である牧野滋造船中佐だった。牧野中佐はかつて『ヤマト』『アンドロメダ』等の設計に携わっており『春藍』級の設計も彼がしていたのだ。

牧野が新たに提示したのは確かに『春藍』級の量産を意識した戦艦であった。主砲は四連装から三連装に戻し艦首波動砲も三連装から単装に戻していた。

「それで肝心のコストは？」

『春藍』級より21%の削減です」

それだけでも財務省は削減出来た事に一安心だったが、牧野の話はそれだけではない。

「削減はしましたが有事にはそれは必要ありません」

「ではどうするんや？」

「主砲や波動砲は提示したそのままです。その代わりに、防衛力に重点を絞ります。つまりは不沈艦とするのです」

確かに『春藍』級に比べたら砲火力は多少は下がっただろう。だが牧野は『アンドロメダ』の最期を見ていた。政府の命令とは言え、自動化し過ぎたのは牧野の痛恨のミスであった。その為、乗員を増やしてその分の防衛力を高めたのである。

以下は説明である。武装は三連装51センチ陽電子衝撃砲を4基にしているがターレットは拡張しやすいように大きめにされていた。(但し、『三笠』は先行試作という形で先に56センチ陽電子衝撃砲を搭載している)その為2218年の改装で全艦が50口径56センチ三連装陽電子衝撃砲を搭載していたのである。

副砲は新型巡洋艦(『アラスカ』級)の主砲である30.5センチ陽電子衝撃砲を採用しており更には対空射撃も可能であった。

最大の武装と言えば艦首波動砲であるがこの波動砲、口径は『ヤマト』の200センチより倍の500センチを採用していた。

三連装と比べたら……どっちもどっちだが財務関係者に言わせたら一門のがコスト削減と思うので結果オーライである。

そして波動砲だが集束・拡散の他にも試験的に『三笠』には拡大型も搭載していた。これは拡大型の発展型であり後の『バイエルン』級主力戦艦にも搭載される。

話を戻す。エンジンは波動エンジンだが三つ搭載している。それが『春藍』級で採用されたのが大型次元波動エンジン一つと後に新型巡洋艦(『アラスカ』級)で採用される中型次元波動エンジン二つである。

これは『春藍』級が大型次元波動エンジン二つ搭載したのに対しコスト削減で大型のは一つとし左右に中型エンジンの炉心を取り付けた形である。その為噴射口は一つだけである。だが、中型エンジンを二つ取り付けているので機動力の低下は僅かに済み、波動砲を撃つても中型エンジンからのエネルギーで供給すれば問題なかったのである。

防衛力については『三笠』は防衛軍の中で二番目の堅牢性能である。

一番は後にドイツ宇宙軍が建造配備した『ビスマルク』級である。(ドイツ宇宙軍はこれを4隻も建造する) 装甲は通常のと、装甲に帯磁性特殊加工をしたモノ。ガトランティス戦役で終盤に発生した超巨大戦艦による砲撃で津波が発生して損傷した記念艦『出雲』『加賀』『長門』『三笠』、将和がつい先日まで乗艦していた『伊勢』の一部解体した資源をも使用した三重装甲としており更にはそこに波動防壁も加わるので実質的に四重装甲でもある。

この装甲をした事によりちよつとやさつとでの航行不能や大破はしなくなつたのである。特にドイツ戦役時にはドイツ軍が使用するハイパー放射ミサイルを五発命中しても重要部分の装甲は破壊されず放射能汚染だけで済み(直ぐにコスモクリーナーDで除去) 尚且つ戦闘から離脱する事は無かつたのである。

なお、諸外国でも同級クラスの建造を開始し北米では『Iowa』『モンタナ』、欧州では『フッド』『ウォースパイト』『マッケンゼン』『ソビエスキー・ソユーズ』、極東では『三笠』『陸奥』の8隻が建造され各艦隊旗艦に配備されるのである。

また、当初は8隻だったが太陽危機では更に『リットリオ』『リシユリユー』、『ディングル戦役時では『山城』『ミズーリ』が建造配備される事になる。

「ゴイツは不沈性能を出来るだけ高めた……後はお前の腕次第だ将和」

「ククク……技術屋からそう言われちゃ頑張るしかないわな……」

牧野の言葉に将和は苦笑する。牧野にそこまでされたら将和も期待に答えるしかない。

「というか『伊勢』の解体から一週間くらいしか経ってないぞ」

「24時間態勢の建造だよ。『春藍』も就役するしその作業員も此方に来るから大詰めを迎えているんだよ」

「成程、掌握した」

「お前の休暇が終われば即竣工・就役するように手配しておく。それまではゆつくりと骨休みをしとけよ」

「ああ、そうしとくさ」

「……………」

将和と牧野はそう言うが傍にいたのはは何とも言えない表情で将和らを見ていたのであった。その日は『三笠』の艦長室で休む事にした将和だったが夜も深けて将和自身も寝ようとしていた時、艦長室の扉を叩く者が現れた。

「どうぞく空いてるよ」

「将和君……………」

「ありや、プレシアさん」

入ってきたのはプレシアだった。

「ねえ将和君。やっぱり管理局は……………」

「うーん……………まあ管理局がこの世界を認識したわけじゃないから多分大丈夫だと思うけど……………どうした？」

「……………単刀直入に言うわ……………波動エンジンはロストログアね……………」

「……………ま、管理局の観点から見ればそうなるわな。じゃあ例えば……………管理局がこの世界に来て波動エンジンを渡したとした上で……………管理局はこの地球を守れると思うかい？」

「……………無理だと思うわね。1隻や10隻の艦隊ならまだ勝ち目はあるかもしれないけど、数百隻程で攻められたら無理ね」

プレシアはそう言って首を横に振る。

「だからもし、管理局がそう言ってきたら私も協力して阻止するわ」

「……………お前には覚悟があるか？」

「えっ……………」

「人を……………敵を撃てる覚悟だ」

将和はそう言って南部式拳銃を机に出して安全レバーをかけた上でプレシアに渡す。

（……………重い……………）

ズシリと重量を実感する。

「この先……………何が起きるかは分からないが……………（分かるけど）暗黒星団帝国の兵士を前にしてプレシアさん、貴女は敵を撃てるか？」

「……………」

「管理局がしているのは治安維持なようなもんだ。此方は戦争だ、そこが違う」

「……………」

「だからこそプレシア……プレシア・テストロッサに『覚悟はあるか？』」

「覚悟……」

「プレシア・テストロッサ……『お前の覚悟を示せ』」

将和はプレシアにそう言い、部屋に帰るよう促すのであった。

「はあ……」

プレシアが退出して数分後、またしても扉をノックする音があつた。

「空いてるよ〜」

「将和」

「……………」

入ってきたのは薫と玲であった。だが、二人ともいつもの作業服装ではなく、紫と赤のネグリジェを着ていた。二人の顔を見れば薫はフツと笑っており玲は頬を赤く染めていた。

「……あー……（そういや最近……）」

最近はずいぶん二人の事を見れていなかったのを思い出した将和は隠し持つてコップに注いでいたラム酒を飲み干した。

「来いよ二人ともツ」

その言葉に二人は笑みを浮かべて将和の元に歩み寄るのであった。

（わっ……彼処までするの……。キヤア、見えてるう……）

なお、部屋の外の廊下では二人（薫と玲）が来たのを見たプレシアが隠れて扉の前まで前進し、扉が少し空いていた事もあり中での夜戦を顔を真っ赤にしながから見学するのであった。

第四十三話

「……以上が地球攻略作戦の全容である」

「……………」

「何か意見はあるかね？」

地球からおとめ座宙域方向約40万光年先の暗黒星雲、更にそこから地球との半分にある20万光年の宙域にある中間補給基地。そこには地球攻略作戦に使用される暗黒星団帝国の三個特務艦隊と重核子爆弾が補給の為に駐留していた。

地球攻略作戦総司令官のグランザル・カザン大將は改めて地球攻略作戦に参加する将官達に作戦の説明を行っていた。カザン大將が将官達を見渡すがそこへ一人の将官がスツと手を挙げた。

「……ミヨーズ大佐」

「ハッ。カザン司令、敵地球艦隊の反攻への対処はいかなさるつもりですか？」

カザンに意見したのは第二特務艦隊司令官のラインハルト・ミヨーズ大佐であった。ミヨーズ大佐はまだ年齢はカザンらよりも若かったが艦隊運用能力は目を見張るものがあつた。その為、今回の地球攻略作戦に参加していたのだ。

「ウム……それについては重核子爆弾を全面に押し立て迎撃に出るであろう敵地球艦隊を全滅させる……そう説明した筈だが？」

「はい。それは地球攻略作戦です。ただ、地球軍はまだ別の星域に艦隊を配備させているのが偵察によって判明しています」

ミヨーズはそう言つて太陽系の星図のタブレットを操作し宙域を広くさせる。

「偵察艦の報告によれば地球軍はシリウスとケンタウルスに植民をしつつ艦隊を配備させているとあります。この艦隊が反攻して地球方面に来るのではありませんか？」

「……それは確かに否定は出来ない」

「ならば……」

「だが、聖総統は早期に地球を攻略せよとの事だ。これが最良なのは明白。そうであろう？」

「……………」

「無論。私もそれは憂慮している。地球攻略後に地球の高官を通じて奴等に降伏勧告を突きつける。それでも降伏しない場合は……ミヨーズ大佐、君の艦隊に対処を任せる」

「……………分かりました」

カザンの言葉にミヨーズは多少は納得しながらも座るのである。そしてカザンは全員を見渡す。

「では諸君、地球へ赴こう」

斯くして補給を済ませた地球攻略作戦部隊は太陽系に向かうのである。そして地球では1隻の宇宙戦艦が就役しテスト航海に向かうとしていた。

「三好艦長、波動エンジン異常無しです」

「ん」

地球防衛軍佐世保鎮守府の地下ドックでは新たに宇宙戦艦『三笠』艦長に就任した将和は航海長である島の報告に頷く。それに続いて戦闘班長のトーレが指示を出す。

「補助エンジン動力接続ッ」

「補助エンジン動力接続……スイッチ・オン」

機関長席に座る山崎機関長は上昇していくエネルギー目盛を読み上げていく。

「補助エンジン定速回転1600、両舷バランス正常、耐水压ドームへ注水、後部ゲート閉鎖」

「ドーム注水」

「水位、5、6、7、……………水位上昇、12、13、14、……………水位艦橋を越えます」

「将和、注水完了したぞ」

「あいよ」

「ガントリーロック解除」

トーレの言葉に『三笠』を支えていたガントリーロックが解除され、『三笠』は海水に身を委ねる。

「微速前進0.5」

「微速前進0.5」

「ゲート・オープン」

「ゲート・オープン」

「三笠、海中へ進入」

「波動エンジン内、エネルギー注入」

「補助エンジン、第二戦速から第三戦速へ。第一宇宙ノットまで、あと30秒」

「波動エンジン・シリンダーへの閉鎖弁オープン。波動エンジン始動5分前」

「波動エンジン内圧力上昇、エネルギー充填90パーセント」

「補助エンジン最大戦速、上昇角40、海面まであと2分」

「波動エンジン内圧力上昇、エネルギー充填100パーセント」

「波動エンジン点火2分前」

「フライホイール始動、10秒前」

「海面まで、あと30秒、現在補助エンジンの出力最大」

「波動エンジン内、エネルギー充填120パーセント」

「フライホイール始動！」

「フライホイール始動！」

「波動エンジン点火10秒前…、5、4、3、2、1」

「フライホイール接続、点火!!」

その瞬間、将和は立ち上がる。

「行くぞ!! 『三笠』発進!!」

「おう!! 『三笠』発進!!」

海面に出た瞬間、『三笠』は波動エンジンを点火させ海面から飛び上がる。そして『三笠』は波動エンジンの推力に力を言わせて上昇していくのである。

「上昇角40度、全艦異常無し、大気圏内航行主翼展開」

「何て船だ……12万トンの重量なのにそれを感じさせずに上昇していく……」

「やはり新型波動エンジンの性能が故か……」

島の驚きの言葉にスカリエッティはウンウンと頷いている。

「このまま上昇し大気圏離脱後、月軌道に乗れば小惑星『イカロス』に向かう」

「『イカロス』ですか？」

「そこは天文台と言いつつも防衛軍の秘密ドックが隠されている。そこで最終チェックも兼ねるんだよ」

「地球で最終チェックをしないのですか？」

「暗黒星団帝国の事もあるからな。万が一に備えていつでも出撃出来るようにと三好長官の御達しなんだよ」

太田らの問いをスカリエッティはそう答えるのであった。その後、『三笠』は砲撃等の訓練をしつつ小惑星『イカロス』に接舷しアステロイドシップで周囲の岩石を集めて『三笠』を隠すのである。そしてスカリエッティとトチローら技術班、少数の者を残して将和らは迎えのパトロール艦で地球に帰還するのであった。

その途中で将和らは山南中将を司令官とする第七艦隊と交差する。

「あれが防衛軍艦隊総旗艦『春藍』か……（うーん、ゲームで見ているが……やはり良いモノだな）」

航過する『春藍』を見ながら将和は満足そうに頷く。

（あれ……『春藍』となると……ゲームも入ってるのか……大丈夫……か？）

余計に心配になる将和であった。地球に帰還後、将和は再び司令部に呼ばれた。

「恐らく……地球は直接、暗黒星団帝国に侵攻されるじやろ」

「……それは何処情報で？」

「なに、ワシの勘じやよ」

（……それにしても凄いぞ親父……）

フォッフオッフオツと笑う正信に将和は冷や汗をかく。将和は誰にも伝えていないのにも関わらず、正信は直接侵攻されると踏んだの

だ。

「それで……俺をどうしろと?」

「なに、貴様には引き続き『三笠』艦長と艦隊を率いてもらう」

正信はそう言つて芹沢に視線を向けて芹沢は頷きタブレットを操作する。

「防衛軍は現在、艦隊は四個艦隊。それぞれカールセン、モートン、山南、そして貴様だ」

「太陽系防衛はモートンに任せる。御主はケンタウルスのカールセンのところに向かえ」

「……まさかケンタウルスに二個艦隊は管理局への……?」

「ウム。まあ管理局の艦隊が来ても追い返せるのは確かじやろうが……まあ万が一の事もあるからの。管理局が来なければ御の字なんじやがのう」

「まあそうですね。ちなみに政府には?」

「奴さんら、来るとしても精々来年と抜かしたからの。あやつら抜きじや」

(やつぱ大統領はアホか)

何を以て来年と抜かしたのかは不明だが、正信らはそれを聞いて防衛軍だけでやる事にしたのだ。

「最悪の想定……地球が占領されてワシらはゲリラ戦を行う。その隙にシリウスとケンタウルスから御主らの三個艦隊が駆けつける……地の利を活かす戦いじやな」

「まあ陸でなら我々には300万はいますからね」

「フオッフオッフオッフ。そういう事じやの」

将和の言葉に正信は笑うのである。

『イカロス』のところには数日内に向かえ。『三笠』の最終チェックが終り次第、ケンタウルスに向かえ、良いな?」

「了解です。親父、頼むから死なんで下さい」

「アホお、ワシはまだ死ぬ気はないわい。まだ貴様の孫も見えないんじやよ」

将和の言葉に笑う正信であつた。それから数日後に将和は数名の

乗員らと共に小惑星『イカロス』に向かうのである。

そして一月後、奴等はやってきたのである。

「太陽センサー、全て作動停止!!」

「冥王星基地、通信途絶!!」

「天王星基地、通信途絶!!」

「海王星、沈黙!!」

「土星基地、沈黙!!」

「……相原、どうかの?」

「はい、非常通信回路を使用しているのですが応答が無くなりました!!」

「未確認飛行物体、速度5000宇宙ノット!!」

「火星基地まで15000宇宙キロ、間に合いません!!」

「……………」

オペレーターからの報告に正信は無言で答えるのであった。

第四十四話

「もうすぐ火星基地だな」

この時、元『伊勢』戦術長の北野中尉は第十パトロール艇の臨時艇長として火星に向かう途中であった。そして火星宙域まで到着すると火星基地に通信を入れる。

「此方第十パトロール艇、予定通り2030に火星基地に到着予定です」

『此方火星基地。おう北野か。お前、未確認飛行物体の情報は掌握していないのか?』

「未確認飛行物体? 何だそれは?」

『知らないのか? 太陽系外から侵入してきている。ガトランティスの残存艦隊かもしれないからパトロール艇は月に避難した方がいいぞ』

「何だつて? 了解した。直ちに反転して月基地に向かう」

北野は直ちに反転して月基地に向かうのである。そして時間は数時間、前に戻る。

土星沖ではモートン少将の第一艦隊が集結し未確認飛行物体への迎撃準備を行っていた。

「土星を絶対防衛圏とする!! 総員、力を尽くせ!!」

第一艦隊旗艦『エンジンコート』の艦橋でモートン少将はそう指示を出していた。その時、オペレーターが叫ぶ。

「未確認飛行物体との距離、凡そ10万宇宙キロ!!」

「波動砲、発射用意!! 収束モードで発射する!!」

「了解、収束モードで発射します!!」

各艦は波動砲の準備に移行するも未確認飛行物体――重核子爆弾――の先端が青白く光る。

「何か反応があります!?!」

「何……？」

それは一瞬だった。先端から青白く光ると思っただけの間、に赤色状の光線に変わり第一艦隊を覆い尽くし、尽くし終わると土星を覆い尽くしたのであった。

「な、何……が……」

モートン少将はそれ以上言えなかった。自身の身体はそのまま提督席にもたれ掛かり動けず目を閉じてしまう。そしてモートン少将を筆頭に第一艦隊の乗員は永遠に目覚める事はなかった。

第一艦隊の乗員達と土星基地は重核子爆弾から放たれた『殺戮光線』により脳細胞を破壊されてしまい戦死したのであった。だが、第一艦隊には量産型アナライザーが1隻に3台配備されており量産型アナライザーは乗員達の戦死を掌握すると艦艇の帰還措置を取り艦隊司令部に事態を通達するのである。

「何!? 第一艦隊の乗員が総員戦死じゃと!?!」

「は、はい。量産型アナライザーからの報告では確かにと……」

(……マズイのう、モートンがやられるとは……)

「長官、直ちに防衛軍の空間騎兵隊及び各国の陸軍に対し戦闘準備を……」

「直ちに展開せよ。それと大統領にも避難してもらえ。奴は邪魔じゃよ」

「ハッ」

「さて……藤堂、君は先に地下都市に行け」

「長官!?!」

「ファッフアッフアツ。心配せんでも良い、ワシはまだ死なんよ」

驚く藤堂を他所に正信はニヤリと笑う。そしてタブレットを操作して藤堂に見せる。

「良いな? 地下都市の彼処じゃよ」

「……分かりました」

正信の言葉に藤堂は頭を下げ、数人の幕僚らを引き連れて地下都市に向かうのである。

「さて虎徹。奴等はこのまま此処に来るじゃろうな」

「ですな。既に空間騎兵隊二個連隊を配備させています」

「ウム……」

正信と虎徹が話すのを他所に未確認飛行物体――重核子爆弾――は防衛軍の迎撃をもつともせず、メトロポリス付近の地表に着陸するのである。

「恐らく敵は我々があの物体を調査しようと近づいたところを上空からの奇襲で攻撃するじやろ。航空隊は上空警戒をしつつ奇襲に備えよ」

「分かりました。直ちに」

なお、大統領は避難する事を拒みテレビを通じて無闇に騒いだりしない事を市民に通達した。それをプレシア達は正信の実家で観ていた。

「ママ……」

「大丈夫よアリシア」

「そうだね、万が一に備えて地下都市に潜る事はしておいた方が良くかもね」

「地下都市ですか？」

「ええ。元は内惑星戦争で火星自治宇宙軍が隕石を地球に降らせてきたからその守りとして地下深くに都市を築いたのよ」

「へえ……そんな事があつたんですね」

「ガミラス戦役の時も地上が部分的に放射能で汚染されたものだから地下都市を利用していたわね」

正信の嫁知美はそう言いながら「都市に潜る準備をしましょうかね……」と呟くのであった。プレシアは不意に空を見つめる、綺麗な満月だった。

「……？」

だが満月を見つめていると光がポツポツと出てきていた。不審に思ったプレシアは知美に声をかける。

「知美さん、あれって……」

「……チツ、防衛軍め。裏を掛かれたわね」

「知美さん……？」

満月を見ていた知美は表情を急変させる。そしてプレシアに声を荒げる。

「プレシアちゃん、急いで手荷物を……いや、間に合わない。アリシアちゃんを連れて来るのよ!! 早く!!」

「ツまさか……」

「そのまさかよ。奴等、上空から……地球の軌道上から降下してきたのよ!! 急いで!!」

「は、はい!! アリシア!!」

知美の言葉にプレシアは蹴られたように廊下を走り出す。そう、暗黒星団帝国は重核子爆弾を地表に降ろしてそれを囷に地球の軌道上から武装兵を降下させたのである。元日本宇宙軍大佐まで登り詰めた知美も瞬時に理解して家から地下都市の避難を優先させたのである。

そしてそれは周辺の家々に住む者達も状況を理解して地下都市に我先にと逃げ出したのである。

「武装降下兵じゃと!? しもうた、その手があつたか!!」

空間騎兵隊からの報告を受けた正信は舌打ちをする。予想はしていた筈だった。だが、この攻撃は予想していなかったのだ。

「それで状況は?」

「現在は警察が市民に地下都市への避難誘導を。武装機動隊と陸軍、空間騎兵隊が防戦をしていますが……状況は悦ばしくないとの……」

「……此処も直に危ないの。防戦の準備はするのじゃ」

「ハッ!!」

正信は画面からメトロポリスを見る。あちこちから火災が上がっていた。恐らくは暗黒星団帝国の破壊活動だろう。

「ツメが甘かったのう……」

「いえ、まだ巻き返しは可能です」

「シリウスとケンタウルスか?」

「はい。それに『三笠』もいます」

「ファッフアッフアツ。成る程の、じゃが今は……」

正信がそう呟いた時、司令部が揺れた。そこへ伝令が走ってきた。

「報告!! 敵が司令部に向かってきます!! 凡そ一個師団規模!! しかも三脚戦車も二個連隊はいます!!」

「チツ、早い。流石じゃな」

「確かに。ですが時間稼ぎは出来るでしょう」

「じゃろうな」

斯くして司令部も敵武装降下兵と戦闘に移行するのである。そしてプレシヤ達は避難を続けていた。

「プレシヤちゃん、此方よ!!」

「はい!!」

三人は大通りから避難しようとしたが地下都市へ逃げる市民達がごった返していたので裏道を利用して逃げていた。時折、避難民の死体が路上に折り重なっていた。プレシヤとアリシヤは吐きそうになるもそれを何とか堪えて足を前に出して走る。

「此方だ、早く!!」

そこへ避難誘導していた武装機動隊の隊員が叫んでいた。隊員の後ろには地下都市への入口があった。

「あれが入口よ!!」

「はい!!」

三人は駆け込もうとしたが、隊員が上空から降下してきた降下兵に撃たれた。

「グアツ!!」

「ツ!?!」

隊員が撃たれたのを見た瞬間、知美が二人を押し倒す。そこへ銃撃が放たれる。

「知美さん!?!」

「大丈夫……かすり傷よ……」

知美は負傷したが大事には至らなかった。だが知美は意識昏倒していた。そこへ一人の降下兵がレーザー小銃を構えて歩み寄る。

「女子供か……」

その時、プレシヤの手元の地面には武装機動隊員が持っていた南部14年式拳銃が転がっていた。これを持ち撃てば……でも外れたら

第四十五話

「クソツ!! 状況は大分悪いようだな!!」

トーレはAK-01レーザー自動突撃銃を持ち向かってくる暗黒星団帝国兵士を薙ぎ倒す。トーレは本来はイカロス天文台にいるのだがたまたま地球に物資補給のためにウーノと共に来ていた。そして次いでとばかりにパトロール艇の艇長になってしまった。そこへの暗黒星団帝国の襲来である。

補給基地は炎上し地球軍兵士と暗黒星団帝国兵士が互いに銃撃をしている。

「トーレ、『英雄の丘』に向かいましょう」

「何!?!」

「恐らく彼処に行けば……」

「よく分かんが分かった!! 取り敢えずは……」

トーレはそう言って破壊されたシーガルを掴み持ち上げた。

『なツ!?!』

銃撃していた暗黒星団帝国兵士達は持ち上がったシーガルを見て唖然とした。まさか地球軍兵士に彼処までの力が……。

「二回 目だが 派手に 飛べ!! ドオオオオオオオ
リヤアアアアアアアアアアアア!!」

『ウワアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!』

シーガルを投げられた暗黒星団帝国軍はたまったものじゃない。残骸に叩きつけられた者、破片が首に直撃して首が吹っ飛ぶ者等々阿鼻叫喚であった。

「今だウーノ!! バイクで逃げるぞ!!」

「ええ!!」

トーレはまだ動けるバイクを動かしウーノがその後ろに乗り込む。乗り込むのを確認したトーレはアクセルを吹かしてそのまま猛ス

ピードで基地を脱出するのである。目指す場所は『英雄の丘』であった。

その一方で『英雄の丘』を目指す者達も他にもいた。それは旧『ヤマト』乗員であった。

「南部砲雷長!!」

「おお、トーレ戦術長じゃないですか!? 御無事だったんですね!!」

「ふえ〜疲れたあ〜」

「太田!?!」

南部、太田等が続々と『英雄の丘』に来たのだ。そして軽傷を負った島とその島を担いできた太助も遅れてではあるが『英雄の丘』に来たのだ。

「しかし……やられたなあ……」

炎上する基地、市街地を見つつ南部が不意に呟いた。だが、彼等はまだ負けたという認識はしていなかった。そしてウーノは通信機を担いでいた相原を見つけた。

「相原大尉、イカロス天文台に繋いでくれませんか？ 彼処には博士達がいいます」

「そうか、スカさん達か!?!」

相原は急いで通信機を操作する。距離が遠いのか雑音だらけだったがそれでもイカロス天文台と通信が繋がった。

『ウーノ……トーレ……』

「博士ッ」

『皆をイカロスへ……イカロスへ……そこに『三笠』と私達はいる……』

「博士ッ!?!」

「駄目だ、妨害電波だッ」

通信が切れたので相原が操作するが妨害電波を出されたので手の施し用がなかった。

「でも博士はイカロスと言っていたわ」

「行きましようイカロスへ!!」

「でもフネが残っているか……」

「取り敢えず付近の基地に行こう」

そして一行らは近くの基地に赴いた。基地は炎上していたがそれでも地下格納庫にシーガルがまだ無傷で残っていたのだ。

「シーガルだ!？」

「早く乗り込め!!」

南部達がシーガルに乗り込むが機体の発進準備をしていたウーノは一人天井を見上げた。

「まさか……」

「どうしたウーノ?」

「天井が開いてないわ。恐らく攻撃で故障して自動で開かないのかもしれないわ。そうなると制御室から天井を開かせるしかないわ」

「何? 場所は何処だ?」

「彼処の司令室よ!! でも発進は自動発進だから……」

「よし、ならば私が行こう!!」

トーレはそう言って特殊技能であるISの「ライドインパルス」を駆使してあつという間に制御室に入り天井を空けさせる。それを見て島は発進のスイッチを押した。

「発進するぞ!!」

「急いでトーレ!!」

搭乗口からウーノが叫ぶ。トーレはISを駆使してあつという間に搭乗口まで滑り込んだのである。そこへ入口から暗黒星団帝国の兵士達が続々と駐機場に乗り込んできたのであるが発進するシーガルを取り逃がしたのである。

「くっ……」

「状況は?」

「あ、アルフォン少尉!? 申し訳ありません、敵の輸送機を取り逃がしました!!」

遅れて駐機場にやってきたのはこの場での現場指揮官であるギルバート・アルフォン少尉であった。

「ふむ……重要要人かもしれない……航空隊は元より艦隊にも連絡。拿捕なり撃墜するなりを求むと伝えろ」

「分かりました!!」

アルフォン少尉の命令は直ちに上空にいた航空部隊や地球宙域や月軌道に展開していた暗黒星団帝国第一特務艦隊へ伝えられ搜索が開始された。

しかし、第一特務艦隊も残存の地球防衛艦隊と交戦中であつただ。

「ええい、忌々しい奴等どもめッ!!」

地球攻略司令官と第一特務艦隊司令官を兼任するカザン大将は旗艦『ガリアデス』の艦橋で前方を見つめる。カザン大将の視線の先には激しく抵抗する残存地球防衛艦隊であつた。

「砲撃を集中せよ!! 落ち着いて狙え!!」

地球防衛軍第四艦隊司令官のパエツタ少将は旗艦『アイアース』で吠えていた。第四艦隊はたまたま金星軌道で演習中だつた事もありハイペロン爆弾の殺戮光線の被害を受けていなかった。そして状況を知ったパエツタ少将は金星基地に駐屯していた第六艦隊（巡洋艦5、駆逐艦8）を糾合して地球に駆けつけたのである。

しかし、第六艦隊を糾合しても第四艦隊の戦力は戦艦3、巡洋艦1、駆逐艦23にしかならず第一特務艦隊との交戦でその数を徐々に減らしていた。

「駆逐艦『バートン』大破、航行不能!!」

「同じく『ジャツカル』爆沈!!」

「くっ……巡洋艦『エイジャックス』『オライオン』に連絡、拡散波動砲発射用意!! 他艦は2隻を守れ!! 『エイジャックス』『オライオン』は準備出来次第拡散波動砲発射せよ!!」

「ア、アイサー!!」

連絡を受けた『エイジャックス』『オライオン』は直ちに拡散波動砲の発射準備に移行する。無論その行為は第一特務艦隊も気づき、2隻を集中砲撃しようとするが『アイアース』ら他艦が楯になった。

2隻が拡散波動砲の発射準備を整えた時、第四艦隊は戦艦1、巡洋艦4、駆逐艦9まで減少していた。

だが、時間を稼げた事で2隻は拡散波動砲を発射したのである。

「し、しまった!?! 回避せよ!?!」

カザンはそう叫ぶが艦隊の六割は拡散波動砲の直撃を食らい爆発四散したのである。慌てふためく第一特務艦隊を見てパエツタは戦線離脱を決意した。

「全艦ワープだ!?!」

「ええッ!?! に、逃げるのですか!?!」

「そうだ!! アドミラル・ミヨシからの命令だからなッ」

そう、パエツタは前々から正信から言われていた事がある。それは暗黒星団帝国が地球に侵攻してきた時、ある程度の損害を与えた後に離脱しケンタウルス座方面に向かい戦力を糾合して地球に再度向かう事だった。

「アドミラル・ミヨシ……無事で……ッ」

パエツタはそう言い残し『アイアース』はワープに成功するのであった。そして混乱から収まった第一特務艦隊は既にワープで離脱した第四艦隊を逃がす事になる。

「おのれ地球人めエッ!?!」

カザンは第四艦隊を追おうとしたがまずは地球攻略を最優先とし艦隊を再編成し地球へ降下するのであった。その為、トーレや島達が乗ったシーガルは第一特務艦隊に見つかる事なく地球からの離脱に成功しそのままイカロス天文台に向かうのであった。

「見えた、イカロスだ」

操縦していた島は目的地である小惑星『イカロス』を見つけて声を挙げた。

「だが入口は何処だ?」

「分からんなあ……」

「おい、見ろよ。天文台のドームが開いていくぞ」

島達が見ている前で天文台のドームが開いていった。それを見てトーレは決断した。

「よし、彼処に降りよう」

「良いのか？」

「構わん。敵が待ち構えていたら敵の艦をぶんどればいい」

「ハハハ、それは良いな」

トーレの言葉に相原が笑い島達も釣られて笑う。そしてシーガルはドームに着陸するのである。その後、トーレ達は通路を歩いていると前方に人影があった。トーレ達は咄嗟にコスモガンを構えるが前方にいたのはトーレと将和だった。

「将和?」

「三好艦長!」

「よう皆。来たか」

驚くトーレ達に将和は笑みを浮かべる。

「俺はたまたまいカロスに2日前に来ていたんだ。『三笠』の最終チェックを兼ねてな」

「『三笠』……あの艦が此処に?」

「ああ。真田が残した『アステロイド・リング』で岩盤を接着させてイカロスを大きくしたからな」

「成る程……」

将和はトーレ達を第一艦橋に案内する。そこにはスカリエツティや数人の者達がいた。

「博士ツ!」

「おう二人とも。無事だったかい」

「ええ、何とか……」

「しかし博士も人が悪い。出迎えてくれても良いじゃないか」
「済まないトーレ。皆と最終チェックに追われていてな……」

トーレの言葉にスカリエツティは済まなそうにする。

「それよりも島、南部達。コイツに見覚えがあるか?」

「ええ……死んだ加藤にソックリです」

「加藤四郎です。兄の意思を継いでコスモタイガーの訓練を続けていました」

「そうか……加藤の弟か」

「まるで加藤が生き返ったみたいだぞ」

島や南部達はやんや言うのである。そして地球では……………。

「本日を以て地球は我々暗黒星団帝国が占領した」

『……………ッ』

カザンは地球連邦会議場にて捕えた地球政府の閣僚達を前にそう宣言をする。その閣僚達の中には頭に包帯を巻いた正信と芹沢の姿もあった。

「諸君、見るがいい」

カザンはビデオパネルを映した。そこには地表に撃ち込まれた重核子爆弾があった。

「我が母星の文明の粋を極めた爆弾だ。あの爆弾一発で地球の自然に何ら影響を与える事なく一瞬の間に全人類の脳細胞を破壊し絶滅させる事が出来るのだ。その驚異に晒されなくなければ我々の命令に服従する事だ。最初の命令を下す。全地球艦艇の所在を明らかにせよ」

『全地球艦艇……………ッ』

閣僚達がざわめく中、閣僚達は自然と正信と芹沢に視線を向けた。それを見たカザンも二人に視線を向けて口を開く。

「その二人、二人は知っているようだな？」

「……………全地球艦艇の所在を知ってどうしようと言うのかね？」

「全部接収でもするのかな？」

「質問は許さんッ」

カザンの口調を強めた命令に正信はホッホッと笑う。

「恐ろしいのかの地球艦艇が？ 地球艦艇より貴様らの艦艇のが性能は上じゃないのかね？ それとも…………地球艦艇が恐ろしいのかの？」

「フン、言っておくが口は割らん。地球にはまだ力が残っている。我々はまだ降伏したわけではない。知りたければ貴様らで探せばいい」

正信と芹沢の言葉にカザンはわなわなと怒りで身体を震わせる。

「愚か者エツ!! この二人を直ちに処刑せよ!!」

カザンはそう言つて二人を処刑するように命令、二人は衛兵に連れられて部屋を出されたのである。

「……………」

衛兵に銃を突きつけられながら廊下を歩く正信と芹沢。

(長官…………)

(ウム…………そろそろじゃな)

二人は頷き合うと立ち止まる。

「何をしている? 早く歩けッ」

「それとも此処で殺されたいか?」

「まあ待て。ワシらも歳なんじゃ……………よッ!!」

正信はそう言つて隙を見てから隣にいた衛兵の顔を裏拳で殴り倒した。

「なッ!? ききッー」

「おっと、お前の相手は俺だ!!」

銃を正信に構えようとしたもう一人の衛兵だったが芹沢の右拳が鳩尾に命中して衛兵は倒れた。だが、芹沢は何かの違和感を感じた。

「どうした虎徹?」

「いや…………この兵士…………」

違和感を拭いきれなかった芹沢はうつ伏せで倒れる衛兵を仰向けにする。そして衛兵の身体を見て眼を見開いた。

「これは…………」

「機械…………じゃの。という事は奴等は…………」

「おや、二人で倒しちいましたか」

「ッ!?」

天井裏から突然の声に正信と芹沢は銃を取るが物体が天井裏から降りてきた。その物体を見て正信は笑みを浮かべる。

「おお、君か」

「待たせたな!!」

何故か決めポーズで笑みを浮かべる空間騎兵隊第27騎兵連隊

長の古野間大佐であった。

「御無事で何よりです長官、参謀長。遅くなって申し訳ない……何分ガタイがデカイもんで通風孔を抜けるのに手間取っちゃいますよ……」

「フアツフアツフア。そんな文句は言わんよ。来てくれるだけでも有難い。虎徹とどう脱出しようか思っていたところなんじゃよ」

「礼は上手く脱出出来てからにして下さい。さ、行きますよ!!」
そして三人は通路を駆け抜けるのであった。

第四十六話

「……………ウツ……………」

プレシアは眼を開く。ボウツとしていたが10数秒後に意識は覚醒して起き上がる。

「アリシア!?!」

「ん……………んう……………」

プレシアは辺りを見渡すと同じく隣のベッドで寝ていたアリシアが眠っていた。それを見てプレシアは安堵の息を吐いた。

「目が覚めたようねプレシアちゃん」

「あ、友美さん……………」

扉を開けて入ってきたのは頭に包帯を巻いた正信の嫁である友美だった。

「此処は……………」

「地下都市の野戦病院よ」

友美の言葉にプレシアはあの時の記憶が徐々に蘇ってきた。そうだ、アリシアはー。

「アリシアちゃんなら大丈夫よ」

友美の視線の先にはプレシアの足元の毛布でスヤスヤ寝ているアリシアがいた。何処も負傷した箇所が無かったようなのでプレシアも安堵の息を吐いた。

「アリシアちゃん、プレシアちゃんが起きるまで起きておくと行って

いたけど流石に疲れていたから途中で寝ちゃったのよ」

「そう……………だったんですね……………」

「今はゆっくりしておきなさい」

「は、はい……………」

友美に促されプレシアはベッドで横になるのである。そして……………。

「ほう。これだけ生き残っていたかの」

「それだけじゃありませんよ。日本だけならまだ戦力はありますよ」

呉宇宙軍港の地下にある旧国連宇宙軍旧地下司令部に正信達は移動していた。メガロポリス（東京）での戦闘で日本地区の兵力は減っていたがまだまだ余力はあった。

「陛下らは？」

「ご安心を。奴等の母船が降り立つ前に松代の旧地下司令部に、そして今は舞鶴の旧地下第四艦隊司令部に移動しています」

「ウム。何れ様子を伺って此方に移動させよう。古野間君、残存兵力のデータか何かあるかね？」

「このタブレットにデータがあります」

「ん」

古野間はそう言ってタブレットを正信に渡す。

日本地区 残存戦力

空間騎兵隊

第7空間騎兵連隊

第12空間騎兵連隊

第18空間騎兵連隊

日本陸軍

第三師団

第十三旅団

日本海軍

呉特別陸戦隊

舞鶴特別陸戦隊

「まあ連隊や師団と言いますけど、よくて各部隊も大隊規模しかいませんや」

「フォツフォツフォ。それだけでもいるのなら大丈夫じゃよ。この戦力は西日本だけかの？」

「関西及び四国、中国地方ですな。九州や北海道の地下施設にも生き残りはいるみたいですが……」

「フム……何れはコンタクトを取らんな……」

「それもですが長官、急いでイカロスと連絡を試みては……」

「それもそうじゃの。通信手、ダメー通信施設を通して小惑星イカロスの天文台に通信連絡をしてくれ」

「分かりました」

通信機器を弄っていた通信手が正信の命令を受けてイカロス天文台へ連絡を入れるのであった。

その頃のイカロス天文台はというと………。

「乗員が足りんな……」

「やむを得ないだろうな。イカロスにいた宇宙戦士訓練学校の生徒を入れても六割だからな」

『三笠』の作戦室で将和らは議論をしていた。

「親父に命令されていたケンタウルス座方面に今の六割の乗員で行ける事は行けるだろう。けど、途中での戦闘を考慮するとな……」

「救いと言えば航空隊は定数揃っているのが救いだな」

「ですね……」

『三好艦長』

「どうした相原？」

『三好長官から緊急連絡です。至急艦橋までお願いします』

「親父から？　そうか、何とか逃げてくれたか……」

相原の連絡に将和は安堵の息を吐き直ぐにスカリエツティらと共に艦橋に向かう。メインパネルには正信と芹沢らが映っていた。

「親父ッ」

『おお将和、息災じやの』

「親父こそな」

『これこれ。ワシらこそ処刑されかけていたんじゃ、少しは労れ』

「どうせ処刑場に向かう途中で衛兵とか殴り倒して逃げたに一票」

『フォッフオッフオ。その通りじゃ』

「なら元気じゃねーか」

笑う正信に将和は肩を竦める。

「それで親父、これからの事後だが……」

『ウム……状況は厄介かもしれない。この映像を見てほしい』

正信はそう言つて地表に撃ち込まれた重核子爆弾の映像を見せる。

『スカリエツティ博士、この爆弾が何なのか分かるかの？』

「……恐らくですが……ハイペロン爆弾でしょう」

『ハイペロン爆弾？』

「はい。こいつが起爆すると、内部に封入された重核子へ中性子ビームが照射され、高エネルギーのプラズマ状態となります。このプラズマ化された重核子を超高エネルギー状態で炉内に閉じ込め、二重らせん構造の定常空間を維持すると、周囲の空間に歪みが発生してベータ変調された重力波が発生するのです。その結果、これを浴びた生物は細胞核内部のDNAが異常活性され、自己崩壊します」

『とすると……』

「冥王星基地等や第一艦隊もこの重力波を浴びて乗員が全滅したのでしよう」

『厄介じゃの……奴等は起爆スイッチを二つ用意していると言つておつた……一つは地球を攻略した占領軍が持つておるじやろ。そしてもう一つは……』

「暗黒星団の母星でしょう。母星からなら安心して奴等は起爆スイッチを押すでしょうな」

『……奴等の母星は判明しておるかの？』

「侵入経路を確認しているけど、おおざっぱで言えば地球から約40万光年先の銀河までとしか……」

この時、暗黒星団帝国の侵入経路を解析中だったが約40万光年からまでとしか分かっていなかった。

『……分かった。将和、直ぐに奴等の母星へ向かい起爆スイッチを破

壊するんじゃない。無論、ケンタウルス座のカールセンらと合流も視野に入れる」

「……分かりました。『三笠』は直ちに敵母星に向けて発進します」
『ウム、頼むぞ』

正信はそう言って通信を切るのであった。そして将和は制帽を被り直す。

「聞いての通りだ。乗員が六割でも出撃だ」

「まあ仕方ないよね」

将和の言葉にスカリエツティは肩を竦める。そうと決まれば急いで発進の準備が進められた。

『艦長』

「おうどうした山本？」

『航空隊異常ありません。命令があればいつでも発艦出来ます』

「おう、ありがとう」

「艦内通気孔オールグリーン。異常無しッ」

「波動エンジン始動ッ」

「波動エンジンへの閉鎖弁オープンッ。波動エンジン内圧力上昇ヘッ」

『圧力上昇ッ』

山崎機関長が機関室にいる太助らに指示を送っていた。

「波動エンジン点火10秒前」

「岩盤爆破、スイッチオンッ」

スカリエツティが岩盤爆破用のスイッチを押す。押した事により小惑星に亀裂が走り岩盤が離れていく。外にあった天文台も破壊された。

「4、3、2、1」

「フライホイール接続点火!!」

『『三笠』発進!!』

『『三笠』発進!!』

岩盤が割れていく中、その岩盤の中から1隻の宇宙戦艦が現れていく。宇宙戦艦『三笠』であった。

「このまま一気に土星方面に向かう」

「了解。進路土星方面へ向かいます」

「そういやトチロー達も拾わないとな……」

「ああ……新婚旅行中だっけ？」

「クソ、トチローめ!!」

(怖えよスカさん……)

悔しがるスカリエッティを他所に『三笠』は土星方面へ向かうのである。だが、暗黒星団帝国も馬鹿ではない。太陽系の至るところに監視用衛星が設置されていた。その監視用衛星の1基が土星方面に向かう『三笠』を発見したのである。

「何？ 地球艦艇が？」

「はっ。1隻の戦艦だけです……如何なさいますか？」

「如何も何も追跡し撃沈せよ」

「はっ。直ちに追跡し撃沈します」

報告を受けたカザン大將は直ちに撃沈命令を発令。月軌道で待機していた第一特務艦隊から巡洋艦14隻、護衛艦29隻が出撃したのであった。

そして占領された地球のとある屋敷では……。

「貴方は……」

「私は暗黒星団帝国地球攻略軍技術士官のアルフォンだ」

元『ヤマト』乗組の西条未来少尉とアルフォン少尉の物語が幕を開けようとしていたのであった。

第四十七話

小惑星イカロスから発進した宇宙戦艦『三笠』は土星方面に向けて航行していた。

「土星到着まで後41分です」

「ん」

太田の報告に将和は頷く。

「防衛軍の生き残りはいるかな……」

「司令部にいた時の情報では主惑星の基地はやられているようです」

将和の呟きに相原がそう言う。

「となると……小惑星や衛星の基地は生き残っている可能性があるわけか」

「ですが艦長、我々には敵の母星を見つけて叩く任務があります」

将和の呟きに島はそう反論する。島の主張も正しい、正論と言って良いだろう。

「島のも一つの正論だろう。だが我々は船乗りでもある。困っている者がいれば手を差し出す」

「……分かりました」

将和の言葉に島は頷く。性格上、島も見捨てる事は出来なかった。ただ、島は正論を言うのも航海長としての仕事でもあった。

「ただ、島の主張も一理ある。そこで『三笠』の前方にある小惑星や衛星の基地のみとする」

「分かりました。直ぐに呼び掛けてみます」

将和の言葉に相原が頷き、直ぐに通信機器を操作する。そして『三笠』の進路上にある衛星『エンケラドゥス』『タイタン』『フェーベ』に向けて電波を発した。

そして返ってきたのは『フェーベ』からだった。

『此方、衛星『フェーベ』守備隊です。地球との交信が全く出来なくて

困っていたところですよ」

「此方、地球防衛軍宇宙戦艦『三笠』です。時間がありません、『フェーブ』守備隊は直ちに基地を放棄して我々と合流してもらいたい」

「一体何が……？」

「一言で言えば地球は敵性宇宙人国家に占領されました。ガミラスではありません、我々は三好防衛長官の命令によりケンタウルス座方面の地球艦隊と合流して敵母星を叩く任務を仰せつかりました」

「何と……分かりました、直ちに基地を撤収して合流します」

「よろしくお願ひします」

そして衛星『フェーブ』に到着すると待機していた防衛軍艦船と合流したのである。

「宇宙戦艦『三笠』艦長の三好将和少将です」

『『フェーブ』守備隊のマイク・ガラнда中佐です。パトロール艦『テリブル』の艦長も兼任しています』

「成る程。ガラнда中佐、戦力は如何程に？」

『パトロール艦1、自動駆逐艦4の哨戒艦隊です』

「成る程……ガラнда中佐。先程も申し上げた通り、我々はケンタウルス座方面で味方艦隊と合流する予定です。一緒に行きましょう」

『それは願ってもない事です。是非御同伴します』

将和の提案にガラнда中佐も頷き、『三笠』は小艦隊ではあるが戦力が増えたのである。しかし、将和らが喜ぶのも束の間……暗黒星団帝国が追撃のために放った艦隊が後方からやってきたのである。

「敵艦隊の数は？」

「巡洋艦級14隻、護衛艦29隻です」

『『テリブル』に連絡。先に小ワープして第十一番惑星方面に離脱せよ』

「艦長！」

「いや、将和のが正しい。『三笠』は新型機関を搭載しているからワープの速度が速くなっているんだ。だからこそ、『テリブル』を追い抜いてしまう可能性がある」

声を荒げるトーレにスカリエッティはそう言う。

「そういうわけだ」

「……了解ッ!! 砲雷撃戦用意だ!!」

将和の言葉にトーレは納得はしたがそれでもの気持ちを振り切つて砲雷撃戦に移行する。

「主砲射撃準備宜し!!」

「撃ち方始めエツ!!」

「撃エツ!!」

『三笠』が砲撃を開始する。だが、初撃は命中しなかった。砲撃の錬度はまだまだ低かった。

「クッ」

「慌てるな。連続での射撃を続けろッ。太田、『テリブル』と自動駆逐艦のワープは？」

『テリブル』以下ワープしました」

「よし。トーレ、後三斉射は行え。その後は此方もワープに移行するッ」

「了解した。砲術、後三斉射行う。外すなよ!!」

『了解!!』

その後、『三笠』は主砲を三斉射行い巡洋艦3隻、護衛艦5隻を撃沈してからワープに移行した。

「5、4、3、2、1、ワープッ!!」

『三笠』がワープする。そのワープ速度は『伊勢』よりも速かった。その様子は追撃していた暗黒星団帝国艦隊も驚愕するのである。

「な、何と速いワープだ……」

「司令、如何なさいますか？」

「……やむを得ん。カザン総司令に報告するしかあるまい。全艦反転せよ」

追撃艦隊司令は追撃を中止して反転、地球に向かうのであった。そして『三笠』は第十一番惑星方面までワープするのである。

「小ワープ終了ッ」

「前方に『テリブル』と自動駆逐艦を確認しました。現在位置、第十一番惑星より約3万天文単位……方位280。オールト雲のど真ん中

です」

「しかし凄い。オールト雲って彗星の巣というアレでしょ？ 一気に太陽系の外側までワープを出来るとは……」

南部がそう感想をもらす。確かに『三笠』の波動エンジンは想像以上の代物だったのだ。

「スカさん、エンジンの状況は？」

「ちよっと待ってくれ。トチローの奴が弄った部分はブラックボックスが多くてね……」

「艦長、レーダー装置にも損傷が発生しています」

「うむ……やはり外部にも障害が出たか……」

相原が通信席にいるためレーダー席に移ったウーノがそう将和に報告をする。

「将和、レーダーの方は高速ワープの影響だろうから技術班を修理に向かわせる。島、イレギュラーの原因についてはちよっと待ってくれ」

「了解です」

「ま、これだけワープ性能が強化されたエンジンなんだ。それだけ問題もあるって事なのかなあ」

「如何にもトチローさんが天才とは言っても連続ワープというのは相当難しい技術でしょうからね」

南部のぼやきに相原はそう反応をする。そこにレーダーが反応する。

「艦長、右舷遠方より艦船が接近してきますッ」

「敵か？」

「敵では無いと思います。恐らく味方の防衛軍の艦かと……」

「防衛軍の艦が？ 何でオールト雲に……？」

「さあてな」

そこへスカリエッティが戻ってきた。右手には何かの金属の球体を持っていた。

「将和、停止の原因が分かった」

「何だったんだ？」

「これだよ」

「博士、これは……?」

球体が分からないトーレがスカリエツティに問うとスカリエツティは肩を竦める。

「信じられないけど……これは波動エンジンのフライホイールシャフトに使うベアリングなんだ。コイツがこの宙域に無数にばら蒔かれていたからコンピュータが障害物と判断したんだろうね。レーダーの破損もコイツとの衝突によるものだった」

「でも誰がこんなモノをばら蒔いたので……?」

『俺さ』

「トチロー!」

そこへ通信パネルが開いて現れたのはトチローだった。

『新型波動エンジン搭載艦のテストのため冥王星基地を出港していたから命拾いしたぜ。後はオールトの雲の中に潜んで地球の様子を伺っていたんだ。敵の通信も傍受出来たからお前らが来る事も分かったし航路も大体は特定出来た。それで余ったベアリングを魚雷に積載してこの宙域にブチまけてみたってワケさ』

ニヒヒヒと笑うトチローに将和は肩を竦める。

「相変わらずだな。そのせいで此方はレーダーまで破損したんだぞ。それに此方の航路を特定したんなら無理に止めたりせずには後から追いかけたら良いじゃないか」

『スマンスマン、勘弁してくれ。実はのつぴきならない状態で『三笠』に止まってももうしかなかったんだ』

「のつぴきならない状況?」

『まあ簡単に言うとな。敵に発見されて追われているのさ』

「オイオイ……」

『何隻かはパエツタ司令の残存艦艇と共に沈めたけど敵の数が多いからとてもじゃないが太刀打ち出来なかったんだよ。それに敵旗艦は空母。航空機をわんさか出してきやがるぜ』

「パエツタ司令? パエツタ司令も生存しているのかツ!」

『ああ、久しぶりだな三好君』

通信パネルに現れたのは頭に包帯を巻いたパエツタだった。重傷なのか巻かれた包帯も所々血が滲んでいた。

『此方もまだ暫くは粘れる。何とか来てほしい』

『分かりました。総員戦闘態勢!!』

戦闘態勢のベルが艦内に鳴り響く。そこへ太田から報告が来た。

『雪風』他11隻を肉眼で捕捉!!』

「艦長!! レーダーが破損しているため此処からでは敵の位置が掴めません!!」

『将和、通信は解放しとけ!! レーダーは此方が担当して送信する!!』

「任せたぞトチロー!! 相原、中継を頼むぞッ」

「了解。どうせ『三笠』の事は敵にバレてるんだ。コソコソするのはやめてハデに行きますか!!」

「ソイツは素敵だ。面白くなってきた!! 山本、航空隊の出番だ!!」

『了解ッ。任せて下さい』

斯くして『三笠』は『雪風』『アイアース』らと合流して迫り来る暗黒星団帝国艦隊を迎え撃つのであった。

第四十八話

宇宙でも通常の空間でもない別次元に設置されている超巨大な円筒状の施設……それは時空管理局の本局と呼ばれる“海”の本部であり、管理局が保有する次元航行艦の母港でもあるこの施設にある一室にて、“海”の制服を纏った幾人かの男性局員らが集まっていた。

「どうにもあの女狐の存在は厄介ですなあ〜」

「確かに……これまでの幸運から増々増長している」

「このままでは我々の立場も危ういのではないか？」

局員らの手の中や眼前に置かれているタブレット端末にはリンデイの顔写真が表示されている。

男尊女卑……男性を重くみて、女性を軽んじることであるが、それは異世界、魔法世界でもソレはある様で、此処に集まった局員たちはリンデイの地位向上に対して嫌悪感、危機感を覚え、嫉妬心を抱いていた。

リンデイ自身、高ランクの魔導師であるのは勿論、彼女自身の経歴と周りの環境が第三者には恵まれているように見えた。

夫であるクライド・ハラオウンもリンデイ同様、高ランクの魔導師であったが、闇の書を一時的に封印する為にその身を挺して封印する事に成功し、殉職するも管理局内で英雄視されている。

息子のクロノ・ハラオウンも両親同様高ランクの魔導師であり、10代で執務官資格を取得する秀才であり、20代の若さで現役の提督職となっており、リンデイ自身も本局の統括官と言う地位に居る。

そもその彼女の幸運は十数年前、偶然発見した第97管理外世界にて、後の管理局のエースとなる高町なのはその言う原石を現地で起きたジュエルシードを巡る騒動にて発見し、その後も管理局では宿命とも言える闇の書事件を完全に解決し、それらを通じて若いながらも高ランクの魔導師を複数管理局へスカウトする事に成功し、その内PT

事件の関係者であるフェイト・テスタロッサを自らの養女にしている。

そんなスカウトをした若き高ランクの魔導師たちの中で、新暦75年に八神はやてが実験的に設立した機動六課の後見人となり、その起動六課は設立した年に闇の書同様、管理局が長い月日に渡って広域指名手配をしていたジェイル・スカリエッツィの逮捕にも成功している。

ただし、逮捕したスカリエッツィと管理局との司法取引に応じなかった戦闘機人たちは収監されていた軌道刑務所から脱獄し、行方不明になっている。

一部の男性局員たちはスカリエッツィたちの脱獄に対して、彼の逮捕に関係したはやて、フェイト、そして六課の後見人であるリンディたちに対して責任問題を追及するも、逮捕とスカリエッツィたちの脱獄との因果関係がなかった事から不問とされた。

「スカリエッツィの脱獄に関して、あの女狐どもを失脚させる絶好のチャンスかと思われたが、『逮捕と脱獄は関係ない』などと生温い判断を下すとはファイル顧問も老いたものだ」

「確かに。ファイル顧問だけではない、キール閣下もクローベル元帥も何かとあの女狐どもには甘い節がある」

「このままでは管理局があの子狐とそのシンパどもに牛耳られてしまう」

「……ここはやはり、あの女狐どもを始末する必要があると思うが？ 諸君はどう思う？」

「賛成です」

「私も……」

「小官も同意見です」

「一先ず一番地位が高いあの女狐を始末すれば、シンパたちは後ろ盾を一つ失う事になりますからね。後はじわじわと力を削いでいけば、瓦解するでしょう」

「肝心なのはどうかやってあの女狐を始末するか……だ……」

「我々の関与がバレてはならない事は当然、前提となる」

「確かに。計画はより慎重にならなければならない」

そして集まった局員たちがリンディの暗殺計画を練り始める。

暗殺計画何てそう簡単に練ることが出来るのかと思われるが、此処に集まった局員たちも性格が歪んでいながらも管理局ではエリート
の部類に属する者たち……。

そのためリンディの暗殺計画は着実に計画され進められていったのである。

事態が動いたのは一部の局員たちがリンディの暗殺計画を企ててから幾日が過ぎた頃……。

「前線の視察？」

「はい。統括官はつい最近、管理世界に入りました『アマリア』についてのご報告は受けたでしょうか？」

「確か、鉱物資源が豊富な世界だったわね」

「ええ、ですが、原住民たちが我々管理局の受け入れに対して難色を示しており、現地では抗議活動やテロ活動が横行しており、現場の方でも色々と難航しているみたいです」

「海」の高官の一人がリンディに対して新たに管理世界入りした世界での近況を報告する。

「被害もかなり出ているみたいね……」

報告書には原住民たちによるテロやゲリラ活動により管理局側に被害が出ている事が記されている。

「そこで、統括官自らが視察に赴いて頂ければ、現場の局員たちも士気軒昂となりましょう」

「海」に所属し、統括官という立場であるリンディも新たに管理世界入りした世界については知っていたが、こうして詳細な報告を受けると、どうもその世界の管理下は上手くいっていない様子だ。

報告を伝えるに来た海」の高官はリンディに対してかの世界へ視察をして、前線の局員たちを鼓舞してもらいたいと具申した。

「……………」

リンディは引き続き報告書に目を通すと管理局側の被害の中には自分の息子や義娘と変わらない年齢の局員も犠牲になっていた。そ

れを見てリンデイは決断をする。

「分かりました。早速準備を進めて貰えますか？」

「承知しました」

リンデイが視察を受け入れた事に対して「海」の高官は深々と一礼する。

ただこの時、「海」の高官が薄ら笑いを浮かべていた事にリンデイは気付かなかった。

それからリンデイの視察への準備が進められた。リンデイの『アマリア』への視察は息子のクロノの耳にも入った。

「母さん、『アマリア』へ視察に赴くって聞いたけど、何故あの世界に視察を!? あの世界はまだ完全に管理下に置かれていないし、周辺の海も放射能嵐が強く、航海計器にも支障をきたす事があるらしいと聞きます!!」

「だからこそ、私は統括官としての立場として現地で苦戦をしている皆の様子を知る必要があるのよ」

リンデイが『アマリア』への視察を決めたのは自分の息子や義娘と同じ年齢の局員たちが劣悪な環境下で必死に頑張っているからこそ、現地に赴こうと決めたのだ。

「でも、そんな危険な場所へXV級ではなく、L級で行くなんて……せめて僕自身が一緒に行ければよかったのに……」

今回リンデイが視察に赴く際に使用される艦は現在管理局で主流となっているXV級次元航行艦ではなく、L級次元巡航艦を使用する。

L級次元巡航艦はリンデイがまだ統括官になる前・艦長職に就いている頃に艦長として乗艦していた艦と同型の艦であったが、現在の管理局ではL級次元巡航艦の多くは廃艦となっており、順次XV級に成り代わっている。

実際にリンデイが艦長を務めていたL級次元巡航艦のアースラも廃艦処分となり除籍されていたが、JS事件の際に戦闘機人とガジェットの襲撃を受けた機動六課隊舎の代わりにはやてが臨時の司令部兼隊舎として使用され、解体処分される前にJS事件終息の一手を担っていた。

「私としては乗り慣れたL級で十分だし、少しでも早く現地に行きたいから……それに貴方の艦は今、整備中でしよう?」

「……………」

「大丈夫よクロノ。現地に着けば他の管理局の艦も居るのだから」

息子としては何だかモヤモヤとした思いを抱きつつ、リンデイの言う通り自分が艦長を務めている艦が整備中では動かせない。

かと言って艦長たる自分がリンデイと共に視察へ行き、艦を留守にすることも出来ない。

整備中と有給は異なり、艦長としてやる仕事はあるのだから……………。

不安を抱きつつもクロノはリンデイを見送るしか出来なかった。

リンデイが『アマリア』への視察に使用するL級次元巡航艦『マジエスタ』は予定通り本局を出航して行った。

「また艦長と一緒に艦に乗れるとは思ってもみませんでした。光栄です」

『マジエスタ』に乗艦したリンデイに大柄ながらも温厚そうな男性局員が話しかけてきた。

「こちらこそ、パトリチエフ艦長。それに今、艦長なのは貴方の方よ」「ハハ、確かに……まあ、年季の入ったボロ船ですが、必ず目的地へ貴女を届けます」

「ええ、貴方の操艦技術を信じているわ」

リンデイに話しかけてきたのはこの『マジエスタ』の艦長であるフォードル・パトリチエフであり、彼はリンデイが『アースラ』の艦長時代からの付き合いがあり、リンデイも彼の船乗りとしての腕を信じていた。

『マジエスタ』が本局を出発して三日の夜、不測の事態が起きた。

今回、リンディは乗員としてではなく、随員……いくなればゲストとして乗艦していたので、艦の運航には携わっていなかった。

リンディは用意されていた士官室にて本を読んでいたのだが、明日に備えて寝ようとしたのだが、中々寝付けなかった。

(久しぶりの長距離航海のせいかしら?)

そこでリンディは寝つきをよくするために睡眠薬を服用しベッドの中に入った。

リンディがベッドに入ってからしばらくして、マジエスタのレーダーがこちらに接近してくる艦影を捉えた。

「艦長、此方に向かって接近してくる艦影があります」

オペレーターがパトリチエフに報告を入れる。

「管理局の艦か？」

管理局の艦である『マジエスタ』に接近してくるのだから、当然接近してくる艦影も管理局の次元航行艦かと思うのは当然の事だった。

しかし、『マジエスタ』の艦橋にあるモニターに表示されたのは管理局の次元航行艦ではなく、民間企業の次元航行船だった。

「民間船のようです」

「……何故、民間船が……向こうの船に通信を送れ、船名、目的を尋ねるのだ」

「了解」

通信士が接近してくる民間船に通信を送る。しかし……。

「接近中の民間船、応答がありません」

「発光信号を使い!!」

通信にも答えずに接近してくる民間船に対してパトリチエフは不信感を高める。

『マジエスタ』は通信の他に発光信号を送るもやはり民間船からの応答はない。

「通信内容を停船命令に変えろ!! 応答なき場合は撃沈する旨も伝え

るのだ!!」

「は、はい!!」

パトリチエフは等々撃沈命令を含む停船命令を民間船に送る。

すると、民間船は船頭の左右上下に備えてある護身用のビーム砲塔をマジエスタへと向けて発砲してきた。

「敵艦、発砲!!」

「フィールド出力全開!! こちらも砲塔を不審船に向けろ!!」

発砲してきことからパトリチエフは接近してくる民間船を民間船から不審船に切り替えた。

『マジエスタ』は不審船に発砲するが、不審船は被弾しても接近を止めない。

「不審船、尚も接近してきます!!」

「このままでは衝突します!!」

「回避ッ!! 面舵一杯!!」

「面舵一杯!!」

アルカンシエルを撃とうにしては相手との距離が近すぎてエネルギーを充填する時間がなかったので、『マジエスタ』は回避行動をとるが、それも間に合わず……不審船は『マジエスタ』の左舷中央部に突き刺さったのである。

「不審船、本艦の左舷に接舷!!」

「不審船より、侵入者を確認!!」

「総員、艦内戦闘用意!!」

パトリチエフはマジエスタの乗員たちに戦闘準備をさせる。

「私は統括官に知らせてくる!!」

そして、部屋に居るリンデイに事態を知らせに行く。

「統括官!! 統括官!!」

パトリチエフがリンデイの部屋の扉をノックして声をかけるが、部屋の中からは返事がない。

「失礼しますッ!!」

緊急事態なので、パトリチエフはマスターキーを使い部屋に入るとリンデイはベッドで眠っていた。

「統括官!! 起きて下さい!! 統括官!!」

パトリチエフがリンデイの身体を揺すりながら彼女を起こす。

「……ん? パトリチエフ艦長? ……どうしたの?」

「緊急事態です!! 何者かが本艦に侵入してきました!!」

「……………えっ?」

事態を説明するもリンデイの様子が何かおかしい。

「統括官?」

「あつ、ごめんなさい……寝付けなかったから睡眠薬を飲んだの。それで意識がぼやけていて……」

「あつ……では、失礼します」

睡眠薬を飲んだせいで眠気が強く足腰に力が入らないリンデイをパトリチエフはお姫様抱っこで部屋から連れ出す。

その頃、不審船と『マジエスタ』の接舷区画では……。

「行くぞ、情報では管理局の統括官がこの艦に乗っているとの事だ」

「ですが誰が管理局の統括官か顔写真や画像がないので、分かりません」

「だったら、この艦に居る管理局の奴らを皆殺しにすればいいだけだ!! 俺たちの世界を滅茶苦茶にした管理局の奴らを許すな!!」

『おう!!』

『マジエスタ』に強行接舷してきたのはリンデイが視察に向かっている『アマリア』の反管理局勢力の過激派たちであった。

なぜ、過激派たちが武装した次元航行船を持ち、この日、この時間にリンデイが乗った次元巡航艦が通るのを知っていたのか?

その理由は簡単で、リンデイの暗殺をもくろんだ管理局の高官らがいくつものブローカーを通じて武装次元航行船と情報を過激派たちに教えていたのだ。

過激派たちは手にした武器でマジエスタの通路を走り、迎撃にあたる局員らを排除しながらリンデイを捜している。

「畜生!! 奴等、質量兵器を保有しているぞ!!」

「怯むな!! 奴等を逃してはならん!!」

過激派たちは質量兵器……自動小銃に手榴弾、果ては対戦車投擲発

射器で武装しており、艦内のあちこちから銃声と手榴弾、投擲発射器の爆発音がする。

『マジエスタ』の乗員たちも必死に抵抗するが、過激派たちの人数の方が多く、武器も相手側の方が優勢みたいで『マジエスタ』の乗員たちはバタバタと斃れていく。

(くっ、このまままでは……)

リンディを抱きかかえながらパトリチエフは味方が不利な状況を察する。

パトリチエフはリンディを逃がす為、脱出艇の格納庫へと向かう。

そして、リンディを脱出艇に乗せた時、数発の銃声が響いた。

「うッ!?」

追い付いた過激派たちがパトリチエフの背中を撃つたのだ。

「ッ……」

パトリチエフは最期の力を振り絞り、脱出艇の射出レバーを下ろす。すると、脱出艇は『マジエスタ』から射出される。

射出されたのを見たパトリチエフは過激派に正対する。足下に大量の血が池を形成していた。

「ふっ……よせよ、痛いじゃないかね……」

パトリチエフは過激派たちに向けて不敵な笑みを浮かべる。

「このッ」

過激派たちはパトリチエフに対して銃撃を加え、パトリチエフの大きな体はたちまち蜂の巣になり斃れた。

「誰かが脱出艇で逃げたぞ!!」

「こいつ、余計な真似を……」

過激派たちもパトリチエフが誰かを逃がした事を確認していた。

「もしかしてあの脱出艇に管理局の統括官が……」

『マジエスタ』から射出された脱出艇に統括官が乗っているのだと判断する。

「砲撃をして脱出艇を撃破しろ!!」

不審船から脱出艇を攻撃しようとするが、不審船は『マジエスタ』に接触したままだったので、射角がとれずに攻撃出来なかった。

「……この角度からでは脱出艇を砲撃出来ない様です!!」

「くそっ、急いで後を追うぞ!!」

過激派たちは急ぎ、接舷した船に戻るが不審船から連絡が入った。

「ん？ 船に残った同志から連絡です!!」

「なんだ？」

「この海域の近くにホワイトホールが出現し、脱出艇が呑み込まれたみたいですよ」

「そうか……ならば追わなくて良い……引き上げるぞ」

『マジエスタ』から射出された脱出艇がホワイトホールに飲み込まれた事実を聞き過激派たちは早々にこの現場から立ち去って行った。
「……………」

パトリチエフから強引に脱出艇に乗せられたリンデイであったが、睡眠薬の効果で眠気が強く意識が朦朧としていたので、脱出艇を操縦することが出来ず、突然出現したホワイトホールへと飲み込まれてしまった。

そして、ホワイトホールがホールアウトしたのは……………。

「艦長、右舷2時方向に漂流物です」

「漂流物？」

「はい。大きさからして小型艇ですよ」

「……もしかしたら暗黒星団の艦隊から脱出した船かもしれないな。一番近いのは？」

「大山少佐の駆逐艦『雪風』ですよ」

「ん。ならトチローに連絡を入れてくれ」

「分かりました。三好艦長」

物語は更に混沌に入ろうとしていた。

第四十九話

さてさて、此方は暗黒星団帝国に占領された地球である。地球を攻略した暗黒星団帝国軍であったが残存地球連邦軍によるパルチザン化でパルチザン狩りをしていたが戦果は芳しくなかった。

「クツ、地球人の分際が……」

報告を受ける地球攻略軍総司令官のカザン大將は苦虫を噛み潰したような表情をする。

「奴等のアジトは特定出来たのか？」

「残念ながら未だ発見には……」

「おのれ!! 何処に隠れよったのか!!」

部下からの報告にカザン大將は机を叩く。暗黒星団帝国軍は地球占領時に約250万程の地球防衛軍の地上軍を捕虜にしていた。無論、幹部級は収容所に移送されて一般兵級は除隊させていた。

しかし、防衛軍司令長官の三好正信元帥大將、芹沢大將、藤堂極東管区長官の行方が以前として不明でありカザンらは正信がパルチザンの司令として活動していると踏んでいた。

「何としても探せ!! そのまま奴等の息の根を止めるんだ!!」

「はッ!!」

カザンは改めてパルチザンを探して撃滅するよう指令を出すのである。そしてカザンから撃滅するよう指令された地球防衛軍のパルチザン部隊はというと……。

「よう北野。そっちはどうだ？」

「古野間さんッ。はい、敵の一個大隊を痛撃させましたよ」

「そいつは重畳だな。『白い花』の情報も助かるな」

古野間はコスモバズーカを肩に担ぎながらニヤリと笑う。古野間の部隊は『白い花』からの情報で暗黒星団帝国軍を待ち伏せてこれもまた痛撃していたのだ。

「だが北野。油断はするなよ？」

「勿論です古野間さん」

古野間の言葉に頷く北野であった。そしてその頃の将和らはい
うと……………。

「三好司令、もう1. 2光年でプロキシマ・ケンタウリの惑星bに到着
します」

「ん。何とか到着する事が出来たか」

残存地球艦隊を率いていた将和はホツと安堵の息を吐いた。この
時、ケンタウルス座に到着した残存地球艦隊は戦艦2、巡洋艦2、駆
逐艦7であった。

「それとスカさん……………彼女の容態は？」

「まあ……………命に別状は無いかな。まだ眠っているが傷らしい傷は確認
されていなかったからね」

将和の言葉にスカリエツティはそう言って肩を竦める。医務室に
は一人の女性が入院という形で入っていた。それが先日、救助した時
空管理局所属提督リンデイ・ハラオウンなのだから仕方ない。

「司令、ケンタウルス座方面から護衛艦2隻接近中です。通信が入っ
てます」

「ん。頼む」

『此方ケンタウルス座方面艦隊所属護衛艦『汐風』。所属と階級を言わ
れたし』

「此方地球防衛軍残存艦隊旗艦『三笠』で艦長の三好将和少将だ」

『三好少将でしたか。しかし何故此処に……………？』

「簡単に言う……………地球が暗黒星団帝国に占領された。俺達は残存艦
隊として此処まで来たわけだ」

『何と、地球が!? 分かりました、直ぐにカールセン司令に報告します

!! 三好少将達も来て下さい!!』

「無論だ」

斯くして将和らの残存地球艦隊は無事にケンタウルス座に到着したのである。残存地球艦隊は惑星bに降り立ち修理ドックに入ると将和はカールセンに呼ばれた。

「お久しぶりですカールセン司令」

「お前もな三好。それで、地球はどんな感じだ？」

「地球及び太陽系は完全に暗黒星団帝国軍に占領され掌握化に入つてます。が、親父や芹沢副長官らは無事です。地下に潜伏してパルチザンで活動しています」

「フム……三好長官が無事なら地球は大丈夫そうだな」

「はい。それで親父はカールセン司令らと協力して敵の母星を叩けと……」

「地球ではなく敵の母星だと？ 何故だ？」

「地球には暗黒星団帝国軍が撃ち込んだハイペロン爆弾という大型爆弾があります。かいつまんで言いますがそいつが爆破すれば地球人の脳が破壊され死亡するという恐ろしい兵器です。そいつの爆破スイッチが地球と敵の母星にあるのです」

「成る程。それで御主らが敵の母星に向かい破壊するというわけか……」

カールセンはタブレットを操作して将和に渡す。

「これは？」

「今のケンタウルス座方面艦隊の数じゃよ」

ケンタウルス座方面艦隊

司令長官 ラウルス・カールセン少将

旗艦『ヘルゴラント』

戦艦

『ヘルゴラント』

『ナツサウ』

『テキサス』

『リットリオ』

『ローマ』

巡洋艦

『カンバーランド』

『アキリーズ』

『パース』

『ブリュッヒャー』

『プリンツ・オイゲン』

『エメラルド』

『高雄』

『愛宕』

『妙高』

『リアンダー』

『アイリス』

駆逐艦

『Z31』以下26隻

護衛艦

『フラワー』以下12隻

パトロール艦

『天塩』『撫子』以下10隻

自動大型戦艦

『クレイモア』以下22隻

自動駆逐艦

『レイピア』以下49隻

補給艦

『速吸』『サクラメント』『デトロイト』『エトナ』

「全部はワシも困る。此処の守備が必要じゃからな」

「そりゃあそうですわな……じゃあこれとこれと……これらで編成して遠征したいと思います」

「フム……これくらいなら構わんぞ」

将和から差し出されたタブレットを見つつカールセンは納得した

ように領いた。

暗黒星団帝国派遣艦隊

司令官 三好将和少将

旗艦『三笠』

戦艦

『三笠』

『リットリオ』

『ローマ』

巡洋艦

『プリンツ・オイゲン』

『高雄』

『愛宕』

『妙高』

『リアンダー』

パトロール艦

『天塩』『撫子』『秋桜』『杜若』

自動大型戦艦

『クレイモア』『タルワール』『ファイランギ』『ロンパイア』『カットラ

ス』『クシポス』『サクス』

自動駆逐艦

『レイピア』以下16隻

補給艦

『速吸』『サクラメント』

特殊駆逐艦

『雪風』

「直ちに編成に入ります」

「ウム。ワシの方も此処を拠点にそっちにも支援を出すようにはしよう」

「ありがとうございます」

「それと……山南の第七艦隊だが……」

「暗黒星団帝国軍にやられた可能性が……?」

「ああ。第七艦隊から最後の通信が『我、暗黒星団帝国艦隊ト遭遇。交戦中』だったからな……『春藍』でさえ……」

「確か第七艦隊はシリウス方面でしたよね? 行き掛けの駄賃で確認はしてみます」

「ウム、頼む」

将和の言葉にカールセンは頷くのである。斯くして将和は艦隊を再編して暗黒星団帝国の本拠地へ向かうのである。

2日後、惑星りから遠征艦隊が出撃するのである。

『済まないな三好司令。私の身体では同行が難しい……』

「気にしないで下さいパエツタ司令。生きているのでめっけもんですよ」

『ハハハ、成る程……確かにアドミラル・ミヨシにも言われそうだ……そうだな、そうだな』

将和の言葉にパエツタは苦笑して敬礼で遠征艦隊を見送るのである。

「さて……取り敢えずはシリウス方面に向かう」

「第七艦隊の安否確認ですね」

「しかし……地球の事を考えると……」

「島の言う事も分かる。だが、いるかもしれない味方を放っておくのは船乗りとしては見過ごす事は出来んからな」

「……分かりましたッ」

「進路、シリウス方面」

「進路、シリウス方面ヨオーソロオー」

艦隊はシリウス方面に向かうのであった。

艦艇紹介

『リットリオ』級主力戦艦

自重 75,000トン

全長 310m

主機 03式HVVED型大型次元波動エンジン×1基

武装 艦首拡大波動砲×1門（拡大・集束可能）

50口径41サンチ三連装陽電子衝撃砲×3基

76ミリ連装対空パルスレーザー砲16基

両舷側面短魚雷発射管×12基

下部ミサイル発射管×6基

魚雷発射管×6基（艦首・艦尾）

艦載艇 90式内火艇×2隻

同型

『リットリオ』『ローマ』『紀伊』以下2205年までに32隻建造配備

【概要】

地球防衛軍の欧州管区にあるイタリア宇宙軍の設計陣が設計した主力戦艦。ガトランティス戦役後、防衛軍はガトランティス軍が放棄したシリウス、プロキオン恒星系の基地を接收した。接收した際、補給艦が同行していた事で艦隊の道中の補給は何とか可能であったが接收に同行した艦隊司令官（パエッタ少将）からの報告で遠洋型の艦艇開発が急務となった。

一応、補給艦を同行させれば近海型の艦艇も長距離進出は可能ではあるが補給艦の数にも限りがある。その為、防衛軍艦政本部は遠洋型宇宙艦艇の設計開発に乗り出すのである。量産性を求めるがため各国にコンペという形で提出を促した。

しかし、北米や欧州各国は上記の護衛戦艦の開発に躍起になっておりあまり返答は芳しくなかったが手を挙げたのがドイツであった。ドイツも『ビスマルク』級護衛戦艦の設計開発をしていたがドイツで

も艦艇開発で有利になりたい思惑があったので手を挙げたのである。更に補佐的に手を挙げたのがイタリアであった。

イタリアは自国独自の護衛戦艦の開発を諦め量産型で有利になるうと思惑があった事もあり両国は互いに連携して艦政補佐的に動いていたのである。艦政本部も他国がコンペを出さなかつた事もありイタリアの設計図案が採用されたのである。

量産性を意識して主砲は『ドレッドノート』級と変化せずに41センチ陽電子衝撃砲を採用している。またパルスレーザーも『ドレッドノート』級よりは増加されており防空火力も期待出来た。

一番の注目は重装甲であろう。ガトランティス戦役で『ドレッドノート』級は装甲では『カラクルム』級大戦艦に負けており一撃で大破しやすかつた。

イタリアの設計陣はそれを反省し改『春藍』級よりは劣るが重装甲を施したのであるが……それを上回つたのがハイパー放射ミサイルであつた。

『ブリュッヒャー』級主力巡洋艦

自重 12,000トン

全長 220m

主機 03式HVED型中型次元波動エンジン×1基

武装 艦首拡大波動砲×1門（拡大・集束可能）

50口径30.5センチ三連装陽電子衝撃砲×2基

76ミリ連装対空パルスレーザー砲10基

両舷側面短魚雷発射管×8基

二段式四連装ミサイル発射管×1基

艦首魚雷発射管×4基

同型

『ブリュッヒャー』『プリンツ・オイゲン』『アドミラル・シエーア』

以下2205年までに56隻

【概要】

地球防衛軍の欧州管区にあるドイツ宇宙軍の設計陣が設計した主力巡洋艦。遠洋型を目指す理由になったのは『リットリオ』級で記載したので省く。ドイツらしく重装甲ではあるが2205年のドイツ艦戦役時では迫り来るハイパー放射ミサイルの前では自慢の重装甲は見る影もなかったのである。

『高雄』級宇宙巡洋艦

自重 16,000トン

全長 230m

主機 03式HWVED型中型次元波動エンジン×2基（ツイン式）

武装 艦首拡大波動砲×1門（拡大・集束可能）

50口径30.5センチ三連装陽電子衝擊砲×3基

50口径20.3センチ連装陽電子衝擊砲×2基（艦体側

面）

76ミリ連装対空パルスレーザー砲14基

両舷側面短魚雷発射管×10#基

二段式四連装ミサイル発射管×1基

艦首魚雷発射管×6基

同型

『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』『妙高』『那智』『足柄』『羽黒』以下2205年までに28隻

【概要】

地球防衛軍の極東管区にある日本宇宙軍の艦本部が『ブリュッヒャー』級を修正して日本独自に建造した宇宙巡洋艦。日本宇宙軍は砲火力に納得出来なかったため後部のカタパルトを撤去して第三砲塔を設置。また、側面には20.3センチ連装陽電子衝擊砲2基を搭載して上下への砲撃を可能とした。

また『ブリュッヒャー』級よりも重装甲を施している。（就役していた艦も順次改装）これは銀河系大戦で経験した事であった。

これだけ施せば機動力は低下するので中型エンジンをツイン式に

搭載した事で機動力低下は防げた。艦本としては大型エンジンを搭載したかったが財務省が懸念を上げたので取り止めになった経緯があり艦本は財務省を憎んでいる。

初陣は『高雄』『愛宕』『妙高』による暗黒星団帝国への遠征であり砲火力は十分に通用したのである。

やるかは分からない完結編相当の展開

西暦2205年、銀河系中心部の宇宙で大きな異変が生じた。突如現れた異次元断層から別の銀河が現れ、核恒星系付近で銀河系同士の間衝突が起こり、多くの星々が消滅したのである。

これを観測していた地球連邦は直ちにこの宇宙災害の調査と軍事技術協定の同盟を締結している。「ガルマン・ガミラス」帝国の本星へ救援の艦隊を送る事にした。

「済まんが御主の艦隊を率いて確認をしてほしいんじやよ」

「それは勿論、構いません。メルダも気にしていたようなので」

「妊婦だから連れては行くなよ?」

「いや、それは薫達もですから」

地球連邦軍宇宙艦隊司令部で第五艦隊司令官の将和は地球連邦防衛軍総司令官の正信からそう言われるのである。その後、将和の第五艦隊は地球を出撃してガルマン・ガミラスに向向くが本星は銀河の衝突の余波で廃墟と化していたのだ。

「デスラーパレスは完全に廃墟と化しています」

「そうか……」

将和は弔砲をしてから本星を離脱するもその帰還途中に惑星の爆発の余波で無差別ワープをするがワープ場所は水の惑星に襲われている星だった。

「司令、救助するか?」

「……周囲の索敵をしろ（これって……）」

「はい……あ、惑星後方約150宇宙キロに正体不明の艦隊発見!!」

「……彼等の故郷だろう。無理に刺激したくない、そのまま帰還する」

『三笠』はそのまま艦隊を引き連れて帰還するが別の艦隊と遭遇する事になる。

「左舷10時方向に正体不明の艦艇多数!!」

「正体不明の艦艇、ミサイルを多数発射!!」

「迎撃ミサイル発射!! 装甲が厚い無人艦を楯にしろ!!」

第五艦隊は応戦するが無人艦の被害が続出してしまい穴が開いてしまう。

「駆逐艦『磯波』轟沈!!」

「最新鋭の『Z』級駆逐艦を一発でか!」

「司令、分析をしているが相手のミサイルはどうやら強い放射能を含んだミサイルらしい。至急、全員に宇宙服を着させてくれ!!」

「よし、宇宙服着用!! 急げ!!」

なお、『三笠』も2発が命中してしまうが隔壁を閉鎖する事で被害を最小限にする。

「主砲撃ちまくれエ!!」

「主砲撃ちながら全艦後退せよ!!」

それでも第五艦隊は喪失艦艇を出しながらも逃げ切る事に成功する。それを見ていたディンギル宇宙軍第一機動艦隊司令長官のルガール・ド・ザール中将は舌打ちをする。

「チツ、逃したか」

「追撃しますか?」

「いや、燃料も少ない。ウルクに帰還しよう」

そしてディンギル艦隊も都市衛星『ウルク』に帰還するのである。

その後、第五艦隊は態勢を建て直しつつ地球に帰還した。

「地球から3000光年の位置に水惑星かの」

「そうです。まあ地球には3000年後に来ると思いますが……」

「御主の艦隊と遭遇した正体不明の艦隊が気になるところじゃないかな……」

「油断ならないと思います」

「ん。シリウスとケンタウルス方面は勿論太陽系艦隊にも警戒するよう発令しよう。今日はもうそのまま帰る事じゃな。皆、御主が帰ってくるのを首を長くして待つとるわい」

「あー、そーいやそーいですな」

正信に言われた将和は久しぶりに官舎から一軒家に引っ越した我

が家に帰る。

「お帰り、将和」

「ああ。ただいま、メルダ」

出迎えたのは『太陽膨張事件』後にガルマン・ガミラスとの架け橋として結婚した三好メルダである。なお、メルダの腹には将和との子を宿したばかりでもあった。

「まあ取り敢えずは腹ごしらえね」

奥からヒョコつと出てきたのはこれまた妊婦の薫である。

「万が一もある。皆はシリウスかケンタウルス方面に避難を……」

「『三笠』に乗るわ。妊婦でもやる事はあるしね」

「おい薫ッ」

「皆で決めていた事なの。それは譲れないわ」

緑茶に角砂糖を大量に入れて飲んでいるリンデイは将和にそう言う。また、リンデイも『太陽膨張事件』後に子を宿したばかりである。なお、玲はまだ飛びたいとの事なので宿してはいなかったりする。

ちなみに此処にはいないがプレシアも色んな意味で三子も授かり今は科学庁でサーダと共に研究開発をしている。

「……………はあ……………」

全員の表情を見て将和は説得を諦めた。どうも三好家になった女性性は頑固になるばかりであった。

「……………分かった。取り敢えずは一つ約束してくれ……………皆、死ぬなよ」

『勿論』

将和の言葉に薫達は笑みを浮かべてそう言うのである。そして水惑星が地球に向けて接近してくる事を知った地球連邦はシリウス、ケンタウルスへの一時的な地球市民の移民を開始する。

しかし、それに待ったをかけたのがディンギル帝国軍であった。

「長官!!…冥王星基地からの通信、途絶しました!!」

「何?!!」

「更に海王星基地から緊急電!!…第五艦隊と遭遇した敵艦隊からの攻撃を受けているとの事です!!」

「……………成る程。そういう事か」

「長官?」

「奴等はワシらの地球を水惑星にぶつけてから地球に住み着く算段のようじゃ。それは出来ん、全地球艦隊は直ちに土星沖に集結!! 敵艦隊を撃滅するんじゃ!!」

「はッ!!」

(じゃが……パエツタの第二艦隊はシリウス、山南の第七艦隊は友好を兼ねてアマールに、カールセンの第十五艦隊はケンタウルス、残っているのは新鋭が故に待機していたルフエーブルとパストーレの第三、第四艦隊のみ……将和の第五艦隊が間に合えば良いが……やむを得んの)

正信はそう言つてスラスラとメモを書いて秘書の西条を呼ぶ。

「西条君、至急この人と連絡を取るのじゃ」

「……ちよ、長官!?! この人は……ッ」

「それと虎徹、『長門』艦隊を集めろ」

「ッ長官!?!」

「……ワシら老骨の出番が来たというわけじゃな」

そして土星沖にて地球連邦軍防衛艦隊の二個艦隊がデインギル艦隊と交戦を開始する。

「拡大波動砲、発射アッ!!」

「ワープ!!」

「敵艦隊、小ワープしました!! 左舷に重力震です!!」

「ハイパー放射ミサイル、発射アッ!!」

二個艦隊は拡大波動砲での先制攻撃を仕掛けるもデインギル艦隊はワープして回避、側面からの水雷艇隊によるハイパー放射ミサイル攻撃により壊滅する。デインギル艦隊はそのまま土星に設置されたコロニーを攻撃しようとするも駆けつけた将和の第五艦隊により壊滅、地球への攻撃は頓挫する。

「唯一の道は敵のワープより前に水惑星の軌道を変える事じゃ。そのための遠征艦隊―――聯合艦隊を出す」

「聯合艦隊を?」

「無論、御主の第五艦隊もじゃ。そして司令長官には―――」

『私は宇宙戦艦『ヤマト』初代艦長の沖田十三である。同時に聯合艦隊司令長官にも就任した。遠征艦隊は直ちに出击準備に移行せよ!! 繰り返す、遠征艦隊は直ちに出击準備に移行せよ!!』

重度の宇宙放射線病から奇跡の復活をした沖田十三が聯合艦隊司令長官に就任しディングルに向かうのである。

「済まないな長門……お前を日本に連れて帰りたかったがそうもいかんようだ……許してくれよ……」

第五十話

「キャゼルヌ少将、大分追い込まれたようだな」

「はい。ですが防衛だけならまだ12日間は粘れます」

「フム。流星は補給の神様といったところか」

「いえ、山南司令らのおかげであります」

バイエル符号の名称は『おおいぬ座a星』とも言われオリオン座のベテルギウス、こいぬ座のプロキオンと共に冬の大三角を構成するシリウス、そのアステロイドベルト帯で構成されている宙域で地球防衛軍宇宙軍の第七艦隊は暗黒星団帝国の三個艦隊と一週間ばかりの交戦を継続していた。

第七艦隊はこれまでの近海型の戦闘艦艇とは類を異なっていた艦艇で編成されていた。というのもも次世代型の宇宙艦艇――遠海型の宇宙艦艇――が防衛軍でも生産を開始しており第七艦隊はその実験艦隊として編成されたのである。また、第七艦隊には各国が独自に開発生産配備された戦艦も配備されていた。

各国が開発生産配備したのは護衛戦艦という宇宙開拓団を護衛するがために出てきたモノであった。その為第七艦隊は都合六か国の先進国（日本・アメリカ・イギリス・ドイツ・ロシア・フランス）で構成されていた。

第七艦隊

司令官 山南修大将

参謀長 アレックス・キャゼルヌ少将

首席参謀 アンドリユー・フォーク大佐

旗艦

『春藍』

戦艦（護衛戦艦も含む）

『春藍』『アリゾナ』『ビスマルク』『プリンス・オブ・ウェールズ』『ノー
ウィック』『アイアース』『リシユリユール』

巡洋艦

『青葉』『古鷹』『アストリア』『ウイチタ』『ニユルンベルク』『ハー
ゲン』『ケント』『シャロップシャー』

無人戦艦

『B-1』から『B-18』

無人巡洋艦

『C-1』から『C-32』

パトロール艦

『フィジー』以下6隻

補給艦

『サクラメント』『ブルー・リτζジ』

今回の第七艦隊での遠征は長距離航海が目的であった。その為無人艦の数が多かった。そして第七艦隊がシリウス方面に到着、演習を行っている最中に暗黒星団帝国艦隊による攻撃を受けたのだ。山南は直ちに無人艦艇を前衛に投入して攻撃を避けつつ後退をしていたがそれでも暗黒星団帝国艦隊の攻撃は苛烈を極めていた。当初は無人艦艇も更にもう少しあったのだが暗黒星団帝国艦隊の攻撃で撃沈、損傷後退していたのだ。

「地球との交信はまだ回復しないのか？」

「はい。向こうの電波妨害が強すぎます」

「ムウ……ガミラスの技術をも加えたスーパー・タキオン通信でも駄目か……」

地球が使用するスーパー・タキオン通信は地球がガミラス戦役より前に使用していたタキオン通信より遥かに強化されていたがそれでも暗黒星団帝国のが上手だったのだ。

「……山南司令……」

「フオーク大佐、傷の具合は良いのか？」

「死んではいけないので大丈夫です。此処でへこたれている場合にはありません」

首席参謀のフオーク大佐は最初の戦闘時の被弾の衝撃で転倒し負傷していたがそれでもフオーク大佐は直ぐに艦橋に戻って意見具申をしたりしていたがそれでも限界だった事もあり先程まで医務室にいたのだ。

「やはりこれ以上の膠着は敵の増援を引き寄せざるばかりです。此処は拡散波動砲での膠着の打開をするしかありません」

「だがフオーク大佐、『春藍』らで拡散波動砲を撃つてもエネルギー切れを起こすぞ」

「違います。無人艦艇で拡散波動砲を撃つのです。その隙に我等は脱出を図ります」

「ほう、無人艦艇を囷にか」

「そうです、こんな時の無人艦艇です。今、使わずにいつ使用するのですか」

フオークはそう山南に具申する。山南も戦局を打開する事が可能ならと許可したのである。そしてフオークらが実行に移そうとした時、対空タキオンレーダーが反応したのである。

「敵機か？」

「いえ……IFFでは味方のコスモタイガーとなっています!!」

「長官ツ!!」

「落ち着け首席参謀。兎に角確認を急がせるのだ」

この時、第七艦隊に接近してきたのは正しく将和の艦隊(『三笠』)から発艦した玲が乗るコスモタイガー2とその一個小隊3機であった。玲もコスモタイガー2に搭載されている簡易式のタキオンレーダーで第七艦隊を確認したのである。

「見つけたッ。鶴見、直ちに『三笠』に連絡だ!!」

『了解!!』

山本の小隊は直ちに『三笠』へ通報した。山本小隊からの連絡を受信すると将和は直ぐに作戦会議を艦橋で開く。

「第七艦隊は左右後方をアステロイドベルト帯を囲んで防衛戦を展開している。そして敵艦隊は正面からしか攻撃していない」

「アステロイドベルト帯を通ろうとすれば狙い撃ちをされると分かっているからだな」

「そうだ。そこで我々は艦隊を二分に分けて敵艦隊の後方に小ワープする。ただし、敵艦隊が逃げやすいように穴は開けておく」

「成る程。完全に包囲してしまえば向こうは死兵となつてがむしやらの突撃をしてくるかもしれない……というわけか」

「その通りだトーレ。此方は長駆の旅に出るからな、無駄な損失は極力減らすつもりだ」

トーレの答えに将和は頷く。

「……他に意見が無ければこの案で行くが？」

『……………無しッ』

「……了解。作戦に移行する、総員小ワープの準備に移れ!!」

そして艦隊は小ワープに移行したのである。その頃の第七艦隊も本格的に追い詰められていた。

「巡洋艦『古鷹』大破!!」

「同じく『ケント』航行不能!!」

「無人戦艦『B-9』轟沈!!」

「長官!!」

「落ち着け。全艦に通達せよ、損傷艦艇を内側にして紡錘陣形を取るのだ!! そのまま全艦、砲撃を集中し敵の包囲陣の一角を突き崩すのだ!!」

「了解!!」

第七艦隊は直ちに山南の命令に従い紡錘陣形に移行する。だが、索敵のオペレーターが叫んだ。

「敵艦隊後方にワープアウト反応です!!」

「敵の増援か!？」

「いえ、この反応は……」

現れたのは防衛軍の艦隊——将和の艦隊であった。艦隊が現れた事に暗黒星団帝国艦隊は焦った。

「後方にワープアウト反応!! 識別からして新たな敵艦隊です!!」

「何!? 地球攻略軍の撃ち漏らしがいたのか!!」

「敵艦隊、突撃してきます!!」

将和の艦隊は巡洋艦隊を先頭に突撃を開始する。その巡洋艦隊を率いていたのはガトランティス戦役でも将和の下で働いていた三木大佐であった。

「突撃!! 奴等を徹底的に叩けエ!!」

三木大佐は乗艦『愛宕』の艦橋で吠える。巡洋艦隊は全て最新鋭の『ブリュッヒャー』級主力巡洋艦でありしかも『愛宕』は更に日本式に改良された『高雄』級主力巡洋艦でもあった。主砲の50口径30・5センチ三連装陽電子衝撃砲と副砲の50口径20・3センチ連装陽電子衝撃砲が連続斉射をまくる。

果てには二段式四連装ミサイル発射管と艦首魚雷発射管も乱射しまくって敵暗黒星団帝国艦隊を攻撃しまくるのである。

「後方に展開していた艦艇の殆どが撃沈されました!!」

「お、おのれエツ!!」

「直撃、来ます!!」

「ツ!」

暗黒星団帝国艦隊旗艦は『高雄』からの砲撃が艦橋に命中、誘爆して撃沈するのである。旗艦が撃沈した事に残存艦艇は砲撃を続行するか逃げるかの二者択一であった。前者を取る艦艇は少なく、多くは後者であった。

「敵残存艦艇、撤退していきます!!」

「スカさん、奴等のワープする位置を探れないか?」

「成る程。奴等が本星方面に向かえば御の字だな。直ちにやってみよう」

スカさんが解析に取り掛かる中で将和の『三笠』は『春藍』の左舷200に付いて程なくしてメインパネルには第七艦隊司令長官の山南中将らが映し出された。

「お久しぶりです山南中将」

『ウム。君らも息災で何よりだよ。しかし、よく我々を見つけてくれ

た。恩にきるよ……』

『お、マサカズじゃないか。久しぶりだな』

「ありや、キャゼル又先輩じゃないですか。そうか、参謀長をしてたんですね」

『ああ。それとコイツもいるぞ』

『……お久しぶりです三好先輩』

「……まさかお前もいるとはなフオーク」

メインパネルには申し訳なさそうな表情をするフオーク大佐が映し出される。

「知り合いですか？」

「ん、ああ。防衛軍学校の時の後輩でな、秀才や英才とか鼻にかけて調子乗っていたところを俺と守が戦略シミュレーションゲームで目茶苦茶に鼻を折らしたんだ」

『……その話は勘弁して下さいよ。今でもトラウマなんですから……』

ウーノの問いに将和がそう答えるとフオークは申し訳なさそうな表情をする。

『あれからは心を入れ換えて目標を三好先輩にしているんです。慢心はしませんよ』

『そうだな。コイツのおかげでガトランティス戦役も助かった時があるしな』

フオークの言葉を補足するようにキャゼル又がそう言う。

「オイオイ、俺を目標にするなら土方の親父とかにしるよ」

『土方さんは……その……顎が痛むので……』

「ああ……確かアツパーされてた記憶があるな」

亡き土方の防衛軍学校教官時の記憶を思い出す将和であるが今は懐かしむ時ではなかった。

『我々、第七艦隊はシリウスに到着した時に敵艦隊に襲われてな。何とかフオークの作戦や山南長官の指揮で此処まで逃げてきたんだ』

『そこに先輩達が来てくれたんですよ』

「成る程」

『しかし、何故君達が此処まで航海を？』『三笠』のシリウスまでの航海は予定に入っていなかった筈だが……』

「……その様子だと連絡が来ていなかったようですね」

そして将和は山南長官らに暗黒星団帝国軍が地球を占領した説明をするのである。

『地球が……占領……!?!』

『本当ですか先輩?!』

「ああ。信じたくはないだろうけどな、だが変えようのない事実だな。けど俺達はソイツを変えなくちゃならん。重核子爆弾の起爆装置を破壊し暗黒星団帝国を倒すんだ」

『ウム……だがその様子では我々第七艦隊が地球に帰還してもその爆弾がある限りは意味が無いという事になるな。その敵の本星とやらの位置は確認出来ているのかね?』

「爆弾の太陽系侵入ルートから逆算しおおよその方角は判明していますが正確には……かつて『ヤマト』がイスカンドルを見つけた時のように何とか進みながら探索するしかありません」

山南の質問にスカリエッティはそう答える。だがその答えに山南は違和感を覚えて後ろにいたキャゼルヌとフォークを見る。

『どう思うね参謀長?』

『はっ、もしかすると……』

「何かありましたかキャゼルヌ先輩?」

『我々が敵艦隊に遭遇した時、偶然にも我々は敵の丁度正面からワープアウトを観測出来たんだ』

「そうか……空間歪曲のエコーか……キャゼルヌ参謀長、そのデータを此方に転送して下さい」

「空間歪曲のエコー……? 何なんですそれは?」

スカリエッティは何か確信があったのかキャゼルヌにそう言うが聞き慣れない言葉に航海席に座っていた島から質問が飛ぶがスカリエッティが答える。

「大きな質量を持つ物体……例えば戦艦等がワープアウトをする際、その進行ベクトル前方に波紋状の空間歪曲波のエコーを放出するん

だ。微弱な空間歪曲波だから前方からしか観測出来ないんだけどね」
「そしてそのエコー形状はワープの距離によって左右されるってわけさ」

「ん？ いたのかトチロー」

「最初からいたぞ」

「どうせキャゼル又先輩がいたから隠れてたんだろ」

「へへッバレたか」

将和の問いにニカツと笑うトチローである。トチローもキャゼル又には大分迷惑をかけてきたので頭が上がらない模様である。

「じゃあ敵が来た方向だけでなくどれぐらいの距離を飛んできたかまで分かるわけなんですね」

「そうだよ。ただ敵が我々のように連続ワープを行っていなければの話だけだね」

「……お、出たぞ。銀河系外周から……凡そ20万光年先だ」

「20万光年……そこには何か星系があるんですか？」

「いや、何も無い……だが、その更に20万光年程向こうには巨大な暗黒星雲があるな……」

「そうなると奴等は40万光年も彼方にある暗黒星雲の向こう側から来たかもしれない……」

トチローの報告に将和は腕を組んでそう呟く。

「そうするとこの20万光年の地点には敵の中間補給基地のようなモノがあるかもしれないな」

「まだ取り敢えず敵が来た方向と距離は分かったわけです。そこまで行ってみるしかないですね」

「ちよつと待てよ太田。トチローさんの言う通りだと敵の基地があるかもしれないんだ。我々の艦隊だけでぐり抜けられるか？」

太田の言葉に南部がそう返すが南部の質問を返したのは山南だった。

『ウム、その点については提案がある。針路の事は兎も角、我々第七艦隊は動ける艦だけでも君達に合流し敵本星まで旅に同行しようと思う』

「本当ですか？」

『ああ。損傷の酷い有人艦は此処に残して継続して修理作業を行えば旅立った後に援軍としてこのシリウスから補給する事も可能だろう』
「では艦隊の指揮は山南長官が……」

『いや、指揮は三好少将が……『三笠』が執るべきだと思う』
「しかし……」

『暗黒星団帝国との戦闘経験に関してはイスカンドルで既に同じ敵を撃破している君達に1日の長があるのだ。地球防衛軍が崩壊している今、私の肩書きなどには意味が無いさ……君達が執るべきだ』

「……分かりました。指揮を執らせて頂きます」

「そうと決まれば早速修理班を向かわせます」

『雪風』には俺の工作機械をたんまりと積んである。あれを使おう」
斯くして山南中将の第七艦隊は将和の艦隊と合流、損傷が酷い艦はシリウス宙域で修理作業が続けられ増援として向かう事になるのである。そして艦隊は『春藍』等損傷が軽い艦艇の修理が終わり次第、出撃するのであった。

「これより艦隊ー『聯合艦隊』は銀河系を離脱し敵本星があると思われる方向への超長距離連続ワープを行う。ワープ準備!!」

「ワープ準備完了!!」

「ん、ワープ開始!!」

「ワープ!!」

そして聯合艦隊は超長距離連続ワープを開始するのであるが……
敵は待ち構えていたのである。

報告

今、三好inヤマトについては暗黒星団帝国編ですが、ここで一つの悩みがあるわけです。

というのも、暗黒星団帝国が主力になったPS2の三部作はあまりやってないんですはい。買った当時はやってたんですが三脚戦車で詰みすぎて……一応三脚戦車はクリアはしたんですよ。

でもその後はエタツたのでようつべで動画を見ていたくらいです。自分もようつべの動画見つつ書こうかなと思っただんですが、あまりにもネタが浮かばないので、今のところ暗黒星団帝国編はサツとやってサツと終わろうかなと思います。(3もやりたいですし……)

無論、プレシアの将和への意識とかメルダの地上戦とかはやりませよ(但し少しのみ)

大体はアニメ基準でやろうかなと思うので物足りないところはステルス兄貴様ので補完して下さい。

そのののころを含めてご了承下さい

以下文字稼ぎ(という名の欲望満載であります)

新見薫は可愛い?可愛い??可愛い??可愛い??可愛い??可愛い??可愛い??

リンディ・ハラオウンも可愛い?可愛い??可愛い??可愛い??可愛い??可愛い??可愛い??可愛い??可愛い??

ウーノは綺麗?綺麗??綺麗??綺麗??綺麗??綺麗??綺麗?

トーレはヤンチャ?ヤンチャ??ヤンチャ??ヤンチャ??ヤンチャ??ヤンチャ??ヤンチャ??ヤンチャ??

山本玲はツンデレ?ツンデレ??ツンデレ??ツンデレ??ツンデレ??ツンデレ??ツンデレ??

第五十一話

聯合艦隊は超長距離連続ワープを8回行って20万光年を短縮する予定だった。しかし、最終的にワープしたのは17万光年だった。

「駄目です艦長。何度確認しても航路記録は17万光年しか来ていません」

「そうか。トチロー、機関の故障か？」

「馬鹿野郎。『三笠』だけならまだしも全艦の機関が一斉に故障なんてするかよッ」

「それもそうか」

トチローの反論に将和は椅子に深く座り込む。どうせ敵の仕業なのだろう。

「取り敢えず警戒はするように」

「了解」

(ふう……これだと地球も大変そうだが……大丈夫か……?)

そう思う将和であった。そしてその心配させられていた地球であるが……。

「コノマ、爆弾のセット完了したぞ」

「了解だメルダの嬢ちゃん。それじゃあ逃げるぞッ」

地球の北米にある砂漠地域、そこに空間騎兵隊の古野間と大ガミラス帝星駐在武官のメルダ・ドイツが建物から暗黒星団帝国に接收された兵器工場の入り口から離れて起爆スイッチを押す。

その瞬間、兵器工場は中から爆発をして次々と誘爆していくのである。

「たーまやーつと」

「何だそれは？」

「日本の花火を上げる掛け声みたいなものよ」

「成る程。日本は奥が深いものだな」

そんな事を言いながら帰還する二人である。数時間後、極東管区の日本にある富士旧地下都市にあるパルチザン司令部に戻ると司令官の三好正信に報告をする。

「兵器工場の爆破には成功しました。恐らく三脚戦車も暫くは出てこないでしょう」

「それは何よりじゃの」

報告を受けて正信も笑みを浮かべる。

「今日はゆっくり休んでくれ」

「反転攻勢はまだやらないので？」

「ウム。少なくとも将和らからの通信が来るまでは……といきたいところじゃがのう」

「まあ40万光年先の本拠地に行ってますからなあ」

「それにケンタウルス座のカールセンらも頑張っておるようじゃ」

暗黒星団帝国の地球攻略軍は艦隊を二つに分けていた。一つは『三笠』らを追う艦隊、これはラインハルト……じゃなくてミヨーズ大佐の艦隊でありもう一つの艦隊はケンタウルス座に向かった。これは残存地球艦隊を撃破するためであった。しかし、ケンタウルス座方面には猛将カールセン少将の艦隊でありカールセンの策（隕石等利用）がハマった事で最後は拡散波動砲で殲滅したのである。なお、ミヨーズ大佐の艦隊も結局は将和の艦隊に殲滅したので地球攻略軍に残ったのは数隻の艦艇しかなかった。だが、カールセンもまだ艦隊は残っていると思案していたので地球の方には来なかったものでそれが地球攻略軍には救いだった。

「まあ攻勢は思案しておくわい」

「了解です」

そう言う正信であった。

「はあ……」

パルチザン司令部の近くにある技術研究室でプレシアは今日何度目かの溜め息を吐いた。最近溜め息も多い傾向である。というのもやはり暗黒星団帝国の侵攻直後の出来事が原因だろう。

あの時、プレシアが放ったレーザーは暗黒星団帝国兵士の胸を貫通させ昏倒させた。そして無我夢中でアリシアと友美を地下都市へ繋がる入口に入り込んだのであり、地下都市へ到着するとそのまま失神したのだ。

それ以降、プレシアはその時の出来事を夢の中で思い出すのが多くなり不眠症になりかける程だった。だが、プレシアにはアリシアがいたのでそこまで重傷になる事はなかった。

しかしながら敵兵士を射殺したのはプレシアの中でも少なからずの影響を残す事になる。

(友美さんは気にする必要は無いと言っていたけど……)

友美にそう言われはしたがやはり気になるモノは気になるのだ。

(誰かに相談……)

その時、プレシアの中に浮かんだのは将和だった。だが将和は敵本拠地を目指しているので此処にはいない。

「……………はあ……………」

取り敢えずは我慢する事にしたプレシアであった。

「何、リンディ・ハラオウンが目を覚ました?」

「ああ、先程の戦闘でな。やはり会うかね?」

「まあ俺は当然として……スカさんはどうする?」

「私が出れば彼女は魔法を行使するかもしれないぞ?」

「いや、ウーノに回収してもらってるから問題は無いぞ」

「まあそれなら……」

「スカさんは後から登場してもらおう」

「その方が良いだろうねえ」

艦長室でそう話す将和とスカリエツティである。話す議題は目を覚ましたリンディ・ハラオウンの話である。リンディは先程ーミヨーズ艦隊との戦闘で『三笠』が被弾した時に揺れで目を覚ましたのだ。

「しかし、大分眠っていたな」

「まあ睡眠薬を服用していた形跡があるから盛られた可能性もあるな」

「……管理局が彼女を消そうと？」

「十分に有り得る話だな」

「めんどくせえ話だな……」

「推測だぞ？」

「スカさん、あんたは誰に依頼されて闇の仕事してたっけ？」

「……うわ、脳ミソどもだった……」

「あんたの原点はそこだぞ」

「この世界の研究が楽しくて永住する気満々だからな。仕方ない事だな」

「仕方ないで済ませるなよ」

思わずそうツツコミを入れる将和である。それはさておき、将和は時間の猶予を作ってから医務室に脚を運んだのである。

「あつ……」

「目を覚まされたようで安心したよ。寝たままで構わん構わん」

将和は起きようとするリンディにそう言って椅子に座る。

「さて、自己紹介といこうか。俺は地球防衛軍所属宇宙戦艦『三笠』艦長の三好将和だ。階級は少将」

「時空管理局統括官のリンディ・ハラオウンです。しかし、地球防衛軍とは……地球にそのような軍は……」

「……ハラオウン氏が驚くのも無理はありません。ですがハラオウン氏の地球は西暦何年ですか？」

「西暦ですか？ 確か西暦はー」

「成る程。ならば仕方ありません、我々の地球防衛軍が存在するのは西暦2203年だからです」

「西暦……2203年……？」

「ええそうです」

そして将和はリンデイに対して地球の現状を説明するのであるが途中で薫特製のガミラス戦役、ガトランティス戦役の映像を見せて西暦2203年だと納得させるのである。なお、ガミラス戦役は三時間、ガトランティス戦役は六時間の映像である。

流星に連続はキツかったようであるがリンデイも是非にとお願いしたのでほぼ1日で視聴した。

「……………」

「気分は……悪いようだな」

「すみません……」

「いやなに、これを見せられたら誰だって気分は悪いに決まっている」

将和はそう言つて緑茶を出して角砂糖の容器をリンデイに渡す。

「ほらっ」

「あ、ありがとうございます……そう言えば何故私が緑茶に角砂糖を入れるのが好きと分かったのですか？」

「ああ……取り敢えず何となくだな」

リンデイの問いにそう答える将和であった。

「それでガトランティス戦役に大いに活躍した人がいる」

「活躍した人ですか……？」

「入つていいぞスカさん」

「やれやれ……やつとの出番かい？」

「なッ!？」

リンデイは入つてきた男ージェイル・スカリエツティに目を見開いた。

「ジェイル・スカリエツティ!? な、何故此処に!？」

「簡単な事だよ。娘達と脱獄した後に君達から逃れるためにランダムジャンプをしたらこの世界にジャンプしたからだよ」

「なッ!?!」

(さーて……話は長くなるぞお……)

そう思う将和であった。なお、話が長くなったのは言うまでもない。

第五十二話

スカリエツテイの登場に驚愕するリンデイだが、将和の説明等により取り敢えずは矛を納めて説明を聞きそして長い地球の現状の説明は終えたのである。

「それではこの艦は今、地球からは……」

「ええ。他の艦隊と共に聯合艦隊を編成して地球から19万光年の付近を航行しています。無論、敵の母星を目指すためにね」

そう言つて将和は通信画面を外部に切り替えてリンデイに見せる。映像を見せられたリンデイは目を見開いて驚愕する。そこには宇宙空間を航行する多くの艦艇があつたのだから。

暗黒星団帝国殴り込み艦隊

司令官 三好将和少将

旗艦『三笠』

戦艦

『三笠』

『リットリオ』

『ローマ』

『春藍』

『アリゾナ』

『ビスマルク』

『プリンス・オブ・ウエールズ』

『ノーウィック』

『アイアース』

『リシユリユ』

巡洋艦

『プリンツ・オイゲン』

『高雄』

『愛宕』

『妙高』

『リアンダー』

『青葉』

『アストリア』

『ニュルンベルク』

『シャロップシャー』

パトロール艦

『天塩』

『撫子』

『秋桜』

『杜若』

『フィジー』

『パナマ』

『ナウル』

『山東』

『サハリン』

『旅順』

自動大型戦艦

『クレイモア』

『タルワール』

『ファイランギ』

『ロンパイア』

『カッツトラス』

『クシポス』

『サクス』

『B—1』から『B—8』

自動駆逐艦

『レイピア』以下16隻

補給艦

『速吸』

『サクラメント』

『ブルー・リッジ』

『間宮』

特殊駆逐艦

『雪風』

「……………これ程の艦隊とは……………」

「ああ、シリウス方面で修理等をしている艦も複数いるのでまだおられますよ」

「そんなにですか!？」

「まだ他にも艦艇がいる事にリンデイも仕舞いには呆れてしまう程であった。」

（これは……………地球には手を出すなという警告ね……………）

リンデイは頭の回転を素早く行いその答えを導き出した。特に口ストギアに匹敵する波動エンジンを地球は保有しているのだ。それを管理局が接收するとか訳の分からん事を言い出したら地球が取る唯一無二の考えられる選択は——戦争であろう。しかもリンデイは映像であるものの波動砲も確認しているので管理局が余計な事をすれば逆に管理局が滅ぼされるのは目に見えていた。

（戻れたら直ぐにそう言わないとね……………）

そう判断するリンデイであったが残念ながらリンデイは二度と元の世界に戻る事は叶わなかったのである。なお、リンデイの身柄はゲスト・アドミラルとして『三笠』で預かる事になる。

それはさておき、殴り込み艦隊は地球から19万光年まで航行して

いたが将和は20万光年で何かあると踏んでいた。

(絶対に中間補給基地が百パーあるのは間違いないわな……取り敢えず索敵機を増やして搜索だな……)

「索敵機を出す。準備を頼む」

「分かりました」

斯くして各艦が搭載しているコスモタイガー、総勢18機が索敵のために発艦したのである。『三笠』の航空隊は使わなかった。否、『三笠』の航空隊は中間補給基地攻撃のため待機せざるを得なかったのだ。

そして将和の勘は当たった。偵察中の1機の索敵機が暗黒星雲を背にした敵の大中型補給基地を発見したのである。

「狙いは当たったか。山本、全機出せるか？」

『勿論です』

「お前もか？」

『……………』

将和は画面に映る玲を見る。玲も一呼吸してから頷いた。

『はい、任せて下さいッ』

「よし。行ってこい!! コスモタイガー隊は全機発艦!!」

直ちに『三笠』のコスモタイガー隊(コスモタイガー2×34機

コスモタイガー3乙×1機)が発艦を開始したのである。艦底の発艦口から次々コスモタイガーが発艦する中で玲のコスモタイガー3乙はリニアカタパルトに装着されそのまま発艦する。

「クッ、相変わらずのじゃじゃ馬だ……」

玲はパワーが有り余る3乙を操作しながらそう呟く。3乙は3甲に比べたら多少はパワーダウンしていたもののやはり平凡のパイロットが操作するには難があった。そのため『三笠』には玲と将和用としての2機のみが搭載されていたのだ。

「全艦に通達、戦艦を前衛に砲撃準備を急がせろ。『春藍』及び全戦艦に発光信号。『三笠』を先頭に単縦陣で突撃するぞ!!」

「了解!!」

「全艦砲撃用意!!」

「全艦砲撃用意!!」

殴り込み艦隊は戦艦を前衛にして戦闘準備に移行したのである。そして『三笠』から発艦した攻撃隊は暗黒星雲からのガスに紛れながら中間補給基地を発見した。

「敵の頭上から逆さ落として攻撃する。全機突撃!!」

『先に行きますぞ隊長!! イヤッホオオ!!』

『坂本の馬鹿!!』

「椎名、坂本を援護してやれッ」

『了解ですッ』

そして35機の攻撃隊は一気に急降下をして頭上からの逆さ落としの攻撃を開始する。

「貫ったッ」

玲はミサイルの発射スイッチを押してミサイルを発射する。放たれた2発のミサイルは中間補給基地の構造物に命中し爆発する。そのまま玲は急降下して停泊していた敵艦艇に照準してミサイルを発射する。他のコスモタイガーもミサイルを発射して停泊している敵艦艇を爆沈させていく。玲は上空を旋回しているとドーム内にも多数の艦艇が停泊しているのを確認し無線を開く。

「ドーム内に突入する。続け!!」

コスモタイガー隊はドーム内に突撃しようとするが半開きだったドームが稼働して閉じていく。それを見て玲は突入を中止させた。

「チッ!! 全機反転、上昇!!」

コスモタイガー隊は上昇していくが敵も漸く迎撃態勢を整えて対空砲火を開始し数機のコスモタイガーが火を噴いて離脱していく。

「厄介ね……」

玲はそう呟きつつ改めて補給基地上空から偵察をする。ドームへの突入にはどれもこれも対空砲火を潜らなければならぬが……見つけた箇所はあった。

ドーム内へ続く通路があった。コスモタイガーでも飛行可能であろう。だからこそ玲は即断した。

「彼処しか侵入路は無いわ……ドーム内に突撃する!! 全機続け!!」

『隊長に続け続けエ!!』

玲は操縦桿を倒して急降下を開始する。それに続いて坂本や椎名も急降下を開始する。コスモタイガー隊が急降下してくるのを見て対空砲も射撃を開始する。急降下する中でまたも数機のコスモタイガーが撃墜されるが被害はそれだけであった。

玲を先頭にコスモタイガーは通路へ侵入に成功したのである。青白い光に操縦席が包まれる。狭い通路ながらも激突して墜落しないのは『三笠』の飛行隊はベテラン揃いだからだろう。そして飛行を続ける中で出口と思わしき光が大きくなり通路から飛び出た。

そこはドーム内であった。玲は付近にいた戦艦に照準してミサイルを発射する。発射したミサイルは敵戦艦の艦橋に命中して爆発、敵戦艦は瞬く間に轟沈した。

他の坂本達も停泊していた艦艇にミサイルを叩き込むのである。そしてコスモタイガー隊はミサイルを全弾発射したので離脱するのであった。

「敵攻撃機引き上げていきます!!」

「おのれエ!! 護衛艦艇は何をしているんだ!!」

「そ、それが護衛艦艇も丁度補給を開始していたところで……」

「グググッ……全てが裏目に出たか!」

部下からの報告に中間補給基地司令官のグノン大佐は地団駄する。

「ドック内に停泊していた艦艇の被害は!」

「はっ、停泊していた72隻中44隻が轟沈。17隻が大破しました。ですが残りの11隻は補給を切り上げて順次出撃していきます!!」

「よし、警戒を厳にしろ!! 奴等はまた来るぞ!!」

グノン大佐の読みは当たっていた。コスモタイガー隊が引き上げていった後、『三笠』を先頭にした殴り込み艦隊が到着したのである。「コスモタイガー隊は後方へ退避。トーレ、射程距離に入り次第砲撃開始だ!!」

「了解!!」

そして艦隊が前進する中で基地も動き出した。どう見ても暗黒星雲に退避しようとしていた。

「見る、基地が動き出した!？」

「どうやらあの基地自体が巨大な宇宙空母も兼ねているようだね」

島の言葉に同じく映像を見ていたスカリエツティは納得したように頷いた。気付けば基地の周囲には残存艦艇が布陣していた。

ふと将和はトーレの隣に設けられた特別席に座るリンデイを見る。ゲスト・アドミラルという事でわざわざ席を用意したのだ。後方からではあるがリンデイの身体は若干震えているように見えた。

(目を逸らさないのは提督としての責務……か……)

リンデイの意気込みに将和は笑みを浮かべる。そして中間補給基地が『三笠』の射程距離に入った。

「撃ちい方始めエ!!」

「撃エ!!」

前部の56サンチ陽電子衝撃砲、30.5サンチ陽電子衝撃砲が砲撃を開始しエネルギー弾は全て中間補給基地に命中する。

「右砲戦とする。とおーりかあーじ!!」

「とおーりかあーじ!!」

『三笠』は軽快な動きを見せて取舵をする。続いて『春藍』もその地点から取舵をして右砲戦の為砲塔を右旋回して中間補給基地に照準し次々と砲撃を開始する。

敵の護衛艦艇も砲撃してくるが全艦が波動防壁を展開していたので無傷であり、11隻の護衛艦艇は1隻、また1隻と砲撃によって撃沈させられた。

「味方護衛艦艇、全て撃沈されました!!」

「馬鹿な……馬鹿なツ!？」

「大変です司令!!」

驚愕するグノンに部下が叫ぶ。

「敵の流れ弾が四番外殻に被弾!! 爆発の影響で格納ドームの火災が動力炉に燃え移りました!!」

「な、何だと!？」

そこへ爆発音と揺れが響く。

「第四動力炉が爆発停止しました!! このままでは全ての炉が連鎖爆

地球連邦防衛軍の編成その2

【地球における宇宙艦艇の変革その4】

取り敢えずは遠洋型宇宙艦艇のコンペは終了しドイツとイタリアで最初の量産型宇宙艦艇が建造を開始したのはイスカンドル救援後であった。この時期には実験戦艦でもある『伊勢』の試作第二世代型波動エンジンの検証結果もあって新型波動エンジンの量産態勢も入りつつあったのも僥倖であった。

また遠洋型宇宙艦艇の性能を試す場所も漸く基地化が完了したケンタウルス座のプロキシマ・ケンタウリb等に派遣する事も視野に入っていた。しかしながら懸念事項もあった。

イスカンドル救援の時に接触した暗黒星団帝国の存在である。呑気な者は白色彗星と同様に太陽系で迎え撃つたら良いと発言していたがそれは最終手段であろう。白色彗星戦役の時の地球は復興の最中でありケンタウルス座方面等に入植の進出をしていなかったからこそ土方長官が取れた最良の戦法であったのだ。

そして防衛軍司令長官の三好正信元帥大将は芹沢大将や藤堂管区長官らと協議を重ねて一先ずは両方を守る選択をした。ケンタウルス座方面にはガミラス戦役で正信の下で戦った猛将ラウルス・カールセン少将の艦隊を派遣させた。この艦隊の中には就役したばかりの遠洋型宇宙艦艇である『リットリオ』級主力戦艦や『ブリュッツヒャー』級主力巡洋艦等も含まれていた。

そして太陽系の守備にはこれまた歴戦の猛者であるライアネル・モートン少将が艦隊を率いて土星の衛星『タイタン』にて駐屯するのである。しかしながら暗黒星団帝国軍はハイペロン爆弾という超弩級を送り出してモートン少将以下、各惑星守備基地人員の脳だけを破壊するというチート技を繰り出すという裏技を使うのであった。

それはさておき、残存地球艦隊はケンタウルス座方面に集結し『三

笠』以下で殴り込み艦隊を編成して暗黒星団帝国の本星に向かう。この時に殴り込み艦隊に同行したのが地球の各国が開発建造配備していた護衛戦艦と遠洋型宇宙艦艇に無人艦艇であった。

結果としては殴り込み艦隊はその遠洋での性能を發揮する事に成功し、以後の地球艦艇は遠洋型を主軸に配備が進められる事になるが近海型も少数ながら配備は続けられる。そして暗黒星団帝国を退けた地球であるが西暦2206年に発生する『太陽危機』で遠洋型宇宙艦艇は活躍するのである。

『太陽危機』は大幅に内容は省略するが、開拓中であったケンタウルス座方面にボラー連邦が侵入して現地のケンタウルス座方面艦隊が迎撃したのが始まりでありその後は銀河大戦に地球は巻き込まれた。その後、三好少将の艦隊を派遣してガミラス軍と共にボラー連邦を討つのであるがこの時も使用されたのは遠洋型宇宙艦艇の『リットリオ』級主力戦艦と『ブリュツヒャー』級主力巡洋艦、更には就役したばかりの『Z』級主力駆逐艦であった。総勢69隻がこの銀河大戦に参加し21隻を喪失するも遠洋型宇宙艦艇の役割を果たしたのである。

【地球における宇宙艦艇の変革その5】

銀河大戦を乗り切った地球連邦防衛軍であるが戦後も軍備の改修を怠る事なく続けていた。宇宙防衛軍は7対3の割合で遠洋型、近海型の宇宙艦艇を建造し配備していた。西暦2207年、防衛軍は艦隊の再編に着手した。この時、総旗艦は『春藍』でありその配下に各国の各艦隊が整備されていた。

しかし正信はそれを廃止して再び白色彗星戦役時の編成に移行させた。

太陽系外周艦隊（遠洋型）

司令部 衛星『タイタン』

第一艦隊

第二艦隊

第三艦隊

第四艦隊

第五艦隊

内惑星防衛艦隊（近海型）

司令部 火星

第六艦隊

第八艦隊

第九艦隊

外惑星守備艦隊（近海型）

冥王星基地艦隊

海王星基地艦隊

天王星基地艦隊

土星基地艦隊

航空艦隊（遠洋型）

第一機動艦隊

第二機動艦隊

輸送護衛艦隊（遠洋型）

第一護衛艦隊

第二護衛艦隊

第三護衛艦隊

ケンタウルス座方面艦隊（遠洋型）

独立艦隊（基本遠洋型）

第七艦隊

第十三艦隊

上記の艦隊編成に移行させ編成完結したのが翌年の西暦2208年だった。しかし、編成完結した西暦2208年は異次元断層から別の銀河が現れ、核恒星系付近で銀河系同士の衝突が起こる宇宙災害が発生しそれを余波とする『デインギル戦役』が勃発するのであった。

【地球防衛軍の艦隊編成】

地球艦隊の艦隊編成は第一次内惑星戦争から遡る。第一次内惑星戦争の時は各国の宇宙艦隊でバラバラの編成が多々あった。そこで第二次内惑星戦争で発足した国連宇宙軍は艦隊編成数の統一を策定した。

一個艦隊の内訳は戦艦4隻の一個戦隊、巡洋艦8隻の二個戦隊、駆逐艦16隻の四個駆逐隊（更に巡洋艦2隻を旗艦とする二個宙雷戦隊）であった。

ガミラス戦役でも基本的には上記と同じ艦隊編成であったが波動エンジン搭載艦優先で配備していた国（日本）もあったのでバラバラで纏まりがなかった。

そしてガミラス戦役後に発足した地球連邦防衛軍では改めて上記の一個艦隊の編成で統一する事にしたが編成完結する前に白色彗星戦役が勃発し地球連邦防衛艦隊は大損害を被るのである。

そして再度の艦隊編成をしたのが『太陽危機』の時であった。この時、総旗艦を『春藍』としつつ一個艦隊の編成内訳は以下の通りであった。

一個艦隊

艦隊旗艦級1隻（『三笠』級）

戦艦4隻一個戦隊

巡洋艦12隻三個戦隊

巡洋艦2隻、駆逐艦16隻の二個宙雷戦隊
空母2隻の一個航空戦隊

空母を増やして上空のエアカバーを付けた艦隊編成であった。実際にこの編成は『太陽危機』では当たりであった。その為、これを基準に進めていったが『ディングル戦役』でハイパー放射ミサイルによる大損害を再び被るのであった。

第五十三話

「どうだスカさん？」

「ああ、多少は故障しているが直せないわけじゃない」
「なら……」

「ああ。この通信器材を直して敵の母星と味方と偽ってコンタクト、敵母星の場所を突き止めてみよう」

「頼むよスカさん」

将和の言葉にスカリエツティは頷き将和と同行していたチエン参謀長は工作室を出る。敵暗黒星団帝国の中間補給基地を叩いた将和の殴り込み艦隊であるが、今は巡航速度で暗黒星団帝国の母星があると思われる白色銀河に向かっていた。本来であれば更なる連続ワープを行う予定だったが、中間補給基地を殲滅後に残骸と化した中間補給基地と破壊した敵艦艇を調査した時に敵艦艇から暗黒星団帝国の通信器材を発見したのである。故障はしていたが、スカリエツティの検分で修理は可能とされたので将和も修理を依頼して直るまでは巡航速度で向かう事になったのだ。

（しかし……補給基地を調査しようと言ったフォークも成長したもんだな）

調査を主張したのは第七艦隊首席参謀のフォークだった。フォークの主張も理に叶っていたので将和も受け入れたのだ。ちなみに残骸と化した補給基地の装甲を解体して自艦の修復材にする事を言い出したのは第七艦隊参謀長のキャゼルヌだったりする。

「参謀長、スカさんの作戦……いけると思うか？」

「難しいですなあ……上手くやれたら御の字……というところですか」

「まあスカさんもそのところは理解してるからな。向こうから電波

を出してくれたら後は特定可能だしな」

「そうですね。それでは私は艦橋に戻ります。艦長はこのまま休まれますか?」

「ああ。二時間後に艦橋に向かうよ」

「分かりました。ではこれで」

チエン参謀長はそう言って将和に敬礼すると艦橋に向かうエレベーターに乗り込むのである。そして将和は艦長室に向かおうと歩いていると広場の長椅子に座るリンディを見つけた。リンディは広場の天井から見える宇宙の星々を見ていた。

「星の観察ですか提督?」

「あ、三好提督……はい、私どもの世界の宇宙とは少し違うので……」
「成る程。まあここいらは暗黒ガスが渦巻いている宙域ですからな……」

殴り込み艦隊は地球から約25万光年も離れた暗黒ガス宙域を航行していた。星は見えるが暗黒ガスも漂っているので見るのも多少の見えずらさはあった。

「……………」

「…………ハラオウン提督、今思っているのは星の観察だけでは無かろう?」

「…………先の戦闘について考えていました」

「……………」

「貴方方の世界での戦争である事は理解しています。私も陸に降りる前は三好提督と同じく船に乗って星の宙(そら)を航海していました」
「……………」

「無論、私の世界でも戦闘はありました……が、ここまでとは思っていませんでした……」

「我々に恐怖を抱いたかな?」

「そ、そんな事は……」

「いや……ハラオウン提督は精神は正常だよ……我々は長きに渡る戦争が多すぎた……」

そう言って将和はリンディに隣に座る。

「俺は今でこそ提督だが、元はただの一戦闘機パイロットに過ぎなかった」

「まあ、パイロットでしたの？」

「ああ。宙（そら）を飛行するのが好きでな……」

「……………」

リンディは宙（そら）を見上げる将和を見る。その表情は懐かしいと思われる表情であった。

「部下のパイロットに言った事あるが……死は結局、運命でもあるんだ……」

「運命……」

「ああ……不思議なもんでな。宇宙での空戦中、何千発のレーザーや機銃弾、対空ミサイルのど真ん中を飛んでいても当たらない時は掠りもしない。けど、当たる時は一発の流れ弾でも当たってしまうんだ」

「……………」

将和の言葉をリンディは黙って聞く。それは歴戦パイロットから語られる言葉であった。

「そう言いながら俺は腕を磨き、生き残るための必死の努力をする……大いなる矛盾なんですよ。その矛盾を生きているのがパイロット達なんです」

「大いなる矛盾……ですか……」

「ええ。でも生き残るために細心の注意を払い完璧に近づこうとしなければ、自分の運命にも出会えないまま……あつという間に死んでしまうんです」

「……………」

「俺はガミラス戦役の時はパイロットでした。無線から流れる上司、同期、後輩達の最期の叫びは未だに記憶に残っている……彼等達の死を無駄にしないが為に俺は此処に居ると思っっているかな」

「……………」

「いや、ややこしくすみません」

「いえ……大変勉強になりますよ」

頭をかく将和にリンディは苦笑する。

「どうです？ 御詫びつちや何ですが食堂で甘いモノでも？」

「あら、宜しいのですか？」

「ええ構いません。美人と御同伴出来るのは名誉な事ですから」

「まあお上手ね」

将和の言葉にリンデイは微笑むのである。そして工作室ではスカリエツティが通信器材の修復を完了させたのである。

「フム……思っていたより部品の損耗が無くて良かったモノだな」

スカリエツティは通信器材のスイッチを入れる。ジジツと画面が立ち上がり文字が大量に出てくるが翻訳機（スカリエツティお手製）を差し込んでいたのでスカリエツティでも分かる文字に翻訳されていた。

「やはり立ち上がりか……さて中身のデータは……」

スカリエツティがキーボードをカタカタと操作し画面が次々と代わっていく。

「フム……護衛艦『ポローニャ』か……ほう、エンジンのデータもあるか……」

スカリエツティはデータを見つけた。どうやら護衛艦のデータであった。

「成る程……二重エネルギーか。だからこそイスクンダルとガミラスを狙っていたのか……ん？」

データを見ていたスカリエツティはとある画面を見て手が止まる。「魔女サーダ……？」

その日、工作室からスカリエツティが出てくる事はなかったのである。そして翌日、スカリエツティは将和に状況報告をするのである。「上手くいった？ マジで？」

「ああ。サウンドオンリーでの会話で上手く向こうと接触が出来たな。敵艦のデータがあつて本当に良かった」

スカリエツティから貰った書類を見つつ将和は眼を見開く。

「やはり地球から40万光年の二重銀河……しかも白色銀河か……」

「ああ」

「それで向こうには何と報告したんだ？」

「単純さ。中間補給基地が破壊され地球までの燃料補給が困難になり通信器材の故障で航路設定が出来なくなつたから帰還したい、母星まで誘導してほしいと言つたら帰還許可を出してくれたよ」

「成る程……分かつたよスカさん。その誘導に従つて行こう。但し、警戒はしつつな」

「無論だね」

「しかし……看破されて待ち伏せをされていそうな気も否定は出来ませんな……」

チエン参謀長は賛成しつつも待ち伏せの可能性も捨てきれなかつたのだ。その指摘に将和は頷く。

「それは十分承知な上だ参謀長。でもスカさんが此処までやってくれているんだ。なら俺達もスカさんに報いる事をしなければならぬ」
「ですな……やりましょう司令」

将和の言葉にチエン参謀長は笑みを浮かべるのである。そして殴り込み艦隊は誘導に従い航行を開始するのであった。

「しかし、小惑星の数が多いな……」

「それにガスもだな……」

「レーダーは？」

「駄目です。どうやら小惑星が多すぎるあまり反射波が効かないようです」

「有視界か……」

その時、殴り込み艦隊の前衛に位置していた無人巡洋艦が爆発したのである。

「無人巡洋艦『C-22』爆発!! 誘爆を繰り返しています!!」

「全艦戦闘配置!!」

「全艦戦闘配置!!」

(さて……この宙域は原作でもあつたが……どうなるやら……)
そう思う将和であつた。

第五十四話

『C-22』はどうか?」

「駄目です。通信機器がやられたようで此方からの命令を受け付けません」

「駄目か……仕方ない。それで敵艦隊の位置は?」

「我が艦隊から十時の方向です。数は約19ツ」

「砲雷撃戦用意!!」

「砲雷撃戦用意!!」

「各艦準備出来次第砲撃開始!!」

「了解!!」

殴り込み艦隊は準備出来次第砲撃を開始する。三斉射で5隻を沈めたがそれでも暗黒星団帝国艦隊は砲撃してくる。

「無人艦隊を前進させろ。『高雄』の三木司令に連絡。『高雄』は巡洋艦隊を率いて側面から攻撃せよとな」

「了解です!!」

「こ、後方から新たな艦隊です!!」

「何?」

「将和、データ照合だと地球攻略軍の艦隊らしい」

「何? という事は地球からわざわざ此処まで追っ掛けてきたのか」

そして将和は思案し直ぐに判断する。

『春藍』に連絡。『春藍』は第七艦隊配下艦を従えて後方の敵艦隊に当たれ。残りはこのまま前方の艦隊を片付けるッ」

「了解ッ」

相原が直ぐに『春藍』に連絡を入れる。連絡を受けた山南司令はニヤリと笑う。

「宜しい。第七艦隊全艦は反転、後方の敵艦隊を殲滅するぞ」

「司令、此処は逆鶴翼の陣を取りましょう」

「ほう、『春藍』を先頭にしておかね？」

「バカデカイですので砲撃が集中するでしょう。その間に他の艦で叩いてもらいます」

「宜しい。フォーク准将の案でいこう」

斯くして第七艦隊の艦艇は反転、『春藍』を中心の先頭にした逆鶴翼の陣に移行して敵艦隊に砲撃を開始するのである。そして砲撃は殴り込み艦隊が制したのである。

「敵艦艇、遁走します!!」

「逃がしてやれ。但し追跡艦を出してな」

「了解です」

「成る程。奴等に道案内をさせるわけですね」

「そういうことだな」

その後殴り込み艦隊は敵艦艇が遁走したルートを絞り暗黒ガスと岩石が浮遊する宙域を航行する。

(敵艦艇は逃げ切ったが……ルート的には合ってる。ただ問題は見えない程の暗黒ガスが吹き荒れての岩石群の衝突を回避だが……原作はサーシャの超能力で回避出来たがはてさて……)

見えなくなりつつある宙域に将和は腕を組んで代案を考えるが代案らしい代案は出てこない。そこへ『春藍』から通信が来た。出てきたのは山南司令とフォーク准将であった。

「どうされましたか山南司令？」

『ウム。フォーク准将からの具申があつてな』

「具申？ フォーク、何かあるのか？」

『はい。このガス雲と岩石群から無傷で乗り切る方法です』

「ほう………何か案があるのか？」

『はい。岩盤を纏うのです』

「ツ………そういう事か……」

フォークの言葉に将和はニヤリと笑う。

「よし、フォークの案を採用してこのガス雲と岩石を抜けるぞ!!」

『ありがとうございます司令』

「なに、お前の案が一番の適合だからな。相原、直ちに全艦に通達、反

重力感応機の準備を急がせろッ」

「分かりましたッ」

直ちに全艦が反重力感応機を主砲から発射して周囲の岩石に打ち込み艦体に装着させていく。

「岩石はけちるなよ。特に艦橋は重視しておけ」

「まあ艦橋は不意を突かれて当たりそうだな……」

(不意じゃなくて本当に当たりそうになるんだよ)

トーレの呟きに将和は内心、そうツツコミを入れるのである。そして殴り込み艦隊は無人艦数隻(岩盤装着付)を先頭に航行を開始するのである。

「スカさん、今のうちに休憩しとけ」

「分かった。なら一時間程休憩してこよう」

将和の言葉にスカリエツティは頷き、スカリエツティは薫に任せて休憩に入った。小腹も空いていたので食堂で軽く摘まめるモノをと思いい食堂に向かうと御茶と御茶菓子をプレートに置いて持つリンデイがいた。

「おやおや、珍しいものだね」

「スカリエツティ……ッ」

リンデイはスカリエツティを見つけると険しい目つきになる。が、スカリエツティは気にせずコーヒー(カフェインレス)を注文する。

「まあなんだ、話でもするかい?」

「……そうね」

二人はそう言って席に着く。席に着くなりリンデイは御茶に角砂糖をボタボタと入れていく。1個ではない、複数である。

「……茶に対する冒瀆かな?」

「え、何が?」

「……いや、何でもない」

触れてはいけない闇の部分なんだろうとスカリエツティはそう自身を納得させコーヒーを啜る。リンデイも御茶を啜るがその様子は警戒心がマシマシであった。

「フツ安心したらいい。私の手元にはデバイスは無いからね」

「……でも娘達には装備しているでしょう?」

「彼女達はあくまでも自衛の為だ。何ならデバイスの記録を見ても構わないが?」

「抹消されている可能性も否定出来ないわ」

「おやおや……」

「……スカリエツティ」

「何かな?」

「組織に縛られるのが嫌だった貴方がどうして地球連邦軍に入ったの?」

当初は志願の特務隊だったスカリエツティ一行、だが白色彗星戦役後は正規に任官して地球連邦軍入りしていた。かつてのスカリエツティなら脳みそ達の指揮下に入って闇の事をしていたがそれを裏切ってスカリエツティ達は事を起こし鎮圧された。そのスカリエツティが何故任官したのか、リンディはそれが気になったのだ。

そして問われたスカリエツティはというとニヤリと笑みを浮かべた。

「なに、簡単な事だ。波動エンジンに夢があるからだ」

「夢……?」

「そうだ。波動エンジンはかつて、星と星を渡るために古代イスカンドル人が作り上げた恒星間エンジンだ。今でこそ波動砲という究極の武器はあるもののそもそも論点に代わりは無い。だからこそ私は波動エンジンに夢があると思っっているからだ」

「……貴方がロマンチストとは知らなかったわ」

「おや、魔法が存在する世界に住んでいた者の発言ではないな」

「……フフツ、確かにそうね……」

スカリエツティの言葉にリンディも思わず苦笑してしまう。そしてスカリエツティの腕時計がピピツと鳴る。終了10分前のアラームだった。

「さて、休憩の終了だ。貴女のお役に立てたかな?」

「ええ、勿論」

「それは何より」

スカリエツティはそうやって残っていたコーヒーを飲み干して食堂を後にするのである。そして残ったリンディは一人、リンディ茶を啜る。

「……この世界は管理局から見れば異常……でも……（この世界から管理局を見れば異常……というわけね。何とも……両方とも度し難い世界ね……）」

そう思うリンディであった。途中、幾度も巨大な岩石に当たるも咄嗟の波動防壁の展開と反重力感応機を装着して纏った分厚い岩盤により切り抜けたのである。殴り込み艦隊は暗黒ガスと岩石群の宙域を抜けたのである。

「ああ……ッ」

「これは……」

「何とも綺麗な……」

暗黒ガス等が大量にあった黒色銀河を抜けるとそこはただただ、綺麗な世界とも言える白色銀河であった。宇宙は黒をイメージする世界であるが白色銀河は宇宙空間が非常に明るかったのだ。将和達が思わず感動してしまうのも無理はなかった。

「スカさん、航路は？」

「うん。針路は0―8―0だ」

「分かった。島、針路0―8―0だ」

「了解。針路0―8―0、ヨオーソロオー」

そして殴り込み艦隊は示された針路を航行するのであるが、将和はスカリエツティに呼ばれた。

「どうしたスカさん？ 大事な話だから艦長室と言われたけども……」

「そうなんだ将和。とても大事な話だ」

「??」

いつになく、真剣な表情をするスカリエツティに将和は首を傾げるがスカリエツティは意を決して口を開いた。

「敵の本星に到着したら俺達は一旦、地球を裏切るつもりだ」

「何……？」

スカリエツテイの言葉に将和は目を見開く。そして次の言葉に更に目を見開くのである。

「将和、俺は敵の側近に惚れてしまった!!」

「……………それ、サーダヤんけエエエエエ!!」

スカリエツテイの決意に思わずそう突っ込んでしまう将和であった。

閑話その2 ガミラス戦役

ガミラスとの接触は第二次内惑星戦争が終結した西暦2183年から8年後の西暦2191年4月であった。4月1日、天王星の監視ステーションが太陽系に進入してくる未確認飛行物体―ガミラス艦隊を捉えたのだ。

この動きに国連宇宙軍は直ちに内惑星艦隊の出撃を発令した。戦艦6、巡洋艦20、駆逐艦34隻の艦隊は司令官には第二次内惑星戦争で活躍した沖田大將が就任して冥王星沖にて先遣艦『村雨』を派遣してガミラス艦隊の動向を監視する事にした。

しかし、国連宇宙軍は火星自治政府宇宙軍の残党と判断して攻撃を命令。攻撃命令に反抗した沖田大將は艦隊司令官を芹沢軍務局長の判断で解任し先遣艦『村雨』に攻撃命令を発令した。

『村雨』は攻撃するも『村雨』が搭載する高圧増幅光線砲はガミラス艦の装甲を貫通する事が出来ず『村雨』は瞬く間に撃沈されてしまう。その後、ガミラス艦隊は地球艦隊にも攻撃し生き残ったのは戦艦『霧島』、巡洋艦3、駆逐艦7隻という八割以上も喪失してしまうのである。

そしてガミラス艦隊は再度太陽系に侵攻してきたが、波動エンジンを搭載した新規艦隊30隻（戦艦2、巡洋艦8、駆逐艦20）は海王星沖でガミラス艦隊と激突、地球艦隊は巡洋艦2、駆逐艦7隻を喪失もガミラス艦隊を壊滅させる事に成功するのである。（西暦2192年 海王星沖海戦）

「だが直ぐにガミラスは出てくるだろう。油断はしてはならないのう」

宇宙軍出身の正信は必ずガミラスは再度侵攻してくると踏んでいた。それは正しくガミラスは冥王星を占領し基地化していたのだ。

「冥王星からガミラス艦隊の出撃を確認しました!!」

「北米艦隊、欧州、ロシア、中国艦隊が出撃します!!」

「バカな、早すぎるッ!!」

「呼び戻せ!!」

「間に合いません!!」

この海戦――第二次天王星沖海戦は地球側が敗北した。というのも四個艦隊(約600隻)はまだ波動エンジンを搭載していない旧式艦艇で編成された艦隊を出していた。本来なら四ヶ国とも波動エンジン搭載艦就役まで出撃は控えるべきだったが中国は国民の感情、ロシアは北米を抑えて主導権を握るため、欧州も似たり寄ったり、北米は大統領選挙も控えていた事もあり此処で勝つ意味があつたので日本の制止を振り切つての出撃だつた。そして西暦2193年、第二次天王星沖海戦が勃発するのであつた。

そして四個艦隊は各個撃破という形ではほぼ全滅したのである。この海戦で国連宇宙軍の戦力は日本宇宙軍艦隊を残してほぼ壊滅する。このため地球――日本はほぼ独力でガミラス艦隊に対処する事を迫られるのである。(波動エンジン換装前の欧州連合軍艦隊も壊滅しているため)

翌年の西暦2194年、ガミラスは冥王星を主力の基地化とし天王星、海王星にも派遣基地を置いているのを監視ステーションが確認した。国連宇宙軍は三星を攻撃する計画を企図するも正信が却下した事で基本的に迎撃に徹する方針となる。(この時に火星沖でも海戦があり国連宇宙軍は大敗している)

西暦2195年、日本宇宙軍は土星を絶対防衛圏に設定し波動エンジン搭載の二個艦隊――宇宙母艦を主力にした機動艦隊――で侵攻してきたガミラス艦隊を奇襲攻撃し壊滅させるのである。

この時、将和も少尉として改装空母『隼鷹』のパイロットとしてこの海戦に参加していたのだ。なお、この時に将和は敵機8機を撃墜し敵空母2、戦艦1、駆逐艦3を撃沈していた。

「今回は勝っても何れは数で押されるじやろ。今のうちに土星宙域から撤退をも視野する」

「しかし、衛星エンケラドゥスにはコスモナイト90が豊富にありま

すぞ」

「エンケラドウスでのコスモナイト90の採掘は中止じやの。だが、撤退までに採掘を優先させて備蓄せねばなるまいのう」

「そうなるか……」

「ウム……直ちに全宇宙艦艇を集結させるんじや」

「決戦場所はどうするのですか？」

「土星じやな」

国連宇宙軍総司令長官に就任した三好正信宇宙軍元帥大将は土星宙域にて全宇宙艦艇の集結を発令。第二次内惑星戦争後に予備艦入りしていた艦艇や新造艦、訓練未成艦等も含めた総勢350隻を土星宙域に集めさせた。

正信も『金剛』改型の『金剛』に乗艦して参戦した。西暦2195年7月7日、両軍は土星沖にて激突したのである。

「全艦、ミサイルを連射しつつカッシーニの隙間まで後退じやツ」

正信はそう指令し国連宇宙軍聯合艦隊150隻はミサイルを連射しつつカッシーニの隙間まで後退する。約250隻のガミラス艦隊は遠距離からの砲撃をしつつ少しずつ距離を詰めていく。カッシーニの隙間に到着するまでに10隻近くを喪失した聯合艦隊であるが、カッシーニの隙間には土方大将率いる別動隊200隻（各国の波動エンジン未搭載である『金剛』級15隻、『村雨』級50隻、『磯風』級135隻）が待機しており、各巡洋艦と戦艦は艦首に搭載した20.3センチ陽電子衝撃砲と36センチ陽電子衝撃砲をガミラス艦隊が射程距離に入り次第、一射撃5隻単位で砲撃を開始したのである。

「な、何だど!？」

瞬く間に撃沈されていく味方艦艇に驚愕するガミラス軍指揮官を他所に正信の主力艦隊が反転してきてガミラス艦隊に突撃する。

「今だ!! 全艦、ありったけの主砲とミサイルを敵に叩きつけるオ!!」

勝敗は決した。

ガミラス艦隊は82隻の残存艦を纏めて土星宙域から撤退を開始した。国連宇宙軍も15隻近くを喪失したが完勝に近い勝利であった。この勝利後、国連宇宙軍の主導権はほぼ日本が手中に納める事になる。

しかし、この戦い以後に国連宇宙軍はコスモナイト90を大量に残存艦艇に載せまくって土星宙域からの撤退をも開始するのである。また、木星宙域からも撤退し新たな絶対防衛線を火星宙域に設定するのであった。だが、ガミラス軍も只では起きなかった。

西暦2196年4月2日、10数発の遊星爆弾が国連宇宙軍の迎撃を掻い潜り5発が地球に着弾した。そのうちの二発は日本の神奈川県と香川県に着弾したのだ。更に残りの三発は北大西洋、北米の五大湖、地中海に着弾した。北大西洋と地中海に着弾した遊星爆弾は大規模な津波を引き起こし、北大西洋に着弾した遊星爆弾の津波は北米の東海岸、アフリカ大陸の西海岸、イギリス、フランス、スペイン、ポルトガルの各海岸を襲い人々を海に引きずり込んだ。それは地中海に着弾した遊星爆弾も同じでありイタリアを筆頭に欧州の各国に大量の難民を引き起こしたのである。

また、五大湖に着弾した遊星爆弾は北米の工業地帯であるデトロイト等を吹き飛ばし生産力を著しく低下させられたのである。

この落着を切っ掛けに遊星爆弾が地球に降り注ぐ事になる。無論、国連宇宙軍も迎撃を行い遊星爆弾を宇宙空間で破壊する事に成功したりするがガミラス艦隊の妨害もあつたりと徐々に影響が出始めたのである。

「ガミラス軍を火星沖で撃滅するしかあるまいのう」

正信は復帰した沖田大将に下駄を預けた。沖田艦隊は全て波動エンジン搭載艦に改装又は更新されておりその戦力は旗艦『霧島』を含む戦艦7、巡洋艦25、駆逐艦42、宇宙母艦6隻の再編成された日本宇宙軍の第一艦隊であった。

対してガミラス艦隊――この頃に惑星ザルツで編成されたザルツ空間機甲旅団が派遣――は超弩級戦艦1、戦艦18、巡洋艦38、駆逐艦54、宇宙母艦4が火星沖に進出した。

数ではガミラス艦隊のが圧倒的に上であったが地の利は日本側が上回っていた。また、火星の衛星フォボス周辺には航空隊用のグラディウスステーションが展開しており日本宇宙軍の第202航空団、第251航空団、第352航空団の計180機が応援可能としていた。

先手を取ったのはガミラス艦隊であった。

「ガミラスの宙雷戦隊が来ます!!」

「落ち着いて砲撃せよ。航空隊にも応援を出すんだ」

ガミラスの駆逐艦隊が突撃してくるがこれは航空隊と『磯風』改型駆逐艦の迎撃によって阻止された。そして両艦隊は同航戦による砲撃戦を開始した。

ガミラス艦隊は陽電子ビームを第一艦隊に叩き込むが第一艦隊は新防御兵器である波動防壁もあつてか無傷であった。

「何故だ……何故奴等はシールドを持っているんだ!?!」

旗艦『シュバリエル』でシュルツ大佐は映像を見ながらそう吠える。開戦初期は圧倒していた筈のガミラス軍だった。しかし、今では地球側に圧倒されつつあったのだ。

結局、ガミラス艦隊は火星沖でも敗北した。シュルツの空間機甲旅団は戦艦11、巡洋艦16、駆逐艦34隻を喪失し火星宙域から撤退したのである。

以後、シュルツは艦隊保全主義を取り遊星爆弾の攻撃をより一層強めるのである。しかし、遊星爆弾の攻撃を行おうにも国連宇宙軍の艦隊は波動エンジン搭載艦に全て完了しており、更には火星と月宙域での迎撃態勢が完了していた事もあり西暦2198年以降の遊星爆弾

が地球に到着する事は無くなったのである。

その一方で第二次火星沖海戦の勝利で沖田大將は正信と同じく英雄に祭り上げられる事になる。

それから数日後、イスカンドルからの使者が密かに地球を訪れた。国連宇宙軍はイスカンドルからの使者の言葉を信じて陽動作戦でもメ号作戦の艦隊編成に移行する。そして翌年の西暦2199年1月10日、再編成した第一艦隊、第一航空艦隊の2個艦隊は地球を攻撃し一路、冥王星に向かうのであった。

第五十五話

「はい、第一回スカさんの惚れた女強奪計画開催」

「パフパフ」

「……何これ？」

艦長室に集まったウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、セツテは将和とスカリエッティに視線を向ける。向けられた将和は肩を竦めながら口を開いた。

「そのままの意味だ。どうやらスカさん、敵さんの側近にいる女性に惚の字なんだよなこれが」

『博士……』

「惚れて何が悪い!! 私も一応は男だぞ!!」

将和の言葉にウーノ達がスカリエッティに軽蔑の視線を向けるがスカリエッティはスカリエッティで娘達の軽蔑の視線は何のそのであつた。

「まあまあ落ち着け……スカさん、一つ聞きたい」

「何だい将和？」

「……本当にサーダを救いたいんだな？」

「ッ……勿論だ!!」

「よし、ならいい。助ける方向にしよう。なあに、助けた後はうちの親父が何とかするやろ」

ニカツと笑う将和である。

「将和……」

「んでまあ……どのよう接触してサーダを助けるかだが……やつぱ此処は原作通りにやるしかねえわな」

「原作通りに……?」

「ああ。多少のアレンジをしてな」

スカリエッティの呟きに将和はニヤリと笑う。そこへ呼び出し音

が鳴る。

「どうした？」

『艦長、大村です』

「どうしました大村さん？」

『はい、白色銀河の一部に発光点を続ける星を発見しました。まだ距離が遠すぎて星は見えませんがどうしますか？』

「分かった。艦橋に向かう」

将和は直ちに艦橋に向かい、状況を確認する。

「状況は？」

「2時方向の星です」

映像を見るが確かに点滅をしていた。発光信号でもなかった。

「発光信号やモールス信号でもありません。一定時間での発光点滅をしています」

「ウム……」

「敵の本拠地でしょうか？」

「本拠地とは言い難いと思います。罊の可能性は十分有り得るか……」

大村とチュンはそう将和に具申する。程なくして山南の『春藍』からも通信が入り、罊の可能性と敵の本拠地の可能性と伝えてくる。

しかし将和は前進する事を選択した。

「艦隊、無人艦を前衛にして前進する」

「司令ツ」

「虎穴に入らずんば何とやらだ。前に進まねば先に行けないしな」

「ですが……」

「だからこそ無人艦を先に前進させて様子を探らせる」

「無人艦だからこそ出来る運用ですな」

「そういう事だ」

チュンの言葉に将和は頷く。直ちに無人小型艦4隻が先行して様子を伺う事になる。しかし、4隻からは特に異常は無かった。

(……ほんとは行きたくないが……)

将和はそう思う。将和としては原作だと黒色銀河で遭遇するゴル

バ型浮遊要塞と交戦していないのが気掛かりだった。そうなる意味もあつて先に無人艦を先行したのだが無人艦からはそういった報告は無かった。

(となるとデザリアム本星での遭遇か……?)

判断状況が少なかった。だが、将和は前進を選択した。虎穴に入らずんば何とやらだ。

そして前進を開始した殴り込み艦隊、先行していた無人艦4隻と合流し更なる前進をするが宙域が段々と再びガス星雲のガスの密度が増してきたのだ。

「タキオンレーダー、索敵が著しく低下します」

「……目視での監視をしろ」

目視での監視が行われる中、事態が動いたのは11分後であった。

『此方右舷ウイング、敵艦らしきモノ見ゆ!!』

『3時の方向、距離15万宇宙キロ!!』

「メインパネルに切り替える!!」

直ちにメインパネルが作動して3時方向を映す。3時方向もガス星雲の密度が濃かった。しかし、何かがいるのは間違いなかった。

「先に仕掛ける。主砲用意」

「主砲発射用意!!」

『三笠』の51サンチ陽電子衝撃砲が右舷に旋回して照準する。

「準備宜し!!」

「主砲、斉射三連!!」

「撃エ!!」

『三笠』の陽電子衝撃砲が斉射三連して吠える。弾道はガス星雲に消えるがパキインパキインと四方にエネルギーが散った。

「主砲を跳ね返しただと……ッ」

「呆けるな、連続斉射だ!!」

「りよ、了解!! 主砲連続斉射!!」

呆ける南部にトーレが叱咤して更に主砲が斉射する。しかし、エネルギー弾はガス星雲に入った瞬間に敵の装甲が貫通せずに四方に飛び散る。

(やっぱりか……)

「コイツは一体……」

「敵がガス星雲から抜けます!!」

そしてガス星雲からヌウツと出てきたのは……ゴルバだった。しかも原作と同じく7基もいた。

「浮遊要塞か……ッ!?」

「全艦砲撃!! 砲撃しつつ後退せよ!!」

殴り込み艦隊は直ちに砲撃を開始する。だが、エネルギー弾は全てゴルバ型浮遊要塞の硬い装甲に阻まれて効果は無かった。

「ククク……この浮遊要塞にそんなチャチな主砲が効くか!!」

浮遊要塞司令官のグロータス准将は殴り込み艦隊からの砲撃にニヤリと笑う。

「全く……魔女が後退というからこの宙域で待機していたが……今度は此方の番だ。包囲陣形に移行しつつ速射ビーム砲で牽制せよ。包囲したら空間重魚雷を連続発射ア!!」

浮遊要塞7基は包囲陣形に移行しつつ速射ビームで包囲した。そして包囲させたら腹部分に設置していた空間重魚雷を連続発射したのだ。

「敵超大型魚雷接近!!」

「波動防壁展開!! 対空防御オ!!」

『三笠』は波動防壁の展開で重魚雷からの攻撃を逃れていたが他艦は展開が一步遅かった。

「巡洋艦『ハーゲン』『ウイチタ』轟沈!!」

「更に無人大型戦艦『フィランギ』『ロンパイア』『クシポス』も轟沈!!」

「戦艦『ローマ』通信途絶!!」

「全艦分散しろ!!」

「駄目です!! 包囲が厚すぎます!!」

「波動防壁46%まで低下!! このままでは……」

「将和!!」

「どうしたスカさん!？」

「波動カートリッジ弾を使おうッ」

「何？」

「まだ、テストもしていなかったら具申しなかったが……この状況だ。一か八かやってみよう」

「分かった。主砲に波動カートリッジ弾を装填!! 『春藍』以下に連絡、『三笠』は波動カートリッジ弾を使用する。無人艦を盾にしつつ砲撃して時間を稼ぐんだ!!」

「了解!!」

「自分は作業に向かいます!!」

「行け南部!!」

直ちに南部が主砲塔に向かう。その間にも浮遊要塞群からの攻撃は続いていた。

「早くしろ!!」

揚弾機から波動カートリッジ弾が主砲塔に押し揚げられ、砲員達が波動カートリッジ弾が砲に装填する。

『装填完了!!』

「トーレ、主砲発射用意!! 手前の浮遊要塞の魚雷発射口を狙え!!」

「了解した!!」

主砲4基に波動カートリッジ弾が装填完了し主砲が接近しつつある手前の浮遊要塞ーグロータス准将の乗艦ーに照準を合わせた。

「撃エ!!」

4基12発の波動カートリッジ弾が連絡発射され、空間重魚雷発射口に次々と突き刺さって内部に潜り込んだ先で爆発、内部に装填されていた波動エネルギーを解放したのである。

「ヌツ!？」

誘爆により浮遊要塞の艦橋にも爆風が舞い込む。そして爆発がグロータス准将を包み込んだのであった。

「ヌアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

轟沈したグロータス准将のゴルバ型浮遊要塞、しかし左舷にいた浮遊要塞も誘爆してこれも爆沈した。だが、面白い事に次々と他の浮遊要塞群も爆発していき爆沈したのである。

「やったぞ!!」

「流石はスカさんだ!!」

「……………」

太田や相原達が喜ぶ中、スカリエッティだけは喜ぶ表情ではなかった。

「どうしたスカさん？」

「おかしい……波動カートリッジ弾にあんな連続して誘爆するような機能は無い」

「そうなんですか？」

「ああ。あの波動カートリッジ弾の内部には波動砲の規定エネルギー量の1/100の波動エネルギーしか入っていないんだ……恐らく、敵のエネルギーと何らかの共鳴反応を起こして爆発連鎖したのかも shouldn't be ……」

そう呟くスカリエッティである。

「取り敢えずは確認しておいてくれスカさん」

「分かった、任せてくれ」

「相原、全艦に被害状況を伝達してくれ」

「分かりました」

そして20分後に被害状況が纏められて将和の下に届いたのである。

「無人大型戦艦7隻、自動駆逐艦10隻、パトロール艦5隻が撃沈されたか……」

「それに損傷艦も戦艦『ローマ』『アイアース』『リシユリユー』、巡洋艦5隻、無人大型戦艦3隻になります」

「補給艦の『サクラメント』と『ブルー・リッジ』を置いて修理に専念させよう」

「分かりました」

将和の言葉にチュン参謀長が頷き、チュンはそれを各艦に伝える為に出る。

「……誘爆どうすつかな……」

「今良いかい将和？」

「どうしたスカさん？」

そこへスカリエツティが艦長室に入ってくる。

「例の件だが……」

「ああ、サーダ救出？　一応案はあるぞ」

「ほ、ほんとかい!？」

「ああ、耳貸せ」

「み、耳を貸すのかい!？」

「比喻表現だから心配すんなつての。良いか？」

「……………」

そして殴り込み艦隊は損傷艦を置いて前進を開始した。目指す場所は発光点滅を続ける星である。殴り込み艦隊は距離の測定をしたので一気にワープをして近づく事にした。

「…………ワープ終了…………ッ」

「か、艦長!?!　ぜ、前方の星…………」

「…………地球……………だな」

殴り込み艦隊の目の前には飛び立った筈の地球があつたのであつた。

第五十六話

「地球……だと……?」

「間違つて地球に来たのか?」

「そんな事はない。ちゃんとワープをしてきたじゃないか」

「しかし……」

島や南部らがそう話す中、将和は立ち上がる。

「取り敢えずは地球(仮)の様子を見てみよう。それで何か分かるだろう」

「分かりました。拡大映像に切り替えます」

相原が拡大映像に切り替えて地球(仮)を見る。そこには彼らが発進する前の地球そのものだった。

「これは……」

「やっぱり地球か……?」

「しかし航路上は……」

「だがこれは地球ではないのか?」

(フム……此処まで似せるとは……その努力を違う方向にやれよ……)

将和は変な方向に努力をする暗黒星団帝国に溜め息を吐く。

「……此処まで似ているとなると……上陸部隊を出して直接確認するしかないな……」

「志願者を募りますか?」

「そうだな……志願者と指定した者の調査隊にするか」

「指定……ですか……?」

「ああ……」

「大村さん」

「何ですか?」

「大村さんに頼みがあります」

「??」

そして一時間後、2機の空間汎用輸送機『SC97 コスモシーガル』が『三笠』から発艦する。選ばれた人員は以下の通りだった。

大村副艦長

スカリエツティ

ドゥーエ

トーレ

相原

徳川太助

アナライザーズ（量産型）

山本玲

保安隊10名

「艦長は残念そうでしたね」

「将和も行きたがっていたからね」

大村の言葉にスカリエツティは苦笑する。将和も降りたかったがチユン参謀長達が「それは駄目でしょう」という正論に押し伏せられ泣く泣く諦めたのである。

そしてシーガルが着陸出来る場所を探して荒野らしきところに着陸する。

「さて……何も無さそうですね」

「あの宮殿らしきモノしかないですね」

着陸場所を探している時、上空から宮殿らしい建物を見つけたのでそこをメインにしようとしたのだ。

「取り敢えずはあの宮殿に向かいますよ」

「念のためだ。シーガルの警護に2名残す」

「分かりました」

そして保安隊の2名が残り、大村達は宮殿に近づく。なお、全員が完全武装である。大村達が宮殿に近づくとうち入口に誰かが立っていた。

「あれは？」

『女性デス。女性ガ近ツイテキマス』

砂埃の中、女性が近づいてきた。

代表して大村が女性に問う。

「貴女は……？」

「私はサーダ……お待ちしていました。聖総統がお待ちかねです」

「聖総統？」

「教えて下さい。此処は地球なんですか？」

「聖総統にお会いになれば分かりますわ……さあ此方へ……」

女性サーダはそう言っ先頭で歩いていく。その後ろを大村達が歩き、宮殿内に入っていく。そしてスカリエツティはというと……。

（ああ……サーダさん……何と美しき人か……やはり私の美学は間違っていないかった……何としてもサーダさんをこんなクソな星から脱出させなければ……）

（何か変な事考えてそう……）

表面上は何もなさそうな雰囲気のスカリエツティだが内面ではめちゃくちゃ違っていた。なお、その様子を見てドウエがコツソリと溜め息を吐いていた。

そして一行は地下に降りて廊下を歩いていると左右の壁に多数の美術品の絵が飾られていた。その映像はアナライザーズを通して将和らの下にも届いていた。

「これは……地球の美術品じゃないかッ」

「……………」

そして大広間らしきところに到着すると正面には一人の男が椅子に座っていた。

「……『ミカサ』の諸君、よくぞ来られた。私が聖総統のスカルダートだ。我々は諸君を第一級の賓客として迎える事にした。安心せられよ」

「敵ではないという事か？」

スカルダートの言葉に相原がボソツと呟く。そこへサーダがグラスに注いだ飲料水を持ってきて皆に渡していく。

「さて諸君……早速御覧頂いた我々の美術品は如何かな？」

「我々の美術品？」

「左様……この星に何世紀も前から伝わる美術品の数々だ」

『……………』

「疑問に思うものも当然だ。この星は君達より2000年未来の地球なのだ」

『2000年後の地球!?!』

「そんな途方もない説明を納得しろと言うのかしら？」

「納得ではない。事実だよ」

山本の反論にスカルダートはそう返す。

「艦長、どうしますか？」

『大村さん、一先ずスカルダートには急な事なので持ち帰って検討すると伝えて下さい』

「分かりました」

そしてスカルダートに一旦戻ると伝わるとスカルダートも了承をし一行は『三笠』に戻る事になるが……此処で事件が起きる。

「スカリエツティ博士、どうしましたか？」

「……………大村副長、先に戻して下さい。どうやらやる事が出来ました」

「博士…………？」

「後程お会いしましょうと将和に伝えて下さい!!」

「博士!?!」

「クツ、副長らは先に戻して下さい!! 私達は残ります!!」

「戦術長!!」

「保安長!!」

「副長、三人を待ちましょう!!」

「いや、このまま離陸する」

「副長!?!」

「訳は後で話す。今は『三笠』に戻る」

「……分かりました」

そして一行はスカリエツテイら三人を残して『三笠』に戻るの
であった。

「艦長!? どうして三人を残したのですか!!」

「何があつたというのですか!?!」

「ウーノさん達も何か言つて下さいよ!!」

「……………」

相原や玲達は帰ってくるなり将和に文句を言う。だが、太助だけは
ずっと変に悩んでいたのだ。

「三人を残す理由は勿論ある……太助」

「は、はい!?!」

「何か悩んでるんだろ? 言ってみろ」

「え、でも……」

「良いから、言ってみろ」

「は、はい。さっきの美術品を見ている時にロダンの「考える人」が
あつたんです。その「考える人」……何かおかしいんです」

「どうおかしいんだ太助?」

「此方が地球にある「考える人」だ、それで此方がさっきの「考える人」
だな」

将和はそう言つてパネルを操作して地球と先の地球にある考える
人を出す。そして見ている時にあツ!?!と太助が叫んだ。

「考える人が変です!?!」

「変? どういう事だ?」

「宮殿の廊下にあつたロダンの「考える人」は左手を顎に当ててポー
ズを取っていました。ほら、本物はこうなんです。右手でポーズを
取っているんですよ」

『何!?!』

将和を除いた全員が画像を見る。確かに宮殿の廊下にあつたロダ
ンの「考える人」は左手を顎に当てていた。対して地球のは右手で
ポーズをしている。

そこへ薫が艦橋に来た。

「みんな聞いて!! あの星は私達の未来なんかじゃなかったわ!! 全ては私達を騙す手立てだったのよ!!」

「騙すだって!？」

薫はそう言って相原がコッソリ持って帰ってきたグラスを島達に見せる。

「このグラスはあの星の宮殿から相原君が持って来たものだけど……指紋がついていないのよッ」

「指紋!？」

「案内してくれた女性が運んできたそうなの。本当なら指紋が付いているはずよ!!」 あの星は私達の未来の地球なんかじゃないのよ!!」

「徳川の言った彫刻も、あの絵もみんなにせ物だったのか」

「それじゃ、あの歴史もでたらめだったんですね!？」

「そうだ。俺たちを騙して降伏させるつもりだったんだ」

「良かった!! 俺たちは地球へ帰れるんだ!!」

「そうとなったら、みんなに報告だ」

「というわけ」

皆がワイワイ言う中、将和が立ち上がる。

「島さん、新見さん、地球の未来だということが嘘なら、地球人類を滅亡させても一向に構わないわけだ!!」

「うん。となれば奴等は……」

「地球にある重核子爆弾を使うかもしれない!？」

「その通りだ南部、ただちに重核子爆弾のコントロール機能を停止させなければ!!」

「慌てるな島。今、スカさん達がコントロール機能を探している」

「スカさんが……?？」

「まさか艦長!？」

驚く島達に将和はニヤリと笑う。

「俺とスカさんは最初から敵だと思っていたからな。だが、確信が無いからスカさん達がわざと星に残るようにして調べてもらおう事にしたんだ」

「それなら艦長、自分達にも言っても……」

「敵を騙すにはまず味方から……というヤツだな。だが、初めから全員が知っていたら芝居がわざとになるだろ？　特に太助とかはギクシヤクして台詞も言えなさそうだからな」

「ひでえや艦長……」

『ハハハハハハッ』

顔を苦虫を噛み潰したような表情をする太助に島達が笑う。そして将和が口を開く。

「そんなわけでスカさん達からの連絡待ちだ。それまでは戦闘配置のまま待機……」

そこへ『三笠』のタキオンレーダーが反応しウーノが報告する。

「敵艦隊です。艦隊より2時方向に敵艦隊が出現しました。距離は凡そ3万宇宙キロ!!」

「来たか、メインパネルに切り替えろ」

メインパネルに切り替えると惑星軌道上に8隻の艦隊が航行しながら此方に向かって砲撃してくる。

「このまま波動砲戦に移行する。波動砲発射用意!!」

「ですが艦長、星に当たりませんか？」

「大丈夫よ、軌道を外すようにすれば星への被害も無いわ」

「反論する島に艦隊を観測していた薫がそう言う。

「俺が撃つツ」

「エネルギー弁閉鎖。　エネルギー充填開始」

「セイフティロック、解除。ターゲットスコープ、オープン。電撃クロスゲージ明度9。発射モード集束モード」

艦長席に拳銃型の波動砲の発射スイッチが出てくる。

「エネルギー充填120%!!」

「発射10秒前、対ショック、対閃光防御。最終セイフティ、解除」

『三笠』の艦首波動砲口に青白いエネルギーが徐々に集まり出してくる。

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、波動砲、撃エエツ!!」

『三笠』から新とも言える波動砲が発射されたのであった。

第五十七話

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、波動砲、撃エエツ!!」

『三笠』から新とも言える波動砲が発射されたのであった。

『ミカサ』から波動砲です!!」

「無限β砲発射ア!!」

対してサーグラス准将の戦艦『グローデス』も無限β砲を発射する。しかし、波動エネルギーの方が無限β砲のエネルギーを上回り波動エネルギーの方が勝ってしまう。

「馬鹿なツ!! 無限β砲がーーーーーーーー」

サーグラス准将はそのまま波動砲に飲み込まれ、原子まで分解され『グローデス』も爆沈しその余波は周囲にいた『グローデス』級をも飲み込んで誘爆して果てていく。だが、その爆発エネルギーは偽地球にまで及んだのである。

「あぁッ!? 惑星にまで……」

「あの星にはスカさん達が……」

誘爆は星の至るところで行われ、星を覆い尽くす。

「…………… (スカさん……………)

艦長席で将和は誘爆に呑まれた星を見ていた。そして爆発が収まる頃、新たな星が将和達の前に姿を現す。

「コイツは……」

「あれがこの星の本来の姿ってヤツなんだろうよ」

「いたのトチロー?」

「いるに決まってるだろ」

技術長席に座って分析していたトチローが喋る。

「見ろ、あの星の中核を。あの装甲はちよつとやさつとでは貫通出来ないだろうな。新波動砲も通用しないだろうな」

「じゃあどう攻略するんですトチローさん?」

「だからスカさん達が残っているんだろ」

そこへ通信が入る。パネルが切り替えるとそこにいたのはスカさん達だった。

「スカさん!？」

「無事だったんですね!!」

『ああ。ここまでは敵も予測していたらしくて、この星の人は誰も傷ついていないよ』

「やっぱりか」

『分かった事が複数ある。この星は空洞惑星のようなんだ。内部の空洞の中央には巨大な人工都市がある。私達がいるのもこの人工都市だ。今から私が南極のパイプを開けるから内部に突入し私達を収容した後に人工都市中心部に波動砲を撃ち込んでほしい。その後は北極から離脱するんだ』

「分かった。『雪風』を迎えに出す。だから……死ぬなよスカさん?」
『無論だ将和』

そう言つて通信を切ると将和は叫ぶ。

『春藍』に連絡!! 『春藍』は他艦を率いて敵の攻撃を惹き付けよ!!

『三笠』と『雪風』は南極から突入するぞ!!」

「艦長、地球から通信です!!」

「なに、地球から?」

そしてパネルに現れたのは元『ヤマト』乗組員の西条未来だった。

「西条!？」

「西条じゃないか!？」

「無事だったのか!!」

『お久しぶりです。三好司令、防衛軍司令長官からのからのメッセー
ジをお伝えます』

「親父から?」

『はい。長官を初めとして地球の有志達は地下に潜って抵抗軍を組織し戦ってきましたがようやく、重核子爆弾の占拠に成功しました。この通信も重核子爆弾内部の通信回線を利用して送っています』

「成る程。それで西条、現在地球の起爆装置は?」

「制御室です!! ですがスカリエツティに切断されたネットワークは一部ですので復旧は可能です!!」

「よし、奴等を殺せ!! 一刻も早く制御室を奪還し切断された箇所の修理を急ぐのだ!!」

「はッ!!」

「それとサーダは何処にいる? 先程から見当たらないぞ?」

「は、はあ。我々も探しているのですが……」

「又ウ……まあ良い。見つけたらワシのところまで来いと伝えろ!!」

「はッ!!」

そして制御室前では瓦礫等を盾にして暗黒星団帝国軍と銃撃するトーレとドゥーエがいた。

「弾切れ!!」

「任せて!!」

AK-01レーザー自動突撃銃のエネルギー切れのため弾倉を交換するトーレに代わりドゥーエが発砲する。

「博士と『姫』は?」

「まだ話しているようね!! 此方は早くしてもらいたいんだけどね!!」

そう言いながら二人は制御室前で奮闘する。そして制御室の中ではトースカリエツティが土下座をサーダにしていた。

「好きです!! 私と一緒に地球に来て私も共に人生を歩んでほしい!!」

「……………」

土下座をして心からの叫びをするスカリエツティに啞然とするサーダである。サーダも内心、何が起こったのか分からなかった。

(えと……何が……)

さしもの魔女と言われた彼女でさえも突然の事態には対処しきれなかった。

「えと……取り敢えずは初対面……ですわね?」

「初対面ではありません!!」

「え?」

「護衛艦『ボローニヤ』覚えはありませんか？」

「『ボローニヤ』……確か映像通信が故障して音声のみの会話……まさか貴方が……？」

「そうです。戦争とはいえ、偽って貴女との通信をしていた者です」

此処に来るまでの間、スカリエツティは鹵獲した護衛艦『ボローニヤ』の通信機器を使用して敵本星の位置を探ろうとしていた。その時にたまたま高官であるサーダとの通信会話が成功した事でその後も私的ながらの音声会話でやりとりをしていたのだ。

「嘘と思われませんか？　ならば先日の交信で貴女が愚痴っていた事を言いまししょうか？」

「え？」

そう言つてスカリエツティは先日、サーダがスカルダートに対しての愚痴を溢していたのを一言一句間違えずにサーダに説明した。

「ま、まさか……（確か聖総統への愚痴は全て一致している……ならば本当にこの人は『ボローニヤ』で通信してた人……）」

偽って通信をしていたのでさえサーダは屈辱的だった。しかし、幾度も通信していた時に悩みや相談にも乗ってもらった事もあった。

だからこそ失望もあつたのだ。だが、その失望の心もいきなりであるスカリエツティの告白に全て吹っ飛んでいた。

「私と共に来てほしい!!」

「……分かっていてしょう？　私の身体は首から下は機械よ。それにこの耳とかも出身星が低級下等人種だからと言つてこのような施しもされて首も半分は機械に侵食されている……私に同情はやめておきなさい」

サーダは強く貶す事でスカリエツティに諦めてもらおうとした。

しかし、スカリエツティはその予想を上回る言葉を出した。

「それがどうした!!」

「ッ!？」

「機械が何だ、元は私も人工的に作られた人種の科学者だ。そしてサイボーグで娘とも言える人間を造り出した……私なら、私ならば貴女を幸せに出来る断言する!!　だから、来いサーダ!!」

「ッ!？」

スカリエッツィの力強い言葉にサーダは顔を赤らめる。

(…………この人なら…………)

此処まで力強く自身を好みと称してくれる…………ならば信じていいのではないだろうか？

「…………はい…………」

赤らめる頬を見せつつサーダは頷いたのであった。

「……………………………………イヤッホオオオオオオオオオ!! 最高だぜエエエエエエ!!」

思わずはしゃぐスカリエッツィでありその声は制御室の外で戦闘をしていたドウエとトーレの耳にも聞こえていた。

「今の声は…………」

「どうやら成功したようね」

「ならば後は逃げるだけだな!! 博士!!」

トーレは叫ぶ。それを聞いたスカリエッツィもニヤリと笑みを浮かべる。

「1分待てトーレ!! 今から奴等に風邪を引かせてやる」

そう言つてスカリエッツィは小型タブレットを取り出してカタカタ操作すると有線ケーブルを差し込み口に差す。

「フハハハハハハ。私特製の置き土産だ、タツプリと味わうが良い!!」

(あ、ちよつと素敵かも…………)

悪の笑いをするスカリエッツィに嬉しそうな表情をするサーダである。

「よし、プレゼントは発送した。引き上げるぞ二人とも!!」

スカリエッツィはそう言つて制御室の半壊させていた起爆スイッチのコントロール装置をコスモガンで更に叩き込んで完全破壊したのである。

「さあ行きましょうマドモワゼル」

「…………はいッ」

サーダはスカリエッツィから差し出された手を取り、二人は手を繋いで制御室を出てその後をドウエとトーレが続く。

「全く、何て逃避行なんだ」

「二人が嬉しそうなら良いんじゃないかしら」

そして4人は南極ホールのスイッチ解放をするのである。それを
見た将和は突撃命令を出す。

「最大戦速!!」

「最大戦速!!」

『三笠』と『雪風』は南極から突入を開始するのであった。

第五十八話

「各部、警戒は怠るなよ!!」

南極から突入した『三笠』と『雪風』は人工都市へ続く通路を全速力で航行していた。そして出口が見えて駆け抜けた。

「……あれは……ッ」

2隻の先の先………煌びやかに輝く水晶のような建物が多数あった。あれが人工都市なのだろう。その人工都市からミサイルが発射された。

「敵ミサイル発射!! 大型です!!」

「対空防衛!! 主砲発射用意!! 目標、敵人工都市!!」

「準備完了!!」

「一斉射のみだ、撃エエエ!!」

『三笠』が一斉射で砲撃する。着弾すると人工都市が爆発していく。

「今だ!! トチロー、『雪風』を突入させろ!!」

「合点承知の助だ!!」

トチローが操作をして『雪風』を最大速度で人工都市に突入させる。波動防壁を展開していたので『雪風』に損傷は無かった。将和は直ぐにスカリエツティに連絡を入れた。

「スカさん聞こえるか!? 『雪風』をくつつけさせたぞ!!」

『此方スカだ。直ちに『雪風』に向かう!! それとトチローに『C-02』を発令させてくれ!!』

「何だ?」

『ウイルスだよコンピューターウイルス!! 奴等のメインコンピューターに侵入してウイルスをばら蒔くんだ!! 制御室で全各所に振り撒くよう仕掛けている!! 無論、奴等にも効くようにな!!』

「奴等に効く? どうやって?」

『コンピューターウイルスだと言ったろ? 人間で例えたら風邪を引

かせるんだ!!」

「大丈夫だスカさん、既に『C-02』は『雪風』を通して流している!!」

そこへ操作を終えたトチローがニカツと笑う。

『流石はトチロー。此方も直ぐに向かう!!』

そう言うスカリエッティだった。その頃、スカルダートも漸く警備隊が銃撃して来ないのを見て制御室に突入するとともにぬけの殻でありコントロール装置が完全に破壊されていた。

「修理にどれくらい時間が掛かるのだ!？」

「少なくとも数時間は……」

「30分以内に終わらせろ!! これは命令だ!!」

「聖総統!？」

「今度は何だ!？」

「サ、サーダ様が……」

「サーダがどうした? 見つけたのか?」

「は、はい。見つかったのは見つかったのですが……」

「なんだ、ハッキリと申せ!!」

言い淀む部下にスカルダートがそう言うのと部下も意を決して口を開いた。

「それが……敵と一緒に行動を共にしているのです」

「何!? 人質か!!」

「いえ……人質では無い様子でした」

「……おのれサーダめ!! 裏切ったなア!!」

部下からの報告に全てを理解したスカルダートは激怒した。

「構わん、サーダごと殺せ!! 植民地惑星の奴隷だからと言って侮つたのが仇となつたわ!!」

「は、はい!! (そらそうだろうな……)」

部下は頭を下げながらそう思い、仕事に取り掛かるのであった。その一方でスカリエッティ達は暗黒星団帝国軍の追跡から逃げつつ『雪風』が突き刺さっているエリアを目指していた。

「わんさかわんさか出てきてキリが無いな!!」

「文句を言う暇があるなら撃ちなさいトーレ!!」

「分かっている!!」

ドゥーエの文句にトーレはそう言っただけで迫り来る敵兵士達に向けて射撃をして倒していく。

「博士、奴等はまだ風邪を引かないのですか!？」

「もうちよつとで流行してくる。何せ流行を長引かせるように9999通りのコンピュータウイルスを送り込んだからな!!」

ドゥーエの問いに走りながら答えるスカリエツティである。そして数度の銃撃をする中、不意に銃撃が止んだのである。

「銃撃が……」

「効いてきたな」

スカリエツティはニヤリと笑みを浮かべて急に倒れて身体からオーバーヒートの煙が出ている敵兵士達を見る。

「これで暫くは時間を稼げる。さあ行くぞ!!」

そして4人は再び走り出す。スカリエツティが仕掛けたコンピュータウイルスは巧妙かつ大胆なモノであった。というのも中将和から敵はサイボーグと聞かされていたので敵の本星は元より艦艇等にもメンテナンス用の回路はあると踏んでいた。それを鹵獲した護衛艦『ボローニャ』のメインコンピュータから探っては見つけていたのだ。

そして制御室からコンピュータウイルスを流した時、メンテナンス用のコンピュータ回路にウイルスを流し込んで回路をウイルスに感染させた。メンテナンス回路は赤外線や有線等を通して敵兵士達のメンテナンスをしていたので後は感染を待つだけだった。

ウイルスに感染した敵兵士の身体は感染対策が地球人がかつて天然痘を撲滅したように対策はサイボーグにインプットされていなかった。その為兵士達の身体は次々とオーバーヒートを起こして機能を停止していたのだ。

「何!?! オーバーヒートだと!?! 馬鹿な、メンテナンスは済んだばかりだぞ!!」

勿論、それはスカルダート本人も機能を一時停止をせざるを得な

かった。ちなみにサーダは対策を施したディスクをスカリエツティが渡してインプットしていたので問題は無かった。

そして4人は『雪風』が突き刺さったエリアに到達した。

「中に入るぞ!!」

暗証番号を入力して『雪風』の中に入り艦橋に入る。

「此方スカリエツティだ!! 将和、聞こえるか!!」

「『雪風』から通信です!!」

『此方スカリエツティだ!! 将和、聞こえるか!!』

「聞こえるぞスカさん!!」

『荷物を含めて全員無事だ!!』

「了解した!! トチロー!!」

「任せろ!! ……………よし、『雪風』コントロール復帰!!」

「よし!! 『雪風』はそのままワープして離脱させろ!! 波動砲発射用意!! 波動砲発射後はワープして現宙域を離脱!! 相原、山南さんにもワープでの退避を伝えろ!!」

「了解!!」

「エネルギー弁閉鎖。 エネルギー充填開始!!」

「セイフティロック、解除。 ターゲットスコープ、オープン。 電撃クロスゲージ明度20。 発射モード集束モード!!」

先程と同じく艦長席に拳銃型の波動砲の発射スイッチが出てくる。

「エネルギー充填120%!!」

「発射10秒前、対シヨック、 対閃光防御。 最終セイフティ、解除!!」

『三笠』の艦首波動砲口に青白いエネルギーが徐々に集まり出してくる。

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1!!」

「波動砲、撃エエエエエエエツ!!」

『三笠』は人工都市に向けて波動砲を発射した。波動砲が直撃した人工都市は建物を吹き飛ばしながら消滅していく。

「ヌウワアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

聖総統スカルダートも波動砲の青白いエネルギーに包み込まれ原子まで分解されたのである。急速に崩壊していくデザリアム星、『三笠』は北極への通路を最大速度で航行しながらワープ準備していた。

「ワープ準備!!」

「ワープ5秒前!! 4、3、2、1」

「ワープ!!」

そして『三笠』がワープする。『三笠』がワープした直後に爆風が『三笠』がいた宙域を襲うも『三笠』はワープしたので無事であった。

『三笠』はデザリアム星からワープし白色銀河の入口まで来た。

「……何とかなったな」

「どうやら……そのようすな」

将和の呟きにチュン参謀長がそう答える。

「相原、山南さんとスカさんに連絡を入れる。全艦、白色銀河入口に集結せよ!!」

「了解ですッ」

そして全艦が集結したのは五時間後の事であった。『雪風』も集結し『三笠』からシーガルが発艦してスカリエッティら4人を収容した。「スカさん、その人は……」

映像を見ていた島達はサーダがいる事に驚くがスカリエッティは頷く。

「大丈夫だ。この人は元々から味方の人だったんだ」

「味方ですか?」

「ん。奴等が占領した惑星の住人でスカルダートの奴隷だったんだ」

「そうだったんですね……」

スカリエッティが言ったのは真実七割嘘三割であるが島達は真実と捉えたようである。

「後、地球に帰ったらこの人と結婚するから」

『ハアッ!』

「カッカッカ!! 面白いなあ……さて、積もる話は後にして帰ろうや、故郷へ!!」

『オオオオオオオ!!』

そして殴り込み艦隊は地球に向けて帰還するのである。その後ろの白色銀河はデザリアム星が消えた事で崩壊しつつあった。それは支配者が消えた星々達の歓喜なのか、それとも新たな戦乱の幕開けなのかは分からない。

「そうか、勝ったようじゃな」

地下都市の野戦病院で頭に包帯を巻いた正信は芹沢からの報告に満足そうに頷いた。そして隣のベッドに収容され横になっていたギルバート・アルフォン少尉に視線を向ける。

「これも少尉のおかげじゃな」

「……………私がしたのは未来にヒントを与えただけ……………私は裏切り者だ」

「そうやって西条君を突き放すのかね?」
「……………」

正信の言葉にアルフォン少尉は口ごもる。地球占領中、アルフォン少尉は負傷気絶していた西条未来を自身の屋敷に収容して保護していた。敵である西条に惹かれていたのだ。だからこそ西条を逃がして重核子爆弾の情報を与え自身を撃たせようとした。

それこそアルフォン少尉自身の償いであるとしたからだ。そして、爆弾の破壊に来た西条は撃った。但し、それは急所を外してだ。

「何で外したかですって? 私も貴方を愛しているからよ!! しつかりと責任を取ってもらおう!!」

涙を流す西条にアルフォンは何も言えなかった。なお、視界の端では北野が振られたショックで泣き、それを古野間が北野の肩にポンと置いて慰めていたりする。

「まあ捕虜でも地球に帰化すれば国籍、戸籍は与えるから心配せんでも良いわい」

「……しかし……」

「まあ他の者がどうするかは自身で決めてもらうがの」

「……部下の配慮に感謝する」

「なに、一度戦争が終わればそこには敵味方は無いからの」

フォッフフォッフフォツと笑う正信であった。

第五十九話

デザリアム星が消滅した事で帰る場所を失った暗黒星団帝国軍の地球占領軍はこの時に2万人前後の捕虜になって月に收容されていた。

防衛軍総司令本部に戻った正信が彼等にしたのは地球に帰化する
か否かであった。

「帰る場所が無いんじゃない。どうせなら帰化するのがオススメじゃない。まあ暫くは監視付きになるがの」

正信の言葉に彼等は迷った。帰化せずに奴等と再度戦おうという者もいたが宇宙船は地球軍に接收されているので非武装船の提供という事であったがどうせ白色銀河に戻る途中に何処ぞの勢力に攻撃されて撃沈されるのが目に見えていた。そこへ再度正信からの秘密裏の内約があった。

「もし帰化してくれるのなら……人造で多少はまだ機械を使用している肉体を与える事は出来るぞ？」

正信はスカリエツティが前にしていた仕事を知っていたのでそう揺さぶりを掛けてきたのだ。無論、この情報には捕虜の者達も心を揺さぶられた。だが、捕虜の中でも下級兵（一般兵や下士官クラス）に人気者であったアルフォン少尉が受け入れると表明を出すと下級兵達は瞬く間に帰化する事を選んだのである。

そうなる後はプライドが妙に高い上官クラスしか残っていないかった。将官クラスがいれば統率もあつただろうが、残念ながら将官・佐官クラスは全て戦死しており残っているのは尉官クラスだけだったのだ。結局は尉官クラスも白色銀河に帰るのを諦めて全員が帰化するのは半年後の事であった。

決め手となつたのは戦闘機人となつた元尉官が收容所に面会に来た時に語った暖かい食事の事だつたと言われている。なお、戦闘機人

とするのにはやはりスカリエッツィの協力が必須でありむしろスカリエッツィもサーダを戦闘機人とするのに研究所は必要だったので渡りに船だったのだ。

それはさておき、地球の復興は始まったばかりである。特に地表に突き刺さったハイペロン爆弾をどう破棄するかが焦点だった。

「太陽に破棄しては？」

「むしろ変に爆発して地球は元より太陽系に異常を発生させないか？」

「有り得る」

「それか無害化させてモニユメントにしては？」

「確かに。運ぶコストも考えればそれが良いかもしれん」

結局、ハイペロン爆弾は殴り込み艦隊が帰還後にスカリエッツィによって無害化されるのであった。そして殴り込み艦隊が地球に帰還したのは2ヶ月後の事であった。

「長官、研究所の方は？」

「ウム。御主から言われた材料、設営の仕方です。研究所は既に完成しておるよ。後は御主が研究を開始すれば研究所は稼働するかの」

防衛軍総司令部に出頭した将和とスカリエッツィは正信からそう説明されていた。

「しかし暗黒星団帝国人の戦闘機人化ですか……途方も無いですね」

「流石に全滅はのう……だからこそサーダ嬢の事も目を瞑る代わりに一仕事をしてほしいかの。無論その分の給料もこのくらいの倍額じゃな」

「成る程。妥当な金額ですね」

「交渉成立じゃな」

ニンマリと互いに笑う二人である。

「将和も今回はご苦労じゃったな」

「かもな」

「一先ずは二週間の休みをやるから家でゆっくりとするがよいわ」

「そうするわ」

そう話す二人であった。そしてスカリエッツィは研究所に行く

いう事なので司令部で別れて将和は実家に帰るのである。(なお、「フハハハハハ!! 待っててくれサーダちゃん!!」と奇声を発して研究所に行くのである)

「ただいまあ」

そして実家に帰り玄関の引戸をガラガラと開けると将和が帰ってきた事に気付いたのか奥からドタドタと走る音が近づき、アリシアが嬉しそうに将和に飛び付くのである。

「お帰りお兄ちゃん!!」

「ただいまアリシア。元気だったかい？」

「うん、地下都市って凄いとこだね!!」

「ハハハ、そうかそうか」

「お帰り将和」

「お帰りなさい将和さん」

「母さん、プレシアさん。ただいま」

夕食の仕込みをしていた友美とプレシアも奥から出てきて将和を労う。

「暫くはゆっくり出来るんでしょ？」

「一応二週間の休みは親父から貰ったな」

「そうかい、ならゆっくりしていきなさい」

友美はニツコリと笑い夕食の仕込みに戻るのである。

「プレシアさんも大丈夫でしたか？」

「え、ええ。取り敢えずは……かな」

「??」

言葉を濁すプレシアに将和は首を傾げるのであった。その後、久しぶりに実家での夕食をし風呂も入った将和は自室のベッドに寝っ転がっていた。

『『永遠に』が終わったから次は……『3』か……』

暗黒星団帝国の物語は終わった。次に起こるのは復興し銀河系内で勢力を拡大しつつあるデスラー総統のガルマン・ガミラス帝国とお仕置きだべえ事ベムラーゼ首相のボラー連邦が『3』でシャルバート教や銀河系大戦に『ヤマト』が巻き込まれる展開であった。

(プロトンミサイルは絶対に迎撃して太陽膨張を防がんとあ……
『3』が始まるまでにガルマン・ガミラス帝国も地球と交流してらるうから何らかの事はあると思うが……そーういやゼニー合衆国とかあつたらしいけど、あるんか?)

そう思いながら将和は机に置かれたグラスに注がれたラム酒をチビチビ飲む。

「まあ……なるようにしかならんか……」

そう思い、残りを飲んで寝ようとしたが扉をノックする音が聞こえた。

「はい?」

『プレシアです』

「プレシアさん? どうぞどうぞ」

『失礼します』

そう言つてプレシアが部屋に入ってくる。服装は薄ピンク色のパジャマであつた。どうやらアリシアを寝かしつけた後だったようだ。

「どうしましたプレシアさん?」

「……以前に将和さんが言つていた『覚悟を示せ』の事なの……」

「……取り敢えずは腰かけて下さいな」

そう言つてプレシアを座らせ、新しいグラスに氷とラム酒を注いでプレシアに渡す。将和自身もさつき空になつたグラスに氷とラム酒を注いで乾杯する。プレシアがチビチビ飲んでいるとポツリポツリと語りだした。

「……暗黒星団帝国が地球に降下してきた時、地下都市に避難していました。でも入口に入る手前で敵の兵士の攻撃で友美さんが負傷して三人とも命が危なかつたわ」

「……………」

「敵の兵士が近づく時、倒れていた武装機動隊の隊員が落としたコスモガンがあつた。その時に貴方の言葉を思い出したの。『プレシア・テスタロツサ、覚悟を示せ』をね」

「……………」

「覚悟つて全然分らないわ……でも、アリシアを守りたい。友美さ

んを守りたい。そして……将和さん、貴方と共に歩みたいという気持ちには覚悟になると思う。だから私はコスモガンを取って敵の兵士に向けて引き金を引いたの」

「……………そうか……覚悟はどんな事でもいい。決めた事が覚悟にだつてなる。だからそれがプレシア・テスタロッサの覚悟だと俺は思うよ」

「……………ありがとう将和さん……………」

そう言つてプレシアは一筋の涙を流す。あの実験で此方に飛んでプレシアは人生が変わつた。誰かに強要されるわけでもなく、娘と過ごせる日々が幸せだった。だからこそこの日々を守りたい。そう思ったプレシアであつた。

「将和さん……………」

「ちよ、プレシアさんッ」

感極まつて思わず将和の胸元に飛び付くプレシア、将和は驚きながらも両の腕をプレシアの背中に回す。将和の鼻付近にプレシアの髪がフワリと舞いシャンプーの匂いが鼻腔を擦る。

「…………………………」

涙を流すプレシアは将和に視線を合わすと眼を閉じて唇をソツと出す。将和は一瞬、どうするか葛藤するもええいままよとプレシアの唇を合わせた。

最初は合わせるだけのキスだったのがいつしか舌と舌を交ぜ合わせるデープキスに代わるのであつた。

「……………良いのか？」

「……………来て……………」

将和の問いにプレシアはそう答えて将和を抱きしめる。その答えに将和はプレシアをお姫様抱っこで抱えてベッドに降ろして部屋の電気を消すのであつた。

(フホホホホ、これはこれは面白くなってきたわねえ♪)

プレシアを焚き付けた友美は将和の部屋から聞こえるプレシアの喘ぎ声にニヤニヤしつつスツと去るのである。そして翌日、艶々しているプレシアと疲れた表情をする将和が朝食を共にするのであった。

「お兄ちゃん、寝不足？ 夜更かしでもしたの？」

「ちよつとな……」

第六十話

「フム……困ったもんじゃな……」

「ですな……」

「ムウ……」

正信の言葉に藤堂と芹沢も同じく唸るように呟く。場所は暗黒星団帝国戦役から一月後の防衛軍総司令部であり3人が悩んでいたのは防衛軍艦隊の再編成であった。

今回の暗黒星団帝国戦役において地球軍の艦隊が動いていたのは有人5個艦隊と3個無人艦隊であった。そのうちの有人2個艦隊相当はケンタウルス座方面に駐屯し、更に1個艦隊はシリウス方面へ長期航海訓練に出ていた。その中での暗黒星団帝国軍の襲撃であった。

モートン少将の艦隊がハイペロン爆弾の迎撃に出たがハイペロン爆弾からの殺人光線により全乗員が戦死してしまい、地球に残っていた艦艇は全て地球攻略軍のカザン艦隊に撃滅されていた。

イカロスで改装していた『三笠』やパエッタ少将の残存艦艇が合流してケンタウルス座で再編成して敵本星への殴り込み艦隊がしたくらいであった。

「乗員の再編成もですが……将官クラスが不足しています」

「ウム……山南に聯合艦隊司令長官に就任してもらうのはまずまずの無難じゃな」

山南中将は大将に昇進した上で聯合艦隊司令長官に就任した。参謀長や首席参謀等は第七艦隊の面々であるキャゼルヌ中将（昇進）やフォーク准将（昇進）がそのまま流れ込む形で引き続き山南を補佐している。ちなみに旗艦は『春藍』である。

「佐官クラスを昇進させて将官にさせねばならないでしょう」

「じゃが佐官クラスもガミラス戦役や白色彗星戦役で少なくなつとるからかう」

「そうなると無人艦隊を暫く増設するしかありません」

「それは困る。迎撃態勢が不備じゃな」

「なら前者しかありません」

「……………リストはあるかの？」

「此方に」

芹沢は予め分かっていたのか佐官・将官（准将クラス含む）のリストを正信に渡す。

「……………」

「如何なされますか？」

「……………少なくともこの5人は艦隊司令官への昇進じゃな」

正信はリストを見て氏名の下に赤線を引いていく。そして引き終わると芹沢と藤堂に見せる。

「ほう……………」

「成る程。妥当な線ですね」

芹沢と藤堂は赤線を引かれた氏名を見て納得した。

・三木大佐↓准将に昇進の上、艦隊司令官へ

・クブルスリー中將↓作戦本部長から艦隊司令官へ

・ポロディン少將↓金星基地司令官から艦隊司令官へ

・水谷大佐↓准将に昇進の上、艦隊司令官へ

・ミュキ・ハウメイ大佐↓准将に昇進の上、艦隊司令官へ

昇進者（将官）

・三好将和少將↓中將へ昇進

・カールセン少將↓中將へ昇進

・パエツタ少將↓中將へ昇進

・チウン准將↓少將へ昇進

・フィツシャー准將↓少將へ昇進

「生きた航路図も昇進ですか」

「フオッフオッフオッフ。どうせあやつも艦隊司令官は拒否るじやろ。」

序でに良いところに案内してやるまでじゃ」

(また三好中將に押し付けるんだらうなあ……)

笑う正信に藤堂はそう思う。

「カールセンには引き続きケンタウルス座で駐屯してもらうかの。開拓民の件もあるしな」

「開拓民……大統領はまだ諦めてないのですか？」

「まだ早いつて言っているのに民間企業にポロポロと溢しとるからの。そろそろあやつ暗殺されんかのう」

「長官!？」

「フオッフオッフオッフ。冗談じゃよ」

(冗談には聞こえないんですが……)

そう思う芹沢である。そして佐官が扉をノックして入室する。

「バレル大使がお着きになりました」

「おお、通してくれ」

程なくしてバレル大使と駐在武官のメルダ・ドイツ大尉が入室する。

「バレル大使、お元気そうで」

「三好元帥も」

二人は他愛ない話をしつつゆつくりと本題に入るのである。

「それで今日はどうなされたので？」

「我が祖国についてです」

「フム……?」

「我が祖国のガルマン・ガミラス星は元々ガルマン星でボラー連邦からの圧政を敷かれていたのをデスラー総統が解放した……此処までは以前に説明をしたと思います」

「伺っています」

「解放したのは良いのですが、それからはボラー連邦に目を付けられましたな。まあ我がガミラス艦隊は精鋭なので他の支配宙域もガルマン・ガミラスが取り戻しています」

「……地球からも義勇軍を派遣してもらいたいと?」

「いえ、違うのです。他の支配宙域の住民の一部が地球に移住したい

と……」

「移住……ですか？」

「はい。地球はこれまで幾度となく支配者を退けてきました。つい最近には暗黒星団帝国をも逆に滅ぼしています。それらを聞いた支配宇宙域の一部が移住したいと言うのです」

「成る程……」

「どうでしょうか？」

「私個人としては賛成です。しかし……」

「やはり多くの戦役が原因ですか……？」

「それもありません。ガミラスは元より内惑星戦争の時でも隕石落としを喰らいましたからな。ですが、地球に移住というよりも火星に移住……ではどうですか？」

「火星に……ですか？」

「はい。火星は内惑星戦争前からテラフォーミングをして海もあります。ただ内惑星戦争後、火星は住民が退去しており無人です。火星も復興の対象にしており地球の復興が済めば火星も予定しております。それに火星だといざこざもそれ程は少ないかと思えます」

「成る程……」

「どうですか？ それに火星には先の戦役で捕虜になって帰化した暗黒星団帝国人も復興の支援で火星に入植する予定です」

「何と……」

この頃になるとスカリエツティの研究所も稼働しており日に10人の戦闘機人化していた。戦闘機人化した元暗黒星団帝国人達も多少のサイボーグは仕方ないとしてもちゃんと自分の足で地面に付けたり食事を楽しんだりする事が出来たので文句はなかった。

「それに元火星人達の再入植も予定しています。私としては火星を各人類の共栄圏にしたいと思っています」

「フム……それならば私としても異論はありませんな」

「それは良かった。ちなみに移住を希望するのはどのくらいでしょう？」

「……今の段階では5万人と私は伺っています」

『5万!?!』

バレルの言葉に流石の正信も芹沢らと驚くしかなかった。

「……そうなると輸送船が大量に必要なですな」

「長官。それにボラー連邦とやらにも警戒するための護衛の艦隊も必要です」

「フム……」

「輸送船は此方のを購入致しませんか？ 幸いにもガミラス星からの移住は完了して輸送船が余っているのです」

「数はどれくらいありますかな？」

「恐らく10隻はあるかと……」

「分かりました、購入しましょう」

即断だった。

「しかし……大統領に報告はしなくてもよいのですか？」

「あやつは今、座っているだけの者ですからな。選挙が終われば下野して田舎に帰らせるのでな」

白色彗星戦役、今回の暗黒星団帝国戦役時に置いて大統領は何も出来なかった。やったのは白色彗星戦役時に土方元帥の艦隊が破れてそれをマスコミに早速発表して暴動を起こし、暗黒星団帝国戦役時には官僚の収監にサインをして無益な血を流せたりと色々やらかしているのだ。流石に大統領を選出させてもらった北米も「役に立たない史上最悪の大統領」と認識され何処にも立場はなかったりする。

そのため選挙が終われば問答無用で下野されて田舎に引きこもる事になっている。正信からすれば銃殺刑にされないだけでも優しいだろう。

ちなみに大統領側に立っていた者達も汚職が見つかったりして軒並み左遷されている。その中には太陽エネルギー省観測局長の黒田博士と地球連邦大学総長も含まれていたりする。

そんなこんなで大統領は今や自身の判子を押す係になっているに等しい。無論、文民統制等の観点から見れば非常に問題でありしかも事実上のトップが軍部の正信だったりするからややこしい。

だが、各国はそんな事は言わなかった。むしろ言えば今の大統領を

認めた自分達にしっぺ返しが返ってくるのだ。しかも初代大統領にそんな不祥事を載せたのではやってられない。なので正信がトップで舵を切っているのは黙認しているのだ。(正信が日本国総理をして政権を担っていたから信用もあつたりする)

そのためバレルもこれ以上は探らないようにした。もしかしたら自分にも火の粉が降りかかるかもしれないと……。

兎も角、方針は決まった。正信は報告書を纏めて大統領に提出し判子を貰って数日後に藤堂管区長官からの声明発表で火星への再入植が発表された。

当初は驚きもあつたが地球の復興後となつていたので市民達もそこまで驚く事なく政府から発表された火星の再入植開拓団の交付にふーんという感じではあるものの元火星人は書類を申し込んだりしている。

そんな時に将和は正信に呼ばれたのである。

「移住船団の護衛任務？」

「ウム。ガルマン・ガミラス帝国がボラー連邦から解放した各惑星の住民が地球連邦に移住したいとな。入植場所は火星としての」

「ああ、成る程……火星への再入植はそういう意味もあるのか」

「そういう事じゃのう。ところで、プレシアさんとはちゃんとやつとるかの？ 他の新見君達も面倒見るのじゃよ」

「言われんでも見てるつての」

プレシアとも関係を持った後、将和はプレシアに薫や玲達の事も伝えておりプレシアも承諾している。ちなみに後日に薫、玲、ウーノ、プレシアの4人が集まって何やら話し合いがあつたらしいが将和も詳しい事は分からなかった。

「それと護衛の序でにガルマン・ガミラス星に寄って観艦式にも参加してくれ」

「それは序でになのか？」

「序でにじゃのう……」

正信はそう言って机の引き出しから中将の階級章を取り出して将和に渡す。

「3日後に中将じゃ」

「まだないと思っていたんですが？」

「モートン少将らの戦死が響いて将官クラスが少ないんじゃないよ。ワシも勘弁してほしいわい」

「デスヨネー」

そう言つて溜め息を吐く将和である。

「一応お前関連と『ヤマト』関連者はお前の艦隊に押し込めるつもりじゃからな」

「ええ……」

「あやつらもお前と同様にクセが強いからのう」
(ひでえ……)

再度溜め息を吐く将和である。

「それと各艦隊も再編成するからの」

「了解です」

それから数日後、地球連邦防衛軍宇宙艦隊は再編成に移行したのであつた。

第六十一話

地球連邦防衛軍宇宙艦隊は再編成に移行した。現時点で艦隊を再編成出来たのは外周艦隊が3個艦隊に外惑星防衛艦隊が2個艦隊、内惑星防衛艦隊の1個艦隊、ケンタウルス座方面艦隊、司令部直卒独立運用艦隊がそれぞれ1個艦隊ずつであった。

宇宙艦隊総司令部兼太陽系外周艦隊司令部

衛星『タイタン』

旗艦『春藍』

宇宙艦隊司令長官 山南修宇宙軍大将

参謀長 アレックス・キャゼルヌ中将

首席参謀 アンドリユー・フォーク准将

第一艦隊（遠洋型）

旗艦『春藍』

第一戦隊

『扶桑』『山城』『肥前』『富士』

第十一巡洋戦隊

『浪速』『高千穂』『秋津洲』『須磨』

第二巡洋戦隊

『吉野』『高砂』『新高』『対馬』

第三巡洋戦隊

『松島』『巖島』『橋立』『和泉』

第一航空戦隊

『天城』『赤城』

第一宙雷戦隊

『阿武隈』

第一駆逐隊

『神風』『野風』『波風』『沼風』
第十一駆逐隊

『吹雪』『白雪』『初雪』『深雪』

第十一宙雷戦隊
『龍田』

第二二駆逐隊

『初春』『若葉』『初霜』『子曰』

第三二駆逐隊

『追風』『疾風』『朝風』『夕風』

第二艦隊（遠洋型）

司令長官 パエツタ中将

旗艦『パトロクロス』

第二戦隊

『アガムムノン』『テメレーア』『ヴァリアント』『ロイヤル・オーク』

第十二巡洋戦隊

『アイリス』『ブリリアント』『ハーマイオニー』『トパーズ』

第二二巡洋戦隊

『アキリーズ』『ホーキンス』『エクセター』『ドーセットシャー』

第三二巡洋戦隊

『グラスゴー』『バーミンガム』『グロスター』『ダイド』

第二航空戦隊

『イラストリアス』『ヴィクトリアス』

第二宙雷戦隊

『ベルファスト』

2個駆逐隊

第十二宙雷戦隊

『シェフィールド』

2個駆逐隊

第三艦隊（遠洋型）

司令長官 クブルスリー中将

旗艦『リシユリユー』

第三戦隊

『ブルターニユ』『ダンケルク』『クールベ』『プロヴァンス』

第十三巡洋戦隊

『ジャンヌ・ダルク』『ブリユイ』『ストラスブール』『プリモゲ』

第二三巡洋戦隊

『ケルシー』『アルジェリー』『フォツシユ』『コルベール』

第三三巡洋戦隊

『イスリー』『パスカル』『リノワ』『ガリレ』

第三航空戦隊

『ベアロン』『クレマンソー』

第三宙雷戦隊

『リミエ』

2個駆逐隊

第二三宙雷戦隊

『エクレール』

2個駆逐隊

外惑星防衛艦隊司令部

衛星『タイタン』

冥王星基地艦隊（近海型）

司令長官 三木幹夫准将

旗艦『榛名』

第十一戦隊

『薩摩』『安芸』『鞍馬』『伊吹』

第二十巡洋戦隊

『浅間』『常磐』『吾妻』『磐手』

第二八巡洋戦隊

『津軽』『音羽』『平戸』『筑紫』

第九宙雷戦隊

『球磨』

3個駆逐隊

土星基地艦隊（近海型）

停泊衛星『エンケラドウス』

司令長官 ミユキ・ホウメイ准将

旗艦『出羽』

第十二戦隊

『ザクセン』『ナツサウ』『定遠』『鎮遠』

第十七巡洋戦隊

『寧海』『平海』『濟遠』『超勇』

第十九巡洋戦隊

『広乙』『広丙』『ケルン』『ドレスデン』

第八航空戦隊

『日向』『フューリアス』

第十四宙雷戦隊

『ニユルンベルク』

3個駆逐隊

内惑星防衛艦隊司令部

『火星』

第六艦隊（近海型）

司令長官 リュウリック・ボロディン少将

旗艦『ガングート』

第六戦隊

『オスリャービャ』『ポルタワ』『オリョール』『ナヴァリン』

第十六巡洋戦隊

『グロモボーイ』『バヤーン』『リユーリク』『パルラーダ』

第二六巡洋戦隊

『キーロフ』『マクシム・ゴーリキー』『カリーニン』『ムルマンスク』

第六航空戦隊

『ヴァリヤーク』『ミンスク』

第六宙雷戦隊

『クラースヌイイ』

3個駆逐隊

ケンタウルス座方面艦隊（遠洋型）

司令長官 ラウルス・カールセン中将

旗艦『ディオメデス』

第十五戦隊

『ヘルゴラント』『テキサス』『リットリオ』『ローマ』

第十五巡洋戦隊

『カンバーランド』『パース』『ブリュッヒャー』『エメラルド』

第二五巡洋戦隊

『リアンダー』『アイリス』『シカゴ』『サンフランシスコ』

第三五戦隊

『チェスター』『クインシー』『ボストン』『ボルチモア』

第十五宙雷戦隊

『オマハ』

2個駆逐隊

第二五宙雷戦隊

『ブルックリン』

2個駆逐隊

第一護衛隊

『フラワー』以下12隻

第一パトロール隊

『天塩』『撫子』以下10隻

第一無人艦隊

指揮艦

『チャールストン』『オリンピア』『デンバー』
自動大型戦艦

『クレイモア』以下28隻

自動駆逐艦

『レイピア』以下60隻

第一補給隊

『サクラメント』『デトロイト』『エトナ』

第十三艦隊（遠洋型）

司令長官 三好将和中将

副司令長官 エドウィン・フィッツシャー少将

参謀長 チュン・ウー・チェン少将

旗艦『三笠』

第十三戦隊

『河内』『摂津』『シャルンホルスト』『グナイゼナウ』

第二三戦隊

『ネルソン』『ロドニー』『アイオワ』『陸奥』

第十四巡洋戦隊

『高雄』『愛宕』『妙高』『羽黒』

第二四巡洋戦隊

『摩耶』『鳥海』『那智』『足柄』

第三四巡洋戦隊

『八雲』『鈴谷』『プリンツ・オイゲン』

第十三航空戦隊

『翔鶴』『瑞鶴』

第二三航空戦隊

『サラトガ』『イントレピッド』

第十三宙雷戦隊

『矢矧』

第十駆逐隊

『夕雲』『卷雲』『風雲』『秋雲』

第十三駆逐隊

『長波』『巻波』『高波』『大波』

第二十宙雷戦隊

『酒匂』

第十六駆逐隊

『初風』『天津風』『時津風』『黒潮』

第十七駆逐隊

『谷風』『浦風』『浜風』『磯風』

第二補給隊

『速吸』『飛鳥』

第一揚陸隊

『秋津丸』『神州丸』

第13空間騎兵隊

「ちよ、待てや親父。何で俺の艦隊に空間騎兵隊が？」

「そりや御主の艦隊が独立艦隊じゃからじゃよ」

「独立艦隊だから？」

各艦隊司令長官、参謀長達が総司令部の会議室に集まり再編成した会議をしていた中で将和の質問に正信はそう返す。ちなみにカールセンはケンタウルス座にいるのでモニターからの参加である。

「そうじゃ。基本的に防衛軍艦隊は守勢を主としておるが御主の艦隊は攻勢を主としているからじゃ」

「……………もしかして前回の殴り込み艦隊……………？」

「そうじゃ。だからこそ改『三笠』級の戦隊4隻をも急遽組み込んだのじゃよ」

「序でにガルマン・ガミラス帝国での観艦式に参加するからちよっと多めにした」

「ちよ、芹沢総参謀長……」

お茶目にウインクをする芹沢総参謀長である。そこへ手を挙げたのはハウメイ准将であった。

「三好の旦那、これだけの艦隊を用意するのはやはりガルマン・ガミラス対策ですかい？」

「それもあるがの……本命はボラー連邦じゃ」

元教え子でもあるハウメイ准将の言葉に正信はお茶を啜りながら言う。

「ボラー連邦の情報は未だ少ない……が、ガトランティスみたいに占領地域を拡大し続けておる。太陽系にも手を延ばすかもしれんからのう」

「成る程……それなら納得です」

「しかし……移住民を受け入れ最中に仕掛けてくるやもしれませんな」

そこへ口を開いたのはボロディン少将である。ボロディン少将の言葉に正信も頷く。

「ウム。そこでじゃ、輸送宙域を分けて移民船団を護衛しようと思う」

正信はそう言って秘書の西条大尉に目配せると西条はタブレットを操作して会議室正面のモニターに宙域を映し出した。

「ガルマン・ガミラス星へ第十一番惑星までを第十三艦隊が、第十一番惑星へ冥王星までを第一艦隊、冥王星へ土星までを冥王星基地艦隊、土星へ火星までを土星基地艦隊、火星へ地球までを第六艦隊に担当してもらいたい」

「成る程……交互に行うと……」

「そういう事じゃの。ま、これで頼むわい」

斯くして地球連邦の方針は決まった。地球連邦への移民船団が出港しそれを護衛する将和の第十三艦隊も出撃するのであった。

第六十二話

地球を出港した移民船団を将和の第十三艦隊が護衛する事になった。船団は火星沖で太陽系外縁部（オールトの雲手前）までのワープを行う事にした。

「ワープ終了」

「各艦の異常の有無報告をしろ」

「各艦、異常無しです」

「ん。相原、30分後に会議室でブリーフィングを行うから各担当者は来てくれと各艦に伝えてくれ」

「分かりました」

それから30分後に各担当者が会議室に勢揃いした。

「揃ったようだ。なら俺から自己紹介かな、艦隊司令長官兼『三笠』艦長の三好将和。好きな定食は炒飯定食な」

「ハハハ、それ良いですな。私は副司令長官のエドウィン・フィッツシャー少将です。趣味はカメラでの撮影ですかな」

将和が挨拶をすると右隣にいた副司令長官のエドウィン・フィッツシャー少将がニコニコと挨拶をする。そして左隣のチェンが立ち上がる。

「参謀長のチュン・ウー・チェン少将です。まあ一般的にパンが好きですかな」

「『三笠』副長の大村です。最近彼女が出来ました」

『えッ!?!』

そんな大村の急な告白はさておき、島や南部達も挨拶をしていく中で女性が立ち上がる。

「副技術長に就任したプレシア・テスタロッサ特務大尉です。経緯は大体スカリエッティ技術長と同じです」

まさかのプレシアも『三笠』へ配置換えで副技術長となっていた。

これも正信の差し金である。そして最後に一人の空間騎兵隊の隊長が立ち上がる。

「第13空間騎兵隊隊長のワルター・シェーンコップ准将だ。『三笠』で世話になる。好きなのは女と過ぐす事だ。宜しくッ」

そう言つてシェーンコップ准将は出席しているウーノやクアット口達にウインクをするがウーノ達は顔を引きつるのであった。

「おや、思つたり受けなかつたかな？」

「准将、一応クアット口らは彼氏いるからな。やるならいない人にしておけ」

「おや、それは失礼致しました」

将和の言葉にシェーンコップは笑みを浮かべつつ盛大に頭を下げるのである。なお、各担当者等は以下の通りであつた。

第十三艦隊司令長官兼戦艦『三笠』艦長 三好将和中将

同副司令長官 エドウィン・フィッツシャー少将

同参謀長 チュン・ウー・チエン少将

戦艦『三笠』副長 大村耕作中佐

同技術長 ジェイル・スカリエツティ少佐

同工作長 大山俊朗大尉

同機関長 山崎奨大尉

同情報長 新見薫大尉

同船務長 ウーノ・スカリエツティ大尉

同戦術長 トーレ・スカリエツティ大尉

同航海長 島大介少佐

同砲雷長 南部康雄大尉

同気象長 太田健二郎大尉

同通信長 相原義一大尉

同航空隊隊長 山本玲大尉

同衛生長 リニス・テスタロッサ大尉

同保安部長 ドウーエ・スカリエツティ大尉

第13空間騎兵隊隊長 ワルター・シェーンコップ准将（『三笠』乗組）

同ゲスト・アドミラル リンデイ・ハラオウン

「そして最後にガルマン・ガミラス星までの道案内をしてくれる同行者を紹介する」

「……ガルマン・ガミラス帝国地球派遣武官のメルダ・ディッツ大尉です。改めて宜しく願います」

将和からの紹介にメルダは全員にペコリと頭を下げるのである。

「さて、移民船団の準備出来次第ワープに移行する。それでは解散ッ」
将和の言葉に皆がバラバラと出ていくのである。将和は時計を見ると針は1300頃を指していた。

「……メシでも食いにいくかな」

その足で将和は食堂に行く。食堂には数人の者が食べていたが将和は食券を購入し窓口で炒飯定食を受け取って端っこのテーブルに座る。胡椒とラー油を大量に振り、炒飯にもラー油を振ってから食べるのである。

「隣……良いかしら？」

そう言ってきたのは正信の計らいによってゲスト・アドミラルの待遇で『三笠』に乗艦する事が出来たリンデイ・ハラオウンである。

「どうぞハラオウン提督」

将和の言葉を聞いてからリンデイが将和の隣にマゼランパフエを載せたお盆を置く。無論、リンデイ茶は健在だ。

「今の生活には慣れてきましたかな？」

「ええ、一先ずは……」

暗黒星団帝国戦役後、リンデイは正信の会談をし取り敢えずは仮の住居として将和の実家が選ばれ厄介になっている。当初、家に赴いた時に出迎えたプレシアとアリシアには流石のリンデイも驚愕するしかなかったが幸せに暮らしている二人を見て何も言わなかった。

これがプレシアがアルハザードにまで行こうとした結末ならプレシアも何も言えなかったのだ。そしてこれを自身ークロノとフェイトがアリシアと同じような境遇になったら親としてはそれを進もうとするかもしれないと思っていたりする。

(これが人の性……というやつなのかしらね……)

そう思うリンディであり、仮に戻れたとしてもフェイトには二人は幸せだと告げる予定である。それはさておき、正信もリンディの待遇は幾分か悩んだがゲスト・アドミラルとして将和に押し付けてしまえば安上がりで認識したのである。(憐れ)

なので暇と言えば暇なのであるが基本的に第一艦橋に常駐する事になっていく。なお、将和としてはリンディを常駐させてデスクラ等の他宇宙人と会わせる事でこの世界は危険と判断させて管理局の影響下に置かせないように狙っていたりする。

「……というよりハラオウン提督、朝もそれを食べていませんでしたか?」

「オホホホ……美味しいのでつい……」

「……トレーニングをしてから食する事をお勧めしますよ」

「………はい……」

そう言いながらもパフェを食べるリンディである。そこへ食堂の入口が騒がしくなり入ってきたのはウーノ、トーレ、玲の3人だった。3人とも表情はイラついた様子であり、マゼランパフェを注文しテーブルを探していると将和とリンディを見つけたので二人のテーブルに座るのである。

「せめて隣宜しいですかとか一言言えよ……」

「ひよはりいひよろしい?」(隣宜しい?)

「パフェ食いながら言うなよトーレ」

お盆に載せたマゼランパフェの一つ目(三つある)をパクパクと食べるトーレだが表情はまだイラついている。

「何があつたんだ?」

「……シエーンコップ准将です」

「あつ(察し)」

玲の言葉に将和は何があつたか察した。どうやら3人は解散後にシエーンコップ准将に言い寄られていたようである。

「しつこく言い寄られたのでトーレが思わず准将を巴投げでブン投げたまでは良かったのですが……」

「むしろ「男勝りな女、それも良い」とか抜かして更に言い寄ってきた

「からな。男の勲章を蹴つてきてやったッ」

「本気出すなよ」

「出したかったがなッ」

「そうなると航空隊にも少々問題が……」

「問題？」

「今度異動してきたポプラン大尉、女癖が酷いですね。後、坂本とよくつるんです」

（ポプランまでいんのかよ……てかそれは中の人だからか……？）

玲の言葉に溜め息を吐く。思っていた以上に艦隊ー『三笠』は問題児が多いらしい。

「まあ程々に対処しとけよ」

将和もそう言うしかなかったのであった。なお、戻ってきたリニスに炒飯定食を食べていたのがバレたので晩飯は鯖味噌定食になっていた将和である。それはさておき、移民船団もワープ準備が完了となったので2100に再度ワープを行いガルマン・ガミラス星まで約1万2000光年となっていた。

「リーダーに反応あり。前方約180宇宙キロ」

「ドイツ大尉、予定だどこいらで艦隊と合流だったよな？」

「ああ、その通りだ」

「ん。ウーノ、メインパネルに切り替えてくれ」

「分かりました」

メインパネルに切り替わると映像にはそこには30数隻のガルマン・ガミラス艦隊が布陣しており程なくして相手から通信が入った。『此方、ガルマン・ガミラス帝国軍第24機甲艦隊司令官のフォムト・バーガー大佐です。地球艦隊及び移民船団の護衛のために参りました』

「まさかのバーガーやん）此方、地球連邦防衛軍第十三艦隊司令長官の三好中将です。護衛、真に感謝します」

メインパネルに現れたフォムト・バーガーに驚きを何とか隠しつつも冷静に対処するのであった。そしてバーガー艦隊と合流しつつ第十三艦隊と移民船団は2日後にガルマン・ガミラス星へ到着するので

あつた。

将和はメルダを伴いその足でデスラー・パレスに向かった。デスラーから招待されたのだ。

応接室らしきところで待っているとデスラーがタランを連れて入室してきた。

「デスラーッ」

「三好、久しぶりだな」

そう言つて将和は両手でデスラーの手を会えた喜びをデスラーに伝える。

「バレル大使やドイツ大尉から話は聞いていたが……建国おめでとう」

「ありがとう三好。君から労いの言葉を貰えただけでも私は嬉しいよ」

将和の言葉にデスラーはニヤリと笑みを浮かべる。デスラーは座るように促すと将和も頷いてソファーに座る。なお、メルダはデスラーが入ってきてガチガチに緊張していたがタランが座るよう促したのでメルダも漸く座つた。

「ハハハ、ドイツ嬢も緊張する事はあるのだな」

「お、お戯れを……」

それを見ていたデスラーは笑みを浮かべつつグラスに注がれた酒を将和と飲む。

「あの別れた後も三好と地球は大変だったと聞いている」

「暗黒星団帝国はなあ……ドイツ大尉も陸戦に奮闘していたらしいしな」

「それは頼もしい。何れは勲章を授けよう」

「は、は、ありがとうございます……」

「三好、今日は夕食をご馳走したいのだが？」

「無論、出席させてもらうよ」

「感謝するよ」

その日、将和はチュンやフィッシャーらをも含めて夕食会に参加するのである。

「やはり目下の相手はボラー連邦だろう」

「やっぱり？」

「ああ。この画面を見てくれ」

幾分程、頬を赤らめ酔いが回っているデスラーは画面を開いて将和に銀河系を見せる。緑の地域はガルマン・ガミラスの占領地域、赤の地域はボラー連邦の占領地域、黄の地域はゼニー合衆国の占領地域、青の地域は地球の占領地域である。

「我々はゼニー合衆国への攻勢を強めているがゼニー合衆国も抵抗が激しい。ボラー連邦ともやり合ってはいるが一進一退の攻防だ」

「地球の占領地域の上の地域もボラー連邦か。だから長距離ワープをしろという事か」

「そうだ。地球とガルマン・ガミラス星の中間星がバース星だ。このバース星はボラー連邦の支配下にあるから無闇な接触を避けるべきと判断したのだ」

「成る程な……」

「出来れば地球にも軍事支援は頼みたい……が、先の戦役もあるしそちらの国民感情もあるだろう」

「まあな……移民を引き受けるだけでも良しとしてほしい」

「かもしれん……だが三好、シャルバート教には気を付けてほしい」

「シャルバート教か……」

「知っているのか？」

「バレル大使からの資料にあつてな……まあ昔の地球にも似たような宗教は数多くあるからな」

「ほう、地球にもかね？」

「ああ。場合によっては生き埋めにされたり火炙りにされたりしてたな」

「ほう……」

（もしかして興味持った……？）

そう違うと思う将和であった。なお、その後は泥酔したデスラーから謎の人生相談（血筋残したいけど、どうしたらいい？）である。結婚しろよと回答してた）を受けたりタランと飲み勝負をしたりして気付

いた時は朝だった。朝であったが将和が目覚めた場所は全く知らないところであった。

「えと……此処は……」

「おや、目が覚めたかね？」

「ドイツツ長官!？」

部屋に入ってきたのはガルマン・ガミラス軍航空艦隊司令長官のガル・ドイツツ大将であった。

「何だ、昨日の事は覚えていないのかね？」

「タラン中将と飲み勝負をしていたまでは覚えているのですが……」

「その後、何人かと飲んだ後に泥酔したからワシの屋敷まで運んだのだ。『三笠』に戻るより屋敷のが近いからな。向こうの参謀長達には言つてあるから心配せずとも良い」

「すみません……ご迷惑をおかけします」

「なに、あれ程深酒をした総統を見れたのだから満足だよ」

ドイツツ長官はそう言つてニヤリと笑う。

「食事を用意してある。共にせぬか？」

「頂きます。着替えてからいきましよう」

「分かった。案内はガミロイドに任せよう」

将和はそう言つて洗面所で顔を洗い本格的に目を覚まさせてから礼服に着替えてドイツツ長官が待つ食堂へガミロイドに案内させてもらい入室するとそこにはドイツツの他に娘のメルダもいた。

しかもメルダには珍しくドレス風の服を着ている。

「み、三好長官!？ な、何で此処に!？」

「いや……昨日泥酔して『三笠』に帰れんかったから泊めてもらつたらし」

「父上!! 私は聞いていません!!」

「屋敷に戻つた時にはお前は寝ていたからな」

「むッ……」

娘の文句にドイツツ大将はシレッとそう返す。メルダもそう言われては文句も返せなかった。

「取り敢えずは食事にしよう」

そう言つて三人は朝食を取る。

(やべ、緊張して味が分かんねえや……)

「時に三好中将、娘は地球では大暴れしていると聞いたが？」

「父上!？」

「ああ、暗黒星団帝国戦役時ですか？ どうやら小銃を持って大暴れしてたらしいですよ」

「三好長官も言わないで下さい!!」

アツサリと言う将和にメルダは顔を真っ赤にして反論する。

「そこは母親の血を受け継いだものだな」

「……母上もそのような事が……？」

「サファイア戦線で派手にやらかしていたがな。それで三好中将」

「何ですか？」

「娘は地球で暴れたらしいが……娘は好みの対象に入るかな？」

(やべ……)

ドイツ大将の表情は明らかに父親の顔をしていた。多分擬音があればドイツ大将の後方からは「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」という擬音があつただろう。

「どうやら……バレルと貴官の父君が何やら……貴官と娘を娶らせようと計画しているとか？」

「んなツ!？」

(……あのクソ親父がアアアアアアアアアアアアアアアア!!)

顔を真っ赤にするメルダを尻目に正信に嵌められた事を知った将和であった。

第六十三話

前回のあらすじ

四面楚歌の将和である。(何)

「三好中将……君は娘をどう思うかね……？」

「……………」

ドイツ大将の言葉に将和は黙ってしまう。進むも地獄、戻るも地獄とは正にこの事であろう。また、メルダに視線を向けると顔を俯かせていた。

「……多少無茶なところはありますが……良い人だと思えますね。まだそれ程しか会話をしていないので一歩踏み込んだ会話はしていませんがね」

「……………成る程、三好中将は素直で宜しい」

「素直でならもう一つ、私は関係を持っていてる者が複数いますが？」

将和は諦めさせようと薫や玲達を例に挙げて言ったがドイツ大将はニヤリと笑みを浮かべる。

「それを言うならテロンで例えると『英雄、色を好む』ではないかね？」

まあ総統にもある程度はそうしてほしいがね」

将和の回答がドイツ大将には満足すべき回答だったのか笑みを浮かべつつ食後のデザートに手を付けるのである。

「三好中将……次の食事までに更に満足する回答を期待する」

「……………はっ……………」

「……………」

ドイツ大将の言葉に将和はそうとしか言えず、メルダは顔を赤らめつつ視線を逸らすのであった。その足で『三笠』に戻ると妙にニヤニヤするチェン参謀長がいたのである。

「……知っていたな参謀長？」

「三好元帥からの依頼でしたので。どうするかは本人ら次第と言われ
ました」

「全く親父め……」

チエン参謀長の言葉に頭を抱える将和である。

「それで観艦式の参加だったな」

「はい。何隻出しますか？」

「……『三笠』級全部出すか」

「『ネルソン』らもですか？」

「ああ。存在感を出すには良いだろ？」

『ネルソン』らは『三笠』級ではあるものの準同型艦に部類される。
というのも各国で主砲の増設等微妙な改修をされていたりするから
であり素直に『三笠』級を建造しているのは日本だけだったりする。

それはさておき、将和の艦隊——『三笠』級5隻も2日後に控えた
観艦式に参加するのである。

観艦式当日、将和は地球代表として式典への出席なので式典会場に
いた。そこへデスラーがタランと赤の礼服に身を包んだメルダを
伴ってやってきた。

「三好」

「デスラー。今日の式典、楽しみにしているよ」

「ありがとう三好」

そう言ってデスラーは指揮官の定位置に付いて始まりまで待った。
ちなみにメルダは将和の警護という形で隣にいる。

「……三好司令、父上にはどうしてあのような……？」

「ん……素直で言うと共に後ろめたさもあつたからな」

「後ろめたさ……？」

「ガルマン・ガミラス星がどのような婚姻政策をしているかは知らな
いが、俺は薰や玲達と関係を持っている。白黒ハッキリさせてディッ
ツ大将には諦めさせてもらおうと思っていたが……ああなるとはな
……」

「……父上は武人であるから真っ直ぐな者には印象を良くするだろ

う」

「そうか……それと君は良かったのか？ ああいう事になっているが？ 俺は君の気持ちを知りたい」

「私とて思う事はある……が、地球とガルマン・ガミラスの仲を保つためなら……貴方と夫婦になっても構わない。それに……玲を負かせるパイロットの腕を私が負かせたい気持ちもあるがな」

「……………クハハハハハツ。成る程な……………」

顔を赤らめつつもそう告げるメルダに将和は苦笑するのであった。そして観艦式は開催される。

(ほう……………一連三段空母をも就役させたか……………流石はドイツ大将か……………)

原作と同じく赤を基調とするカラーリングを艦体に施した『ノイ・ガイペロン』級二連三段空母が2隻、式典の上空を通過していく。その後方をデスラー砲艦こと『ノイ・デウスーラ』級砲艦が続いていく。(着実に『3』の物語に移行している……………か……………)

過ぎ去っていく艦艇群を見つつ将和はそう思う。

(ま、取り敢えずは観艦式を楽しむとしますか……………)

そう思いながら続々と航行してくる艦艇群を見学するのである。

この観艦式はガルマン・ガミラス軍が占領する地域に放送されたが、この観艦式の映像はボラー連邦も入手していた。

「何？ ガルマン・ガミラス軍が観艦式を行ったと？」

「はっ。映像を入手しております」

「フム……………見せろ」

「はっ」

ボラー連邦宇宙軍総参謀長のゲオルギー・ゴルサコフ元帥宇宙大將はそう言って部下に視線に向け部下が映像を流す。

「ほう……………デスラーめ、士気向上のためか……………」

「恐らくは……………」

「……………ん？ この艦艇は何だ？ 他のガルマン・ガミラス艦艇より色が違うが？ もしや新型艦艇かね？」

「いえ、違います。情報では地球連邦と称する国です」

「地球連邦？ 何処かで聞いた名だな」

「はっ、オリオン腕方向にある文明です。過去にはガミラス、ガトランティス、暗黒星団帝国をも撃ち破っています」

「何？ ガミラスは元よりガトランティスと暗黒星団帝国をもだど？」

「はい。ガルマン・ガミラスとは技術同盟を締結しているようでありますが……如何なさいますかベムラーゼ首相？」

「フム……」

ゴルサコフ元帥宇宙大将の言葉にボラー連邦最高評議会議長兼第五次ベムラーゼ内閣総理大臣のミハイロ・ベムラーゼは日課であるアルコール度数が45度もあるカオツウトを飲みながら思案する。

（厄介だったガトランティスと暗黒星団帝国を撃ち破った文明か……接触する必要があるやもしれんな……）

ベムラーゼはグラスに残っていたカオツウトを全て飲み干すとゴルサコフに視線を向ける。

「暫くは動向を監視しよう。技術同盟という事は軍事同盟ではあるまい。我々もガルマン・ガミラス帝国の他にもゼニー合衆国、中堅国家のアマールやエトス等の戦争も多く抱えている」

「ハッ。首相閣下の御慧眼には恐れ入ります」

「そう褒めずとも良い。しかし地球連邦をも考えると一番地球連邦に近い有人惑星は何処かね？」

「我がボラー連邦から3万5000光年に位置するバース星になります。彼処からだど地球連邦の太陽系は1500光年になります故……」

「バジウド星系第4惑星だな……彼処のバース星軍人の軍人精神には我がボラー連邦よりも上だったな」

「ハッ。しかし我がボラー連邦宇宙軍も連邦に対する忠誠心はバース星軍人には負けてはおりません」

「フハハハ、そう嘆くであるまい。そうなればバース星は重要になるな」

「守備艦隊を増強させますか？」

「そうするように手配しろ。減らす戦線についてはアモール戦線で良いだろう」

「ハッ、早速手配致します」

ゴルサコフはそう言いつて退出する。ベムラーゼは窓に視線を向ける。首都惑星の『ラスコー』は極寒の惑星であり各都市はドーム状態の建物と各張ったビルから成り立っており建物には氷が張り付いている程である。

ベムラーゼがいる建物はベムラーゼパレスという宮殿でありこの宮殿は最高評議会議長の公邸として代々受け継がれていた。

「地球連邦か……（味方であれば良いが……ガルマン・ガミラスと共にするならば……）」

ベムラーゼはクククと笑うのであった。そして観艦式を終えた将和の第十三艦隊は移民団を満杯に積めた移民船団と上空で合流すべく発進準備を整えていた。

「三好長官、全艦発進準備完了です」

「ん……全艦発進ッ。帰ろうや地球へ」

第十三艦隊は『三笠』を先頭に次々とガルマン・ガミラス星から出港していく。それを見送りに来たのはデスラー、タラン、そしてドイツ大将であった。

「娘が心配かねドイツ大将？」

「いえ……娘も大人ですので娘に任せようと思います」

デスラーの言葉にドイツ大将はそう答えるのであった。

「ところで総統、『三笠』でマゼランパフエとやらを食したと聞いておりますが？」

「……………美味だったと言っておこう」

（おかわりを要求したとは言わないでおこう）

そう思うタランであった。そして地球では正信らが安堵の息を吐いていた。

「やれやれ。将和も思ってたよりもドイツ大将に気に入られたようじゃが、何かあったのかの？」

「単なる自棄でしょう（さもありません……）」

首を傾げる正信に芹沢はシレッとそう答える。

「しかしまあ……思っていたよりも移民が多いのう」

「我々の予想よりも0が一桁多いですからな」

藤堂管区長官らの予想では一桁万くらいとしていたが、バレル大使から提出された再度の移民団報告書には11万と記載されていたのだ。

「暗黒星団人が約2万人、地球からの移民が1万人、地球在住で元火星人の移民が5万人、そして今回ので11万かの」

「11万と言いつつも半数近くを占めているのがザルツ人ですから」

「それで……シャルバート教信者はどれくらいじゃ？」

「凡そ三割です」

「まあかつての地球もキリスト教の迫害を筆頭に色々あったから気にするまではいかんとと思うが……やはり警戒は必要じゃな」

「何も無い事を願うばかりですな」

「本当にのう」

そう話す正信らであった。

第六十四話

火星への再移民が始まってから半年後、火星は復興の道を歩んでいた。かつて火星最大の都市を誇ったアルカディア・シティは再建された宇宙港であるアルカディアポートも再建された。

現在まではアルカディア・シティのみの復興であるが地球連邦が作成した『火星復興五カ年計画』では最初の一年でアルカディア・シティの再建とし、二年目～四年目にかけてアルカディア・シティ周辺に点在していたシティ群を再建し五年目で南部造船が主とした造船工場の再建が計画されていた。

移民した住民同士のいざこざ（文化の違い）も多少はあるが基本的に治安は良かったりする。これは治安維持の為に空間騎兵隊が派遣されているからである。

この派遣の為に将和の第十三艦隊に配備された第13空間騎兵隊が配置替えて火星駐屯となったのである。

「おーい明人、空いてるかー?」

「あ、瓜畑さん。カウンターなら空いてますよ」

そんなアルカディア・シティのところにある食堂『ユートピア』に一人の宇宙軍尉官が昼メシを利用するためにやってきた。

「調子はどうだい明人?」

「まずまずってところですね。百合香は接客業に向いてなさそうですし……」

「それは地球にいた時からだろ……」

明人の言葉に瓜畑は笑みをひきつらせる。そして食堂は段々と人が多くなりだしてきた。

「5番テーブルの注文でーすッ」

「はーい」

人の出入りが多くなったので新しく雇ったザルツ人の主婦はよく

働いていた。どうやら夫がガルマン・ガミラス軍にいて火星の派遣基地で働いているらしいから此処まで来たようである。瓜畑はそれを横目に本日の日替わりランチを食べている。

「それで……最近はどうなんだ店は？」

「まあ……見ての通りの繁盛ですね」

周りは地球人、火星人、ザルツ人、暗黒星団帝国人、他の星々の人々が食堂のカウンター、テーブルに座って昼食を食べ、注文を待っていたりする。

「だろうな。お前の食堂、評判になっっているし他の人々の交流の場になっっているからな」

「アハハハ、何もしてないんですけどねえ」

「ただいま」

「ただいま」

そこへ食堂の扉をガラガラと開けて入ってきた二人の少女がいた。

一人は中学生くらい、もう一人は小学生くらいである。

「おっ、ルリルリとラピスちゃんも今日は早いな」

「今日は午前中だけですのぞ」

「……昼からは明人と一緒……」

表情があまり動かない二人だが、地球にいる時からの知り合いである瓜畑には二人が嬉しそうな表情をしているのを感じた。

二人は天川夫妻の子どもでもあるものの養子である。ルリルリこと天川瑠璃はガトランティス戦役時に、ラピスこと天川ラピスは暗黒星団帝国戦役時に孤児となったのを明人が引き取って養子にしていたのだ。当初は二人とも明人や百合香に心を開かなかつたが明人が作ったラーメンが美味しかったのでそれからは心を開いたのだ。

二人は客からも人気であり特に暗黒星団帝国人からは「まるで電子の海にいる妖精のようだ」と『電子の妖精』という渾名があつたりする。また、瑠璃は意外と毒舌であり「バカばっか」とよく呟いたりする。

「あー!? 瓜畑さんだ!!」

「よう艦長、元気そうぞ何よりだ」

「ブー、違いますー。今は明人のお嫁さんなんですよー」

店舗兼住居の奥から出てきたのは明人の嫁である天川百合香でありその腹はポッコリと膨らんでいた。よーするに妊娠していたのだ。

「百合香あ……奥で休んどけって言っただろ」

「でもそうすると食っちゃ寝を繰り返して太りそうだからちよつとは働かないとね」

百合香はそう言って食器を洗い出す。地球にいる時から接客業は苦手ではあるが食器洗いだけは上達しているのである。

「まあそんだけ元気なら大丈夫だろ。俺のカミさんもそんな感じだったからな」

「なら良いんですけど……」

そう言つて笑い合う明人と瓜畑であった。今日も食堂『ユートピア』は繁盛するのであった。

「え、また艦艇を削減するんで？」

「ああ。移民船団の護衛として複数の護衛艦隊を立ち上げるつもりだな」

「けど、前の通りで行くって……」

「当初はそのつもりなんじゃったが……ボラー連邦らしき艦艇が移民船団を追尾してきたらしいんじゃない」

防衛軍総司令部に呼ばれた将和は正信と面会をして自身の艦隊に属する艦艇がまたしても削減される事に頭を抱える事になっていた。

「それで……削減して以降の艦隊編成はどうなるんで？」

「これがその艦隊編成だ」

芹沢はそう言つて将和にタブレットを渡す。

第十三艦隊

司令長官 三好将和中将

副司令長官 エドウィン・フィッシャー少将

参謀長 チユン・ウー・チエン少将

旗艦『三笠』

第十三戦隊

『河内』『摂津』

第二三戦隊

『ネルソン』『ロドニー』『アイオワ』『陸奥』

第十四巡洋戦隊

『高雄』『愛宕』『妙高』『羽黒』

第二四巡洋戦隊

『摩耶』『鳥海』『那智』『足柄』

第三四巡洋戦隊

『八雲』『鈴谷』『プリンツ・オイゲン』

第十三航空戦隊

『サラトガ』

(コスモタイガー36機 雷撃機36機 シーガル2機)

『イントレピッド』

(コスモタイガー54機 雷撃機36機 シーガル2機)

第十三防空戦隊

『アトランタ』『五十鈴』

第十三宙雷戦隊

『矢矧』

第十駆逐隊

『夕雲』『卷雲』『風雲』『秋雲』

第十三駆逐隊

『長波』『巻波』『高波』『大波』

第十七駆逐隊

『谷風』『浦風』『浜風』『磯風』

第二補給隊

『速吸』

第一揚陸隊

『神州丸』

第20空間騎兵隊

(2個中隊基幹)

「戦艦と空母が2隻ずつ、1個宙雷戦隊規模が引き抜かれた感じですか」

「その代わり空母護衛用の防空戦隊を入れておいたわい。それに引き抜いた『翔鶴』『瑞鶴』は怪我から復帰した山口の航空艦隊に任せるつもりじゃ」

「山口さん、復帰したんですか。それなら納得しますよ」

山口中将の航空艦隊は暗黒星団帝国戦役時、地球に停泊しており奇襲攻撃を受けほぼ壊滅していた。司令長官の山口も負傷して療養していたのだがこの程復帰したのだ。

「まあ艦隊も全て遠洋艦じゃから長期航海も楽になるじゃろうのう」

「ガルマン・ガミラス星への航海も特に問題は無かったしな」

「そういう事じゃの」

ちなみに艦艇諸元は如何の通りであった。

『リットリオ』級主力戦艦

基準排水量 7,2000トン

全長 315m

全幅 78m

全高 110m

主機 03式HVED型大型次元波動エンジン×1基

補機 ケルビンインパルスエンジン×2基

乗員 280名

武装 次元波動爆縮放射機×1(艦首拡大波動砲)

50口径40・6センチ三連装陽電子衝撃波砲塔×3基

12・7センチ四連装高角速射光線砲塔×6基

12・7センチ連装高角速射光線砲塔×6基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×8基

前部魚雷発射管×4基

側面短魚雷発射管×12基

艦底部ミサイル発射管×6基

搭載航空機6機

同型艦

『リットリオ』『ローマ』以下2207年までに69隻。

【概要】

地球防衛軍の欧州管区にあるイタリア宇宙軍の設計陣が設計した主力戦艦。ガトランティス戦役後、防衛軍はガトランティス軍が放棄したシリウス、プロキオン恒星系の基地を接收した。接收した際、補給艦が同行していた事で艦隊の道中の補給は何とか可能であったが接收に同行した艦隊司令官（パエツタ少将）からの報告で遠洋型の艦艇開発が急務となった。

一応、補給艦を同行させれば近海型の艦艇も長距離進出は可能ではあるが補給艦の数にも限りがある。その為、防衛軍艦政本部は遠洋型宇宙艦艇の設計開発に乗り出すのである。量産性を求めるがため各国にコンペという形で提出を促した。

しかし、北米や欧州各国は上記の護衛戦艦の開発に躍起になっておりあまり返答は芳しくなかったが手を挙げたのがドイツであった。ドイツも『ビスマルク』級護衛戦艦の設計開発をしていたがドイツでも艦艇開発で有利になりたいと思惑があったので手を挙げたのである。更に補佐的に手を挙げたのがイタリアであった。

イタリアは自国独自の護衛戦艦の開発を諦め量産型で有利になるうと思惑があった事もあり両国は互いに連携して艦政補佐的に動いていたのである。艦政本部も他国がコンペを出さなかった事もありイタリアの設計図案が採用されたのである。

量産性を意識して主砲は『ドレッドノート』級と変化せずに41センチ陽電子衝撃砲を採用している。またパルスレーザーも『ドレッドノート』級よりは増加されており防空火力も期待出来た。

一番の注目は重装甲であろう。ガトランティス戦役で『ドレッドノート』級は装甲では『カラクルム』級大戦艦に負けており一撃で大破しやすかった。

イタリアの設計陣はそれを反省し改『春藍』級よりは劣るが重装甲

を施したのであるが、それを上回ったのがハイパー放射ミサイルであつた。

なお、当初は補機は無かつたが暗黒星団帝国戦役の戦訓から増設された。

『河内』級宇宙戦艦

基準排水量 7,8000トン

全長 330m

全幅 78m

全高 110m

主機 03式HWVED型大型次元波動エンジン×1基

補機 ケルビンインパルスエンジン×2基

乗員 290名

武装 次元波動爆縮放射機×1（艦首拡大波動砲）

55口径40・6センチ三連装陽電子衝撃波砲塔×3基

12・7センチ四連装高角速射光線砲塔×6基

12・7センチ連装高角速射光線砲塔×8基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×12基

前部魚雷発射管×4基

側面短魚雷発射管×12基

艦底部ミサイル発射管×8基

搭載航空機6機

同型艦

『河内』『摂津』『相模』『薩摩』以下2207年までに24隻

【概要】

地球防衛軍の極東管区にある日本宇宙海軍の艦政本部が『リットリオ』級を多少修正して日本独自に建造した宇宙戦艦。

主砲を50口径から55口径に換装しており射程距離も延びている。また、装甲を『リットリオ』級より増して重装甲にしており後のハイパー放射ミサイルに多少耐える事が出来たのである。

『ブリュッヒャー』級主力巡洋艦

基準排水量 18,000トン

全長 220m

全幅 40m

主機 03式HWVED型中型次元波動エンジン×1基

武装 次元波動爆縮放射機×1基（艦首拡大波動砲）

50口径30・5センチ三連装陽電子衝擊砲×2基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×12基

両舷側面短魚雷発射管×8基

二段式六連装ミサイル発射管×1基

艦首魚雷発射管×4基

搭載航空機2機

同型

『ブリュッヒャー』『プリンツ・オイゲン』『アドミラル・シエーア』以下2207年までに84隻

【概要】

地球防衛軍の欧州管区にあるドイツ宇宙軍の設計陣が設計した主力巡洋艦。遠洋型を目指す理由になったのは『リットリオ』級で記載したので省く。ドイツの設計思想らしく重装甲ではあるが2205年のデインギル戦役時には迫り来るハイパー放射ミサイルの前では自慢の重装甲は見る影もなかったのである。

『高雄』級宇宙巡洋艦

基準排水量 24,000トン

全長 265m

全幅 46m

主機 03式HWVED型中型次元波動エンジン×2基（ツイン式）

武装 次元波動爆縮放射機×1基（艦首拡大波動砲）

50口径30・5センチ三連装陽電子衝擊砲×3基

50口径20・3センチ三連装陽電子衝擊砲×2基（艦体側面）

12・7センチ連装高角速射光線砲塔×8基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×16基

両舷側面短魚雷発射管×10基

二段式八連装ミサイル発射管×2基

艦首魚雷発射管×6基

搭載航空機2機

同型

『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』『妙高』『那智』『足柄』『羽黒』以下2007年までに28隻

【概要】

地球防衛軍の極東管区にある日本宇宙海軍の艦政本部が『ブリュッヒャー』級を修正して日本独自に建造した宇宙巡洋艦。日本宇宙軍は砲火力に納得出来なかつたので後部のカタパルトを撤去して第三砲塔を設置。また、側面には20・3センチ三連装陽電子衝擊砲2基を搭載して上下への砲撃を可能とした。

また『ブリュッヒャー』級よりも重装甲を施している。（就役していた艦も順次改装）これは銀河系大戦で経験した事であった。

これだけ施せば機動力は勿論低下するので中型エンジンをツイン式に搭載した事で機動力低下は防げた。艦本としては大型エンジンを搭載しなかったが財務省が懸念を上げたので取り止めになった経緯があり艦本は財務省を憎んでいる。

初陣は『高雄』『愛宕』『妙高』による暗黒星団帝国への遠征であり砲火力は十分に通用したのである。

また、噂を聞き付けたタイ宇宙海軍やフィンランド宇宙海軍が購入をしてそれぞれ『トンブリ』級、『イルマリネン』級と名称を付けてい

る。

『Z』級主力駆逐艦

基準排水量 10,000トン

全長 200m

全幅 20m

主機 03式HWVED型中型次元波動エンジン×1基

武装 50口径40・6センチ連装陽電子衝擊波砲塔×1基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×6基

艦首魚雷発射管×4基

二段式四連装ミサイル発射管×1基

搭載航空機2機

同型艦

『Z1』『Z2』『Z3』以下115隻

【概要】

地球防衛軍の欧州管区にあるドイツ宇宙軍の設計陣が設計した主力駆逐艦。駆逐艦と言いつつも全長は200mを超えた艦となっている。主砲は『リットリオ』級主力戦艦の40・6センチ陽電子衝擊波砲を連装で1基搭載。駆逐艦とは言いが昔で言う防護巡洋艦に近い。また後部は航空機搭載用の格納庫になっている。というのも地球連邦の復興でなるべくの数揃える為にこのような設計になっている。

『夕雲』級宇宙駆逐艦

基準排水量 15,000トン

全長 230m

全幅 24m

主機 03式HWVED型中型次元波動エンジン×1基

武装 50口径30・5センチ連装陽電子衝撃波砲塔×3基（前部2基 後部1基）

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×8基

艦首魚雷発射管×4基

艦底部ミサイル発射管×4基

二段式六連装ミサイル発射管×1基

搭載航空機2機

同型艦

『夕雲』『巻雲』『風雲』『長波』以下72隻

【概要】

地球防衛軍の極東管区にある日本宇宙海軍の艦政本部が『乙』級を更に独自修正して日本独自に建造した宇宙駆逐艦。相変わらず日本宇宙軍が駆逐艦の砲火力に納得出来なかつたので独自仕様の再設計しての開発建造を行った。

主砲は40・6センチだったのを巡洋艦の30・5センチを連装3基にし全長を延ばして前部2基、後部1基に改めた。その為、航空機用格納庫は撤去され艦底部に移されたのである。また、艦底部にもミサイル発射管を増設し前部に設置されたミサイル発射管も六連装に改めたのである。

結果的に海防戦艦に近い形ではあるものの運用は満足出来る代物であり、その噂を聞き付けたタイ宇宙海軍やフィンランド宇宙海軍が購入したりしている。

「それと将和、ボラーに気を付けてくれ」

「キナ臭いか親父？」

「まあ。ありやあ地球で言うたらソ連の臭いがプンプンするわい」

正信の言葉に将和は苦笑する。まさか正信もボラー連邦の元ネタがソ連だとは知るわけないのだ。

「分かった、兎に角も気を付けるよ」

「ウム、頼むぞ」

そう言って敬礼し合う親子であった。

兵器設定その2

『リットリオ』級主力戦艦

基準排水量 7,2000トン

全長 315m

全幅 78m

全高 110m

主機 03式HWVED型大型次元波動エンジン×1基

補機 ケルビンインパルスエンジン×2基

乗員 280名

武装 次元波動爆縮放射機×1（艦首拡大波動砲）

50口径40・6センチ三連装陽電子衝撃砲塔×3基

12・7センチ四連装高角速射光線砲塔×6基

12・7センチ連装高角速射光線砲塔×6基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×8基

前部魚雷発射管×4基

側面短魚雷発射管×12基

艦底部ミサイル発射管×6基

搭載航空機6機

同型艦

『リットリオ』『ローマ』以下22207年までに69隻。

【概要】

地球防衛軍の欧州管区にあるイタリア宇宙軍の設計陣が設計した主力戦艦。ガトランティス戦役後、防衛軍はガトランティス軍が放棄したシリウス、プロキオン恒星系の基地を接収した。接収した際、補給艦が同行していた事で艦隊の道中の補給は何とか可能であったが接収に同行した艦隊司令官（パエッタ少将）からの報告で遠洋型の艦艇開発が急務となった。

一応、補給艦を同行させれば近海型の艦艇も長距離進出は可能ではあるが補給艦の数にも限りがある。その為、防衛軍艦政本部は遠洋型宇宙艦艇の設計開発に乗り出すのである。量産性を求めるがため各国にコンペという形で提出を促した。

しかし、北米や欧州各国は上記の護衛戦艦の開発に躍起になっておりあまり返答は芳しくなかったが手を挙げたのがドイツであった。ドイツも『ビスマルク』級護衛戦艦の設計開発をしていたがドイツでも艦艇開発で有利になりたい思惑があったので手を挙げたのである。更に補佐的に手を挙げたのがイタリアであった。

イタリアは自国独自の護衛戦艦の開発を諦め量産型で有利になるうと思惑があった事もあり両国は互いに連携して艦政補佐的に動いていたのである。艦政本部も他国がコンペを出さなかった事もありイタリアの設計図案が採用されたのである。

量産性を意識して主砲は『ドレッドノート』級と変化せずに41センチ陽電子衝撃砲を採用している。またパルスレーザーも『ドレッドノート』級よりは増加されており防空火力も期待出来た。

一番の注目は重装甲であろう。ガトランティス戦役で『ドレッドノート』級は装甲では『カラクルム』級大戦艦に負けており一撃で大破しやすかった。

イタリアの設計陣はそれを反省し改『春藍』級よりは劣るが重装甲を施したのであるが、それを上回ったのがハイパー放射ミサイルであった。

なお、当初は補機は無かったが暗黒星団帝国戦役の戦訓から増設された。

『河内』級宇宙戦艦

基準排水量 7, 8000トン

全長 330m

全幅 78m

全高 110m

主機 03式HWVED型大型次元波動エンジン×1基
補機 ケルビンインパルスエンジン×2基
乗員 290名

武装 次元波動爆縮放射機×1（艦首拡大波動砲）

55口径48センチ三連装陽電子衝擊砲塔×3基

12・7センチ四連装高角速射光線砲塔×6基

12・7センチ連装高角速射光線砲塔×8基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×12基

前部魚雷発射管×4基

側面短魚雷発射管×12基

艦底部ミサイル発射管×8基

搭載航空機6機

同型艦

『河内』『摂津』『相模』『薩摩』以下2207年までに24隻

【概要】

地球防衛軍の極東管区にある日本宇宙海軍の艦政本部が『リットリオ』級を多少修正して日本独自に建造した宇宙戦艦。

主砲を50口径から55口径した48センチ陽電子衝擊砲に換装しており射程距離も延びている。また、装甲を『リットリオ』級より増して重装甲にしており後のハイパー放射ミサイルに多少耐える事が出来たのである。

『ブリュッツヒャー』級主力巡洋艦

基準排水量 18,000トン

全長 220m

全幅 40m

主機 03式HWVED型中型次元波動エンジン×1基

武装 次元波動爆縮放射機×1基（艦首拡大波動砲）

50口径30・5センチ三連装陽電子衝擊砲×2基

- 7・5サンチ連装高角速射光線砲塔×12基
- 両舷側面短魚雷発射管×8基
- 二段式六連装ミサイル発射管×1基
- 艦首魚雷発射管×4基
- 搭載航空機2機

同型

『ブリュッヒャー』『プリンツ・オイゲン』『アドミラル・シエーア』以下2207年までに84隻

【概要】

地球防衛軍の欧州管区にあるドイツ宇宙軍の設計陣が設計した主力巡洋艦。遠洋型を目指す理由になったのは『リットリオ』級で記載したので省く。ドイツの設計思想らしく重装甲ではあるが2205年のデインギル戦役では迫り来るハイパー放射ミサイルの前では自慢の重装甲は見る影もなかったのである。

『高雄』級宇宙巡洋艦

基準排水量 24,000トン

全長 265m

全幅 46m

主機 03式HWVED型中型次元波動エンジン×2基（ツイン式）

武装 次元波動爆縮放射機×1基（艦首拡大波動砲）

50口径30・5サンチ三連装陽電子衝撃砲×3基

50口径20・3サンチ三連装陽電子衝撃砲×2基（艦体側面）

面）

12・7サンチ連装高角速射光線砲塔×8基

7・5サンチ連装高角速射光線砲塔×16基

両舷側面短魚雷発射管×10基

二段式八連装ミサイル発射管×2基

艦首魚雷発射管×6基

搭載航空機2機

同型

『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』『妙高』『那智』『足柄』『羽黒』以下2007年までに28隻

【概要】

地球防衛軍の極東管区にある日本宇宙海軍の艦政本部が『ブリュッヒャー』級を修正して日本独自に建造した宇宙巡洋艦。日本宇宙軍は砲火力に納得出来なかつたので後部のカタパルトを撤去して第三砲塔を設置。また、側面には20・3センチ三連装陽電子衝撃砲2基を搭載して上下への砲撃を可能とした。

また『ブリュッヒャー』級よりも重装甲を施している。(就役していた艦も順次改装)これは銀河系大戦で経験した事であった。

これだけ施せば機動力は勿論低下するので中型エンジンをツイン式に搭載した事で機動力低下は防げた。艦本としては大型エンジンを搭載したかったが財務省が懸念を上げたので取り止めになった経緯があり艦本は財務省を憎んでいる。

初陣は『高雄』『愛宕』『妙高』による暗黒星団帝国への遠征であり砲火力は十分に通用したのである。

また、噂を聞き付けたタイ宇宙海軍やフィンランド宇宙海軍が購入をしてそれぞれ『トンブリ』級、『イルマリネン』級と名称を付けている。

『Z』級主力駆逐艦

基準排水量 10,000トン

全長 200m

全幅 20m

主機 03式HWVED型中型次元波動エンジン×1基

武装 50口径40・6センチ連装陽電子衝撃砲塔×1基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×6基

艦首魚雷発射管×4基

二段式四連装ミサイル発射管×1基

搭載航空機2機

同型艦

『Z1』『Z2』『Z3』以下115隻

【概要】

地球防衛軍の欧州管区にあるドイツ宇宙軍の設計陣が設計した主力駆逐艦。駆逐艦と言いつつも全長は200mを超えた艦となっている。主砲は『リットリオ』級主力戦艦の40・6センチ陽電子衝撃波砲を連装で1基搭載。駆逐艦とは言いが昔で言う防護巡洋艦に近い。また後部は航空機搭載用の格納庫になっている。というのも地球連邦の復興でなるべくの数揃えを揃える為にこのような設計になっている。

『夕雲』級宇宙駆逐艦

基準排水量 15,000トン

全長 230m

全幅 24m

主機 03式HWVED型中型次元波動エンジン×1基

武装 50口径30・5センチ連装陽電子衝撃砲塔×3基(前部2

基 後部1基)

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×8基

艦首魚雷発射管×4基

艦底部ミサイル発射管×4基

二段式六連装ミサイル発射管×1基

搭載航空機2機

同型艦

『夕雲』『卷雲』『風雲』『長波』以下72隻

【概要】

地球防衛軍の極東管区にある日本宇宙海軍の艦政本部が『Z』級を更に独自修正して日本独自に建造した宇宙駆逐艦。相変わらず日本宇宙軍が駆逐艦の砲火力に納得出来なかつたので独自仕様の再設計しての開発建造を行った。

主砲は40・6センチだったのを巡洋艦の30・5センチを連装3基にし全長を延ばして前部2基、後部1基に改めた。その為、航空機用格納庫は撤去され艦底部に移されたのである。また、艦底部にもミサイル発射管を増設し前部に設置されたミサイル発射管も六連装に改めたのである。

結果的に海防戦艦に近い形ではあるものの運用は満足出来る代物であり、その噂を聞き付けたタイ宇宙海軍やフィンランド宇宙海軍が購入したりしている。

『翔鶴』級戦闘空母

基準排水量 84,000トン

全長 460m

全幅 125m

主機 03式HWVE D型大型次元波動エンジン×1基

補機 ケルビンインパルスエンジン×6基

武装 次元波動爆縮放射機×1基（集束・拡散可能）

51センチ三連装陽電子衝撃砲塔×2基

六連装大型エネルギー砲×1基

12・7センチ連装高角速射光線砲塔×12基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×20基

航空機 戦闘機×54機 雷撃機×36機 シーガル×2機

同型艦

『翔鶴』『瑞鶴』『イントレピッド』『エンタープライズ』以下2207年までに12隻。

【概要】

地球防衛軍の極東管区にある日本宇宙海軍の艦政本部が『アンドロ

メダ』級宇宙戦艦の空母型を目的に設計建造した。元々はガトランティス戦役時に『アンドロメダ』級宇宙戦艦の大量建造に踏み切って建造していたが結局は間に合わず放置や損傷艦の修理のために資材解体等をしていったがそれに目を付けたのが牧野技術中佐であり勿体無い精神で空母型にしたのである。

設計図を見せられた正信も納得してGOサインを出して建造が変更されて再開されたのである。

同型艦はデインギル戦役までに12隻が就役、デインギル軍の水雷艇迎撃に艦載機が活躍する。

全体的なモチーフはリメイク『2205』の『ヒュウガ』であり、飛行甲板はアングルド・デツキの二段式である。

『日向』級航空戦艦

基準排水量 58,000トン

全長 310m

全幅 72m

主機 03式HWVED型大型次元波動エンジン×1基

補機 ケルビンインパルスエンジン×4基

武装 次元波動爆縮放射機×1基（集束・拡散可能）

50口径40・6センチ三連装陽電子衝撃砲塔×2基

六連装大型エネルギー砲×1基

12・7センチ連装高角速射光線砲塔×10基

7・5センチ連装高角速射光線砲塔×16基

航空機 戦闘機×36機 雷撃機×36機 シーガル×2機

同型艦

『日向』『ベアルン』『レキシントン』『サラトガ』以下2207年までに10隻

【概要】

地球防衛軍の極東管区にある日本宇宙海軍の艦政本部が『ドレッド

ノート』級主力戦艦の航空戦艦を目的に設計建造した。艦体は『ドレッドノート』級であるが波動エンジンは03式に改めているので長距離航海も可能となっている。全体的なモチーフはリメイク『2205』の『ヒュウガ』であり、飛行甲板はアングルド・デッキの二段式である。

『速吸』級補給母艦

ぶつちやけ『2205』の『アスカ』と諸元（主砲は40・6センチ陽電子衝撃砲）は同じだが、特殊装備は無い。

同型艦

『速吸』『サクラメント』『秋津丸』『神州丸』以下2207年までに16隻。

第六十五話

「何とか年末には帰って来れたな……」

年もそろそろ暮れようとしている西暦2204年12月20日、将和の第十三艦隊はガルマン・ガミラス星からの第七次移民船団を護衛して第十一番惑星へと入港していた。この後は各艦隊が引き継いで移民船団を護衛していくのである。

護衛の任を解かれた第十三艦隊はそのまま地球に戻り年末年始は地球で過ごす事になったのだ。

「今年の年始は家で餅が喰えそうだ」

「私の家族もご同伴しようかな」

「ハハハ、オカンにもそう言っておくよ」

スカリエツティの言葉に将和は苦笑しながらそう言う。将和の実家もスカリエツティ一家や薫に玲達が多く出入りする事が多くなってきたので改築していたりする。

「ハハハ、孫の顔が早く見れそうじゃの」

家の改築を聞いた正信がニヤニヤしながら笑っていたが将和は気にしない事にした。

「しかし……相変わらずシャルバート教信者は多いな」

「地球で例えたらキリスト教みたいなモノですからね」

今回の第七次移民船団には多くのシャルバート教信者が乗船していた。というのもガルマン・ガミラスは元よりボラー連邦、ゼニー合衆国もシャルバート教信者を迫害していたのだ。だからこそシャルバート教信者も安寧を求めて火星の移住を希望したのだ。

無論、地球連邦も対策はした上である。

「信者を増やして地球連邦への武力行使をしないのであれば火星への移住を認める」

正信はシャルバート教信者の中でも長老格と会談をした上で長老格も武力行使の放棄を認めての移住承諾だったのだ。

「まあそれでも警戒はすべきじゃろうのう」
「ですな」

正信も過去に宗教がどのような事をしていたのかは知っているの
で正信も基地艦隊は元より火星軌道を周回する二段式40・6サン
チ三連装陽電子衝撃衛星砲を4基も設置しているのである。
(早くシャルバート星見つけて引き取ってもらった方がはええな
……)

そう思う将和であった。そして第十三艦隊は31日に地球の呉宇
宙港へ帰還したのである。

「さて、帰るかな」
「そうですな。今年は妻に怒られなくて済みそうです」

将和の言葉にチェン参謀長もそう呟くのである。その後、実家に帰
ると台所には母親の友美にプレシア、そして戦闘機人となったサーダ
が夕食を作っており更には年越し蕎麦の準備もしていた。

「お帰り将和。もうちよいで出来るよ」
「あいよ。着替えてくるわ」

友美にそう言われ将和も二階に上がって服を着替えて降りてくる
のである。降りてきたら年越しに呼ばれた薫と玲、メルダ、リンディ、
ウーノにトーレとスカリエッティらも来ていた。なお、トチローとク
アットロ、セツテは3人でデートしているらしい。(血涙を流すスカ
リエッティからの報告)

「お、来た来た」
「ちよ、薫。初っぱなから缶ビール開けるんじゃないよ」

「固い事はいいっこ無しよ」
「そういう事じゃねえつての……」

最近、薫の酒癖が悪くなってきているのに頭を抱える将和であっ
た。その後、全員で夕食のすき焼きをつつき合うのである。

「タマゴタマゴ……」
「はいタマゴよ将和君」

「あ、ありがとうございます」

「……何か彼処の空間だけ初々しいぽくないかしら？」

「ならお酒を控えるべきじゃないですか？」

「絡み酒の貴女に言われたくはないね玲」

「笑い上戸が何か言いましたか？」

「貴女達ね……」

「ハツハツハ、すき焼き食べないなら私が食べるぞ」

「ハムツ…ハムツ……この美味しさに私は今、感動しているツ」

「賑やかだねえ」

「そうですねジェルさん」

皆が思い思いにすき焼きを堪能するのであった。その後、皆が年越し蕎麦を食べつつ除夜の鐘を聞いてから西暦2205年が幕を開けた。

そして酒飲み組が撃沈する中で正信、将和、スカリエツティ、サーダの4人が細やかながらの飲みをしていた。

「改めて結婚おめでとうスカリエツティ君、サーダ嬢」

「ありがとうございます三好元帥」

「はい、それに敵に与していた私に此処までの恩情……感謝しきれません」

「良いんじゃないよサーダ嬢。確かに去年は敵同士ではあったが今は味方で手を取り合っているんじゃない。変えられるのは未来だけという事じゃない」

頭を下げるサーダに正信はフオツフオツフオツと笑いながらコップに注がれた日本酒を飲む。

「幸いにも新居は隣にしておいたからの。何かあった時はワシの妻に頼るが良い」

「ありがとうございます」

「それで……話とは何だ親父？」

「フム……実はサーダ嬢に聞きたい事があったのじゃ」

「聞きたい事……ですか？」

「かつて、貴女が暗黒星団帝国に身を寄せていた時、銀河系の勢力範囲

とかを知っておられたかの？」

「勢力範囲ですか？ 確かあの段階では新興国のガルマン・ガミラス、ボラー連邦、そしてゼニー合衆国が一番の勢力範囲ですが……」

「……まさか親父……」

「……バレル大使からの情報でな、ガルマン・ガミラスとボラー連邦が本格的な戦争を開始したようじゃ」

『ッ』

正信の言葉に将和らは息を飲む。

「これまでは局地的な戦闘じゃったが……今のところはガルマン・ガミラス軍が有利に戦闘をしておるようじゃ……だからこそ暗黒星団帝国におったサーダ嬢が何か情報を知っておるか確認したかったのじゃよ」

「そうだったのですね……確かに暗黒星団帝国も銀河系に進出して調査をしておりました……我々の身体に合うかどうかです」

「あー……そういう事か」

「はい。それで高確率で一致したのが……地球人でした。なので地球を狙う事になりました」

「成る程のう」

「しかし、ガルマン・ガミラスとボラーが戦うならカールセン中将のケンタウルス座方面艦隊が……」

「そこなのじゃ」

将和の言葉に正信は再度コップに日本酒を並々に注いで飲み干す。

「アルファ・ケンタウリのプロキシマ・ケンタウリbは開拓が進められておる。テラフォーミングも順調じゃが、完全に地球化の環境になるにはまだ10年は掛かるのう」

「ケンタウルス座方面艦隊の増強をするので？」

「無論な。じゃがあまり増強してはボラーを刺激するやもしれん。ガルマン・ガミラスにはバレル大使を通じて伝えておるわい」

「……新年早々から怪しげな雰囲気ですね」

「せめて5年は平和の時間が欲しいわい。孫の顔も見れないから
のう」

「あいな……」

「ところで将和。誰にするかは決めたのか？」

「……………決められるかよッ」

正信の言葉に将和はそう言つてコップに注がれた日本酒を飲み干して新しくコップに注ぐ。なお、隣ではスカリエッティが機嫌悪くしていた。そりや当然だろう。ウーノは将和の毒牙に掛かり、トーレも最近怪しいのだ。気が気でないのだ。

「フォッフフォッフオツ。お主、何か勘違いしてないかの？」

「勘違い？」

「ワシが言いたいのは正式に結婚する人じゃよ。闇での事はワシも口を挟まんわい」

「……………」

「ワシも友美にするまでには多くの事があつたからの。お主も穩便にしておくのじゃよ」

「……………聞きたくなかつた。親父の闇……………」

「フォッフフォッフオツ」

そう言つて笑う正信であつた。そして場所は代わりガルマン・ガミラス星となる。

「キーリング、戦況はどうか？」

「はっ、ご説明致します」

ガルマン・ガミラス総統デスラーの問いに参謀総長のネルン・キーリング上級大将が席を立ち上がりメインパネルに切り替えてデスラーに説明をする。

「我が軍は最大限出せる6個空間機甲師団でボラー連邦への侵攻を開始し現在は約31%まで占領地域を拡げております」

「ウム。ゼニー合衆国へは？」

「ヒステンバーガー大将が3個空間機甲師団を率いて作戦中です」

「ウム」

「総統、オリオン腕辺境方面は如何されますか？」

「……………地球の事か……………」

「はっ。銀河系統一となると地球連邦をも含む事に……………」

「……地球連邦は対等な同盟国だ。そこは勘違いするなキーリング」

「はっ、失礼しました」

「だが……地球連邦との協議は必要だろう。バレルにもその旨を伝えるのだ」

「分かりました。そのように」

「但しだ……オリオン腕方面はバジウド星系までにしておこう」

「確かバジウド星系のバース星はボラー連邦寄り……」

「そういう事だキーリング」

「分かりました、直ちに。そうであればオリオン腕方面艦隊が必要になります」

「ウム……適任者はいるか？」

「はっ……ガイデル大將は如何でしょうか？」

「ガイデルか……宜しい。キーリングに任せよう」

ガルマン星解放戦時、ガルマン人ながらレジスタンスのリーダーの一人として活躍していたのがヴィルヘルム・ガイデルであった。頭に血が昇るのが難点だがこれまでの戦争でデスラーを支えてきた一人でもあったのだ。

斯くしてガイデル大將は就役したばかりの機動要塞『ヴェルダン』を旗艦にして第18空間機甲師団、再編成したフォムト・バーガー大佐の第6空間機甲旅団を中心にした方面艦隊でバジウド星系攻略を念頭に行動が開始されたのであった。

そしてボラー連邦の首都惑星『ラスコー』ではベムラーゼ首相が激怒していた。

「僅か3日でポウリヤンド戦線が突破されたというのか!？」

「はっ。面目次第ありません」

ベムラーゼの激怒をゴルサコフ総参謀長が一身に受けていた。

「それで、被害は？」

「はっ。ポウリヤンド戦線に配備していた第十主力艦隊はほぼ全滅、更に増援に駆けつけた第十一主力艦隊も壊滅状態です」

「……………」

「また、第十主力艦隊提督のブジュンカリ中将は責任の重さを痛感し

自決、第十一主力艦隊提督のラリバルフ中將は戦死しました」

「……敗因は何処と見ている？」

「ブジュンカリ中將の索敵ミスかと。ガルマン・ガミラス軍が增強していたのは確認済みでしたが……」

「ならブジュンカリの責任は重いな。ブジュンカリ一族の資産を没収の上、強制収容惑星へ送るのだ」

「ははっ」

「ゴルサコフ、ポウリヤンド戦線は如何致す配分かね？」

「はっ、ペトロフ中將の第七主力艦隊、マリノフスキー中將の第九主力艦隊の2個艦隊を派遣致します」

「宜しい。それと壊滅した2個艦隊の早急な回復に務めよ」

「ははっ!!」

「それとゴルサコフ……地球連邦をどう見るべきだと思うかね？」

「地球連邦をですか？」

「左様。奴等、シャルバート教信者を受け入れて移民をしているようだ」

「……まさかシャルバート教を保護するため……」

「可能性は否定出来ん」

「首相閣下、地球連邦はもしかしたら惑星『ファンタム』に幽閉したルダ王女の情報を探っているのでは……?」

「何? ルダ王女だと?」

ゴルサコフの言葉にベムラーゼは眼を見開く。数年前にベムラーゼはシャルバート王室の血筋を引くルダ王女を辺境惑星である『ファンタム』に幽閉したのだ。

「うゝむ……」

「如何されますか?」

「警戒は必要だな。警戒に割ける艦隊はあるかね?」

「今のところは……ただ割けるのであればゼニー合衆国のアリエスカ戦線かと……」

「アリエスカ戦線なら何個割けるのだ?」

「良くてハーキンス中將の第八主力艦隊とザハロフ中將の第十二主力

艦隊かと思えます」

「宜しい。ゴルサコフ、貴様に任せる。ゼニー合衆国への戦闘も暫くは小康状態にさせよう」

「分かりました。直ちにそのように」

ボラー連邦の方針は決まった。直ちに艦隊の移動が行われ戦力の再編成が開始されたのである。そして銀河系を巡る戦いに地球も巻き込まれるのであった。

人物設定その2

【注意】

基本的にその1で登場した人物は作者の判断により覚醒後に再度出したり省いたりします。

プレシア・テストロツサ

防衛軍科学庁の勤務だったが暗黒星団帝国戦役時にはパルチザンのメンバーになり後方でパルチザンを支えていた。戦役後、将和が出した『覚悟を示せ』の答えを将和に出しそのまま将和に抱いてもらう。

その後は『三笠』副技術長に転出する。

サーダ・スカリエツティ

元々はデザリアム星出身ではなく暗黒星団帝国軍に占領された周辺惑星の奴隷だった。その後はのし上がってスカルダートの側近(妾)になってその知識面から「魔女」とも言われていた。

殴り込み艦隊がデザリアム星に来た時、親しくしていた護衛艦『ボローニャ』のオペレーターがスカリエツティだと知り驚愕し更にスカリエツティが求婚してきて更に驚きつつもスカリエツティの熱意に押されて結婚を承諾しスカリエツティらと共にデザリアム星を脱出する。

地球に来訪後は事情を聞いた正信の手回しで戸籍を貰い、更にはスカリエツティから戦闘機人の身体を貰いスカリエツティと新婚生活

を送っており友美から料理の手解きをしてもらっている。(将和の実家の隣)

一応は予備役という形で軍にも過去に在籍したという形になっている。

(戦闘機人前。戦闘機人後はオリジナルサーダ)

ドゥーエ・スカリエツティ

スカリエツティが生み出した戦闘機人シリーズの次女。原作では騎士ゼストからの攻撃で息絶えたが、咄嗟に身体を捻った事で即死は免れるもほぼ致命傷であり、最後の力を振り絞ってスカリエツティから渡された自爆用の小型高性能爆弾を爆発させてこの世から消えたと思われたが、何の偶然か分からないが地球から16万8000光年も離れた惑星『イスカンドル』に転移した。

発見したスターシアと古代守の搬送と治療により死を免れ生存ルートになる。イスカンドル表敬艦隊が来るまではリハビリをしておりその後はスカリエツティと合流する。

その後は『三笠』の保安部長として艦内の取り締まりをしているが専ら戦闘時は負傷者の搬送をしたりしている。

3相当の序盤では宇宙戦士訓練学校の臨時格闘教官として赴任し学生達をボコボコにするも学生である土門の負けず嫌いな性格を見て土門の面倒をよく見ている。

土門竜介

宇宙戦士訓練学校の学生。そのうち出る。

スタンフォード・クブルスリー

地球連邦宇宙海軍第三艦隊司令長官。地球連邦軍では珍しい火星出身。内惑星戦争では自身の私情を押し込んで火星自治政府宇宙海軍と戦う。

ガミラス戦役、白色彗星帝国戦役時は宇宙戦士訓練学校の副校長を務めており校長の山南を支えていた。

暗黒星団帝国戦役時は首都防衛第二師団長をしており戦場で瀕死の重傷を負うも後に回復して艦隊司令長官を拝命する。

ミユキ・ホウメイ

地球連邦宇宙海軍土星艦隊司令長官。中華系日系人であり旦那がいる。(主夫) ガミラス戦役時から一貫して輸送艦隊を率いて指揮していたが正信に見出だされて艦隊司令長官に就任する。

得意料理はパエリア。

リユーリック・ボロディン

地球連邦宇宙海軍第六艦隊司令長官。内惑星戦争からの猛者であり正信の下で人事局長等を歴任し第六艦隊司令長官となる。艦隊運用はそつなくこなすのが自慢。

アベルト・デスラー

元は大ガミラス帝星の総統だったが『ヤマト』に破れて以降は『ヤマト』に復讐する一途のあまり白色彗星帝国に身を寄せてズオーダー大帝と友情を結んだりしていたが『ヤマト』に敗れ白色彗星の弱点を教えつつ宇宙空間に身を投げるも再び生き返る。

その後はほぼテレビ版の展開をしつつ銀河系中心部に位置するガ
ルマン星を解放し『ガルマン・ガミラス帝国』を建国し選挙によつて
総統に選ばれる。周辺の星々を解放しつつボラー連邦と構えている。
好きな食べ物は『三笠』見学のため乗艦して食堂で食べた『マゼラ
ンパフェ』でありコックに『マゼランパフェ』を作るよう指示したと
かしないとか。

ガデル・タラン

タラン、何年私の副官をやっている？

元ガミラス軍大本営参謀次長で今はガルマン・ガミラス帝国軍大本
営司令部総統付中將となつてデスクラーを支えている。

最近地球の日本産である熱いお茶を飲むのがマイブームになつ
ている。

ガル・ドイツ

元ガミラス軍航空艦隊司令長官で現ガルマン・ガミラス帝国軍航空
艦隊司令長官をしている。元帥でもある。

バレル大使から娘メルダと将和の結婚を聞かされた時は3日3晩
飲み明け暮れたが4日目には何とか復活し当人同士が良いならと
渋々承諾する。将和と初めての会食をした時、素直に正直に話す将和
を見て好感を得た事で本格的に二人を認めるのである。

最近の趣味はキーリングと二人で地球からの文化輸入された囲碁・
将棋・チェスをする事。

ヴェルヘルム・ガイデル

ガルマン・ガミラス軍東部方面軍司令長官で大将。ガルマン星が解
放される前からゲリラ活動をしていた程の歴戦の猛者である。ボ
ラー連邦との開戦後も空間機甲師団を率いてボラー連邦と戦ってい

だがバジウド星系攻略のために新設された東部方面軍の司令長官に就任する。予め地球の事はキーリングから知らされていたので自軍の艦隊が地球圏内に入らないよう配慮しているが内心はヒヤヒヤしている。

最近のマイブームは地球からの文化輸入されたヘッドスパ。

地球連邦

行政管区

北米管区 南米管区 欧州管区 アフリカ管区 東アジア管区(日

本以外)東南アジア管区 南アジア管区 大洋管区 日本管区(特別
枠)

政府機能

連邦大統領

連邦首相

各担当大臣

地球連邦軍

総司令部

陸軍

海軍

空軍

宇宙海軍

空間騎兵連隊

第一次内惑星戦争く戦間期

その船がいつから火星にあつたのか、何故火星にあつたのかは西暦2210年を過ぎた今でも分かっていない。ただ、分かっている事はその船がボラー連邦の艦船であり火星で回収されその回収データを元に火星自治政府宇宙海軍が創設され、地球国連宇宙海軍艦艇の基礎になったのと言うまでもない。

火星が地球からの独立を望むようになったのは西暦2150年代からと言われている。火星への植民が始まった西暦2110年代はそうは言つてられなかった。テラフォーミングも全ては完了しておらず、完全に完了するのも西暦2180年頃と予測されていた。

転機が訪れたのは西暦2148年だった。火星への植民をしていた火星自治政府は北極冠の開発に乗り出した時に雪に閉ざされ半壊されながらも威容を保っていた1隻の宇宙艦を発見した。それは火星は元より地球の宇宙艦艇ではなく、しかも明らかに異星文明の宇宙戦艦艦艇であつた。

この発見に火星自治政府は二つの反応を示した。一つは地球からの独立派がこの宇宙艦艇の分析・解析を行い量産し宇宙海軍の創設を主張したのである。

もう一つは同じく分析・解析を行い地球・火星と共に宇宙艦艇を増設し外敵からの敵に備える派閥であつた。

「地球から独立。これが火星の往く道である」
「独立を言っている場合でない。異星文明がいたのだ、もしもに備えて地球と連携を取るべきだ」

両者は互いにそう主張し妥協点を見出だせず、独立派の中に部類する強硬派が連携派閥を闇で暗殺したりテロ活動をして連携派閥はその規模を縮小し西暦2151年に火星自治政府は地球からの独立する事を基本方針となつたのである。

火星自治政府が独立を訴える事に地球国連政府は当初は一蹴していた。しかし、極東管区の日本――当時の内閣総理大臣の三好正盛（将和の祖父）――は国連政府に警告を発していた。

「火星自治政府は密かに異星文明の宇宙艦艇の回収を実施して分析・解析中である。これらが量産すれば地球の脅威になる事は間違いない」

日本政府は西暦2157年、独自に火星自治政府の役人からのルートを使って火星自治政府が異星文明の宇宙艦艇を回収して分析・解析中との情報入手したのだ。

だからこそ正盛はその情報を国連政府に流して警告を発したのだ。しかし国連政府はその情報を単なるデマとし相手にしなかったのだ。「奴等は火星を甘くみている。杞憂で終われば良いが終わらないだろうな……」

一蹴されたとの報告を受けた正盛は溜め息を吐いて自国だけでも何とか乗り切る事にして日本国宇宙海軍の増設を図るのである。

そして正盛の杞憂は現実となってしまう。西暦2160年、地球からの独立を望む火星の独立運動は火星全土を覆い尽くしてしまい、火星に進出していた地球の各企業は軒並み撤退を余儀なくされてしまうのである。

この行為に国連政府は火星への輸出禁止等を決定、更には各国の宇宙艦隊を火星方面に派遣して砲艦外交を行うようになる。この挑発行為に火星自治政府も地球国連政府に抗議をするが両者の主張は妥協点を見出だせなかった。

正盛は日本国として国連政府と火星自治政府の仲介をしようとするが互いに互いの主張を認めない両者に匙を投げてしまう程であり西暦2164年3月3日、その日は桃の節句であった。

火星自治政府は地球国連政府に対し宣戦を布告して火星の衛星『ダイモス』宙域で挑発行為を行っていた国連政府の宇宙艦隊――中国艦隊――に火星自治政府宇宙海軍の第二艦隊が砲撃を開始したのである。

「薙ぎ払え!!」

火星自治政府宇宙海軍の『マーズ』級宇宙巡洋艦を主力に編成された火星艦隊は中国艦隊を圧倒し生還出来た艦艇は僅か4隻という有り様であった。対して第二艦隊の損害は小破3隻の快挙である。

同年5月5日、国連政府は各国の宇宙艦隊を火星に差し向けた。北米、ユーラシア、欧州が主力となった3個宇宙艦隊であった。その編成は戦艦級28、巡洋艦級49、駆逐艦級66という火星への攻撃をどれ程までに重要視していたかが分かるようであった。

火星自治政府宇宙海軍も精鋭の第一艦隊の他にも第二、第三艦隊を投入、第一次惑星戦争でも最大の艦隊決戦となった。

結果、国連政府の宇宙艦隊は大敗北した。各艦隊は主導権争いをし合同艦隊としての統制が取れずに各個撃破されたのだ。

焦った国連政府は慌てて月を中心とした防衛ラインの構築に勤しむがその前に火星は行動を開始した。

『月の兎撃ち作戦』

火星自治政府宇宙海軍は現時点で動員出来る宇宙艦艇の全てを使用して月を攻略しようとしたのである。非武装船をも動員したこの作戦には351隻という火星自治政府宇宙海軍も初めての運用という代物であった。

火星側も月を攻略すれば地球政府も根を上げて火星の独立を認めるだろう。そのような樂觀視さえあった。

しかし、月沖まで進出してきた時に各艦艇の対艦レーダーが大規模な宇宙艦艇を探知したのである。

「日の丸……あれは日本宇宙海軍です!!」

主要各国の宇宙艦隊を喪失した国連政府は遂に日本にも救援を要請、正盛は虎の子とも言える日本宇宙海軍5個艦隊172隻と3個航空艦隊を投入したのである。

当初は火星側が有利に動いていた。火星側は遠距離砲撃にて日本宇宙艦隊を圧倒していたのだ。

だが、日本宇宙海軍も負けてはいなかった。

「全機突撃!!」

採用されたばかりの空間戦闘攻撃機『飛燕』は月航空基地から発進

してきて攻撃を仕掛ける。その数は約200機余りであり火星側も対空戦闘を行うが数の暴力に負けて護衛艦艇等は次々と沈められていった。

「今だ!! 全艦、ありったけのビームとミサイルを敵に叩きつけるオ!!」

第五艦隊司令長官に就任したばかりの三好正信准将はやられっぱなしだった戦況を引っくり返す為に突撃を開始する。場合によって敵艦の側面に艦首を突撃させ衝突、更に白兵戦をして船を奪取したりする艦もあつたりするのであつた。

戦闘は僅か1時間で終了した。日本宇宙海軍は98隻の艦艇と52機の空間戦闘攻撃機を喪失するも火星自治政府宇宙海軍は186隻の艦艇を喪失し月攻略は失敗するのであつた。

同年8月15日、地球と火星は和平して停戦という形で落ち着いた。落ち着いたというのは火星側が地球へ隕石落としを敢行したからだ。

7月に西シベリア平原、ゴビ砂漠にそれぞれ1発ずつの隕石が落とされた。被害は大規模地震に代わり大陸方面に多数の死傷者が出たのである。そこで国連政府は漸く火星側に停戦を申し入れたのであつた。

無論、火星側もこれを受け入れた。なお、これを受け入れなかった場合、国連政府も日本宇宙海軍を主力にした艦隊を火星に派遣する予定であつたので両者の主張がある意味一致した結果であつた。

痛み分けに近い形の戦争であつたが国連政府は日本宇宙海軍が月沖海戦で捕獲した火星自治政府宇宙海軍の艦艇を分析・解析する事になる。失敗を次に活かそうとする姿勢を見せる地球であつたが火星はその反対だつた。

独立はまだ出来なかつたものの、主導権を握つたと判断した強硬派は増長する事になる。それに伴い火星は新たに火星共和国準備委員会を創設し独立への前進を開始するのであつた。

また軍も名称を変えて火星軍（陸海空宇宙）となるのである。

一般的に第一次内惑星戦争と第二次内惑星の間は戦間期と呼ばれる。この戦間期で地球国連政府は宇宙艦隊の大規模な増設と新型艦艇の就役を行うのである。その一番最初に行われたのが西暦2166年の試験艦『飛鳥』の就役であった。

『飛鳥』は後に巡洋艦級で採用される20センチ連装高圧増幅光線砲が搭載されその威力は火星軍の艦艇を十分に破壊出来るモノであった。

国連政府もこの報告を受けて西暦2168年に宇宙海軍を創設し艦艇増強を開始する。その翌年の西暦2169年に国連宇宙海軍初の巡洋艦『シャノン』が進宙し以後、各国の宇宙海軍は『シャノン』級主力宇宙巡洋艦を建造配備する事となる。日本宇宙海軍も『シャノン』級を建造配備しネームシップは『村雨』と名付けられ以後は『村雨』級宇宙巡洋艦となるのであった。

そして西暦2170年、国連宇宙海軍は標準規格艦として策定した巡洋戦艦『AU艦』をベースにし建造配備されていく事となり日本宇宙海軍もネームシップに『金剛』とした『金剛』級宇宙戦艦が西暦2171年に次々と就役を果たし第二次内惑星戦争時の西暦2179年まで日本宇宙海軍は『金剛』級宇宙戦艦を19隻建造配備するのである。

また、それと平行して地球の各地下に避難用の地下都市が建設されていた。

これは先の隕石落下としての影響でもあった。火星側がトチ狂って隕石を大量に地球へ落下させて市民を殺戮するのは国連政府も容認する筈がなかった。だからこそその地下都市の建設だった。

その一方で火星共和国独立準備委員会は地球の宇宙艦隊増設を容認する筈がなかった。

「地球は直ちに宇宙艦隊の解体せよ」

準備委員会はそう地球に警告を発したが国連政府はその警告を無視し艦隊の増強を繰り返した。その数、戦艦134隻、巡洋艦257隻と火星宇宙軍の艦艇を軽く超えており火星宇宙軍も慌てて新造艦

の建造ペースを早める程であった。そのような軍拡には両者共に限界がある、妥協点を探るしかない。

そう主張したのは日本国内閣総理大臣の三好正盛であった。これ以上、両者が争えば更なる悲劇を生むと主張しそれは両者も受け入れつつあった。だが火星独立を望む強硬派が動いた。

そして西暦2179年2月、火星との会談をするために正盛は火星へと向かい、火星軌道上までに来た時にそれが発生した。

『バレンタインの悲劇』

西暦2179年2月14日、火星軌道上まで来ていた正盛を載せた日本の使節団の宇宙船が突如火星宇宙軍に包囲・攻撃され使節団は正盛以下全員が死亡したのである。そしてそれと同時に火星でも強硬派による軍事クーデターが発生、強硬派が政権を握り声明文を発表した。

「我が火星共和国は地球への戦争を開始する」

西暦2179年2月18日、第二次惑星戦争が勃発するのであった。

第二次内惑星戦争く戦後処理

『正信、生きていたら聞いてくれッ。我々は嵌められた、敵は火星の他にも国連、そして日本内部にもいた!! 通りで事が上手く運ぶと思っていた……使節団の人員は三好の関係者が大勢いた……ッ……三好重工の弟達も皆やられた!! いいか、正信!! 生きていたら、生きていたら日本のために動け!! それが我が三好家の宿命だ!! 敵は火星、国連政府、南部重工……正信、生きていたら……生きて……ッ』

これは西暦2210年、地球連邦軍総司令長官の三好正信が退任する時に公表された第二次内惑星戦争の始まりを示すモノであった。火星軌道上で攻撃された使節団は最初から火星共和国の生贄だったのだ。

その生贄に差し出されたのが三好正盛とその関係者達であった。幸いにも正信は生き延びており三好家は存続する事は可能だったが正信以外の三好家は軒並み死亡された事になっていた。

日本――三好家が邪魔だった国連政府は三好重工と対立していた南部重工をも巻き込んで火星共和国に使節団を撃たせたのだ。そして正盛が死亡した事で国連政府が火星共和国を攻撃する大義名分を得たのである。

そしてその正盛が最期に残した通信は正信の下に届いており戦後、日本内部を掌握した正信の国連政府への復讐は目を見張るモノであったがそれは別の機会に語るべきであろう。

正盛が暗殺されてから4日後の2月18日、火星共和国は独立を宣言して地球国連政府に宣戦を布告し艦隊を動かした。

数にして戦闘艦艇58隻、補助艦艇14隻、揚陸艦艇15隻であり2個艦隊は月に向かった。月には国連宇宙海軍の月基地がありそこには3個艦隊が駐留していたのだ。この3個艦隊がマトモに対処すれば月基地は守備出来ただろう。

しかし、3個艦隊の司令官は互いに先陣争いをしてしまい（3人も同期生）遂には各個に出撃してしまう有り様であった。

そして最悪の展開となってしまう。

「奴等め、勝ったつもりか。ならば戦争を教えてやる!!」

火星宇宙海軍第一艦隊提督のアレク・ジェリコリー中将は遠距離砲撃をしつつ機を見て一気に突撃を開始した。

「迎撃だ、迎撃しろ!!」

「間に合いません!!」

国連宇宙海軍の第四艦隊司令長官のパストーレ中将は遅きの指示を出すも砲撃が艦橋に命中、被弾力所から宇宙に吸い出され第六艦隊司令長官のムーア中将も旗艦の爆発に巻き込まれた。

第十一艦隊司令長官のホーランド中将は粘っていたが艦隊の限界点を見抜かれ旗艦を集中砲撃されて轟沈戦死した。敗走する残存艦艇を追撃していた火星宇宙海軍第一艦隊だったが地球方面から接近しつつある艦隊を対艦レーダーが探知した。

「新たな敵艦隊?」

「凡そ30隻程の艦隊です!!」

「宜しい。ならばこのまま殲滅するッ」

ジェリコリー中将はそのまま艦隊を前進させ接近してくる艦隊に砲火を開いた。

「撃エ!!」

火星宇宙海軍第一艦隊の各艦から高圧増幅光線砲の砲撃が開始される。エネルギー弾道は全て敵新規艦隊に――弾かれたのである。

「我が方の砲撃、全て弾かれました!!」

「そんな馬鹿な事があるか!？」

ジェリコリー中将には信じられなかった。しかし眼前で起きているのは事実であった。そして敵新規艦隊――国連宇宙海軍第五艦隊は砲撃を加えてきた。

「駆逐艦『スメールイ』『スコールイ』轟沈!!」

「巡洋艦『ケルチ』『アゾフ』大破、航行不能!!」

「敵の空間戦闘機も接近!! 約80余り!!」

「……………撤退だ」

「え!? し、しかし……………」

「このままでは一方的にやられ壊滅してしまう。その前に撤退する。艦隊進路反転ッ」

第一艦隊は更なる追撃を受け結果的に巡洋艦11隻、駆逐艦19隻、補助艦艇6隻、揚陸艦艇8隻を喪失してしまい第一艦隊はその戦力を低下させたのである。

「何とか勝てましたな」

「電磁防壁を主張したおかげでもあるわけだな……………」

「このまま火星へ?」

「……………そうしたいが……………まずは国連政府内部だな」

第五艦隊旗艦『霧島』の艦橋で正信は沖田艦長にそう答えたのである。第二次月沖海戦後、日本一取り分け正信は国連政府宇宙海軍の総司令長官となりその勢力を拡張宇宙の事に関しては自身が鍛えた部下達（沖田や土方達）に任せたのである。

そのおかげかは知らないが開戦から一年で正信の勢力は国連政府内部の半数を占める程であった。それはさておき、戦線の方は一進一退の攻防であった。

主に戦場は地球と火星の中間地点程での戦闘が多かった。国連宇宙海軍は宇宙戦士訓練学校の校長であり正信と同期生である福部仁中將が第五艦隊司令長官に就任して国連宇宙海軍の各艦隊を統率していた。

「敵艦隊が前進してきますッ」

「ウム、第五艦隊は後退しつつ砲撃。第二、第三艦隊は第五艦隊の左右に展開しこれを砲撃するのだ」

「了解。各艦隊に伝達します」

福部中將の慎重さもあり、時には大胆な作戦で火星宇宙海軍はその戦力を徐々に減らしていき西暦2181年には当初は5個艦隊もい

た火星宇宙海軍は僅か1個艦隊規模しか運用出来ていなかったのだ。そして火星宇宙海軍も最終防衛線を衛星『フォボス』からの線に敷いて何が何でも死守する方向であった。

「フム……思っていたより固いな」

「どうしますか?」

「沖田君、君ならどうするかね?」

「私……ですか?」

「そう、君だ」

「私なら……」

西暦2182年11月、地球と火星による最後の艦隊決戦が衛星『フォボス』宙域で行われたのである。福部中将の直卒3個戦隊にワイアット中将のイギリス宇宙海軍第三艦隊、ジャミトフ少将の第八艦隊の2個半艦隊が『フォボス』宙域にて火星宇宙海軍1個艦隊と交戦する。

だが、火星宇宙海軍も意地を見せジャミトフ少将の第八艦隊を敗走させジャミトフ少将をも戦死させる勢いをする。しかし、天頂方向から第五艦隊司令長官に就任したばかりの沖田少将の第五艦隊が旗艦『霧島』を先頭に突撃、火星宇宙海軍の艦隊旗艦に命中弾多数を叩き込んで爆発轟沈させると残存火星宇宙海軍艦隊は支離滅裂となった。

「敵の艦列が乱れました!!」

「宜しい。我々もスマートに砲撃しつつ包囲するのだ」

紅茶の時間となりワイアット中将は紅茶を飲みつつそう答える。残存火星宇宙海軍艦隊が火星に向かって敗走するのはそれから14分後の事であった。

「火星軌道上の戦闘衛星を破壊しつつ火星に打電せよ。『降伏セヨ』とな」

「しかし、奴等は降伏しますかな?　むしろ徹底抗戦するかもしれないが?」

司令部がある月基地で正信がそう言うのと芹沢少将は眉を潜めつつ反論する。

「構わん。我々が降伏を打診したという証拠があれば良い。それに火

星の市民にも知れ渡るじやろ」

数日後、火星の市民にも国連政府が降伏を打診した事に抗戦派と降伏派が相互にデモを繰り返して互いに私闘をして血で血を染める内戦に勃発するのである。

それを尻目に国連宇宙海軍も戦力を回復させ翌年の西暦2182年12月まで内戦が続いて漸く降伏派が勝ち、翌年西暦2183年に火星が地球に対し降伏をするのである。

「まあ例のフネの情報を七割も持って来れたのは幸いだったかもしれないな……」

「地球と火星に存在する放射線のどのも符合しない未知の放射線です。これは脅威に等しいですぞッ」

「落ち着かんか芹沢。それで藤堂、文字も解析は出来ておらんのだろうか?」

「はい。全く以て未知の文字です」

火星の極冠に漂着していた戦闘艦艇に文字が記載されていた。しかし、全く以て解析不能だったのである。

「……降伏した火星の住人は再度地球に戻し、火星は暫くは軍事基地のみの駐屯する。そう具申しよう」

「しかし長官、それは……」

「やむを得んだろう……太陽系に侵攻するかもしれない未知の異星文明があるのかもしれないのだ……」

『……………』

正信の言葉に藤堂と芹沢は何も言えなかった。それから火星の住人の地球への強制送還が開始され火星は軍事基地のみの星となるのである。

「長官、これからどうなるのでしょうか……」

「そうだな……」

一先ずの休みがついた日、藤堂らと飲んでいる時に藤堂からの言葉に正信は口を酒で濁しつつも口を開く。

「少なくとも10年前後の戦いは無い時代に入るんだ。兵器開発をして艦艇を新しくする。これしか無いだろうか……」

「が？」

「少なくとも今は平和を満喫しようじゃないか」

正信はニヤリと笑うのである。そして平和な時代は西暦2191年まで続くのであった。

第六十六話

「臨時の出向……なのかしら？」

「ああ。防衛軍の宇宙戦士訓練学校に格闘の臨時教官としてだ」

将和に呼ばれたドゥーエが何なのか入り将和と会々と将和から辞令書を渡された。辞令書の中身は宇宙戦士訓練学校の教官への臨時出向であった。

「それは今どうしてなのかしら？」

「それがなあ……格闘教官している者が怪我で休職したんだ。そこでうちの親父がドゥーエに目を付けてな……まあ臨時出向だから短期間で終わるから心配はするな。休みと思えばいいさ」

「ま、それもそうね。なら休みを楽しませてもらおうかしら」

将和の言葉にドゥーエは苦笑し宇宙戦士訓練学校に臨時出向するのである。

「はあ………退屈ね………」

教官室でドゥーエは溜め息を吐く。学校に着任してからの三週間が過ぎてはいたがドゥーエには退屈だった。ドゥーエが格闘教官だからと言って腕試しをしようと訓練生達がドゥーエに挑むも全て返り討ちをされてしまい今では生きる伝説になっていた。最初は負けじと果敢に挑戦する者達はいたが日が経つにつれ一人、また一人と挑戦を諦めてドゥーエに挑む者はいなくなってしまうた………が、まだ一人だけいた。

「スカリエツティ教官!!」

そこへドカドカと廊下を走ってきて扉をノックしてから部屋に入ってきた訓練生がいた。

「土門訓練生、スカリエツティ教官に挑戦に来ました!! 今日こそ教官に勝ちます!!」

「……………フフツ。まだ10年は早いわね土門（今では土門が来るのを待ち遠しいなんてね…………）」

土門竜介訓練生、彼だけは元来の性格故なのか負けず嫌いであり何度負けてもドゥーエに格闘を挑んできたのだ。その為ドゥーエも何度も格闘を施してあげる程である。ちなみに倒れた土門の回収は同期生の揚羽が担当していたりする。

「さて、今日も地に伏せさせてあげるわ」

「負けません!!」

結局、土門の連敗記録は更新され揚羽に回収されるのであった。そして防衛軍宇宙艦隊総司令部では正信らが盛大な溜め息を吐いていた。

「…………マズイのう…………」

「…………確かにマズイですな」

「しかし…………いやはやこれはマズイですな…………」

この時、正信ら三人はガミラス側からの報告に頭を悩ませていた。この情報をどうするべきか、公表すべきか否か？

「…………仕方あるまい。艦隊司令長官達には話すとするかの」

「ですな。何せ場合によってはカールセン中将が危ういかもしれませんからな」

「そうじゃな」

そして正信は各艦隊旗艦に通信して総司令部に集まれる各艦隊司令長官は総司令部に集合せよと命じるのであった。

「おや、三好の小僧じゃないか」

「お、ホウメイさんじゃないですか。また焼飯食いたいです」

「調子に乗るんじゃないっての」

総司令部の廊下を歩いているとホウメイ准将に出会った将和はそう言いながら作戦室に入る。作戦室にはほぼ艦隊司令長官達が勢揃いしていた。

「どうやら最後のようで…………」

「そのようじゃな、ああカールセンは超タキオン通信での参加じゃな
『遅いぞ三好!!』」

「すみません」

カールセンに怒鳴られ将和はカールセンに頭を下げつつ席に座る
のである。

「さて、全員揃ったところで今日の緊急な集まりを話す事になる。つ
いてはこれを見てほしい」

正信はそう言っている一枚の画像を出した。それは地表に漂着す
る破壊された艦であった。

「これって………当時の火星共和国宇宙海軍が火星の地表で回収した
とされる艦じゃないですか」

「これが何を………?」

「フム」

ボロディン少将の問いに正信は頷き口を開いた。

「コイツの正体が分かったのじゃよ」

『ツ!?!』

正信の言葉に全員が目を見開いた。この艦は所謂、二次に渡る内惑
星戦争の火種でもあった。

「して………どのような事が………?」

「フム………コイツはボラー連邦の戦艦と類似しているのが見受けら
れた」

「ボラー連邦ですと?」

「ちよつと待ってくれ三好の旦那。じゃああれかい? ボラー連邦は
以前………地球が宇宙に上がる前に火星に来ていたのかい?」

「可能性は………否定出来んのう」

「それは………由々しき事態ではありませんか? もしかしたらボラー
連邦は地球への航路を知っている可能性が大いにある………という事
になりませんか?」

「そういう事じゃの」

「なればこそ防衛はしっかりと固めませんと………」

正信の言葉にパエツタはそう具申する。

「そういう事じゃな。特に一場危ういのは……カールセン、お主の方じゃからな」

『ですな。その為には是非とも増強を願います』

「分かっておる。パエツタ、暫くはカールセンの指揮下でケンタウルスに向かつてほしい。頼めるか？」

「無論ですアドミラル・ミヨシ。むしろ私は志願する程です」

「ハハハ、そいつは有難いが油断は禁物じゃよパエツタ」

「しかし長官、どうしてボラー連邦と判明したのですか？」

三木准将は疑問をぶつけるがそれは将和も同じであった。

「ウム、コイツの艦内で見つかった文字はたまたまガミラスにも伝えたのじゃよ」

「そうしたらガミラスが解読してな。何処の国の文字か尋ねたらボラー連邦だった……というわけだ」

「何と……そういうわけだったのですな」

「しかし……そうになるとボラーは敵……という認識ですかい三好の旦那？」

「ギリギリまで待つてほしい。ワシらも確信は持てんからのう。じゃが向こうから攻撃してきたのなら話は別じゃよ」

「ハハハ、それだけで十分だよ」

正信の回答にホウメイは満足そうに頷く。

「それにバレル大使からの情報ではボラー連邦も守勢から攻勢に転じたようじゃ」

ボラー連邦もこれまではガルマン・ガミラスの攻勢には守勢をしていたが兵力の再編成が完了した事でベムラーゼ首相は2個主力艦隊を以てガルマン・ガミラスの占領地域に攻勢を開始したのである。

「それで戦況は？」

「未だ五分と五分のようじゃ。均衡がいつ破れるかは分からんがの」

「そうになると警戒はやはり必要ですな」

「そういう事じゃな」

斯くして会議は進むのであった。

西暦2205年 地球防衛軍艦隊編成（ヤマト3）

西暦2205年時の防衛軍艦隊編成

地球防衛軍総司令長官

三好正信宇宙海軍元帥大将

参謀長

芹澤虎徹宇宙海軍大将

主席参謀

アンドリユー・フオーク宇宙海軍少将

聯合艦隊（地球又は月基地に駐屯）

司令長官

山南治宇宙海軍大将（第一艦隊提督兼任）

参謀長

アレックス・キャゼルヌ宇宙海軍少将（第一艦隊参謀長兼任）

第一艦隊

司令長官

山南治宇宙海軍大将

参謀長

アレックス・キャゼルヌ宇宙海軍少将

第一艦隊（遠洋型）

旗艦『春藍』

第一戦隊

『扶桑』『山城』『肥前』『富士』

第十一巡洋戦隊

『浪速』『高千穂』『秋津洲』『須磨』

第二巡洋戦隊

『吉野』『高砂』『新高』『対馬』

第三二巡洋戦隊

『松島』『厳島』『橋立』『和泉』

第十一航空戦隊

『天城』『赤城』

第一宙雷戦隊

『阿武隈』

第一駆逐隊

『神風』『野風』『波風』『沼風』

第十一駆逐隊

『吹雪』『白雪』『初雪』『深雪』

第十一宙雷戦隊

『龍田』

第二二駆逐隊

『初春』『若葉』『初霜』『子曰』

第三二駆逐隊

『追風』『疾風』『朝風』『夕風』

第二艦隊（遠洋型）

司令長官 パエツタ中将

旗艦『パトロクロス』

第二戦隊

『アガムノン』『テメレーア』『ヴァリアント』『ロイヤル・オーク』

第十二巡洋戦隊

『アイリス』『ブリリアント』『ハーマイオニー』『トパーズ』

第三二巡洋戦隊

『アキリーズ』『ホーキンス』『エクセター』『ドーセットシャー』

第三二巡洋戦隊

『グラスゴー』『バーミンガム』『グロスター』『ダイド』

第三二航空戦隊

『イラストリアス』『ヴィクトリアス』

第二宙雷戦隊

『ベルファスト』

2個駆逐隊

第十二宙雷戦隊

『シエフィールド』

2個駆逐隊

第三艦隊（遠洋型）

司令長官 クブルスリー中将

旗艦 『リシユリユー』

第三戦隊

『ブルターニュ』『ダンケルク』『クールベ』『プロヴァンス』

第十三巡洋戦隊

『ジャンヌ・ダルク』『ブリユイ』『ストラスブール』『プリモゲ』

第二三巡洋戦隊

『ケルシー』『アルジェリー』『フォツシュ』『コルベール』

第三三巡洋戦隊

『イスリー』『パスカル』『リノワ』『ガリレ』

第三二航空戦隊

『ベアロン』『クレマンソー』

第三宙雷戦隊

『リミエ』

2個駆逐隊

第二三宙雷戦隊

『エクレール』

2個駆逐隊

第一航空艦隊（遠洋型）

司令長官

山口多聞中将

参謀長

古村啓蔵少将

旗艦『大鳳』

第一航空戦隊

『大鳳』

【コスモタイガー54機 雷撃機36機 シーガル2機】

『翔鶴』

【同上】

『瑞鶴』

【同上】

第二航空戦隊

『エンタープライズ』

【コスモタイガー54機 雷撃機36機 シーガル2機】

『アーク・ロイヤル』

【同上】

第三航空戦隊

『蒼龍』

【コスモタイガー36機 雷撃機36機 シーガル2機】

『飛龍』

【同上】

第五一戦隊

『相模』『丹後』『播磨』『石見』

第五一巡洋戦隊

『青葉』『衣笠』『古鷹』『加古』

第五一護衛戦隊

『ジュノー』『サンディエゴ』『サンフラン』『オー克蘭ド』

第五一水雷戦隊

『酒匂』

第六駆逐隊

『暁』『響』『雷』『電』

第十六駆逐隊

『初風』『天津風』『時津風』『黒潮』

第二七駆逐隊

『時雨』『夕暮』『有明』『白露』

第六十一駆逐隊

『秋月』『照月』『涼月』『初月』

外惑星防衛艦隊司令部

衛星『タイタン』

冥王星基地艦隊（近海型）

司令長官 三木幹夫准将

旗艦『榛名』

第十一戦隊

『薩摩』『安芸』『鞍馬』『伊吹』

第二十巡洋戦隊

『浅間』『常磐』『吾妻』『磐手』

第二八巡洋戦隊

『津軽』『音羽』『平戸』『筑紫』

第九宙雷戦隊

『球磨』

3個駆逐隊

土星基地艦隊（近海型）

停泊衛星『エンケラドウス』

司令長官 ミユキ・ホウメイ准将

旗艦『出羽』

第十二戦隊

『ザクセン』『ナツサウ』『定遠』『鎮遠』

第十七巡洋戦隊

『寧海』『平海』『濟遠』『超勇』

第十九巡洋戦隊

『広乙』『広丙』『ケルン』『ドレスデン』

第八航空戦隊

『日向』『フューリアス』

第十四宙雷戦隊

『ニユルンベルク』

3個駆逐隊

内惑星防衛艦隊司令部

『火星』

第六艦隊（近海型）

司令長官 リュウリック・ボロディン少将

旗艦『ガングート』

第六戦隊

『オスリヤービヤ』『ポルタワ』『オリョール』『ナヴァリン』

第十六巡洋戦隊

『グロモボーイ』『バヤーン』『リュウリック』『パルラーダ』

第二六巡洋戦隊

『キーロフ』『マクシム・ゴリキキー』『カリーニン』『ムルマンスク』

第六航空戦隊

『ヴァリヤーク』『ミンスク』

第六宙雷戦隊

『クラーヌスイイ』

3個駆逐隊

ケンタウルス座方面艦隊（遠洋型）

司令長官 ラウルス・カールセン中将

旗艦『ディオメデス』

第十五戦隊

『ヘルゴラント』『テキサス』『リットリオ』『ローマ』

第十五巡洋戦隊

『カンバーランド』『パース』『ブリュッヒャー』『エメラルド』

第二五巡洋戦隊

『リアンダー』『アイリス』『シカゴ』『サンフランシスコ』

第三五戦隊

『チエスター』『クインシー』『ボストン』『ボルチモア』

第十五宙雷戦隊

『オマハ』

2個駆逐隊

第二五宙雷戦隊

『ブルックリン』

2個駆逐隊

第一護衛隊

『フラワー』以下12隻

第一パトロール隊

『天塩』『撫子』以下10隻

第一無人艦隊

指揮艦

『チャールストン』『オリンピア』『デンバー』

自動大型戦艦

『クレイモア』以下28隻

自動駆逐艦

『レイピア』以下60隻

第一補給隊

『サクラメント』『デトロイト』『エトナ』

第十三艦隊

司令長官 三好将和中将

副司令長官 エドウィン・フィッツシャー少将

参謀長 チュン・ウー・チエン少将

旗艦『三笠』

第十三戦隊

『河内』『摂津』

第二三戦隊

『ネルソン』『ロドニー』『アイオワ』『陸奥』

第十四巡洋戦隊

『高雄』『愛宕』『摩耶』『鳥海』

第二四巡洋戦隊

『妙高』『那智』『羽黒』『足柄』

第三四巡洋戦隊

『八雲』『鈴谷』『プリンツ・オイゲン』

第十三航空戦隊

『サラトガ』

【コスモタイガー36機 雷撃機36機 シーガル2機】

『イントレピッド』

【コスモタイガー54機 雷撃機36機 シーガル2機】

第十三防空戦隊

『アトランタ』『五十鈴』

第十三宙雷戦隊

『矢矧』

第十駆逐隊

『夕雲』『卷雲』『風雲』『秋雲』

第十三駆逐隊

『長波』『巻波』『高波』『大波』

第十七駆逐隊

『谷風』『浦風』『浜風』『磯風』

第六十二駆逐隊

『新月』『若月』『霜月』『冬月』

第二補給隊

『速吸』

第一揚陸隊

『神州丸』

第20 空間騎兵隊

(2 個中隊基幹)